

第Ⅲ部 2014-2015年度における各教員の活動

01 言語学

教授 林 徹 HAYASI, Tooru

1. 略歴

- 1977年3月 東京大学文学部言語学科卒業（文学士）
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（言語学専攻）修了（文学修士）
- 1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（言語学専攻）単位取得退学
- 1984年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
- 1989年7月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 併任
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、チュルク語学

b 研究課題

(1) ユーラシア周辺部チュルク諸語の記述研究

中国新疆ウイグル自治区南部のエイヌ語、中国甘粛省のサリグ・ヨグル語、そして、トルコやドイツで話されるトルコ語の諸変種を主な対象とし、現地調査によって収集したデータによりながら、言語接触によって生じた特徴も含め、言語構造と言語使用を明らかにする。

(2) トルコ語の指示詞に関する研究

トルコ語の3系列の指示詞に関して、話者の内省、アンケート、実験から得られたデータを用いながら、それぞれが使用される語用論的条件を明らかにする。

c 概要と自己評価

(1) のテーマに関しては、論文を1本を発表し、招待講演1件を行った。さらに、2016年度中の完成を目指してエイヌ語のモノグラフを執筆中。(2) については、論文を2本（うち1本は共著）を発表した。ただし、依然として未分析のデータが大量に残っている状況である。

d 主要業績

(1) 著書

編著、唐沢かおり 林徹、『人文知1：心と言葉の迷宮』、東京大学出版会、2014.7

共著、鍛冶広真 アクマタリエヴァ・ジャクシルク 林徹、『キルギス語彙集：言語調査実習の報告』、東京大学文学部言語学研究室、2015

(2) 論文

Tooru Hayasi, 「Mixed language in use: a case of Eynu, a Modern Uyghur-based secret language spoken in the south of Taklamakan」、『Dilbilim Araştırmaları』、2014, No.2, 99-115 頁、2014

林徹、「序：心と言葉への問い—言葉を心につなぐもの」、唐沢かおり・林徹（編）『人文知1：心と言葉の迷宮』、1-24 頁、2014.7

Tooru Hayasi, Sumru Ozsoy, 「Şu or bu/o: Turkish nominal demonstratives with concrete referents」、『Deniz Zeyrek, Çiğdem Sağın-Şimşek, Ufuk Ataş, and Jochen Rehbein (eds.) Ankara papers in Turkish and Turkic linguistics. Wiesbaden: Harrassowitz』、389-401 頁、2015

(3) 解説

林徹、「ダイクシス」、斎藤純男・田口善久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』東京：三省堂、143 頁、2015.8

(4) 学会発表

国際、Tooru Hayasi, 「Eynu, a Modern Uyghur-based secret language, and its implications in Turkic linguistics」、17th International Conference on Turkish Linguistics、Universite de Rouen、2014.9.5

国際、Tooru Hayasi、「Türkçe ve Japonca: Ortaklıkların içindeki farklar」、Joint Symposium: “Japan and Turkey - Where Did We Come From? Where Are We Going? -”、Ankara HiltonSA Hotel、2014.9.23

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「第 12 回東京移民言語フォーラム：移民コミュニティの多言語使用と言語意識」、主催、東京大学文学部、2015.6.1

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、林徹、研究代表者、基盤研究 (B) (海外学術調査)「学校を通して見る移民コミュニティの多言語使用と言語意識」、2015～

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、ウプサラ大学、言語文献学科教授人事選考委員会外部評価委員、2015.3～2015.11

研究機関、人間文化研究機構、評価担当委員、2015.8～2015.9

教授 西村 義樹 NISHIMURA, Yoshiki

1. 略歴

1984年3月	東京大学文学部英語英文学専修課程卒業
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程入学
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程進学
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程退学
1989年4月	実践女子大学文学部英文学科専任講師
1992年4月	東京大学教養学部助教授
1993年4月	東京大学大学院総合文化研究科専攻助教授
2004年4月	東京大学人文社会系研究科助教授 併任
2004年9月	東京大学人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学人文社会系研究科准教授
2012年4月	東京大学人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、意味論、認知文法

b 研究課題

文法の意味的基盤

認知文法の観点からさまざまな文法現象の意味的な基盤を明らかにすることを目標として研究を進めてきた。これまで分析の対象にしてきた主な現象は、日英語の使役構文、項構造の交替、文法関係などである。近年は認知言語学の分野でその遍在性、重要性が新たに注目されている換喩 (metonymy) の本質を解明し、それに基づいて従来別々に扱われてきた多くの文法現象を統一的に把握し直すことを目指している。

c 概要と自己評価

2010年から言語に関心をもつ哲学者と議論を重ね、文法の意味的基盤について考察を深めることができた。その成果を昨年以下の共著書およびいくつかの学会で発表することができた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、斎藤純男、田口喜久、西村義樹（編者）、『明解言語学辞典』、三省堂、2015.8

(2) 論文

西村義樹、「心・言語・文法—認知言語学の視点」、唐沢かおり、林徹（編）『人文知 1 心と言葉の迷宮』、pp.51-69、2014.7

(3) 解説

「カテゴリー化」、『明解言語学辞典』（三省堂）、pp.34-35、2015.8

「句」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.50、2015.8

「語彙項目」、『明解言語学辞典』（三省堂）、pp.79-80、2015.8

「合成性」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.84、2015.8

「参照点」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.100、2015.8

「スキーマ」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.125、2015.8

「認知言語学」、『明解言語学辞典』（三省堂）、pp.176-177、2015.8

「百科事典の意味論」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.189、2015.8

「文法」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.198-199、2015.8

「メタファー」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.219、2015.8

「メトニミー」、『明解言語学辞典』（三省堂）、pp.219-220、2015.8

「用法基盤モデル」、『明解言語学辞典』（三省堂）、pp.228-229、2015.8

「プロファイル」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.194、2015.8

「使役構文」、『明解言語学辞典』（三省堂）、p.102、2015.8

(4) 学会発表

国内、西村義樹、「文法と意味」、東京言語研究所春期講座、2014.4.26

国内、西村義樹、「認知文法の言語観と方法論」、関西言語学会第39回大会シンポジウム「言語理論と科学哲学」、大阪大学、2014.6.14

国内、西村義樹、「認知言語学と日本語研究」、日本語学会2014年度秋季大会シンポジウム「一般言語理論と日本語研究」、2014.10.18

国内、西村義樹、「意味を構築する仕組みとしての文法再考」、文法学研究会2014年度連続公開講義「文法と意味」、東京大学本郷キャンパス、2014.12.6

国内、西村義樹、「文法と意味: 認知言語学の視点」、認知言語学フォーラム2015、北海道大学、2015.7.4

国内、西村義樹、「語彙、文法、好まれる言い回し—認知文法の視点」、東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第17回研究会、東京外国語大学、2015.12.5

国内、西村義樹、「多義の実在性はどこまで擁護可能か? : 認知言語学の多義研究が進むべき道」、早稲田大学言語学シンポジウム2015、早稲田大学、2015.12.12

(5) 啓蒙

西村義樹、「語彙と文法だけで言語は語れない(巻頭言)」、『Harvard Business Review』、第36巻第7号(通巻310号)、p.3、2014.7

(6) 総説・総合報告

西村義樹、藤田耕司、森雄一、「(展望2) 理論的研究(特別記事: 日本語文法学会の展望)」、『日本語文法』(日本語文法学会)、Vol.16, No.1、pp.137-145、2016

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、関西大学(集中講義)、「認知言語学」、2014~2015

1. 略歴

平成4年3月	京都大学文学部文学科卒業（文学士）
平成4年4月	京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻入学
平成6年3月	京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻修了（文学修士）
平成6年4月	京都大学大学院文学研究科博士後期課程梵語学梵文学専攻進学
平成12年3月	京都大学大学院文学研究科梵語学梵文学専攻博士後期課程中途退学
平成8年9月	ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程入学
平成12年12月	ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程卒業（Ph.D）
平成12年4月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 COE 非常勤研究員（平成13年3月まで）
平成13年4月	白鷗大学経営学部専任講師（平成17年3月まで）
平成17年4月	白鷗大学経営学部助教授（平成19年3月まで）
平成19年4月	白鷗大学教育学部准教授（平成22年3月まで）
平成22年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

歴史言語学、音韻論、インド・アーリア語、ドラヴィダ語、オーストロアジア語

b 研究課題

インド・アーリア語、とくにサンスクリットの音韻論と、ドラヴィダ語族、オーストロアジア語族言語のフィールドワーク

c 概要と自己評価

インド・アーリア語についてはサンスクリットを中心として他の印欧語族言語と比較し、音韻上の特性を記述した著書を出版した。ドラヴィダ語族では、北部の2つの少数民族言語について、現地調査を重ねて文法記述を進めている。

d 主要業績

(1) 著書

Masato Kobayashi, 『Texts and Grammar of Malto』, Vizianagaram: Kotoba Books, 2012

(2) 論文

Masato Kobayashi, 「The attributive locative in the R̥gveda」, 『Sahasram ati Srajas』, Ann Arbor: Beech Stave, 2016, 206-215.

Masato Kobayashi, 「Origin of redundant agreement in Malto *-ke* converb」, 『V.I.Subramoniam Commemoration Volume, Vol. 1』, Thiruvananthapuram 2015

Masato Kobayashi, 「Origin and Development of Sanskrit *-yy-*」, 『Vedic and Sanskrit Historical Linguistics: Papers of the 13th World Sanskrit Conference』, Volume III, 2014.1

(3) 学会発表

海外、Masato Kobayashi, “Patanjali on the borderline cases of compound classification”, 16th World Sanskrit Conference, Bangkok, Thailand, 2015.6.29.

国内、小林正人、「インド・アーリア語における場所格の連体修飾」、日本言語学会、愛媛大学、2014.11.16

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、京都大学文学部、「インド古典学特殊講義」、2014.10～2015.3

(2) 学会

国内、日本言語学会、常任委員、2012.4～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、運営委員会委員、2013～

教育機関、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、研修専門委員会委員、2016～

02 考古学

教授 大貫 静夫 ONUKI, Shizuo

1. 略歴

1971年3月	千葉県県立千葉高等学校卒業
1971年4月	東京大学文科3類入学
1975年3月	東京大学文学部考古学専修課程卒業
1978年3月	東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程修士課程修了
1984年6月	東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程博士課程退学
1984年7月	東京大学文学部助手（東京大学遺跡調査室）
1986年5月	東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設に配置換え
1994年4月	東京大学文学部助教授（考古学）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（考古学）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（考古学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

東北アジア考古学

b 研究課題

- (1) 日本列島を含む環日本海の定着的食料採集社会の成り立ち、およびその変容過程の考古学的研究
- (2) 中国中原地域の初期国家形成過程についての研究

c 概要と自己評価

(1) については科学研究費を得て、15年度まで毎年ロシアの研究者と共同でアムール川下流域およびサハリンの遺跡発掘調査を進めてきた。サハリン島においてサハリン国立大学とともに14年度はアド・ティモボ遺跡群を調査した。また、13年度に引き続きロシアとの二国間共同研究に基づき、若手研究者間の交流促進もおこなった。15年度はゴルノザボーツク2遺跡を調査した。アムール川下流域ではノパロフスク郷土誌博物館とともにハルピチャン遺跡を調査した。さらに、東北アジア全体の変容過程を体系化するために、朝鮮半島や北海道の研究も進めた。(2) では、2014年に中国北京で開催された国際学会「紀念二里頭遺址發現55周年學術研討会」において発表するなどして初期国家形成時代の研究分野でも研究を進めた。着実に成果を上げていると考える。

d 主要業績

(1) 論文

大貫静夫、「文化史考古学から見た北海道縄文時代早期環境変動に関する諸問題」、『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究』、111-135頁、2015.3

大貫静夫、「13類土器について」、『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究』、149-153頁、2015.3

大貫静夫、「中国・朝鮮半島の土器出現期」、『季刊考古学』、132、79-82頁、2015.8

大貫静夫、「二里頭遺址的出現（中文）」『夏商都邑与文化（二）』61-77頁、2014.10

(2) 予稿・会議録

国内会議、大貫静夫、「文化史考古学から見た北海道縄文時代早期の環境変動」、2015.2.22、『第16回北アジア調査研究報告会』、57-58頁、2015.2

国内会議、福田正宏・グリシェンコ、V・ワシレフスキー、A・大貫静夫他 2015「サハリン中部アド・ティモボ遺跡群の考古学的調査（2014年度）」、『第16回北アジア調査研究報告会発表要旨』35-42頁、2015.2

国際会議、ONUKI Shizuo, The Impact of Ancient China in Northeast Asia from Archaeological Point of View, The International Conference on “Dialogue of Civilisations: Comparing Multiple Centres of Early Civilisations of the World” CONFERENCE PROGRAMME、中国・北京大学、2015.4.8

国際会議、大貫静夫、「基於碳十四測年的夏商都城相對年代和絕對年代」、『紀念二里頭遺址發現55周年學術研討會論文・提要集』、5-7頁、中国・社会科学院考古研究所、2014.10

(3) 調査報告

福田正宏・グリシェンコ,V・大貫静夫他、「サハリン新石器時代前期スラブナヤ5遺跡の発掘調査報告」、『東京大学考古学研究室紀要』29号、121-146頁、2015.3

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

その他、高梨学術奨励基金、理事、2013.4～

教授 **佐藤 宏之** SATOU, Hiroyuki

1. 略歴

1982年3月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
1982年4月 財団法人東京都埋蔵文化財センター調査員
1988年4月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程入学
1991年3月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1991年4月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程入学
1994年3月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程修了、博士(文学)取得
1994年4月 財団法人東京都埋蔵文化財センター副主任調査研究員
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1997年5月 東京大学文学部付属北海文化研究常呂実習施設助教授
1999年4月 東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
(新領域創成科学研究科助教授併任、2004年3月まで)
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学、民族考古学、人類環境史

b 研究課題

- (1)日本列島および東アジアの旧石器時代における石器技術論、行動論、遺跡形成論、石材論的研究。
- (2)生業・居住形態等に関する民族考古学的研究。
- (3)民俗知の環境論的研究。

c 概要と自己評価

上記の研究課題(1)に基づき実施した、科研費基盤研究(A)「黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容」(平成21～25年度)の成果をまとめた『考古学ジャーナル』特集号を刊行した。また共編著『The Emergence and Diversity of Modern Human Behaviors in Paleolithic Asia』により、アジアにおける現生人類出現に関する最新の考古学研究をまとめた。また研究課題(2)(3)については、東北芸術工科大学と共同研究を実施した。いずれも当初の研究計画をおおむね遂行できたと考えている。

d 主要業績

(1) 著書

- 編著、佐藤宏之編、『黒曜石原産地遺跡の研究(『考古学ジャーナル』659号)』、ニュー・サイエンス社、2014.8
編著、Kaifu, Y. Izuho, M. Geobel, T. Sato, H. Ono, A.共編著、『The Emergence and Diversity of Modern Human Behaviors in Paleolithic Asia』、Texas M & A University Press、2015.2
編著、佐藤宏之編、『旧石器～縄文移行期を考える(『季刊考古学』132号)』、雄山閣出版、2015.8

(2) 論文

- Sato, H., and Yamada, S., 「Intrasite variability of Oshorokko microblade industry in Yoshiizawa site in Hokkaido, northern Japan」、
『Topical issues of the Asian Paleolithic, edited by A.P. Derevianko and N.I. Dorozdov』、153-158 頁、2014
- 佐藤宏之・役重みゆき、「北海道の後期旧石器時代における黒曜石産地の開発と黒曜石の流通」、佐藤宏之・出徳雅実
編『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(Ⅱ)』[東京大学常呂実
習施設研究報告第12集、平成21～25年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(A)研究成果報告書]、123-
156 頁、2014.3
- Miyuki Yakushige and Hiroyuki Sato, 「Shirataki obsidian exploitation and circulation in prehistoric northern Japan」、『Journal of
Lithic Studies』、1(1)、319-342 頁、2014.4
- Izuho, M., J.R. Ferguson, M.D. Glascock, N. Oda, F. Akai, Y. Nakazawa, H. Sato, 「Integration of obsidian compositional studies
and lithic reduction sequence analysis at the Upper Paleolithic site of Ogachi-Kato 2, Hokkaido, Japan」、『Methodological Issues
for Characterisation and Provenance Studies of Obsidian in Northeast Asia. British Archaeological Report, International Series
2620, edited by A. Ono, M. D. Glascock, Y. V. Kuzmin, and Y. Suda』、125-142 頁、2014.4
- Ferguson, J., M. Glascock., M. Izuho, M. Mukai, Wada, K. and H. Sato, 「Multi-method charaaterization of obsidian source
compositional groups in Hokkaido Isalnd (Japan)」、『Methodological Issues for Characterisation and Provenance Studies of
Obsidian in Northeast Asia. British Archaeological Report, International Series 2620, edited by A. Ono, M. D. Glascock, Y. V.
Kuzmin, and Y. Suda』、13-32 頁、2014.4
- Wada, K., M. Mukai, K. Sano, M. Izuho and H. Sato, 「Chemical composition of obsidians in Hokkaido Island, northern Japan: the
importance of geological and petrological data for source studies」、『Methodological Issues for Characterisation and Provenance
Studies of Obsidian in Northeast Asia. British Archaeological Report, International Series 2620, edited by A. Ono, M. D.
Glascock, Y. V. Kuzmin, and Y. Suda』、67-84 頁、2014.4
- 佐藤宏之、「狩猟具と施設」、今村啓爾・泉拓良編『講座日本の考古学 第4巻 縄文時代(下)』、36-53 頁、2014.5
- 佐藤宏之、「大学との地域連携と「北の異界展」」、菊池徹夫・宇田川洋編『オホーツク海沿岸の遺跡とアイヌ文化』、
235-242 頁、2014.7
- 佐藤宏之、「北東アジアの歴史の中で」、菊池徹夫・宇田川洋編『オホーツク海沿岸の遺跡とアイヌ文化』、266-275 頁、
2014.7
- 佐藤宏之、「総論: 黒曜石原産地遺跡研究の地平」、『考古学ジャーナル』、659号、3-5 頁、2014.8
- Kazuki Morisaki and Hiroyuki Sato, 「Early Holocene human adaptation to abrupt palaeoenvironmental change in the Russian Far
East: for international comparative study」、『The Dolní Věstonice Studies』、20、143-147 頁、2014.8
- Kazuki Morisaki and Hiroyuki Sato, 「Lithic technological and human behavioral diversity before and during the Late Glacial: A
Japanese case study」、『Quaternary International』、347、200-210 頁、2014.10
- Hiroyuki Sato, 「Did the Japanese obsidian reach the Continental Rusian Far East in Upper Paleolithic?」、『Aeolian Scripts: New
Ideas on the Lithic World Studies in Honour of Viola T. Dobosi, edited by T. Biró Katalin, M. András and P. Katalin Bajnok』、
77-91 頁、2014.11
- 佐藤宏之、「考古学から見た死と儀礼」、秋山聡・野崎敏編『死者との対話』人文知第2巻、93-107 頁、2014.11
- Hiroyuki Sato, 「Trap-pit hunting in Late Pleistocene Japan」、『The Emergence and Diversity of Modern Human Behaviors in
Paleolithic Asia, edited by Kaifu, Y. Izuho, M. Geobel, T. Sato, H. Ono, A.』、389-405 頁、2015.2
- 福田正宏・グリシェンコ V.・ワシレフスキー A.・大貫静夫・熊木俊朗・國木田大・森先一貴・佐藤宏之・モジャエ
フ A.・パシエンツェフ P.・ベレグドフ A.・役重みゆき・夏木大吾・高鹿哲大、「サハリン新石器時代前期スラブ
ナヤ5遺跡の発掘調査報告」、『東京大学考古学研究室紀要』、29号、121-146 頁、2015.3
- 佐藤宏之、「北海道の石刃鍬石器群と石刃鍬文化」、福田正宏編『日本列島北辺域における新石器縄文化のプロセス
に関する考古学的研究: 湧別市川遺跡の研究』、102-110 頁、2015.3
- Morisaki, K., Izuho, M. Terry, K. and Sato, H., 「Lithics and climate: technological resposes to landscape changes in Upper Paleolithic
northern Japan」、『Antiquity』、89(345)、554-572 頁、2015.6
- 佐藤宏之、「総論: 旧石器から縄文へ」、『季刊考古学』、132号、14-17 頁、2015.8
- Morisaki, K. and Sato, H., 「Hunter-gatherer responses to abrupt environmental change from the terminal Pleistocene to the early
Holocene in the Lower Amur region」、『Forgotten Times and Spaces: New Perspectives in Paleoanthropological,
Paleoethnological and archaeological studies. edited by S. Sázellová, M. Novák and A. Mizerová』、418-434(reference 549-598)
頁、2015.10

(3) 書評

関俊彦、『カリフォルニア先住民の文化』、六一書房HP『書評』欄、2015.10

(4) 学会発表

国内、佐藤宏之・山田哲・夏木大吾・役重みゆき・尾田識好・高鹿哲大、「北海道北見市吉井沢遺跡の発掘調査」、第15回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2014.3.1

国際、Sato, H., H. Hagiwara and K. Shiozuka, 「The lithic assemblages of the Iriguchi Site, Nagasaki Prefecture, northern Kyushu」, 6th World Congress of SEAA in Ulaanbaatar, Mogolia, National University of Mongolia, 2014.6.8

国際、Hiroyuki Sato, 「Comment: Recent researches on the Japanese Early Palaeolithic.」, 6th World Congress of SEAA in Ulaanbaatar, Mogolia, National University of Mongolia, 2014.6.8

国内、佐藤宏之、「列島の陥し穴研究の現状」、東北芸術工科大学東北文化研究センター私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究」考古班研究集会、是川縄文館、2014.6.15

国内、佐藤宏之、「北海道の後期旧石器時代における黒曜石産地の開発と黒曜石の流通」、第12回日本旧石器学会総会、小平市・ルネ小平、2014.6.21

国際、Kazuki Morisaki, Hiroyuki Sato, 「Early Holocene human adaptation to the abrupt palaeoenvironmental change in the Russian Far East; for international comparative study」, Mikulov Anthropological Meeting, Mikulov Castle, Czech Republic, 2014.8.29

国際、Hiroyuki Sato, 「Obsidian procurement and circulation in the Upper Paleolithic Hokkaido」, 7th International Symposium of the Asian Palaeolithic Association, 韓国公州市、2014.11.14

国際、Izuho, M., J.R.Ferguson, M.D.Glascock, N.Oda, F. Akai, Y.Nakazawa, H.Sato, 「Integration of obsidian compositional studies and lithic reduction sequence analysis at the Upper Paleolithic site of Kamihoronai-Moi, Hokkaido (Japan)」, 7th International Symposium of the Asian Palaeolithic Association, 韓国公州市、2014.11.14

国際、Daigo Netsuki, Hiroyuki Sato, Satoru Yamada, 「Intra-site spatial organization of the Yoshiizawa Site」, 7th International Symposium of the Asian Palaeolithic Association, 韓国公州市、2014.11.14

国内、福田正宏・グリシェンコ, V.・ワシレフスキー, A.A.・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・國木田大・ペレグドフ, A.・内田和典・森先一貴・役重みゆき・夏木大吾・山下優介、「サハリン中部アドティモボ遺跡群の考古学的調査(2014年度)」, 第16回北アジア調査研究報告会、東京大学、2015.2.22

国内、佐藤宏之、「日本列島の陥し穴—世界最古の畏獣と定着的生業システム—」、日本考古学協会第81回総会、帝京大学、2015.5.24

国内、夏木大吾・佐藤宏之・山田哲、「炉周辺の間活動と遺跡構造の関係性—北海道北見市吉井沢遺跡の事例より—」、北海道旧石器文化研究会、北海道大学、2015.6.27

国際、Hiroyuki Sato, 「Human behavioral responses to environmental condition and the emergence of the world's oldest pottery in Northeast Asia」, 第19回国際第四紀学連合名古屋大会、名古屋国際会議場、2015.7.28

国内、佐藤宏之、「日本列島の陥し穴—世界最古の畏獣—」、第69回日本人類学会大会シンポジウム「日本列島における後期旧石器時代研究の最前線」、産業総合技術研究所臨海副都心センター、2015.10.11

国際、Daigo Netsuke, Hiroyuki Sato, 「Invisible hearths and restoring human behavior: high resolution archaeological analysis at the Yoshiizawa Site of Northern Japan」, 20th International Symposium (Part 2): Suyangae and Her Neighbours in Korea, 韓国忠州市、2015.11.3

国内、福田正宏・Grischenko V.A.・大貫静夫・Vasilevski A.A.・佐藤宏之・熊木俊朗・國木田大・Gorshkov M.V.・Shipovalov A.M.・Gabrilchuk M.A.・森先一貴・内田和典・夏木大吾・Shevkomud I.Ya, 「環日本海北回廊の考古学的研究—到達点と今後の課題—」、日本シベリア学会第1回研究大会、北海道大学、2015.11.22

国内、佐藤宏之、「遊牧社会形成前史としてのユーラシア東部地域の旧石器社会」、中央アジア考古学研究会セミナー「キルギスとその周辺地域における遊牧社会の形成」、上野・黒田記念館、2016.2.6

国内、夏木大吾・山田哲・中村雄紀・廣松滉一・吉留頌平・木ノ内忍・小澤太一・佐藤宏之・熊木俊朗・尾田識好・ナタリア・ツィデノバ、「吉井沢遺跡2015年度調査の成果」、第17回北アジア調査研究報告会、石川県立博物館、2016.2.27

(5) 総説・総合報告

佐藤宏之、「序」、『環日本海北回廊の考古学的研究(I): ヤミフタ1遺跡発掘調査報告書(平成23~27年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果中間報告書、東京大学常呂実習施設研究報告第11集)』、1頁、2014.3

佐藤宏之・出穂雅実、「I. 研究の目的と概要」、『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(Ⅱ)[東京大学常呂実習施設研究報告第12集、平成21～25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書]』、4-11頁、2014.3

佐藤宏之・出穂雅実、「IV. 総括」、『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(Ⅱ)[東京大学常呂実習施設研究報告第12集、平成21～25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書]』、208-214頁、2014.3

佐藤宏之・山田哲、「IV-B. 展望と課題」、『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(Ⅲ)[東京大学常呂実習施設研究報告第13集、平成21～25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書]』、287-288頁、2014.3

佐藤宏之、「IV-C. 結語」、『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容(Ⅲ)[東京大学常呂実習施設研究報告第13集、平成21～25年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書]』、288-290頁、2014.3

(6) マスコミ

「研究室散歩: 考古学研究室」、『東京大学新聞』、2014.10.14

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究B、佐藤宏之、Hiroyuki Sato、研究代表者、「現生人類文化の出現と拡散に果たしたアジア南回りルートの意義に関する考古学的研究」、「Archaeological Research on the role of the emergence and diffusion of modern human in the Asian southern route」、2015～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、平成26年度是川縄文館考古学講座、「クィーン・シャーロット諸島の民族考古学—北米北西海岸ハイダ族の世界と環境」、2014.7

その他、平成26年度日本旧石器学会普及講演会、「日本列島の旧石器時代」、2014.10

特別講演、2014年度第2回法政考古学会講演会、「北海道の後期旧石器時代における黒曜石の利用」、2014.11

非常勤講師、九州大学文学部/大学院比較文化研究院、「考古学講義XV/東アジア比較考古学研究Ⅲ」、2015～

その他、放送大学、「考古学」、2015～

特別講演、平成26年度東京都遺跡調査・研究発表会、「鈴木遺跡と日本の旧石器時代研究」、2015.2

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜教室「日本考古史10講」、「新しい旧石器時代像」、2015.7

(2) 学会

国内、日本考古学協会、理事(総務担当)、2014.5～2016.5

国内、日本旧石器学会、会長、2014.6～2016.3、APA第8回日本大会実行委員会プログラム委員、2015.6～2016.3

国内、日本第四紀学会、名誉会員候補者選考委員会、2016.1～2016.3

1. 略歴

1974年3月	群馬県立前橋高等学校卒業
1974年4月	静岡大学人文学部人文学科入学
1978年3月	静岡大学人文学部人文学科卒業
1978年4月	静岡大学人文学部人文学科研究生
1979年3月	静岡大学人文学部人文学科研究生修了
1979年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻博士課程入学
1986年3月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
1986年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生
1987年12月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生修了
1988年1月	国立歴史民俗博物館考古研究部助手
1996年4月	国立歴史民俗博物館考古研究部助教授
2004年4月	駒澤大学文学部歴史学科助教授
2006年12月	博士(文学)取得(筑波大学)
2007年4月	駒澤大学文学部歴史学科教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本考古学

b 研究課題

- (1) 縄文時代から弥生時代への移行問題の研究
- (2) 縄文・弥生時代の葬墓制の研究
- (3) 縄文・弥生時代の通過儀礼の研究

c 概要と自己評価

上記の(1)に関して、土器の表面における圧痕のレプリカを採集し、顕微鏡観察することにより穀物栽培の開始期とその状況を明らかにする基礎研究を関東地方を中心に行った。その結果、分析試料には弥生時代以前に穀物はなく、弥生時代になると稲よりもむしろアワ、キビの雑穀類が主体的にあらわれることが判明した。2013年度より科学研究費基盤研究A「植物・土器・人骨の分析を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究」のテーマで、植物種子圧痕の研究を基軸に、日本列島の農耕文化複合の形成の特質を東アジア的な視野から分析することを目指した研究をスタートさせ、2015年度をもって終了した。(2)に関して、愛知県田原市保美貝塚の発掘調査を行い、盤状集骨という特異な埋葬を検出し、調査し縄文晩期の葬墓制の特質を明らかにする手掛かりを得たが、その結果をまとめつつある。(3)に関して、科学研究費基盤研究(C)「人物造形品の集成と分析にもとづく弥生時代の儀礼と社会組織に対する基礎的研究」の研究を推進したが、その結果をまとめつつある。

d 主要業績

(1) 著書

単著、設楽博己、『縄文社会と弥生社会』、敬文舎、2014.5

編著、設楽博己・植月学・賀来孝代・小林青樹・新美倫子・北條朝彦、『十二支になった動物たちの考古学』、新泉社、2015.12

(2) 論文

設楽博己、「「考古ボーイ」の絶滅危惧種化を憂う」、『東京大学進学ガイダンス2014』、207-209頁、2014

設楽博己、「最近の弥生文化研究に思うこと」、『栃木県考古学会誌』、35、1-24頁、2014.3

設楽博己、「講演会報告 邪馬台国はどこか？—イレズミから考える私の仮説—」、『茨城史学』、49、32-44頁、2014.3

設楽博己、「縄文農耕と弥生農耕」、『学士会会報』、907、16-20頁、2014.7

設楽博己、「弥生文化と農耕文化複合」、『企画展示 弥生ってなに?!』、108-109頁、2014.7

設楽博己・守屋亮、「レプリカ法による縄文後期後半～弥生前期の土器の種実圧痕調査」、『SEEDS CONTACT』、2、2-5頁、2014.8

- 設楽博己、「写真による歴史の証人 収蔵品紹介 柳田國男が集めた石器と土器」、『歴博』、187、20-23 頁、2014.11
- 設楽博己、「原秀三郎先生と考古学」、『學縁 原秀三郎先生傘寿記念文集』、61-65 頁、2014.12
- 設楽博己、「縄文時代の再葬墓と弥生再葬墓」、『季刊考古学』、130、65-68 頁、2015.2
- 設楽博己、「弥生時代の松戸」、『松戸市史』、上巻（改訂版）原始・古代・中世、329-347 頁、2015.2
- 設楽博己、「弥生時代の始原—農耕文化の複合体—」、『歴史の「常識」をよむ』、20-23 頁、2015.3
- 設楽博己、「公開講演会 柳田國男と考古学」、『民俗学研究所紀要』、39、1-28 頁、2015.3
- 設楽博己・佐々木由香・國木田大・米田穰・山崎孔平・大森貴之、「福岡県八女市岩崎出土の炭化米」、『東京大学考古学研究室紀要』、29、147-156 頁、2015.3
- 設楽博己、「弥生時代における祖先祭祀の諸形態」、『弥生研究の交差点—池田保信さん還暦記念—』、みずほ別冊 2、135-144 頁、2015.5
- 設楽博己、「浮線網状文土器の基準資料—静岡県御殿場市宮ノ下遺跡の土器をめぐって—」、『駒澤考古』、40、45-57 頁、2015.6
- 設楽博己、「辰」、『十二支になった動物たちの考古学』、新泉社、59-74 頁、2015.12
- 設楽博己、「申」、『十二支になった動物たちの考古学』、新泉社、119-132 頁、2015.12

(3) 学会発表

- 国内、設楽博己、「今年度の成果」、設楽科研 2013 年度成果報告会、上越市埋蔵文化財センター、2014.3.28
- 国内、設楽博己、「柳田國男と考古学」、成城大学民俗学研究所 平成 26 年度公開講演会、成城大学 3 号館 2 階 321 教室、2014.5.31
- 国内、設楽博己・簗原泰彦・工藤雄一郎・熊木俊朗・高瀬克範・福田正宏・山田康弘・林正之、「柳田國男の収集した考古資料」、一般社団法人 日本考古学協会第 81 回総会研究発表、帝京大学 17 号館 2 階 1722 教室、2015.5.24

(4) 研究報告書

- 設楽博己、「西新井遺跡第 4 地点—老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」、2・6-10・14、2014.7

(5) 予稿・会議録

- 国内会議、設楽博己、「節分の豆まきから卑弥呼を考える」、金鶏会公開講座考古学シリーズV、金鶏会館宝形塔屋講義室、2014.4.19
- 国内会議、設楽博己、「考古学で決めた！邪馬台国」、埼玉県立歴史と民俗の博物館友の会講演会、埼玉県立歴史と民俗の博物館、2014.4.27
- 国内会議、設楽博己、「日本列島における弥生時代の青銅祭器」、生涯学習応援団千葉主催リレー塾 銅鐸の謎に迫る、ホテルポートプラザちば、2014.10.5
- 国内会議、設楽博己、「東名遺跡からみえる縄文の精神文化」、「東名シンポジウム 東名遺跡からみえる縄文の世界—激変する環境を生きぬいた縄文人たちの足跡—」、佐賀県立美術館ホール、2014.11.8
- 『東名シンポジウム資料 東名遺跡からみえる縄文の世界—激変する環境を生きぬいた縄文人たちの足跡—』、18-21 頁、2014.11
- 国内会議、設楽博己、「東名遺跡からみえる縄文の精神文化」、「平成 26 年度東名遺跡シンポジウム 2014 東名遺跡からみえる縄文の世界—激変する環境を生きぬいた縄文人たちの足跡—」、2014.11.8
- 『平成 26 年度東名遺跡シンポジウム 2014 東名遺跡からみえる縄文の世界—激変する環境を生きぬいた縄文人たちの足跡—記録集』、99-118 頁、2015.3
- 国内会議、設楽博己、「仮面と黥面の考古学」、「平成 26 年度考古学ゼミナール 暮らしを考える—装う—」、神奈川県民センター、2014.11.15
- 『平成 26 年度考古学ゼミナール 暮らしを考える—装う—』、11-12 頁、2014.11
- 国内会議、設楽博己、「弥生の始まりと静岡県」、静岡県高等学校社会科教育研究協議会西部支部歴史部会研修会、静岡県立掛川西高等学校百周年記念館、2014.11.19
- 国内会議、設楽博己・簗原泰彦・工藤雄一郎・熊木俊朗・高瀬克範・福田正宏・山田康弘・林正之、「柳田國男の収集した考古資料」、一般社団法人 日本考古学協会第 81 回総会、帝京大学 17 号館 2 階 1722 教室、2015.5.24
- 『一般社団法人 日本考古学協会第 81 回総会研究発表要旨』、74-75 頁、2015.5

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、駒澤大学文学部、「考古学特講VII」2015.4～
- その他、SBS学苑パルシェ校、「縄文人は骨をどのように扱ったか—愛知県保美貝塚の調査を通じて—」、2014.3

その他、朝日カルチャーセンター新宿、「弥生文化とはなにか」、2014.5～2014.6
その他、朝日カルチャーセンター新宿、「古代日本を発掘する 墓からみる弥生文化の特色」、2014.9
セミナー、明治大学リハビリタワー1031 教室、「第99回歴博フォーラム 縄文時代・文化・社会をどのように捉えるか 総括コメント」、2015
セミナー、柏原市歴史資料館、「縄文晩期のまつり—大阪平野と東日本の比較から—」、2015.2
特別講演、袖ヶ浦市教育委員会、「銅鐸と小銅鐸」『袖ヶ浦市遺跡発表会特別講演』、2015.6
その他、SBS学苑パルシェ校、「顔の考古学」『古代史探訪「顔の考古学」』、2015.6
セミナー、あがたの森文化会館、「松本の弥生時代の始まり」『第37回あがたの森考古学ゼミナール』、2015.7
その他、朝日カルチャーセンター横浜、「あたらしい弥生時代像」『日本考古史10講』、2015.9
特別講演、大阪府立弥生文化博物館、「縄文稲作はあったのか?」、2015.11
特別講演、大垣市歴史民俗資料館、「東町田遺跡にみる絵画土器—僻邪視文をめぐって—」、2015.11

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、調布市教育委員会、調布市史跡下布田遺跡調査評価委員、2015.4.1～2017.3.31
教育機関、千葉市教育委員会、史跡整備保存委員会委員、2015.5.1～2017.4.30

03 美術史学

教授 佐藤 康宏 SATO, Yasuhiro

1. 略歴

- 1978年 3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業
- 1978年 4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）入学
- 1980年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）修了
- 1980年 4月 東京国立博物館学芸部資料課に勤務（文部技官）
- 1981年 4月 文化庁文化財保護部美術工芸課に出向
- 1989年 10月 同上 絵画部門文化財調査官
- 1994年 10月 東京大学文学部に出向（助教授）
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美術史学）
- 2000年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（美術史学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史を専攻する。主たる分野は江戸時代の絵画・版画の歴史。

b 研究課題

室町時代末期から江戸時代初期にかけての風俗画、江戸中期の若冲・蕭白と浮世絵、中後期の南画を主な研究領域としている。近年は平安・鎌倉時代の絵巻や近代の洋画も論文の主題にするなど、論及の対象は拡大し、日本美術史全体を概観するようになった。本来は記号論、社会史、精神分析などの観点を日本絵画の解釈に生かすとともに、作品と文献史料の双方で絵画史研究のための基礎資料を整備することに努めている。

c 概要と自己評価

伊藤若冲研究に基づくワシントンでのシンポジウム発表（2012年）、岩佐又兵衛「伊勢物語 梓弓図」（文化庁）についてのベルリンでのシンポジウム発表（2013年）、浦上玉堂研究に基づくチューリッヒでのシンポジウム発表（2014年）——いずれも早くに原稿を送ったものの、ゲラさえも返って来ず、いっこうに報告書が刊行される気配はない。こちらは締切を守っているのだから刊行の約束も守ってほしいと切に思う。そのようなしだいで英文の論文が少ない中、日本美術の特質を外国人研究者のために英語で論じた口頭発表を行ない、それを若干増補した論考1篇を紀要に掲載した。従来の同種の議論とはいささか異なる視点を提示している。ほかには南画について概観する論考2篇が主要な業績といえる。以下に特記していない仕事としては、『辻惟雄集』（岩波書店）全6巻のうち第3巻以降の校訂作業がある。編集者を補助し、専門の立場から実質的な校正を行なった。

美術史学会常任委員に選出され、編集委員と例会委員を務めた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、佐藤康宏、板倉聖哲編『日本美術全集6 東アジアのなかの日本美術』、小学館、2015.3

(2) 論文

佐藤康宏、「プライズ本鳥獣花木図の作者——辻惟雄氏への反論」、『國華』、1432号、34-43頁、2015.2

SATO Yasuhiro, "Absence of Boundaries, Presence of Frames: Two or Three Things I Know About Japanese Art", 『美術史論叢』、31号、pp. 77-100、2015.3

佐藤康宏、「明末蘇州派と18世紀京都画壇」、国際シンポジウム報告書『蘇州をめぐる諸問題——中国と日本の観点から』、241-252頁、2016.3

(3) 解説

佐藤康宏、「異端研究の正統派」、『辻惟雄集6 若冲と蕭白』（岩波書店）、241-244頁、2014.9

佐藤康宏、「渡邊崋山筆芸妓図」、『國華』、1433号、41-43頁、2015.3

佐藤康宏、「椿椿山筆根津宇右衛門象」、『國華』、1442号、28-32頁、2015.12

(4) 学会発表

国際、SATO Yasuhiro, “Absence of Boundaries, Presence of Frames: Two or Three Things I Know About Japanese Art”, 12c
École Internationale de Printemps / 12th International Spring Academy、東京国立博物館、2014.6.10
国内、佐藤康宏、「明末蘇州派と 18 世紀京都画壇」、蘇州をめぐる諸問題——中国と日本の観点から、大和文華館、
2015.11.1

(5) 啓蒙

佐藤康宏、「日本美術史不案内 60 授業評価」、『UP』、498 号、30-31 頁、2014.4
佐藤康宏、「日本美術史不案内 61 東大教師が新入生にすすめる日本美術史以外の本 その五」、『UP』、499 号、8-9
頁、2014.5
佐藤康宏、「日本美術史不案内 62 速度に背いて」、『UP』、500 号、8-9 頁、2014.6
佐藤康宏、「日本美術史不案内 63 現実の乱反射」、『UP』、501 号、20-21 頁、2014.7
佐藤康宏、「日本美術史不案内 64 成人向け」、『UP』、502 号、6-7 頁、2014.8
佐藤康宏、「日本美術史不案内 65 海を渡り外国人を殺しに行く」、『UP』、503 号、18-19 頁、2014.9
佐藤康宏、「日本美術史不案内 66 探幽伝の余白に」、『UP』、504 号、20-21 頁、2014.10
佐藤康宏、「日本美術史不案内 67 短か過ぎた夏の光」、『UP』、505 号、16-17 頁、2014.11
佐藤康宏、「日本美術史不案内 68 裏工作」、『UP』、506 号、12-13 頁、2014.12
佐藤康宏、「日本美術史不案内 69 図形なのに自然」、『UP』、507 号、14-15 頁、2015.1
佐藤康宏、「日本美術史不案内 70 この巨大なガラクタ置場のなかで」、『UP』、508 号、6-7 頁、2015.2
佐藤康宏、「日本美術史不案内 71 伯楽は常には有らず」、『UP』、509 号、44-45 頁、2015.3
佐藤康宏、「日本美術史不案内 72 本を読む女たち」、『UP』、510 号、22-23 頁、2015.4
佐藤康宏、「日本美術史不案内 73 東大教師が新入生にすすめる日本美術史以外の本 その六」、『UP』、511 号、24-
25 頁、2015.5
佐藤康宏、「日本美術史不案内 74 美女と死体」、『UP』、512 号、14-15 頁、2015.6
佐藤康宏、「日本美術史不案内 75 アトリビューション」、『UP』、513 号、20-21 頁、2015.7
佐藤康宏、「日本美術史不案内 76 近視眼」、『UP』、514 号、24-25 頁、2015.8
佐藤康宏、「日本美術史不案内 77 泣いてもええやん」、『UP』、515 号、32-33 頁、2015.9
佐藤康宏、「日本美術史不案内 78 政治的中立」、『UP』、516 号、44-45 頁、2015.10
佐藤康宏、「日本美術史不案内 79 古雑誌頌」、『UP』、517 号、28-29 頁、2015.11
佐藤康宏、「日本美術史不案内 80 放送大学で学ぶ」、『UP』、518 号、16-17 頁、2015.12
佐藤康宏、「日本美術史不案内 81 枕絵論の枕に」、『UP』、519 号、14-15 頁、2016.1
佐藤康宏、「日本美術史不案内 82 お笑い最高裁」、『UP』、520 号、26-27 頁、2016.2
佐藤康宏、「日本美術史不案内 83 開店休業」、『UP』、521 号、8-9 頁、2016.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

委嘱教授、放送大学、「日本美術史 (14)」、2014.4~2015.3
特別講演、大和文華館、「祭りの準備——初期祭礼図について」、2014.5
特別講演、台湾大学、“Absence of Boundaries, Presence of Frames: Two or Three Things I Know About Japanese Art”、2014.9
特別講演、林原美術館、「初期洛中洛外図——歴博甲本について」、2014.10
特別講演、日本アート評価保存協会、「なぜ、それは若冲ではないのか」、2015.2
非常勤講師、早稲田大学エクステンションセンター、「若冲の絵画」、2015.8~2015.9
非常勤講師、アカデミー文京、「伊藤若冲の生涯と作品」、2015.11~2015.12

(2) 行政

文化庁、文化審議会専門委員（文化財分科会）、2014.3~2016.3
練馬区、練馬区立美術館運営協議会委員、2014.7~2016.3
鎌倉市、鎌倉市美術工芸品等収集選定委員会委員、2016.1~2016.3

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

任意団体、美術史学会、常任委員、2015.6~2017.6
任意団体、國華編輯委員会、編輯委員、2014.4~2016.3
任意団体、鹿島美術財団、推薦委嘱者、2014.4~2016.3

1. 略歴

1986年3月	東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（文学修士）
1997年2月	フライブルク大学哲学部 Ph.D
1997年4月	電気通信大学電気通信学部助教授（～1999年3月）
1999年4月	東京学芸大学教育学部助教授（～2006年3月）
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	同上准教授
2011年3月	同上教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋美術史

b 研究課題

デューラーを中心とした中近世ドイツ美術、聖遺物と美術との相関性、イメージ（像）の生動性、比較宗教美術史

c 概要と自己評価

主として西洋中近世における教会宝物や宮廷宝物についての研究を、美術と宝物との相関性および宮廷における宗教文化を意識しつつ展開した。また宝物および宮廷に重点をおきつつ、比較宗教美術史的考察をも展開した。特に比較宗教美術研究に関して、海外研究者と意見交換する機会に恵まれ、台湾、アラブ、ドイツ等における国際会議等において研究成果の一定の発信をすることができたのではないかと思う。また日本の聖地をめぐることにより、キリスト教における聖性概念について、新たな角度から考察する手がかりを得つつある。国立民族学博物館共同研究員として「物質性の民族学」という共同研究は2014年度で終了したが、その研究成果の発表に向けての活動は継続されており、自らの研究領域を相対化する機会ともなっている。こうした研究関心に応じた国際的な研究ネットワークが徐々に形成されてきている。なお、立ち上げから関わってきた全学の教育プログラム、体験活動プログラムおよび初年度長期休学制度（FLYプログラム）に協力を続けるとともに、2015年からは日本学術会議の連携会員として美術館・博物館委員会に所属し幹事を務めている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、秋山聰、野崎敏（編集）『人文知2』、2014.12（秋山聰、「聖なる宝物—天と地をつなぐモノ」、pp.109-131; 「あとかぎ」、pp.225-227）

共著、G・ヴォルフ、M・ファイエツィ、秋山聰他、『Power of the Line』、Hirmer Verlag、2015、240pp.（Akira Akiyama, "The Sacred Footprint, examined from Comparative Perspectives", pp.96-105.）

(2) 論文

秋山聰、「西洋中近世のキリスト教儀礼における像と人との共演をめぐる—比較美術史的観点から」、『死生学・応用倫理研究』、19、pp.232-210.

秋山聰／京谷啓徳／木下直之／古谷嘉章／芳賀京子、「スペクタクルをめぐる」、『西洋美術研究』、19、8-36頁、2014.12

(3) 学会発表等

秋山聰、「宮廷と美術：研究計画」、国際研究集会『東大教授と台湾美術史相關領域學者座談會』、台北、台湾大学大学院、2014.9.22

秋山聰、「デューラーの失われた傑作をめぐる—考察—《ヘラー祭壇画》」、明治学院大学芸術学科講演会、2014.12.6

秋山聰、「Icon or Relic? Comparative Studies on the Imperial Regalia」国際シンポジウム『Normadic Object: Early Modern Religious Art in Global Context』、アラブ首長国連邦、アラブ、ニューヨーク大学アラブ 2016.1.18～2016.1.20

秋山聰、「レガリアの比較美術史—帝国宝物と三種の神器」、研究集会『宮廷・宝物・美術』、九州大学大学院文学研究院、2016.2.20

秋山聰、「聖地から学ぶもの—比較美術史的考察」、研究集会『聖地と宝物』、九州大学大学院文学研究院、2016.2.22

秋山聰、「On the Relic and Iconic Character of the Sacred Objects – A comparative Art History Perspective」、国際シンポジウム『The Materiality of the Sacred in Medieval Japan and Europe: Buddhism, Shinto, Christianity』、ドイツ連邦共和国、ハイデルベルク、ハイデルベルク大学 2016.2.29～2016.3.2.

(4) 翻訳

共訳、ゲアハルト・ヴォルフ／フィリーネ・ヘラス、「Die Nacht der Bilder」、秋山聰（監訳）／太田泉フロランス（訳）、「1462年ローマにおける聖母被昇天の祝祭行列：二つのアイコンが会おう夜」、『西洋美術研究』、18、37-53頁、2014.12

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、秋山聰、研究代表者、「宮廷と美術に関する比較美術史学的研究」、2014～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、青山学院大学、「西洋の宗教と芸術／芸術史特講（2）」、2014.4～

非常勤講師、國學院大學大学院、「西洋美術史」、2014.4～

共同研究員、国立民族学博物館、～2015.3.

(2) 学会等

美術史学会、常任委員、東支部編集事務局担、2014.4～

地中海学会、常任委員、大会準備委員会委員長、2014.4～

国際美術史学会（CIHA）日本委員会、事務局長、2014.4～

日本学術会議、連携会員、博物館・美術館委員会幹事、2015～

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira

1. 略歴

1990年4月 東京藝術大学美術学部芸術学科入学
1994年3月 東京藝術大学美術学部芸術学科卒業
1994年4月 東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程入学
1996年3月 東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程修了
1996年4月 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程入学
2000年3月 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程修了、博士（美術）の学位取得
2000年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（2003年3月まで）
2004年4月 財団法人大和文華館学芸部部員（2005年9月まで）
2005年10月 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻助教授（2007年3月まで）
2007年4月 同 准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史、主として中世絵画史

b 研究課題

中世やまと絵の研究、絵巻の研究

c 概要と自己評価

日本美術史とそれを取り巻く日本史や日本文学の分野において、全集や講座などのシリーズ刊行が相次ぎ、分野横断的に室町時代の造形文化を俯瞰する機会に恵まれた。あわせて、日本美術史に関する概説書を共同監修し、ここでも室町時代の造形美術全般をとらえなおすことを試みた。また、ブラジル・韓国において日本美術史の啓蒙的な講演を行った。国内外における中世絵画の作品調査を継続しており、作品論・作家論についてもなお一層の注力が課題である。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、高岸輝、『日本美術史（美術出版ライブラリー 歴史編）』、美術出版社、2014.4
共著、高岸輝、『岩波講座 日本歴史 第8巻 中世3』、岩波書店、2014.8
共著、高岸輝、『日本美術全集 第9巻 室町時代 水墨画とやまと絵』、小学館、2014.10
共著、Takagishi, Akira. *Between East and West: Reproductions in Art*. Osano, S. (ed.) Crakow, Poland, IRSA Publishing House, 2014.12
共著、高岸輝、『日本美術全集 第8巻 鎌倉・南北朝時代II 中世絵巻と肖像画』、小学館、2015.6

(2) 論文

- 高岸輝、「足利義教と美術—北山と東山をつなぐ」、『聚美』、13号、38-43頁、2014.10
Takagishi, Akira. The Reproduction of Engi and Memorial Offerings: Multiple Generations of the Ashikaga Shoguns and The Yūzū nenbutsu engi emaki, *Japanese Journal of Religious Studies* 42(1), pp.157-182. 2015.7
高岸輝、「中世の絵師と絵巻」、『日本文学論究』、75冊、6-9頁、2016.3

(3) 書評

- 綿田稔、『漢画師 雪舟の仕事』、ブリュッケ、『日本歴史』、792号、137頁、2014.5
笠嶋忠幸、『日本美術における「書」の造形史』、笠間書院、『日本歴史』、794号、120頁、2014.7
齋藤真麻理、『異類の歌合』、吉川弘文館、『日本歴史』、796号、118頁、2014.9
古田亮、『特講 漱石の美術世界』、岩波書店、『日本歴史』、798号、122頁、2014.11
平瀬礼太、『〈肖像〉文化考』、春秋社、『日本歴史』、800号、168頁、2015.1
東京大学史料編纂所編、『描かれた倭寇』、『日本歴史』、802号、121頁、2015.3
黒田日出男、『江戸名所図屏風を読む』、KADOKAWA、『日本歴史』、804号、119頁、2015.5
門脇むつみ、『巨匠・狩野探幽の誕生』、朝日新聞出版、『日本歴史』、806号、121頁、2015.7
太田智己、『社会とつながる美術史学』、吉川弘文館、『日本歴史』、808号、121頁、2015.9
植村峻、『紙幣肖像の近現代史』、吉川弘文館、『日本歴史』、810号、119頁、2015.11
安村敏信、『線で読み解く日本の名画』、幻戯書房、『日本歴史』、812号、150頁、2016.1
小野正俊・五味文彦・萩原三雄編、『木材の中世』、高志書院、『日本歴史』、814号、119頁、2016.3

(4) 解説

- 高岸輝、「釈迦堂縁起絵巻」第三巻第一段（清凉寺蔵）、『日本歴史』、800号、口絵頁、2015.1
高岸輝、「伝常縁筆『古今和歌集』（群馬県立土屋文明記念文学館蔵）の見返し絵について」、群馬県立土屋文明記念文学館紀要『風』、18、1-4頁、2015.3

(5) 学会発表

- 国際、Takagishi, Akira. Emaki Studies: Past, Present, and Future, ORIENTS: Widening Frontiers International Meeting of Researchers on Oriental Art, São Paulo, Brazil, 2014.5.22
国際、Takagishi, Akira. Emaki Studies in Japanese Art History, 2015 Spring AHAK Conference: Art History in Korea in the Age of Asia, Seoul National University, Seoul, Korea, 2015.5.9
国内、高岸輝、「中世の絵師と絵巻」、國學院大學国文学会秋期大会シンポジウム「文化史の中世—文学史をとりまく 武具史・絵画史・書道史—」、國學院大學、2015.11.28.
国内、高岸輝、「室町時代の縁起絵巻にみる古典復興の諸相」、古典知研究会、学習院大学、2016.1.10
国内、高岸輝、「矢代幸雄の絵巻研究」、矢代幸雄研究会、東京文化財研究所、2016.1.13

(6) 啓蒙

- 高岸輝、「淡青評論 2014年ブラジル、もうひとつのキックオフ」、『学内広報』、1457号、12頁、2014.8

(7) 監修

- 山下裕二、高岸輝、『日本美術史（美術出版ライブラリー 歴史編）』、美術出版社、2014.4

(8) 会議主催(チェア他)

- 国内、美術史学会全国大会、チェア、第1分科会、早稲田大学、2014.5.18
国際、l'École Internationale de Printemps à Tokyo, チェア、Troisième Session: Décoration / Decoration, Tokyo National Museum, 2014.6.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、Musée d'ethnographie Neuchâtel, Swiss, One look into the Japanese collections of the Musée d' ethnographie Neuchâtel.
2014.9

特別講演、東京大学文学部公開講座（北海道北見市常呂町公民館）、「絵巻の表現技巧」、2014.10

セミナー、Seoul National University, Seoul, Korea, Emaki Studies in Japan, 2015.5

特別講演、大和文華館、「聖者の群像、霊地の形象—「菅田宗廟縁起絵巻」「石山寺縁起絵巻」を読み解く—」、2015.9

特別講演、大阪府能勢町、「槻峯寺建立修行縁起絵巻」を読み解く」、2015.10

特別講演、防府天満宮、「中世後期における縁起絵巻の再生と「松崎天神縁起絵巻」」、2016.2

(2) 学会

国際、国際美術史学会(CIHA)、国内委員、2014.3～

国内、美術史学会、常任委員、2013.5～

04 哲学

教授 一ノ瀬 正樹 ICHINOSE, Masaki

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第一類哲学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位取得満期退学
1988年4月	東京理科大学理工学部非常勤講師（～1991年3月）
1991年4月	東洋大学文学部専任講師
1994年4月	東洋大学文学部助教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1997年11月	東京大学より博士（文学）の学位を取得
2002年7月	英国オックスフォード大学客員研究員（～2003年7月）
2007年1月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）
2011年1月	英国オックスフォード大学 Honorary Fellow（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

因果論、人格概念の研究、確率の哲学、死刑論、意思決定理論、動物倫理、自由と責任、音楽化された認識論、イギリス経験論

b 研究課題

原因概念と責任概念の連携をめぐる認識論における規範性の役割の研究など

c 概要と自己評価

古典イギリス経験論や現代英米哲学における知識と行為の問題を手掛かりにしつつ、因果性や人格概念についてテーマ研究を進めている。総じて、知識がそのつどいわば即興的に生成してくる場面に注目し、そこで「人格」による知識の所有が生じている次第を解明しつつ、こうした「人格」をこそ知識成立の「原因」と捉える、ただしそうした「人格」の他律的あり方も同時に射程に入れていく、という方向で議論を展開している。また、そのように即興的に生成してくる知識を「音楽」としても押さえ返すことで、新しい認識論の可能性も探っている。近年は、そのような新しい認識論構築の道程として、「意思決定理論」における因果概念と確率概念の絡み合いについて研究を進めている。そして、そうした研究の文脈に沿って、「グローバルCOE「死生学の展開と組織化」拠点リーダーとしての活動と絡めて、医療的意思決定の問題にも研究領域を拡張してきた。さらには、死刑論や安楽死論にも議論を及ぼし、死を差し出す、自分の死を決定できる、という想念に巣くう「死の所有」の観念を指摘し、その構造の解明を試みてもいる。その成果は、2011年刊行の単著『死の所有一死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学一』にまとめられている。

この二年間については、まず、2014年8月に京都大学において開催された国際学会 *The Second Conference on Contemporary Philosophy in East Asia* に参加して、Omission に関わる因果関係について英語による口頭発表をしてきた。さらには、その研究内容をさらに発展させた内容のものを、2015年4月に、カナダのバンクーバーで開催された *The American Philosophical Association Pacific Division 89th Annual Meeting* においてやはり英語で口頭発表をしてきた。不在性が因果関係の中に組み入れられた場合のさまざまな問題性についての研究であり、一筋縄ではいかないが、多くの有益な反応を得て、今後のさらなる展開につながると期待される。また、2015年10月には、記述性と規範性をめぐる英語論文が、定評ある国際ジャーナルの *Synthese* に採用され、まずはオンラインにおいて公開された。国際ジャーナルでの論文掲載は、日本の人文学の分野ではなかなかないので、意義があったと認識している。なお、2011年3月11日の東日本大震災に起因する福島第一原子力発電所事故をめぐる、いわゆる放射能問題についての研究・発信も、前年度に引き続いて、継続して行ってきた。2015年12月には福島に出張し、飯舘村などを視察してきた。それに先立つ2015年3月に、紀要に発表した放射能問題関連の論文は、SNSで流布し、論争を惹起した。加えて、2015年10月にも『哲学雑誌』に避難弱者や被災地での放置動物についての論文を発表した。また、2015年3月には、本郷キャンパスに上野英三郎博士とハチ公の像を建立する計画が実現し、同時に東大ハチ公物語についての編著も公開した。

今後は、引き続き、因果論三部作の最後となる『原因と責任の迷宮』の完成に向けて、自由を規定する他行為可能性に対する条件文分析の手法の適用などを研究していくと同時に、「音楽化された認識論」のさらなる展開も目指したい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、一ノ瀬正樹・正木春彦編『東大ハチ公物語—土野博士とハチ、そして人と犬のつながり』東京大学出版会、2015.3
単著、一ノ瀬正樹『英米哲学史講義』、ちくま学芸文庫、2016.7

(2) 論文

一ノ瀬正樹、「経験論の源流—ベーンコン哲学から広がりいつる眺望」（中公クラシックス・成田成寿訳『ベーンコン 随筆集』所収の解説、中央公論新社、pp.1-24.）、2014.9

一ノ瀬正樹、「いのちは大切」、そして「いのちは切なし」—放射能問題に潜む欺瞞をめぐる哲学的再考—、『論集』第33号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2015年3月、pp.1-48.

一ノ瀬正樹、「断章 いのちは切なし—人と動物のはざま—」（『いのち』再考『哲学雑誌』第130巻802号、哲学会、有斐閣、2015年10月、pp.46-74.）

Masaki Ichinose, "Normativity, probability, and meta-vagueness" (*Synthese*, DOI:10.1007/s11229-015-0950-7, Springer, October 2015)

Masaki Ichinose, "An Essay towards an Epistemology of Responsibility: A Probabilistic Approach" (*Philosophical Studies*, Vol.34. The Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, March 2016, pp.1-32.)

(3) 学会発表

国内、一ノ瀬正樹、「科学的発見のフィクション性と実在性」、哲学熟議第三回「研究倫理と生命倫理」、東京大学文学部、2014.7.7

国内、一ノ瀬正樹、「福島原発と放射能問題を、哲学・死生学を切り口に考える」、ISL 7DAYS、ISL クラスルーム、東京、2014.8.6

国際、Masaki Ichinose, "On Omission-Involving Causation", *The Second Conference on Contemporary Philosophy in East Asia*, Kyoto University, Kyoto, Japan, 24 August 2014.

国内、一ノ瀬正樹、「因果応報と無」、シンポジウム「インドの大地が育んだ世界認識の枠組み～東西哲学対話の再出発～」、東京大学文学部、2014.11.23

国内、一ノ瀬正樹、「倫理学とエネルギー問題」、3.11 哲学熟議7「次世代エネルギーへのソフトランディング」東京大学工学部、2015.3.11

国際、Masaki Ichinose, "Causation by Absence and Normativity", *The American Philosophical Association Pacific Division 89th Annual Meeting*, Westin Bayshore Vancouver, Canada, 3 April 2015.

国内、一ノ瀬正樹、「『声主』（パーソン）と倫理」、哲学熟議8「声のメディアロジー」、東京大学工学部、2015.6.4.

国内、一ノ瀬正樹、「死刑不可能論の射程—人権概念からの一つの哲学的・論理的展開—」、東京法哲学研究会6月例会、東京大学法学部、2015.6.20

国際、Masaki Ichinose, "How to solve the problem of profligate causation", *International Conference: Williamson, Logic and Philosophy*, Peking University, China, 17 October 2015.

国内、一ノ瀬正樹、「仮言的主張としての「死刑不可能論」とその射程」、2015年度日本法哲学学会学術大会Cワークショップ「死刑は刑罰たりうるか」、沖縄県那覇市・市町村自治会館、2015.11.7

国際、Masaki Ichinose, "Music, Improvisation, and Knowledge", *The 7th International Symposium on Temporal Design*, The University of Tokyo, 24 November 2015.

国内、一ノ瀬正樹、「放射線被曝と「いのちの大切さ」をめぐる迷走について」、日本学術会議 臨床医学委員会放射線防護・リスクマネジメント分科会第23期・第3回、日本学術会議、2016.1.7

国際、Masaki Ichinose, "Two Conditional Thinking on Rational Decision-Making", *International Conference on Ethno-Epistemology: Culture, Language, and Methodology*, IT Business Plaza Musashi, Kanazawa, 3 June 2016.

3. 主な社会活動

(1) 文部科学省業務

- ・中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・社会・地理歴史・公民ワーキンググループ委員(2015～)
- ・中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム委員(2015～)
- ・中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・考える道徳への転換に向けたワーキンググループ主査(2016～)

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程修士課程修了
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程退学
1988年4月	東京大学文学部助手
1992年4月	立命館大学文学部助教授
2001年4月	立命館大学文学部教授
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2009年9月	東京大学より博士（文学）の学位を取得
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ現代哲学、ケアの哲学

b 研究課題

ドイツ現代哲学のなかでも、とりわけフッサール、ディルタイ、ハイデガー等によって展開された現象学・解釈学に関する歴史的・体系的的研究を行っている。これまで積み重ねてきたフッサール研究については、1冊の書物にまとめたものを、2009年11月に公にした。また以上の文献的研究と並行して、現象学的哲学の今後の展開の可能性のひとつとして、「看護」を中心とする「ケア」の営みを現象学の視点から基礎づけ解明する試みも行っている。

c 概要と自己評価

フッサールを中心とする現象学の歴史的・体系的的研究に関しては、フッサール現象学とハイデガー哲学の体系的内実について、ドイツ語、英語、日本語で研究成果を報告した。また、ケアの現象学的哲学的考察に関しては、主としてフッサールとハイデガーの現象学に基づきつつ、ケアという営みの哲学的解明を行うとともに、さらに現場でのケアの営みの方から現象学的考察を立ち上げる試みを行い、論文および口頭発表にて、日本語、英語、ドイツ語で研究成果を公表した。さらに「ケアの現象学」に関しては、その研究成果を看護系ならびに医療系の学会および教育機関等において社会に還元する活動も行った。これらの研究・教育活動は、総じて相当程度の成果をあげることができたと判断される。

d 主要業績

(1) 論文

Tetsuya Sakakibara, „Die Intentionalität der Pflegehandlung“, in: *Phänomenologische Forschungen, Jahrgang 2013, Soziale Erfahrung*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 2014, S. 249-265.

Tetsuya Sakakibara, “A Phenomenological Study on Caring for People with Suicidal Inclinations”, Kwok-ying Lau / Chung-Chi Yu (Eds.), *Border-Crossing. Phenomenology, Interculturality and Interdisciplinarity*, Königshausen & Neumann, Würzburg, 2014, pp. 159-170.

榊原哲也、「〈われと汝〉と〈われわれ〉」、木村敏・野家啓一監修『臨床哲学とは何か—臨床哲学の諸相』、2015.1.

榊原哲也、「クリティカルケアへの現象学的アプローチ」、『日本クリティカルケア看護学会誌』、Vol. 11, No. 1, 2015年、9-15頁

榊原哲也、「フッサールとハイデガー——ケアという事象をめぐる——」、『Heidegger-Forum』、第9号、2015年、112-125頁

榊原哲也、「最初で最後、本当に外線その一回きり——透析ケアの現象学試論」、『哲学雑誌』、第130巻第802号、2015年、75-97頁

榊原哲也「「あなたらしさ」を支える患者指導への現象学的視点」、『腹膜透析 2015』(『腎と透析』第79巻別冊)、2015年、23-25頁

榊原哲也、「透析看護に活かす現象学」、『透析ケア』、第21巻11号(通巻283号)、2015年、80-88頁

(2) 学会発表

- 国際、Tetsuya Sakakibara, ““I and Thou” in Nishida and Heidegger”, 6th International Conference of P.E.A.CE (Phenomenology for East-Asian Circle) “Kairos and Topos: Phenomenology and the Celebration of Thinking”, The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong, China, 2014.5.20
- 国内、榊原哲也、「クリティカルケアへの現象学的アプローチ」、第10回日本クリティカルケア看護学会学術集会、名古屋国際会議場、2014.5.24
- 国際、Tetsuya Sakakibara, “Phenomenology of Caring in the Light of Husserl’s Analyses”, International Conference “Phenomenology as a Bridge between Asia and the West: Ethics, Reason, and Culture”, National Sun Yat-sen University, Kaohsiung, Taiwan, 2014.6.14
- 国内、榊原哲也、「ケアの志向性—ケアの志向性の構造—」、哲学講演会、東北大学大学院文学研究科、2014.7.9
- 国内、榊原哲也、「「あなたらしさ」を支える患者指導への現象学的視点」、第20回日本腹膜透析医学会学術集会・総会、山形国際ホテル、2014.9.6
- 国内、榊原哲也、「フッサールとハイデガー——ケアという事象をめぐって——」、ハイデガー・フォーラム第9回大会、東洋大学、2014.9.21
- 国内、榊原哲也、「ケアすることとケアされること」、第18回北日本看護学会学術集会、東北福祉大学（宮城県仙台市）、2015.8.30
- 国際、Tetsuya Sakakibara, “Caring bei Husserl und Heidegger”, Internationale Tagung der Deutschen Gesellschaft fuer phänomenologische Forschung “Lebenswelt und Lebensform”, Universitaet Koblenz-Landau, Campus Landau, Germany, 2015.9.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 講義、「ケアの現象学——急性疾患と慢性疾患をめぐって——」（医療・介護従事者のための死生学 2014年度夏季セミナー）、東京大学本郷キャンパス、2014.8
- 講義、「患者をトータルに見るということ——〈ケアの現象学〉の視点から」（医療・介護従事者のための死生学 2015年度夏季セミナー）、東京大学本郷キャンパス、2015.8
- 非常勤講師、東京慈恵会教務主任養成講習会、「哲学」、2014.7、2015.7
- 非常勤講師、朝日カルチャーセンター・横浜、「ケアの現象学入門」、2014.8～9; 「1日で学ぶ思想家 フッサール」、2015.7
- 非常勤講師、首都大学東京大学院人間健康科学研究科、「看護哲学Ⅰ、Ⅱ」、2014.4～2015.3
- 非常勤講師、日本赤十字看護大学、「哲学と倫理」「生命倫理」、2014.4～2015.3

(2) 学会

- 哲学会、理事長、2014.4～2016.3
- 日本哲学会、会計監査、2014.4～2015.6； 理事、2015.6～2016.3
- 日本現象学会、委員、2014.4～2016.3
- 実存思想協会、理事、2014.4～2016.3

(3) 委員等

- 首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会委員、2015.4～2016.3
- 日本赤十字看護大学研究倫理委員会委員、2015.4～2016.3

1. 略歴

- 1986年3月 東京大学文学部哲学専修課程学士・文学士
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士・文学修士
1990年10月 東京大学教養学部助手（～1993年3月）
1993年4月 神戸大学文学部助教授（～2006年3月）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に西欧近世哲学と現代フランス哲学

b 研究課題

<内在性の哲学>の体系化の作業として次の三つが現在の研究課題である。

- 1/西洋形而上学の形成史の探求とそれを背景とした<存在の一義性>の哲学の系譜学の作業。
- 2/現代フランスにおける差異哲学の検討。
- 3/非人間主義（inhumanisme）の哲学の展開。

c 概要と自己評価

上記三つの研究課題をより具体的には次のように遂行している。

1/ドゥンス・スコトゥスからスピノザに至る中世後期から近世にかけての<存在の一義性>の系譜学の意義を、とりわけスピノザ哲学に焦点をあてて解明すること。

2/現代における<内在性の哲学>の範型＝差異哲学としてのドゥルーズ哲学を解凍し、その意義を現代分析的形而上学や日本語の哲学と突き合わせながら展開すること。

3/限定された存在としての人間とは異なる他のありようへと変容していくことの可能性を肯定する思考としての非人間主義の哲学を、具体的な主題において展開すること。

この二年間においては、1に関して、とりわけスピノザ哲学の特異な位置づけを、ライブニッツ哲学との関連、ならびにその受容史をもとに解明する作業を行い、単著『スピノザライブニッツ問題』として刊行する準備を集中的に進めてきた。2017年初頭の刊行に向けての脱稿を目指している。さらに、岩波書店から刊行予定の『スピノザ全集』編集委員として、全集刊行の準備を進め、幾つかの著作の翻訳を終え、来年度の刊行に向けて、現在、最終的な調整を行っている段階である。また、2に関しドゥルーズ前期哲学を主題とする単著『ドゥルーズ哲学の生成と構造』（仮題）として刊行する準備を進めてきた。こちらに関しても遠くない時期に公刊予定である。脱稿が遅れていることには不満が残るが、これまでの研究の集大成となる大部の著作の刊行を期したい。

d 主要業績

(1) 論文

鈴木泉、「内在と内在的因果性——アンリのスピノザ主義に関する覚書——」、『論集』第34号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、33-55頁、2016.3

(2) 学会発表

国内、鈴木泉、「個体と汎神論——アンリにおけるスピノザライブニッツ問題に向けて」日本ミシェル・アンリ学会第6回研究大会、シンポジウム「アンリとスピノザ」提題、成城大学、2014.6.15

国内、鈴木泉、「広大無辺性概念をめぐって——「形而上学的思想」の位置づけ——」スピノザ協会総会講演、明治学院大学、2015.6.13

国内、「メルロ＝ポンティと大合理主義に関する覚書」メルロ＝ポンティ・サークル、シンポジウム「メルロ＝ポンティと17世紀」提題、駿河台大学、2015.9.26

国内、鈴木泉、「自己決定の自由と自発性/創造の事由——大西克智著『意志と自由』をめぐって——」哲学会ワークショップ「自由の形而上学——大西克智著『意志と自由』をめぐって」、東京大学、2015.10.31

国内、鈴木泉、「ドゥルーズ哲学を要約するかもしれない二、三の定式について——ドゥルーズは本当のところ哲学に何を寄与したのか——」、ドゥルーズ没後20周年シンポジウム「反時代的な未来のために」講演、早稲田大学、2015.11.23

国内、鈴木泉、「テロリズムと戦争機械——「パリ同時多発テロ」を機会に——」、早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「現代日本における『信頼社会』再構築のための総合的研究」主催シンポジウム「テロリズムを考える——デリダ、ドゥルーズ、レヴィナスの哲学から——」、早稲田大学文学部、2016.2.2

国際、鈴木泉、「ドゥルーズと非人間主義の哲学」、全南大学校（韓国・光州）、BK21Plus The Philosophical Education Project towards Transverse Thinking（BK21Plus 横断的思考に向けての哲学教育プロジェクト）による招聘講演、2016.2.23

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京芸術大学、「哲学」、2014.4～2015.3

(2) 学会

日本哲学会、評議員、理事、2013.5～2015.4

日仏哲学会、理事、2014.4～2016.3

スピノザ協会、理事、2014.4～2016.3

日本ライブニッツ協会、理事、2014.4～2016.3

05 倫理学

教授 関根 清三 SEKINE, Seizo

1. 略歴

- 1974年3月 東京大学文学部倫理学科卒業（文学士）
- 1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程修了（文学修士）
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
- 1979年4月 日本学術振興会奨励研究員（所属：東京大学倫理学科）～1980年3月
- 1980年8月 ドイツ学術交流会（DAAD）・ドイツ福音教会（DW）奨学生としてミュンヘン大学福音神学部旧約学科に留学（1985年2月に博士号審査合格）～1985年3月
- 1981年10月 ミュンヘン大学学術助手～1985年3月
- 1985年4月 北海道大学文学部助教授（宗教学）～1988年3月
- 1988年4月 東京大学文学部助教授（倫理学）～1994年6月
- 1989年6月 ミュンヘン大学より Dr. Theol. [神学博士] の学位を取得
- 1994年6月 東京大学文学部 [1995年4月より大学院人文社会系研究科] 教授（倫理学）～現在
- 1996年3月 東京大学より博士（文学）の学位を取得
- 1997年6月 大学入試センター研究開発部教授を併任～1998年3月
- 2000年4月 放送大学客員教授を併任～2004年3月
- 2004年3月 ウィーン大学およびエッセン大学で客員教授～同7月

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋倫理思想史・旧約聖書学

b 研究課題

ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教倫理思想の研究

c 概要と自己評価

西洋の倫理思想史の二大潮流の一たるヘブライズムに関して、旧約聖書に溯って、その解釈学的な解明と思想史的考察とを主たる研究課題としている。その際、編集史、意味論、象徴の解釈学等の方法を用いつつ、一方ではヘブライ語原典の本文批判に基づく研究と、他方ではユダヤ・キリスト教思想、ギリシア哲学を中心とする西洋倫理思想全般との対比を目指している。

この二年間の研究は教育と密接に関係しつつ、1) 2016年3月の定年を前に今までの仕事を纏めることと、2) この十数年のルーティーンを続けることと、両面に分かれる。1) として、定年教員は『紀要』に「遺言」を寄稿するという研究室の緩い慣習に従って「旧新約聖書の一断面」という論考を二号に分けて執筆した。これは全学の大学院生向けのエグゼクティブ講義で語った内容であり、教育と直接結びついている。その講義にも出ていた院生のうち三人が定年の前後に博士論文を纏め、その指導に微力を尽くしつつ、例えば自分のエレミヤ研究も練りつつある。またかつての演習の参加者との共訳で、一緒に読んだテキストの翻訳を出版した。イエレミアス『なぜ神は悔いるのか』がそれだが、これも定年を前にして心して纏めた、教育と関わる仕事だった。

2) については、研究を海外に発信する活動を細々と続け、アテネの国際哲学会でのシンポジウム発題が *Congress Volume* に、また、アジアの旧約学の歴史を概観した論考が、権威ある *Hebrew Bible/Old Testament* に、それぞれ掲載された。後者は、随分前に執筆したものだが、ようやく他の執筆者の原稿が出そろったらしく、ともかく活字となってホッとしている。14年1月に上梓された、私の4冊目の外国語の著作、*Philosophical Interpretations of the Old Testament* の書評もぼつぼつ出だし、その書評者の一人、エッセン大学のアロン教授は今秋、研究交流のため来日の予定で、4月からの勤務校の演習教育にも関わってもらおうと思っている。また日米独のアスペン研究所の交流を通して、古典研究や教育のあり方について反省する機会を持っており、今夏は、本場米国のアスペン・セミナーに参加して研究教育両面の交流を深める予定である。こうした国際的な交流は、体力の続く限り今後も続けていきたい。なお日本のアスペン・セミナーでは2003年以来、企業や官庁のエグゼクティブの方々、更には高校生たちと、古典を泊りがけで共に読

んで対話を積み重ねるセミナーのモデレーターを務め、研究と結び付いた幾ばくかの社会貢献・社会教育の責を果たそうと努めている。この二年間も、アスペンでの活動は私の喜ばしい責務であった。

d 主要業績

(1) 論文

Seizo Sekine (関根清三)、“Hebrew Bible / Old Testament Studies in Asia”、*Hebrew Bible / Old Testament. The History of Its Interpretation, Volume III/2: The Twentieth Century* (edited by Magne Saebo) 、pp.285-299、2015

関根清三、「旧新約聖書の一断面 —「命」という視座から—」、『倫理学紀要』東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室、22 輯、1-23 頁、2015.3

Seizo Sekine (関根清三)、“Philosophical Inquiries into Religions: A Japanese Old Testament Scholar’s Perspective”、**Selected Papers from the XXIII World Congress of Philosophy: Philosophy as Inquiry and Way of Life** (edited by Konstantine Boudouris, Costas Dimitracopoulos and Evangelos Protopapadakis), Philosophy Documentation Center、pp.203-212、2015.9

関根清三、「旧新約聖書の一断面 —「命」という視座から— (続)」、『倫理学紀要』東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室、23 輯、1-29 頁、2016.3

(2) 翻訳

共訳、Joerg Jeremias、“Die Reue Gottes, Aspekte alttestamentlicher Gottesvorstellung,1997(2)”、関根清三、丸山まつ、イエルク・イエレミアス『なぜ神は悔いるのか 旧約的神観の深層』、日本キリスト教団出版局、2014.7

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

「西田哲学と旧約聖書 —アケゲル解釈を中心に—」(2015 年 8 月 6 日、東西宗教交流学会第 34 回大会「西田哲学とキリスト教」講演、京都パレスサイドホテル)

「聖書の哲学的考察 —「命」をめぐる—」(2015 年 12 月 21 日、経営文化フォーラム、学生会館)

(2) 学会

日本倫理学会、評議員、1995 年～

日本基督教学会、理事、2005 年～

日本旧約学会、委員、2015 年～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

和辻哲郎文化賞選考委員、2003 年～

日本アスペン研究所理事、2013 年～

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第1類（文化学類・倫理学専修）卒業（文学士）
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程終了（文学修士）
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
1986年4月	跡見学園女子大学文学部非常勤講師 ～1989年3月
1987年4月	日本学術振興会特別研究員 ～1989年3月
1989年4月	専修大学文学部非常勤講師 ～1990年3月
1990年4月	北海道大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1995年4月	北海道大学文学部人文科学科倫理学講座助教授（学部改組による）
1996年10月	東北大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1997年4月	東北大学文学部人文社会科学科哲学講座助教授（学部改組による）
2000年4月	東北大学大学院文学研究科哲学講座助教授（大学院重点化による）
2000年10月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論、近現代西欧倫理思想

b 研究課題

倫理学的諸概念の哲学的考察

c 概要と自己評価

主たる研究は、一方ではドイツ観念論から現代の現象学的・解釈学的哲学をはじめとする思想史的研究をふまえながら、倫理学的諸問題を「人のあいだ」に根ざし、「人のあいだ」にかかわる問題群として思考することである。この数年は、現在の共同的な生を枠づけている資本制の問題にあらためて関心をいだき、かつて発表した『マルクス 資本論の思考』に引きつづき、考察を継続している。

d 主要業績

(1) 著書

共著、熊野純彦、『人文知 3』、東京大学出版会、2014

(2) 論文

熊野純彦、「美と倫理とのはざままで」、『群像』、11月号、56-69頁、2015.10

熊野純彦、「美と倫理とのはざままで（2）」、『群像』、12月号、182-195頁、2015.11

熊野純彦、「美と倫理とのはざままで（3）」、『群像』、1月号、236-247頁、2015.12

熊野純彦、「美と倫理とのはざままで（4）」、『群像』、2月号、210-223頁、2016.1

熊野純彦、「美と倫理とのはざままで（5）」、『群像』、3月号、237-249頁、2016.2

熊野純彦、「美と倫理とのはざままで（6）」、『群像』、4月号、248-259頁、2016.3

(3) 解説

熊野純彦、「和辻哲郎と私」、上廣倫理財団編『わが師・先人を語る 1』、2014

熊野純彦、「哄笑するカント」、『群像』、2015年1月号、146-147頁、2015

(4) 翻訳

個人訳、I. Kant, "Kritik der Urteilskraft"、熊野純彦、『判断力批判』、作品社、2015

個人訳、H. Bergson, "Matiere et memoire"、熊野純彦、『物質と記憶』、岩波書店、2015

1. 略歴

- 1984年3月 お茶の水女子大学文教育学部哲学科 卒業（倫理学専攻）
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（倫理学専門課程）
1986年3月 同 修了
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（倫理学専門課程）
1991年3月 同 単位取得退学
1991年4月 山口大学人文学部日本思想史学講座専任講師
1994年3月 東京大学大学院人文科学研究科において博士号（文学）を取得
1995年7月 山口大学人文学部日本思想史学 助教授
1996年4月 お茶の水女子大学文教育学部哲学科助教授（倫理学専攻）
2007年4月 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授（比較社会文化学専攻思想文化学コース）
（改組に伴う配置換え）
2011年1月 同 教授
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史・比較思想

b 研究課題

日本思想の倫理学的考察

c 概要と自己評価

倫理学の中心問題である「何をなすべきか」という行為に対する問いを、その基盤となる「人は何であるのか」「世界は何であるのか」という存在の問いにまで遡って考えることを目指す。研究方法としては、日本語で書かれたテキストの思想構造を解明することを通じて、その世界観、人間観を検討するとともに、背後にあるコンテキストも探る。具体的には、道元、法然、親鸞、日蓮、盤珪、白隠などの日本仏教の思想を中心として、日本思想を幅広く扱っている。特に、和辻哲郎の倫理学、倫理思想史の方法について検討し、「間柄の倫理学」には収まらない超越との関係という側面から、新たな日本倫理思想史の構築を目指す。なお、和辻倫理学の対抗軸として、現在、日本民俗学の諸思想家（柳田國男、折口信夫など）を検討中である。これまでの研究は、個別思想家についてを中心としてきたが、今後は、それらを踏まえて新たな日本倫理思想史の構築に関する研究の比重を増やす予定である。

d 主要業績

(1) 著書

単著、頼住光子、『正法眼蔵』入門、角川書店、2014.12

(2) 論文

頼住光子、「井筒俊彦と道元」、『道の手帖 井筒俊彦 言語の根源と哲学の発生』、2014.6

頼住光子、『正法眼蔵』「仏性」巻にみられる道元の世界観に関する一考察、『日本の哲学 第15号 日本哲学史フォーラム』、2014.12

頼住光子、「共生」をめぐる一考察—仏教・儒教・神道の観点から、『倫理学紀要 第22輯』、2015.3

頼住光子、「日本思想における「共生」」、『比較思想研究 第41号』、2015.3

頼住光子、『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」巻に関する一考察、『駒澤大学佛教学部論集』第四十六号、23-52頁、2015.10

(3) 書評

末木文美士、『現代仏教論』、『比較思想 第40号』、2014.3

小林道憲、『歴史哲学への招待 生命パラダイムから考える』、『比較思想 第40号』、2014.3

芹川博通、『ともにいきる』思想から「いかされている」思想へ 宗教断章三十話【改訂版】、『比較思想 第40号』、2014.3

智山伝法院編、廣澤隆之他監修、『近代仏教を問う』、春秋社、『比較思想研究』第41号、175-176頁、2015.3

末木文美士、『日本仏教入門』、角川学芸出版、『比較思想研究』第41号、172-173頁、2015.3

(4) 学会発表

国内、頼住光子、「日本思想における共生」、比較思想学会平成26年度大会、2014.7.20

国内、頼住光子、『正法眼蔵』「現成公案」巻の思想、駒澤大学仏教会平成二六年次大会、駒澤大学深沢校舎、2015.1.26

国内、頼住光子、「比較思想研究の方法論に関する一考察」、比較思想学会東京地区例会、大正大学、2015.3.7

国際、頼住光子、「Some Aspects of Watsuji Tetsuro's Ethics of Aidagara (Betweenness): On the Formation of His Ethics from the Viewpoint of His Ideas on Form and the Flow of Life」、"East Asian Ethics: Lessons from Japanese Confucianism"「日本儒學視域中的東亞倫理學」國際學術研討會、臺灣大學人文社會高等研究院、2015.8.21

国内、頼住光子、「日本思想の中の「無常」」、皇学館大学神道学会、皇学館大学、2015.11.20

(5) 啓蒙

頼住光子、「道元に学ぶ」、『佛教文化講座 第58集、浅草寺』、2014.8

(6) 会議主催(チェア他)

国内、「日本思想史研究会」、主催、2015.4.5

国内、「思想史の対話」(第一回)日本思想史学会総務委員会企画研究会、実行委員、2015.9.12

国内、「日本倫理思想史研究会」、主催、東京大学文学部、2016.3.20

(7) マスコミ

「良寛に学ぶ 上」、『東京新聞』『中日新聞』等、2014.5.17

「良寛に学ぶ 下」、『東京新聞』『中日新聞』等、2014.5.28

(8) 共同研究(産学連携除く)

国内、参画、岡山大学アジアキャンパス、「東アジアの共通善：伝統思想部会」、2015～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、放送大学多摩センター、「「無常」を生きる—日本の思想・文化の中の「無常」」、2014.2

特別講演、朝日カルチャーセンター、「浄土思想と平等院」、2014.3

非常勤講師、法政大学文学部、「日本思想史1、2」、2014.4～2016.3

非常勤講師、朝日カルチャーセンター新宿校、「道元『正法眼蔵』を読む」、2014.4～2016.3

非常勤講師、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、「演習」、2014.4～2016.3

非常勤講師、お茶の水女子大学文教育学部、「演習」、2014.4～2014.9

非常勤講師、京都大学文学部、「日本の仏教思想」、2014.8～

特別講演、文京学びの杜セミナー、放送大学文京センター、「やさしい仏教入門」、2014.8

特別講演、朝日カルチャーセンター(新宿校)、「井筒俊彦と仏教」、2014.12

特別講演、朝日カルチャーセンター(新宿校)、「空海思想と高野山」、2015.3

非常勤講師、お茶の水女子大学文教育学部、「演習」、2015.4～2015.9

非常勤講師、東北大学文学部、「日本の仏教思想」、2015.10～

(2) 学会

国内、日本倫理学会、評議員、2014.4～2016.3、編集委員、2015.4～、大会課題設定委員、2015.10～、大会実行委員、2015.10～

国内、日本仏教総合研究学会、評議員、2014.4～2016.3

国内、日本宗教学会、評議員、2014.4～2016.3

国内、実存思想学会、編集委員・理事、2014.4～2016.3

国内、比較思想学会、編集委員・理事、2014.4～2016.3

(3) 行政

中央教育審議会教育課程企画特別部会「社会・地理歴史・公民WG」、教育政策、委員、2015.12～

06 宗教学宗教学史学

教授 鶴岡 賀雄 TSURUOKA, Yoshio

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部宗教学・宗教学史学科卒業
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教学史専門課程修士課程修了
- 1980年10月 パリ第IV大学歴史学部留学（フランス政府給費留学生）～1981年9月
- 1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教学史専門課程博士課程単位取得退学
- 1982年4月 日本学術振興会奨励研究員（～1983年3月）
- 1984年4月 東京大学文学部助手
- 1985年4月 工学院大学工学部専任講師
- 1987年4月 工学院大学工学部助教授
- 1996年4月 工学院大学工学部教授
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2001年10月 東京大学より博士（文学）の学位取得
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学、西洋宗教思想

b 研究課題

- (1) 近世西欧（とくにスペインとフランス）における神秘思想の研究。中世後期から現代にいたる西欧の宗教思想の展開を、広い視点で見通す研究を目指している。
- (2) 上の研究課題の鍵語である「神秘主義」という概念、およびその実質的内容についての研究。とりわけ近現代（19世紀末～20世紀の西欧と日本）における歴史的形成過程およびその意義についての研究。
- (3) 「神秘主義」概念の成立とさまざまに関連しつつ19～20世紀に誕生した狭義の「宗教学」について、その学問論的性格、および宗教学史思想史上の意義、ないしはその現代的可能性についての研究。

c 概要と自己評価

- (1) 16～17世紀のスペイン神秘主義についての従来の研究をまとめた総合的研究書を完成させたい。実質はほぼ完成しているが、著作としての具体的かたちを与えるための時間的余裕を得られずにいる。最も詳細に研究してきたアビラのテレジアや、十字架のヨハネの宗教思想にかんしては、その現代的意義を探る論考群を執筆しているが、さらに論述を深める必要がある。
- (2) 「神秘主義」という重要概念について、古代から現代にいたるその概念史、および現代的可能性についての総合的著述を企図しており、関連する論考を執筆しているが、いくつかの面でさらに検討が必要な状況にある。
- (3) 「宗教学」という学問的場の性格については、一定の見通しを得るにいたり、試論的論考を作成中である。そうした宗教学を経由した上で、「神」「超越」「神秘」といった宗教哲学的語彙について新たな語り方を産み出すことが今後の課題となっている。

d 主要業績

(1) 論文

- 鶴岡賀雄、「アビラのテレジアにおける「女性と共生」、『共生学』、10号、84-106頁、2015.12
- 鶴岡賀雄、「闇は（どうして）光になるのか——十字架のヨハネにおける「夜」の変容」、『身心変容技法研究』、6号、29-37頁、2016.3
- 鶴岡賀雄、「「他者学」としての宗教学——宗教学の性格規定についての試論」、三友健容博士古稀記念論文集『智慧のともしび アビダルマ佛教の展開』、758-744頁、2016.3
- 鶴岡賀雄、「神のことがらが（わかる）——十字架のヨハネの「受動知性」論」、佐藤直子編『中世における制度と知』、2016.3

(2) 書評

東長靖、『イスラームとスーフィズム——神秘主義・聖者信仰・道徳』、名古屋大学出版会、『宗教研究』、379号、196-207頁、2014.6

ヒロ・ヒライ・小澤実編、『知のマイクロコスモス——中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』、中央公論新社、『史苑』、75巻、242-247頁、2015.1

須沢かおり、『エディット・シュタインの道程』、知泉書館、『宗教研究』、382号、171-177頁、2015.6

(3) 学会発表

国内、鶴岡賀雄、「身心変容技法とキリスト教神秘主義」、日本宗教学会第74回学術大会、同志社大学、2014.9.14

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立正大学、「宗教学特殊講義」、2015.4～2016.3

(2) 学会

国内、日本宗教学会、常務理事、2004.9～

国内、中世哲学会、理事、評議員、2015.11～

教授 市川 裕 ICHIKAWA, Hiroshi

1. 略歴

1976年3月 東京大学法学部卒業（法学士）
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学・宗教史学）
1982年7月 ヘブライ大学（エルサレム）人文学部タルムード学科特別生等（1985.7.）
1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
1986年5月 筑波大学哲学・思想系文部技官（～1990.8.）同講師（～1991.3.）
1991年4月 東京大学文学部助教授
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授 現在に至る
1998年10月～11月 ボストン大学人文学部客員研究員

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・ユダヤ教

b 研究課題

継続して以下の3つの主要な課題に取り組み、成果は講義、講演、論文において主として反映させているが、1番と3番に関係する課題が幸いにも2013年より科学研究費の課題として採択された。

- (1) 宗教的想像力の比較宗教学の構想：聖書とタルムードの宗教を基盤とするユダヤ教の宗教思想の特徴を、自由の精神の意義に重点を置いて宗教と法の基礎理論を構築し、これをモデルにして、他の古典的宗教との比較考察を行う。
- (2) イエス時代のユダヤ人社会に関する宗教史的研究：「旧約時代・中間時代・新約時代」という歴史分割をせずに、ヘレニズム・ローマの影響下における古代地中海世界の宗教として、ユダヤ宗教文化の特徴を把握する試みを行う。
- (3) 宗教学の観点から近現代を見直す作業：近代に遭遇したユダヤ教の葛藤と変容を研究の出発点として、近代の人間観、世界観を形成した啓蒙主義とロマン主義の今日的意義を考察し、現代世界の喫緊の課題の淵源とその解決のための枠組みを提示し、もって日本の近代の理念を再検討する。

c 概要と自己評価

- (1) 平成25年度科学研究費基盤研究A「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」に基づいて、平成26（2014）～27（2015）年度に本格的な共同研究を実施した。平成26年9月の日本宗教学会学術大会（於同志社大学）において、パネルテーマ「ローマ帝国における諸民族と宗教」と題して、5名の研究者による研究発表

を行った。平成27年3月に小規模の国際シンポジウムを開催し、同年夏の世界宗教史学会（於エアフルト大学）のための準備に充てた。基盤研究のための事務局体制を作って、若手研究者とともに研究計画を遂行できたことが、研究の充実につながったのは、大変ありがたいことであった。

市川科研 HP URL <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/ichikawakaken/index.html>

- (2) 同科研基盤 (A) の研究の一環として、平成27年度8月28日に、世界宗教史学会において、パネルを組織し、4名の研究者による研究発表を行った。テーマは「Change of Religious Consciousness under the Roman Empire: Animal Sacrifice and its Substitution」である。会議の実行委員長がドイツの古代ローマ宗教研究者の故か、古代宗教のパネルが多く、この分野で日本から参加したのが我々のパネルのみだったこともあり有意義な時間を過ごすことができた。古典古代の宗教研究は格段の進歩を遂げているため、同時代のユダヤ教研究との共同作業の必要性を痛感した。
- (3) また、平成27年1月には、カイロゲニザ文書の専門研究者をイスラエルから招聘して、セミナーとシンポジウムを開催した。セミナーは、「How to read and identify Jewish legal contracts from the Geniza (いかにしてゲニザ文書中の、ユダヤ法に基づく契約書を読み解き同定するか)」と題して、ゲニザ文書の読解を学び、国際シンポジウムは「ユダヤ的共同体の萌芽と中世における展開 一次史料による比較」と題して、ユダヤ人共同体構成の実態に迫る貴重な一次史料2つ、即ち、バビロニア捕囚期の楔形文字資料と紀元後10-13世紀エジプトのゲニザ文書を手掛かりに、1500年を隔てた両者の比較を通して、ホスト社会における寄留者ユダヤ人の法的地位とアイデンティティの実態に迫る試みを行った。
- (4) 近代ユダヤ教の分野では、京都大学の勝又直也准教授の科研基盤研究 (A) の研究分担者として、平成26年9月から10月にかけてイスラエルの専門研究者を招聘して、ハスカラーとハシディズムの第1次文献の講読をヘブライ語で享受してもらった。これには10名の若手研究者が参加し、現代ヘブライ語による原典講読の醍醐味を満喫できた。19世紀東欧のユダヤ教は今後さらに重点的に扱うべき題材にあふれていることを知り、大変励まされた。

d 主要業績

(1) 論文

- 市川裕、「ユダヤ賢者における「神の国」の観念」『聖書学論集46 聖書の宗教とその周辺』日本聖書学研究所、リトン2014.9、195-214頁。査読あり
- 市川裕、「井筒俊彦とユダヤ思想：哲学者マイモニデスをめぐって」『慶應義塾大学 言語文化研究所紀要』2015.3、49-69頁。査読あり
- 市川裕、「公的宗教としてのユダヤ教とその現代的変容」(韓国語訳 梁賢恵)、『宗教研究 *Korean Journal of Religious Studies*』Vol.75-No.1, pp. 37-58, 韓国宗教学会編 2015.
- 市川裕、「タルムードの聖書解釈に込められたユダヤ賢者の実存的関心」『京都ユダヤ思想 特集号 レヴィナス哲学とユダヤ思想』京都ユダヤ思想学会編、33-52頁、2015.3.
- 市川裕、「神殿供儀から啓示法へ——神教の歴史におけるラビ・ユダヤ教の意義——」『東京大学 宗教学年報』XXXI、2015.3. 1-19頁、査読なし。讃辞つき。

(2) 編集、監修

- 編著『図説ユダヤ教の歴史』河出書房新社(フクロウの本シリーズ)、執筆担当：第1, 2, 6, 7章他、2015.3、総頁131頁。
- 共著：南直人編『食の文化フォーラム32 宗教と食』(ドメス出版2014)、執筆担当「第II部第1章ユダヤ教—神との契約」(68-89頁)、及び「総合討論」。査読あり 2014
- 黒川知文との共著『世界宗教シリーズ ユダヤ教』宗教情報センター(真如苑)、「ユダヤ教の思想」1-67頁、2015.2(非売品)。査読なし

(3) 書評、新刊紹介

月本昭男『この世の成り立ちについて—太古の文書を読む』ぶねうま舎、書評新聞。2014.2.

(4) 講演・学会発表

- 第73回日本宗教学会学術大会、パネル「ローマ帝国における諸民族と宗教」(土居・小堀・中西・葛西と)の代表として「祭司的ユダヤ教からラビ・ユダヤ教へ」を発表。2014.9 於同志社大学。
- 韓国宗教学会秋季大会のキーノート・スピーカーとして「公的宗教としてのユダヤ教とその現代的変容」、ソウル市東国大学 2014.11.15 (発表は日本語で行われ、事前に梁賢恵梨花女子大教授の韓国語訳が配布された。コメントに対する回答は、梁教授の通訳を介して行われた。)。発表論文は韓国語訳で紀要号に掲載された。
- 「リトアニアの正統派ユダヤ教の伝統とその現代的影響」科学研究費基盤 (A) (代表：勝又直也京都大学准教授) による研究会、於京都大学 2014.6.22.
- 「井筒俊彦とユダヤ思想：哲学者マイモニデスを中心に」科学研究費基盤 (B) (代表：天理大澤井義次教授) による研究会、於東大東洋文化研究所、2014.11.20.

科研国際シンポジウム：パネル発表（土居・小堀・ゲンチェヴァと）。科学研究費基盤（A）（代表：市川裕）による研究成果。於東大法文1号館。2015.2.

Panel title: Change of Religious Consciousness under the Roman Empire: Animal Sacrifice and its Substitution

Ichikawa's title: 'From Sacrifice to Divine Law: The formation of the Halakhic Religion of Jews under the Roman Empire.'

IAHR 国際宗教学会、パネル発表（土居・小堀・ゲンチェヴァと）。2015.8.28 於ドイツ、エアフルト。

Panel title: Change of Religious Consciousness under the Roman Empire: Animal Sacrifice and its Substitution

Ichikawa's title: 'From Sacrifice to Divine Law: The formation of the Halakhic Religion of Jews under the Roman Empire.'

第74回日本宗教学会学術大会発表「一神教の歴史におけるユダヤ啓示法の意義」於創価大学2015.9.6.

早稲田大学史学会 公開シンポジウム「世界史の中のユダヤ人」、招待報告③ 市川裕「日本の世界史教科書におけるユダヤ人」、於早稲田大学戸山校舎33号館。2015.10.4.

同志社大学一神教学際センター主催 CISMOR 公開講演「タルムードと日本文化」2015.11.7.

千葉教会会堂利用委員会主催 公開講座「ユダヤ人をはぐくんだユダヤ教」千葉教会、千葉市、2015.11.29.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立教大学大学院キリスト教学研究科、「聖書学演習（旧約）」、2014.9～2015.3, 2015.9～2016.3

非常勤講師、東京芸術大学音楽学部、「宗教学」、2014.7～2014.9, 2015.7～2015.12

非常勤講師、慶應義塾大学文学部、「哲学倫理学特殊II」、2015.4～2016.3

非常勤講師、聖心女子大学哲学科、「キリスト教特講IV」、2014.4～2015.3, 2015.4～2016.3

(2) 学会関係

日本宗教学会（理事）、日本ユダヤ学会（理事長）、日本聖書学研究所（役員）、日本オリエント学会、日本法哲学会、京都ユダヤ思想学会

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部I類宗教学宗教学史学専門課程卒業
1982年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程入学
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻博士課程進学
1987年9月	ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程（カナダ・ヴァンクーバー）入学
1990年8月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻博士課程退学
1990年8月	筑波大学地域研究研究科文部技官、哲学思想学系準研究員就任
1993年4月	筑波大学地域研究研究科（哲学思想学系）助手昇進
1994年5月	ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程修了
1995年4月	東京大学大学院人文社会系大学院宗教学宗教学史学研究室助教授転任
2007年4月	同准教授（名称変更）
2009年4月	同教授
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター長（兼任）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代宗教研究、祖先崇拜研究、死生学研究、生命倫理研究、応用倫理研究

死者にかかわる思想、表象、儀礼を比較文化的視点から考察することを中心的な目的とし、その目的の下に具体的な研究テーマを以下のように設定する。(A)「死者性」という概念（我々が死者をどのような存在として認識しているのか、また我々が死者とどのような関係を持っているのか、死者に対するイメージと記憶）をキーワードとし

て、宗教・世俗の枠を越えた死生学を構築することを目指した上で、具体的研究対象として、(B)古代中国における死ならびに死者に対する観念と儀礼の背後にある宗教的宇宙観と救済論、歴史を明らかにすること、(C)現代の生命倫理をめぐる言説の中に、死と死者に関わる考え方がどのように反映しているかを明らかにすること、という二つを設定し、その上で (D)伝統的な宗教的な価値観や感覚が、宗教という形態をとらずに現代社会に浸透している様を考えることを目指している。

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のように区分できる。

まず、「死者性」概念に基づく死生学研究（上記(A)）にかかわる分野として

- (1) 死生学の研究史とその理論構築、および死生学の比較文化論的研究。
- (2) 祖先崇拝の理論研究ならびに比較文化的研究。

次に、中国古代における死ならびに死者に関する研究（上記(B)）にかかわる分野として

- (3) 殷・周・春秋時代の出土文字資料（甲骨・金文）を用いた中国古代宗教研究。
- (4) 戦国・秦・漢時代の出土文字資料（簡牘・帛書）を用いた中国古代宗教研究。
- (5) 戦国・秦・漢時代の儒家の「孝」文献に関する研究。
- (6) 戦国・秦・漢時代の儒家文献を用いた葬送儀礼、祖先祭祀研究。
- (7) 漢代の墓葬文書（告地策・鎮墓文・画像石・墓碑）に関する研究。
- (8) 殷周～隋唐時代における「死者性」の変化をあとづける宗教史的研究。

現代の生命倫理に関する研究（上記(C)）として

- (9) 生命倫理言説の文化性に関する研究。
- (10) 現代中国における生命倫理・医療倫理言説に関する研究。
- (11) 伝統的中国医学（漢方）の医療倫理に関する研究。

伝統的価値観の現代における浸透の研究（上記(D)）として

- (12) 応用倫理という領域に宗教が与えている影響に関する研究。

c 概要と自己評価

この内、(2)(3)(5)は2001年度発刊の著書の中で系統的に見解を述べることができた。(1)(4)(6)(7)(8)(9)(10)についても、既に相当程度、体系的に研究を発表してきている。現在は(1)(9)(10)(12)が最も関心を持っている分野になっている。一方、(11)は未だに萌芽的な研究にとどまっておき、なかなか進展していない。中国の生命倫理、医療倫理に関する専門家は日本には殆どいないのが現状であり、その研究の意味は大きいと考えるので、その分野の研究に積極的に取り組んでいきたい。

d 主要業績

(1) 論文

池澤優、「儒教のお葬式」、『仏教文化』第54号、2016年3月20日、東京大学仏教青年会、45～66頁。

池澤優、「文化的差異の視点から死生学を考える」、『死生学・応用倫理研究』第21号、東京大学大学院人文社会系研究科、2016年3月15日、84～100頁。

IKEZAWA, Masaru, "Rapport du congrès international «Après le désastre - commémoratives et culturelles»,» «Après le désastre - commémoratives et culturelles», Death & Life Studies and Practical Ethics, the University of Tokyo, March 2016, pp.5-13.

池澤優、「中国における呪術に関する若干の考察—呪術という語の呪術的性格」、江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛』、リトン、2015年3月31日、257～296頁。

池澤優、「国際シンポジウム「災害が遺したもの—語りつぐ記憶と備える文化」趣旨説明」、『死生学・応用倫理研究』第二十号、2015年3月15日、10～18頁。

池澤優、「生命倫理と伝統的文化—中国における知 情 同 意 に関する論争を題材に」（日本生命倫理学会第25回年次大会大会長講演）、『死生学・応用倫理研究』第二十号、2015年3月15日、120～151頁。

池澤優、「死者とはだれのことか—古代中国における死者の記憶を中心に」、秋山聰・野崎勲編『人文知』第三巻（死者との対話）、東京大学出版会、2014年11月28日、23～42頁。

池澤優、「祀りと占いの世界」、中国出土資料学会編『地下からの贈り物—新出土資料が語るいにしへの中国』、東方書店、2014年6月30日、78～87頁。

(2) 教科書

東京大学生命科学教科書編纂委員会『現代生命科学』、羊土社、2015年3月15日。（担当：第11章「生命倫理はどこに向かいつつあるのか」、155～166頁。）

(3) 学会発表

海外、IKEZAWA, Masaru, “The Religiosity of Bioethical Discourses: An Examination from the Viewpoint of Cultural Diversity,” in XXIth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions パネル “Representing Death and Life: Transitions, Diversities, and Contemporary Significance” (No.25-312), University of Erfurt, Germany, 2015 年 8 月 25 日。

海外、IKEZAWA, Masaru, “Confucianism, Daoism, and Toshihiko Izutsu: Comments on ‘Rectifying Names’ (zheng ming 正名) and ‘Being Arises from Non-being’ (yu sheng yu wu 有生於無),” in XXIth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions パネル “Toshihiko Izutsu and Oriental Religious Thought,” (No.27-306), University of Erfurt, Germany, 2015 年 8 月 27 日。

(4) 会議主催(チェア他)

海外、XXIth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions パネル “Representing Death and Life: Transitions, Diversities, and Contemporary Significance” (No.25-312) 企画・司会。University of Erfurt, Germany, 2015 年 8 月 25 日。

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

國學院大學非常勤講師、2004.4～

(2) 学会

日本生命倫理学会、理事。日本宗教学会、理事。中國出土資料學會、理事。東方学会、評議員。

(3) 行政

東京大学医学部附属病院臨床試験審査委員会委員、東京大学医学部附属病院法の脳死判定委員会委員、東京大学生命科学ネットワーク運営委員会、幹事会委員。

准教授 **藤原 聖子** FUJIWARA, Satoko

1. 略歴

1986 年 3 月	東京大学文学部宗教学宗教史学専門課程 卒業
1986 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 入学
1988 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 修了
1988 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程 進学
1991 年 9 月	シカゴ大学大学院ディヴィニティ・スクール宗教史専攻留学 (至 1994 年 6 月)
1995 年 12 月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程単位取得退学
1996 年 1 月	日本学術振興会特別研究員 (至 1998 年 12 月)
2001 年 4 月	大正大学文学部国際文化学科助教授
2006 年 4 月	大正大学文学部表現文化学科教授
2010 年 4 月	大正大学文学部人文学科教授
2011 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学 (理論研究・比較研究)、宗教と教育の関係、アメリカの宗教

宗教学の基礎でありながら、20 世紀後半以降、方法として成立し難くなった「比較」に注目し、その観点から、理論研究を行うとともに、ケーススタディとして宗教と教育の関係やアメリカの諸宗教を分析している。

b 研究課題

宗教比較の方法、宗教史の記述について、学界ならびに一般社会に見られる問題とその背景・原因を洗い出し、具体的対案を提示することを課題とする。個々の課題設定は以下の通りである。

(1) 比較理論の検討として、①欧米宗教学の変遷、②宗教分類概念の問題、③宗教に対する代替概念の問題をとりあげる。

- ①「比較宗教学 comparative religion」から出発した欧米の宗教学とその基礎前提が、その後通時的・実証的研究を重視することによってどのように変化したかを調べる。人文的宗教学と社会科学的宗教学の制度的位置関係についても、その歴史の変遷過程を明らかにし、その中での国際学会の役割を批判的に検討する。
- ②「世界宗教」「民族宗教」の対概念をはじめ、宗教学で伝統的に用いられてきた宗教分類概念の妥当性を、昨今の批判理論に照らして検討する。特にマックス・ウェーバーの宗教社会学（「世界宗教の経済倫理」）の受容が、日本とアメリカの宗教学でどのように異なるかに焦点を当て、何がその違いをもたらしたのか、それが今日の両国の学界・社会におけるマクロな宗教比較言説をどう規定しているかを調べる。
- ③2000年代以降の宗教現象を分析するために、ポスト・セキュラー論・概念がしばしば用いられるようになったが、それは日本の現状をとらえるのにどこまで有効かを検討する。
- (2) 近現代社会の公教育において宗教がどう扱われてきたかに関する歴史的研究を行う。
ある国の公教育では宗教が排除される、他の国では宗教が取り込まれるという現象を、単に「宗教教育の有無」や「政教分離の有無」として見るのではなく、排除・吸収どちらの場合でもその前提として公権力により「宗教」が定義されているということに注目し、各国の教育制度と法令・教科書の中にその表れを探る。一般概念としての「宗教」のみならず、キリスト教、仏教といった各宗教に関する記述と、教育方法・思想や当該国の宗教・社会情勢の関係を調べる。対象国はイギリスとアメリカを中心とする。
- (3) (2)の研究成果を踏まえ、国内の公教育における宗教の描き方・教え方に関する問題点を指摘し、改善のための具体的方策を示す。対象は中等教育から高等教育、社会人教育を含む。

c 概要と自己評価

上記の(1)(2)(3)の課題にはほぼ同時進行で取り組み、全てに関して書籍ないし論文によりまとめた成果を発表した (d 参照)。(1)の①②については国際宗教学会の学会誌刊行 60 周年記念出版をはじめとする 2 つの論文集に 2 本の英語論文を寄稿した。③については米国で 2 回の研究発表を行ったほか、国際ジャーナル用に “On Secularity and Post-Secularity in Japan: Japanese Scholars’ Responses” と題した特集号を編集している。(2)の宗教と公教育のテーマについては海外でも関心が高まっており、日本の現状分析については成果を英語論文・伊語論文で発表し、イギリスのそれについては国際学会での口頭発表後、日本語論文として発表した。(3)については自らの実践を踏まえた英語論文を発表するほか、海外のシンポジウムで口頭発表を行った。

d 主要業績

(1) 論文

Satoko Fujiwara, “Establishing Religion through Textbooks: Religions in Japan’s ‘Ethics’ Program,” *Textbook Gods: Genre, Text and Teaching Religious Studies*, ed. by Bengt-Ove Andreassen and James R. Lewis, pp. 43-61, 2014.6

Satoko Fujiwara, “Problemi nell’insegnamento delle religioni in un Paese non religioso,” *I’educazione nella società asiatica*, a cura di Kuniko Tanaka, *Asiatica Ambrosiana* 6, pp. 99-113, 2014.9

藤原聖子、「アメリカ宗教学における「呪術」概念」、江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛 上巻（宗教学論叢 19）』、47-78 頁、リトン社、2015.3

Satoko Fujiwara, “How Religious Studies is Taught in Japan,” *Teaching Theology & Religion*, 18/3, pp.276-279, 2015.7

Satoko Fujiwara, “An Analysis of Sixty Years of Numen: How Much Diversity Have We Achieved?,” *NVMEN, the Academic Study of Religion, and the IAHR: Past, Present, and Prospects*, ed. by T. Jensen and A. W. Geertz, pp.391-414, 2015.11

Satoko Fujiwara, “Why the Concept of ‘World Religion’ Has Survived in Japan: On the Japanese Reception of Max Weber’s Comparative Religion,” *Contemporary Views on Comparative Religion*, ed. by Peter Antes, Armin W. Geertz and Mikael Rothstein, pp. 191-203, 2016.2

藤原聖子、「テロに抗するイギリスの宗教教育」、『現代宗教 2016』、55-76 頁、国際宗教研究所、2016.3

(2) 解説

藤原聖子、「解説」、増澤知子『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説—』、449-465 頁、みすず書房、2015.3

(3) 学会発表

国際、Satoko Fujiwara, “The Dynamics of Religious Diversity and Social Cohesion within School Textbooks: A Reflection on ‘Contextual’ Religious Education Research,” CARD (Critical Analysis of Religious Diversity) Seminar, Nyborg, Denmark, 2014.6.6 (招聘講演)

国内、藤原聖子、「ポスト多文化主義とポスト世俗主義の接合—英国宗教教育の現在—」、日本宗教学会、同志社大学、2014.9.13

- 国際、Satoko Fujiwara, “Explaining Japanese youth religiosity after Aum: spiritual or post-spiritual?,” AAS/WMU Workshop: Against Insularity: Moving Beyond “Japanese Religions,” Kalamazoo, USA, 2015. 3.30 (招聘講演)
- 国際、Satoko Fujiwara, “A Critical Reflection on the “Communitarian Turn” in Religious Education,” IAHR, Erfurt, Germany, 2015.8.27
- 国際、Satoko Fujiwara, “Why the Concept of ‘World Religion’ Has Survived in Japan: On the Japanese Reception of Max Weber’s Comparative Religion,” IAHR, Erfurt, Germany, 2015.8.28
- 国内、藤原聖子、「サンデルが宗教の授業をするとどうなるか—英国宗教科の新展開—」、日本宗教学会、創価大学、2015.9
- 国際、Satoko Fujiwara, “Critics, Caretakers, or Creators?: The Role of Scholars of Religion in Japanese RE,” Southern Denmark University Symposium, Odense, Denmark, 2015.11.11 (招聘講演)
- 国際、Satoko Fujiwara, “Explaining Japanese youth religiosity after Aum: an alternative or a new mainstream?,” American Academy of Religion, Atlanta, USA, 2015.11.23

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 特別講演、京都女子大学、「これからの社会人における 他者を気づかう宗教リテラシー」、2014.11
- セミナー、浄土宗総合研究所、「教科書の宗教記述の問題について」、2015.5
- 特別講演、都倫研、「市民性教育としての宗教の学習 —その可能性と課題をイギリスの実践から考える—」、2015.6
- セミナー、南山大学宗教文化研究所・Templeton 財団助成プロジェクト、「日本の中等教育の教科書において「宗教」はどのように扱われているか」、2015.10
- 特別講演、浄土宗総合研究所、「公教育と宗教—教科書からみた現状と課題—」、2016.2
- 非常勤講師、大正大学、2011.9～

(2) 学会

- 国内、日本宗教学会、理事。日本学術会議、会員。哲学委員会幹事(2014.10～)。日本宗教研究諸学会連合、幹事(2014.12～)。
- 国際、International Association for the History of Religions, Executive Committee Member, 2010.9～
- 国際、World Humanities Conference (CIPSH/UNESCO), Core Group Member, 2016.1～

准教授 **西村 明** NISHIMURA, Akira

1. 略歴

- 1997年3月 東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教学専修課程 卒業
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教学専門分野修士課程 入学
- 1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教学専門分野修士課程 修了
- 1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教学専門分野博士課程 進学
- 2001年4月 日本学術振興会特別研究員 DC2 (東京大学、至2003年3月)
- 2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教学専門分野博士課程 単位取得退学
- 2003年4月 日本学術振興会特別研究員 PD (九州大学、至2004年3月)
- 2004年4月 鹿児島大学法文学部人文学科助教授
- 2007年4月 鹿児島大学法文学部人文学科准教授
- 2012年9月 ハワイ大学マノア校歴史学科客員研究員・米国国務省東西センター太平洋諸島開発プログラム 客員研究員 (フルブライト奨学金研究員プログラム、至2013年2月)
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教学専門分野准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・宗教学人類学・宗教民俗学・慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化
 主な研究活動は大きく以下の3つのテーマ群についてである。

(A)戦争や災害による犠牲者に対する態度、(B)現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性、(C)島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のとおりである。

(1) 「(A) 戦争や災害による犠牲者に対する態度」に関わる研究

遺骨収集・戦地慰霊において、遺族や戦友といった戦死者を取り巻く直接的関係者ばかりではなく、宗教者・旅行者・行政といった第三者がどのように関与するかをめぐると、次世代へどのように継承されようとしているかをめぐるとして調査・考察を行っている。その際、日本人による遺骨収集や戦地慰霊の状況と米豪や太平洋諸島の状況との国際比較、次世代継承に関する宗教体験の伝承や宗教組織の継承などとの比較、戦地慰霊に関する聖地巡礼との比較を行っている。

(2) 「(B)近現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性」に関わる研究

九州をおもなフィールドとして、近現代の地域社会のなかで人びとがどのような信仰実践や宗教的行為を行ったかについて、そうした実践を支える日常生活とともに調査・考察している。とりわけ、民俗社会を基盤とした地域が、戦争や公害、自然災害などの歴史的経験からのレジリエンス（回復力）をどのように発揮しているかということについて、博士論文で取り上げた長崎の原爆慰霊を視野に入れながら考察しようとしている。

(3) 「(C) 島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触」に関わる研究

奄美群島とマイクロネシア地域を主な対象としながら、大航海時代以降のヨーロッパ人のグローバルな移動に端を発する人的な交流の活発化のなかで宗教的接触状況が地域の宗教性のあり方にどのような影響を及ぼしているのかについて比較宗教的な理解を目指している。

c 概要と自己評価

(1)は博士論文の研究課題の延長上にあるものだが、対象地域の拡大と継承という宗教学的テーマへの深化を図りつつある状況である。2010～12年度に代表を務めた科研費基盤研究と、2012年度に滞在したハワイ大学での研究によって研究内容も研究ネットワークもさらなる展望が開けつつある。

(2)(3)はさまざまな研究プロジェクトへの関わりから徐々に輪郭が浮かびつつある、ポスト博士論文の研究テーマであるが、現状としては単発のモノグラフや翻訳の作業にとどまっている。しかし将来的には九州を窓口としてアジア・太平洋域を視野に入れた日本宗教史の構想につながる研究であるという認識で進めている。

d 主要業績

(1) 論文

西村明、「隔たりへの感受性—遺骨収集・戦地慰霊への宗教学的アプローチ」、『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、27、pp.27-36、2014

西村明、「葬送儀礼への第三者の関与—参入と介入の視点から」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、第191集、299-314頁、2015

西村明、「船と戦争—記憶の洋上モデルのために」、『思想』、no.1096、51-66頁、2015.8

西村明「唐人町—城下のマチを活かす」、『新修福岡市史 民俗編二』、369-395頁、2015

財部めぐみ・西村明「奄美の宗教について—島の精神的動態」高宮広土・河合 溪・桑原季雄編『鹿児島島の島々—文化と社会・産業・自然』、南方新社、31-41頁、2016

(2) 書評

志賀市子、『(神)と(鬼)の間—中国東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』、風響社、『宗教と社会』、第20号、pp.98-101、2014.6

石川明人、『戦場の宗教、軍人の信仰』、八千代出版、『宗教研究』、381号、pp.274-278、2014.12

今井昭彦、『反政府軍戦没者の慰霊』、御茶の水書房、『宗教と社会』、第20号、81-84頁、2015.6

(3) 学会発表

国内、西村明、「戦地慰霊・遺骨収集をめぐるパフォーマティブ・メモリー—金谷安夫氏の8ミリ作品「姿なき墓標」(テニアン、昭和51年)、「草むす屍」(サイパン、昭和59年)の上映とともに」、「宗教と社会」学会研究プロジェクト「戦争死者慰霊の関与と継承」研究会第6回研究集会・國學院大學研究開発推進センター研究事業「昭和前期における神道・国学と社会」、國學院大學学術メディアセンター棟会議室06、2014.3.16

国内、西村明、「橋を架ける—パフォーマティブな記憶の比較論」、西日本宗教学会第四回学術大会、川辺岩屋公園清流の杜（南九州市川辺町清水3882岩屋公園キャンプ場内）、2014.3.30

国際、Akira Nishimura, “Mapping Minamata on Kyushu island on the geopolitical perspective and the tracing-layer movements,” International Union of Anthropological and Ethnological Science、幕張メッセ、2014.5.16

国内、西村明、「越境する『導師』たち—戦跡慰霊に対する仏教者の関わりについて」、龍谷大学アジア仏教文化研究センター(BARC)2014年度第2回国内シンポジウム「アジア仏教の現在 VI 仏教と死者のゆくえ—近現代の日本からの展望」、龍谷大学、2014.5.31

国内、西村明、「戦争死者の慰霊とパフォーマンスな記憶—モニュメント・写真・仏像」、国立大学法人総合研究大学院大学学融合研究事業・公開セミナー「負の文化遺産についてあらためて考える」、国立民族学博物館、2014.7.26

国内、西村明、「ポスト九学会連合の奄美調査の可能性」、日本宗教学会第73回学術大会、同志社大学、2014.9.13

海外、Akira Nishimura, “Considering Oceanic Mode of Memory” The 6th International Emotion Research Conference: DEATH, MOURNING AND THE MEMORY POLITICS IN ASIA, 全南大学校湖南学研究所 (韓国)、2015.6.19

海外、Akira Nishimura, “On the Relation of Yasukuni Jinja Shrine and the Recovery of Fallen Soldiers’ Remains,” XXI World Congress of the International Association for the History of Religions, エアフルト大学 (ドイツ)、2015.8.24

海外、Akira Nishimura, “Double-layered pilgrimage: commemorating fallen soldiers on the occasion of visiting Buddhist holy sites,” XXI World Congress of the International Association for the History of Religions, エアフルト大学 (ドイツ)、2015.8.24

国内、西村明、「戦後における戦跡巡拝と仏跡巡拝の重なりについて」、日本宗教学会第74回学術大会、創価大学、2015.9.6

国内、Akira Nishimura, “Two Types of the War Dead and their Commemorations in Japan,” 国際ワークショップ (ウメサオ・スタディーズ・インターナショナル)「戦争とその継承—展示、経験、死者」、京都大学人文科学研究所、2016.3.6

(4) 予稿・会議録

国内会議、西村明、「越境する『導師』たち—戦跡慰霊に対する仏教者の関わりについて」、龍谷大学アジア仏教文化研究センター2014年度第2回国内シンポジウム、龍谷大学、2014.5.31

『アジア仏教の現在 VI 仏教と死者のゆくえ—近現代の日本からの展望』、pp.49-67、2014

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「戦争死者慰霊の関与と継承」研究プロジェクト第7回研究会(共催:戦争社会学研究会・関東例会、科研費基盤研究B「連合国のアジア戦後処理に関する宗教学的的研究—海外アーカイブ調査による再検討」(研究代表者:創価大学中野毅))、チェア、東京大学本郷キャンパス法文1号館1階113教室、2014.11.1

国内、「宗教と社会」学会第23回学術大会、実行委員、東京大学本郷キャンパス、2015.6.13~2015.6.14

(6) 翻訳

共訳、Keith L. Camacho, “Loyalty and Liberation,” 西村明・町泰樹、『Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory, and History』、『思想』、no. 1096、188-213頁、岩波書店、2015.8

(7) 共同研究(産学連携除く)

国内、参画、京都大学人文科学研究所、「日本宗教史像の再構築」、2014~

国内、参画、国立民族学博物館、「宗教学人類学の再創造—滲出する宗教性と現代社会」、2013~2016

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、駒澤大学、「宗教学研究」、2014.4~

特別講演、東西大学校(韓国釜山)、「名もなき死者への想像力—戦争死者慰霊の越境性—」、2014.11

非常勤講師、筑波大学、「宗教学とフィールドワーク」、2015.2

非常勤講師、鹿児島大学、「文化政策特論「地域における文化的実践と価値意識」」、2015.2

ゲスト講師、神戸大学、“The Two Sources of the postwar commemorations for the war dead in Japan: focusing upon the atomic bomb dead in Nagasaki,” 2015.7

(2) 学会

国内、日本宗教学会評、評議員 2013.9~、編集委員 2013.9~

国内、戦争社会学研究会、運営委員、2014.3~、編集委員長、2016.4~

国内、現代民俗学会、一般会員、2014.7~

国内、「宗教と社会」学会、会長、2015.6~

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

公益財団法人国際宗教研究所、国際宗教研究所ニュースレター編集委員、2015~

宗教文化教育推進センター、連携委員、2013~

07 美学芸術学

教授 渡辺 裕 WATANABE, Hiroshi

1. 略歴

- 1972年3月 千葉県立千葉高校卒業
- 1977年3月 東京大学文学部第1類（美学芸術学専修課程）卒業
- 1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美学芸術学）修了
- 1983年7月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（美学芸術学）単位取得退学
- 1983年7月 東京大学文学部助手（美学芸術学）
- 1986年4月 玉川大学文学部専任講師（芸術学科）
- 1991年4月 玉川大学文学部助教授
- 1992年4月 大阪大学文学部助教授（音楽学）
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美学芸術学）
- 2001年7月 博士（文学）学位取得（東京大学）
- 2002年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

聴覚文化論、音楽社会史

b 研究課題

1. 音の文化の伝承、受容、流用にかかわるプロセスとメカニズムの歴史研究による解明。これまで、音楽を「文化」として捉えるという観点から、西洋芸術音楽の「近代化」とテクノロジー、西洋芸術音楽における演奏伝統の形成とその伝承メカニズム、日本近代の音楽文化におけるメディアや言説といったテーマでの研究を進めてきたが、最近では「音楽」という枠をこえて、「音楽」以外の音も含めた様々な音が形作る「音の文化」の研究を軸に、「感性文化」という観点から、人々の形作ってきた歴史を描き直す試みを行っている。
2. 「聴覚文化」という観点からの日本戦後史の再検討。上記の問題意識をふまえた一種の応用問題として、現在は「1968年」を中心とした日本戦後史を「感性文化」の変化の歴史として捉え直す研究に取り組んでいる。「1968年」は近年、戦後史の転換点となった年として注目されているが、この前後の時期は、政治的な意味での転換点にとどまらず、人々の感性のあり方や志向が大きく変化した時期でもあったのではないだろうか。そのような問題意識をふまえつつ、同時代のドキュメンタリー音源、ドキュメンタリー映像やそれに関わる様々な言説などを主要な題材として、その変化についての分析を進めている。
3. 場所の表象、記憶の生成・変容のメカニズムやそれに関わる多様な文化的コンテクストの相互作用の解明および芸術作品や感性的体験がその過程で果たす役割の考察。作品体験と現実の都市の表象とを媒介する場としての文学散歩、映画のロケ地巡りといった営みの考察、廃墟趣味や路上観察の見直し等の試みを起点に、主に写真や映像による表象の分析を通して、様々な立場や観点がぶつかり合い、また離合集散しつつ変容してゆく場としての文化のありようを捉えることを目指している。

c 概要と自己評価

2013年には、それまでのほぼ10年間にわたる研究の集大成として著書『サウンドとメディアの文化資源学』をまとめることができたが、この2年間は、そこでの基本的な考え方をふまえつつ、「研究課題」の項に2として記載している日本戦後史の再検討というテーマに関する研究を中心に推し進めた。幸いなことに、このテーマの研究プロジェクトが、筆者を研究代表者とする佐藤守弘（京都精華大学）、輪島裕介（大阪大学）、高野公平（茨城大学）各氏との共同研究として、科学研究費基盤研究（B）に採択され（「聴覚文化・視覚文化の歴史からみた『1968年』：日本戦後史再考」、課題番号25284036）、2013年から2016年までの4年間にわたってその助成を受けることができたこともあって、このテーマの研究は順調に進捗している。これまでにまとまった分に関しては、2016年度中か、遅くも2017年度のうちには単行本の形で刊行できる見通しである。

d 主要業績

(1) 論文

- 「音楽はどのように言葉や図像とかわるのか：ベートーヴェン《月光》をめぐるマルチメディア的想像力」、唐沢かおり・林徹編『人文知 1 心と言葉の迷宮』（東京大学出版会）、2014.7、pp.187-208.
- 「映画《東京オリンピック》は何を記録したか：『テレビ的感性』前夜の記録映画」、『美学芸術学研究』第33号（東京大学大学院人文社会系研究科美学芸術学研究室）、印刷中

(2) その他の寄稿

- 「『芸術作品』をめぐる虚実皮膜の間：『佐村河内事件』の一側面」、『アステイオン』第80号、2014.5、pp.242-245.
- 「『アームチェア・フィールドワーカー』の時代（書物逍遥）」、『ミネルヴァ通信「究」』第41号、2014.8
- 「宝塚歌劇100年（ニュースの本棚）」、『朝日新聞』、2014年8月31日
- 「『少女車掌』の『説明』する風景」、『アステイオン』第81号、2014.11、pp.196-199.
- 「聴覚性の過去と現在」（共同討議、渡辺裕＋吉田寛＋金子智太郎＋長門洋平＋福田貴成）、『表象』09（表象文化論学会）、2015.3、pp.17-59.
- 「社会教育施設としての名曲喫茶」、『アステイオン』第82号、2015.5、pp.206-209.
- 「映画《東京オリンピック》は何を記録したか」、『アステイオン』第83号、2015.11、pp.244-247.
- 「どこまでが『音楽』？：『発車メロディ』の現在が問いかけるもの」、『日本近代音楽館館報』第4号、2015.12、pp.4-5.

(3) 学会発表・講演等

- 「『芸術作品』をめぐる虚実皮膜の間：人々は『佐村河内守』に騙されたのか？」、第65回美学会全国大会、（ワークショップ「『カタ』るヘルメス：芸術をめぐる虚実の物語」）、九州大学、2014年10月12日
- 「『文化資源』という概念は何をもたらしたのか？」、日本音楽学会全国大会（シンポジウム「音楽と文化資源としての音環境」）、青山学院大学、2015年11月14日

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

- お茶の水女子大学生活科学部、2015年4月～2016年3月
- 九州大学文学部、2015年4月～2016年3月

(2) 学会

- 日本音楽学会、会長、2014年4月～
- 美学会、委員、2014年4月～
- 文化資源学会、会員、2014年4月～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

- サントリー文化財団、サントリー学芸賞選考委員、2014年4月～
- 第20回国際音楽学会東京大会（IMS2017）組織委員会、委員長、2014年4月～
- 明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館、収書委員、2014年4月～

1. 略歴

- 1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1981年3月 東京大学文学部第一類（美学芸術学専修課程）卒業
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程進学
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
（その間 1987年10月～1988年9月 DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生としてハンブルク大学に留学）
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
1988年10月 神戸大学助教授，文学部（哲学科芸術学専攻課程）
（その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究）
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学（博士課程）兼任
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門課程）助教授
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）教授
（その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究）

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

第一に、2001年に公開した『芸術の逆説——近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公開した『西洋美学史』（東京大学出版会）において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもあり、この研究をその後も継続して行っている。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。この2年間はとりわけカントとヘルダーに即してこの主題を検討した。

第三に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探る作業を継続している。

c 概要と自己評価

上記三つの課題に関して、この2年間はとりわけ第二の課題に多くの時間を割き、18世紀の美学理論における「無意識」的なものをめぐる考察を通して、さらに *sensus communis* に関する研究、あるいはカントの『判断力批判』の再読を通して、論文及び講演において新たな知見を示すことができた。

d 主要業績

(1) 論文

- 小田部胤久、「Auffassung/Zusammenfassung/Zusammensetzung/Darstellung——カント『判断力批判』における「構想力」について——」、『美学芸術学研究』、2014.3
Tanehisa Otabe、「Das Unbewusste im letzten Viertel des 18. Jahrhunderts aus der ästhetischen Sicht」、『JTLA』、2014.3
小田部胤久、「『判断力批判』における「構想力」と「内官」再考——感性論としての美学への一つの寄与——」、『美学』、2014.9
Tanehisa Otabe、「Aesthetik in Japan」、『Laenderbericht Japan. Die Erarbeitung der Zukunft.』、2014.11
Tanehisa Otabe、「On an Aesthetic Consciousness of our Being: Toward a Contextualization of Shusterman's Somaesthetics」、『International Yearbook of Aesthetics』、18、117-123頁、2014.12
小田部胤久、「〈共通感覚〉の問題圏——〈感覚の感覚〉（アリストテレス）から〈美的意識〉（カント）へ」、栗原隆・座小田豊編『生の倫理と世界の論理』東北大学出版会、2015.3

Otobe, Tanehisa, 「Das Problem des „sensus communis “. Die Wahrnehmung des Wahrnehmens (Aristoteles) und das ästhetische Bewusstsein (Kant)」、『JTLA』、39、69-82 頁、2015.3

Tanehisa Otobe, 「The Idea of “Common Sense” Revisited: A Contribution to an “Aesthetic Turn” of Aesthetics」、『Revisions of Modern Aesthetics』、493-503 頁、2015.6

小田部胤久、「モナドロジー的世界観の美学的意味」、『モルフォロギア』、37、36-48 頁、2015.10

(2) 書評

西村清和、『分析美学基本論文集』、『週刊読書人』、4 頁、2016.1

(3) 学会発表

国内、小田部胤久、「感性論としての美学からみたカント『判断力批判』」、美学会東部会、2014.5.31

国内、小田部胤久、「モナドロジー的世界観の美学的意味」、ゲーテ自然科学の集い、2014.11.2

国際、Tanehisa Otobe, 「The Idea of “Common Sense” Revisited: A Contribution to an “Aesthetic Turn” of Aesthetics」、Revisions of Modern Aesthetics, International Scientific Conference、Belgrad、2015.6.28

国際、Tanehisa Otobe, 「Toward A Problem Area of ‘Common Sense’: From Aristotle’s ‘Perception of Perception’ to Kant’s ‘Aesthetic Consciousness’」、14th International Congress for Eighteenth-Century Studies、Rotterdam Erasmus University、2015.7.28

国内、小田部胤久、「晩年のヘルダーの美学的思考の射程——感性論から生の術へ——」、日本ヘルダー協会 秋期研究会、立教大学、2015.10.18

国際、小田部胤久、「『美的生活』論争の射程」、The International Conference of Aesthetic Consciousness of East Asia、The Academy of Korean Studies、Seoul、2015.10.30

国内、小田部胤久、「『ästhetisch に意識する』とは何か」、日本カント協会第40回学会、清泉女子大学、2015.11.14

国内、小田部胤久、「『美的生活』論争の射程」、京都土井道子記念シンポジウム、2015.12.25

(4) マスコミ

「超絶技巧 明治工芸の粋」展、『読売新聞』、2014.6.5

「こどもの城3月閉館」、『東京新聞』、2015.2.23

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、美学会、会長、2014.4～

国際、Culture and Dialogue、編集委員、2014.4～2016.3

国際、Allgemeine Zeitschrift fuer Philosophie、編集委員、2014.4～2016.3

国際、国際美学連盟派遣委員、2014.7～2016.3

国際、国際18世紀学会執行委員、2014.4～2015.7

国際、国際18世紀学会派遣委員、2015.7～2016.3

国際、国際シェリング協会参与、2014.4～2016.3

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業
1983年4月	同大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程修士課程入学
1985年3月	同修士課程修了
1985年4月	同博士課程進学
1989年3月	同博士課程単位取得退学
1989年4月	和洋女子大学文家政学部英文学専任講師
1994年4月	和洋女子大学文家政学部英文学専任助教授
1998年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科助教授
2003年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科教授
2008年4月	和洋女子大学人文学群日本文学・文化学類教授
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

分析哲学、美学

b 研究課題

フィクションの存在論の研究から出発し、虚構文の論理構造の解明から論理学の「可能世界」概念の応用へ、そして「可能世界」概念そのものの論理の研究へと進んだ。その過程で、自然科学の「多世界」「多宇宙」の概念と「可能世界」との関係の考察を迫られ、それらの概念に立脚した「人間原理」を方法的基盤とした諸議論の中で哲学問題を再構成する仕事を進めた。現在は、芸術の現状に対して人間原理的（進化論的）な説明を与え、見かけの法則性を観測選択効果へ還元する論理を追求している。

c 概要と自己評価

哲学問題を人間原理の観点から考察し直す仕事については、比較的長い論文を順次発表することができている。心の哲学、ロボット科学、人文死生学といった分野の研究者と研究会を重ねる中で、議論の中で人間原理の射程を測る手ごたえを感じているが、長年の研究テーマであるフィクション論の人間原理的再構成については、まだ構想が固まっているとは言いがたい。それでも、いくつかの下位カテゴリについては試論的な論考を発表できており、現在、サブカルチャーにおける例外的な実験芸術的試み（具体的には、アニメにおけるコンセプチュアルアートの実験）の事例を分析することから、人間原理的フィクション論の端緒を掴みつつあるところである。

コンセプチュアルアートは芸術の伝統的本質を欠いた例として挙げられることが多く、「芸術の定義」という分析美学の中心問題を左右する類型と言える。その「芸術の定義」と他の問題圏（とくに「芸術作品の解釈論」）を統一する試みを、2016年10月の美学会第67回全国大会で発表するべく、準備中である（「芸術の統一理論に向けた「再帰的定義」の可能性——C. L. スティーブンスンのモデルから」）。

なお、専門研究と並行してクリティカルシンキングの単行書を啓蒙目的で発信してきたが、2016年9月頃に、『論理パラドクス』（二見書房、2002年刊）の改訂版を文庫本（二見文庫）で出版する予定である。

d 主要業績

(1) 著書

単著、『思考実験リアルゲーム——知的勝ち残りのために』、二見書房、2014.3、263p.

単著、『下半身の論理学』、青土社、2014.10、388p.

単著、三浦俊彦、『天才児のための論理思考入門』、河出書房新社、2015.6、185p.

(2) 論文

三浦俊彦、「フィクションとシミュレーション——芸術制作の方法論からジャンル論へ」、中村靖子編『虚構の形而上学——「あること」と「ないこと」のあいだで』春風社、361-442頁、2015.2

三浦俊彦、「サウンドホライズンに見る芸術と政治の接点 研究ノート」、『和洋國文研究』、50、94-107頁、2015.3

三浦俊彦、「プラグマティズム美学の限りなき分岐点」、『現代思想』、7月号、96-106頁、2015.6

Toshihiko Miura、「A Preliminary Sketch for the Applied Anthropic Arguments ——Away from God into Spatial Reincarnation」、『JTILA (Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics)』、Vol.39、53-68頁、2016.2

三浦俊彦、「観測選択効果」の視点による進化芸術学の可能性、『文化交流研究』、第29号、1-20頁、2016.3

(3) 学会発表、講演記録

国内、三浦俊彦、「三浦俊彦 芸術作品としてのポツダム宣言——レディメイド文学の提唱——」東海大学、2014.8.1、
『総合文学ウェブ情報誌 文学金魚』 <http://gold-fish-press.com/archives/26878>

国内、三浦俊彦、前田高弘、水本正晴、金杉武司、「多義性の誤謬としての点滅論法」、日本科学哲学会第47回大会
ワークショップ「ゾンビと点滅論法と哲学的論争」、南山大学、2014.11.15

国内、三浦俊彦、「人間原理から眺める「エンドレスエイト」——コンセプチュアルアートとしてのアニメ」、アニメ
国際シンポジウム 日本アニメの歴史と現在、和洋女子大学、2015.10.3

国内、小島康次、三浦俊彦、新山喜嗣、渡辺恒夫、「精神医学と現象学的心理学から死と他者の形而上学へ」、日本質
的心理学会第12回大会、宮城教育大学、2015.10.4

国内、三浦俊彦、「言語の生物学的解明とは？——記述か説明か；人間原理の観点から」、第4回文学部講演会、千
葉大学、2015.11.12

(4) マスコミ

「BOOKSCAN × 著者インタビュー」、『BOOKSCAN』、2014.7.22 <http://www.bookscan.co.jp/interview/422>

「今年の執筆予定」、『出版ニュース』、2015年1月上・中旬号、p.47、2015.1

「認識は常識から——最低限、母国語に通じる日本であってほしい」、『ポリタス』特集：「戦後70年——私からあ
なたへ、これからの日本へ」、2015.10.16 <http://politaz.jp/features/8/article/466>

「今年の執筆予定」、『出版ニュース』、2016年1月上・中旬号、p.47、2016.1

(5) その他

連載、「偏態パズル」、『総合文学ウェブ情報誌 文学金魚』、2014.4～2016.3 <http://gold-fish-press.com/archives/7755>

コメント、『巨匠の失敗作』（岡澤浩太郎著、東京書籍）、第12章「デュシャンと泉」、第14章「ポロックとブルー・
ポールズ」、pp.187-198、pp.219-231、2014.9

対談、「Interview of gold fishes 第15回 三浦俊彦×遠藤徹対談 モンスター文学を求めて」、『総合文学ウェブ情報誌
文学金魚』、(前編)2015.10.1、(後編)2015.11.1、<http://gold-fish-press.com/archives/35934> 35967

エッセイ、「オトナの科学」、『サイゾー』、2015年12月号、pp.66-69、2015.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、『科学哲学』、編集委員、2014.4～2016.3

08 心理学

教授 **立花 政夫** TACHIBANA, Masao

1. 略歴

- 1972年3月 東京大学文学部心理学専修課程卒業（文学士）
- 1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（心理学）修了（文学修士）
- 1975年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（心理学）退学
- 1975年4月 慶応義塾大学大学院医学研究科博士課程（生理学）入学
- 1979年3月 慶応義塾大学大学院医学研究科博士課程修了（医学博士）
- 1979年4月 岡崎国立共同研究機構生理学研究所・助手（生体情報研究系）
- 1979年10月～1982年3月 ハーバード大学医学部（神経生物学）研究員
- 1985年1月～1985年4月 シカゴ大学 Visiting Assistant Professor
- 1985年5月～1985年8月 ノースウェスタン大学 Visiting Associate Professor
- 1988年10月 東京大学文学部助教授（心理学）
- 1994年1月 東京大学文学部教授（心理学）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（心理学）
- 2015年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

生理心理学

b 研究課題

視覚を成立させる神経機構を、細胞レベル・神経回路レベル・行動レベルで神経科学的に研究すること。

c 概要と自己評価

私たちに非常に安定した空間が見えており、その中を様々な対象が動き回り、また、私たち自身も動き回っている。感覚器官である眼球の光学系によって投影された外界の像（網膜像）は網膜で受容され、出力細胞である神経節細胞の軸索の束（視神経）を介して情報が脳に送られ、視覚が成立する。従来、個々の神経節細胞は網膜上の小領域（受容野）の光情報を独立に処理して脳に出力していると考えられてきた。しかし、眼球や身体の動きに伴って激しく揺動する網膜像を網膜ほどのように符号化して脳に送っているのか、という問題はほとんど検討されてこなかった。そこで、眼球から剥離した静止網膜標本に眼球運動を模した動的な光刺激パターンを提示し、複数の神経節細胞からスパイク発火応答を同時記録し、情報の符号化様式を解析した。その結果、特定の神経節細胞サブタイプ（Fast-transient型：Ft型）は受容野の興奮領域にテスト刺激が到達するよりも前に発火し、しかも近隣のFt型細胞群が同期発火することを見いだした。また、近隣の別のサブタイプ群は、Ft型細胞群の第1スパイクの発火時刻から一定の遅延でスパイクを発生することも明らかとなった。これらのサブタイプ群は、光刺激パターンに依存して機能的結合性を動的に形成し、相互に関係性を持って情報を符号化していることがわかった。以上の結果は、網膜神経節細胞群が、従来考えられてきたように個々独立して小領域（受容野）の情報処理を行っているのではなく、揺動する網膜像に対して、特定のサブタイプ群が機能的に結合して情報を協同的に符号化し、脳の視覚中枢に送っていることを示している。視覚系の入り口である網膜でこのように複雑な情報処理が自動的に（無意識的に）行われるということは驚きである。網膜における動的な神経機構がどのようになっているのか、また、網膜で符号化された視覚情報が脳でどのように復号化されて視覚に至るのか、今後に残された大きな課題である。

d 主要業績

(1) 学会発表

国内、雁木美衣、高田昌彦、立花政夫、「網膜ON型運動方向選択性細胞の応答形成機構」、視覚科学フォーラム、前橋、2014.8.18

国内、松本彰弘、立花政夫、「眼球運動を模した光刺激に対する網膜神経節細胞応答の解析」、視覚科学フォーラム、前橋、2014.8.18

国内、松本彰弘、立花政夫、「眼球運動時における網膜神経節細胞群の協同的な光応答」、日本神経科学学会大会、横浜、2014.9.11
国際、Masao Tachibana、「Neural coding of retinal images during eye movements」、Asian Retina Meeting 2014、仙台、2014.9.14
国内、Masao Tachibana、「Cooperative processing of dynamic visual images by retinal ganglion cell assembly」、立命館大学視覚科学統合研究センター・シンポジウム「Vision and Mind」、2015.3.16

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、同志社大学、「網膜における動的視覚情報の符号化」、2014.6

教授 **佐藤 隆夫** SATO, Takao

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/psy/sato_ind/index.html

1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部心理学専攻卒業
1976年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（心理学）
1976年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程 ～1983年3月
1978年9月	ブラウン大学心理学部大学院 ～1982年10月
1983年6月	ブラウン大学心理学部大学院 Ph.D. (Experimental Psychology)
1983年4月	日本学術振興会奨励研究員（東京大学文学部）
1984年4月	日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所研究専門調査員
1986年4月	(株)国際電気通信基礎技術研究所（ATR）主任研究員
1987年4月	(株)国際電気通信基礎技術研究所（ATR）主幹研究員
1990年11月	日本電信電話（株）基礎研究所主幹研究員
1995年5月	東京大学文学部助教授
1996年12月	東京大学文学部教授
2016年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

知覚心理学

b 研究課題

心理物理学的手法や誘発電位（脳波）を用いた実験、およびモデリングの手法を用いて、視覚、聴覚の比較的低次のプロセス、特に運動視、両眼立体視のメカニズムの研究を進めている。また、顔の知覚、視線の知覚、指さしの知覚などの比較的高次のプロセスに関わる研究も行っている。さらに、どちらも既に終了したプロジェクトであるがインテリジェント・モデリング・ラボラトリーの大規模設備を使用したバーチャルリアリティに関する研究、総務省の委託を受けた映像情報の安全性に関わる研究なども行って来た。

c 概要と自己評価

主としてパターン視、運動視、立体視の初期課程に関する研究を進めている。それに加え、最近、色残効、特に、輪郭などの副次的な刺激の色残効に対する効果の研究も開始した。ここ数年、色残効に加え、視覚におけるボケの効果に関する研究にも力を入れている。

d 主要業績

(1) 論文

Nakayama, R., Motoyoshi, I., & Sato, T. (2014). Spatiotemporal properties of illusory discrete motion. *The Japanese Journal of Psychonomic Science*, 33(1), 119-120.

- Sato, H., Motoyoshi, I., & Sato, T. (2014). Roles of on-off contrast polarities in the perception of blur. *The Japanese Journal of Psychonomic Science*, 33(1), 121-122.
- Wen, W., Ishikawa, T., & Sato, T. (2014). Instruction of verbal and spatial strategies for the learning about large-scale spaces. *Learning and Individual Differences*, 35, 15-21.
- Kawashima, T., & Sato, T. (2015). Perceptual limits in a simulated "Cocktail party". *Attention, Perception, & Psychophysics*, 77(6), 2108-2120.
- Sato, H., Motoyoshi, I., & Sato, T. (2016). On-off selectivity and asymmetry in apparent contrast: An adaptation study. *Journal of Vision*, 16(1):14, 1-11.
- Sato, H., Motoyoshi, I., & Sato, T. (in press 2015 available online). On-Off asymmetry in the perception of blur. *Vision Research*.
- Nakayama, R., Motoyoshi, I., & Sato, T. (in press) Motion dominance in binocular rivalry depends on extra-retinal motions. *Journal of Vision*.

(2) 予稿・会議録

- Ryohei Nakayama; Isamu Motoyoshi; Takao Sato (2014) Competing motion signals compromise to discrete perception. . Vision Science Society Annual Meeting, St. Pete Beach, FL, USA.
- Chen, C. C., Chen, H. T. & Sato, T. (2014) Interocular lateral interaction subserves dichoptic positive color aftereffects. Vision Science Society Annual Meeting, St. Pete Beach, FL, USA.
- Kawashimo, S. Watanabe, M. & Sato, T. (2015) Competing motion signals compromise to discrete perception. Vision Science Society Annual Meeting, St. Pete Beach, FL, USA.
- Sato, T. (2015) Effect of attention in vection perception - a two stage model - Asia-Pacific Conference on Vision, Singapore.
- Kanaya, H. & Sato, T. (2015) Interocular display of classical apparent motion traversing horizontal and vertical meridians. Asia-Pacific Conference on Vision, Singapore.
- Sato, T., Nakayama, R. & Nakamura, A. (2015) Extraretinal factors modulate color after effect. European Conference on Vusyak Perception, Liverpool, U.K.

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本心理学会、理事長、2011.6～2015.6、 常務理事、2015.6～
- 国内、日本心理諸学会連合、副理事長、2013.6～2015.6
- 国内、日本基礎心理学会、常務理事、2006.13～2015.12、 理事、2015.12～
- 国内、日本視覚学会、幹事、2008.4～
- 国内、日本バーチャルリアリティー学会、評議員、2006.4～
- 国外、Society for Gestalt Theory and its Applications、編集委員、2006.8～

教授 **高野 陽太郎** TAKANO, Yohtarō

1. 略歴

- 1981年9月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程入学 (フルブライト奨学生)
- 1985年6月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程修了 (Ph.D.)
- 1985年9月 Virginia 大学心理学部専任講師
- 1987年4月 早稲田大学文学部専任講師
- 1990年4月 東京大学文学部助教授
- 2003年4月 東京大学文学部教授
- 2016年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

認知心理学、社会心理学

b 研究課題

- (1) 鏡像問題：この問題（「鏡に映ると左右が反対に見えるのは何故か？」という問題）は、プラトンの昔から議論されてきたにもかかわらず、未だに定説がない。1998年に、この問題に解答する理論を記した論文をアメリカの学術雑誌に発表した。2000年から2004年にかけて、3つの実験をおこない、その理論の妥当性を立証した。これらの実験の結果は、2007年にイギリスの学術雑誌に発表した。また、日本の物理学者たちとも、シンポジウムで議論を交わし、誌上討論を行なった。2011年から2016年まで追加実験を続け、理論の妥当性を示す更なるデータを得た。これらの研究の結果は、単著『鏡映反転 — 紀元前からの難問を解く』として2015年7月に発表した。
- (2) 外国語副作用：30年ほど前に、この現象（「不慣れな外国語を使用している最中は、一時的に思考能力が低下する」という現象）を発見し、理論的な説明とともに実験による立証を行い、その結果を国際誌に発表した。2011年度から2013年度にかけては、国際基督教大学の研究者と協力して科研費による研究プロジェクトを行ない、2014年度からは、早稲田大学、明治大学、長岡技術科学大学の研究者の参加も得て科研費プロジェクトを続行している。2013年の電子情報通信学会研究会における招待講演、2016年の日韓ワークショップにおけるシンポジウムなどの機会を通じて、この現象の周知に努めている。
- (3) 日本人論批判：「日本人は集団主義的で、アメリカ人は個人主義的」という日本人論の通説について、実証的な国際比較研究を組織的に調べたところ、実証データはこの通説をまったく支持していないことを発見し、国内外の学術雑誌や書籍に論文を掲載した。これらの論文はかなりの論議を呼び、シンポジウムや学術雑誌において通説の擁護者と議論を続けてきた。2004年には、カナダの研究者による批判の妥当性を調べるために同調行動の実験をおこない、この批判が事実と合致していないことを確認した。これらの研究の成果をまとめて、2008年には、『「集団主義」という錯覚』と題する単著を出版した。また、大阪大学、東洋大学、白百合女子大学、関西大学などで招待講演を行なった。
- (4) 因果的説明における価値のバイアス：20年以上前、本学に赴任してきたばかりの頃に、湾岸戦争直前の世論を利用して、社会的事象の因果的説明は、社会的対象に抱いている価値によって歪められることを実験的に示した。この研究は、病気のために長らく中断していたが、2004年に新しい実験をおこなって、最初に行なった実験の結果に関する別解釈を排除できることを確認した。
- (5) 確率推定：確率推定においては、事前確率を考慮に入れ損なう「基準率無視」という現象がよく知られている。この基準率無視の原因については、多くの研究者説明を試みてきたが、因果関係が推定されることが一因となっていることを一連の実験によって明らかにした。

c 概要と自己評価

「日本人 = 集団主義」説が事実の裏づけを持っていないことを示した研究に関しては、米国の教科書“Inter/Cultural Communication”(Sage, 2013) に依頼原稿を掲載した。この原稿の一節と、Takano & Osaka (1999) の一節は、米国の性格心理学の教科書“The Personality Puzzle (6th ed.)”(Norton, 2012) に引用されている。

鏡像問題に関しては、物体の左右軸が鏡面と斜交する場合に左右の鏡映反転が認知されるプロセスの理論的な説明を行ない、その説明を立証する実験を行なった。理論的説明は、*Philosophical Psychology* 誌に掲載された。

外国語副作用に関しては、TOEIC等の一般的な英語検定が「英語を使いながら思考する能力」を的確に測定しているかどうかを調べるために、外国語副作用の実験結果と英語検定の成績とのあいだの相関を調べる研究を続けている。

d 主要研究業績

(1) 著書

高野陽太郎、『鏡映反転 — 紀元前からの難問を解く』、岩波書店、2015.7.15

(2) 論文

杉本崇・高野陽太郎、「アンカリング効果のメカニズムにおける“カバー効果”の検討」、『認知心理学研究』、2014, 12(1), 51-60.

Takano, Y. Mirror reversal of slanted objects: A psycho-optic explanation. *Philosophical Psychology*, 2015, 28(2), 240-259.

高野陽太郎、「「認知心理学の名づけ親」ナイサー教授を追悼する」、『認知心理学研究』、2015, 13, 1-6.

高野陽太郎・伊藤彦、「16世紀に渡来した宣教師は日本人を“集団主義的”と評したか?」、『心理学研究』、2016, 86(6), 584-588.

(3) 解説

高野陽太郎、「記憶を呼び起こす」、『マーケティング・リサーチャー』、10-15頁、2014.10

- (4) 監修
高野陽太郎、DVD 現代心理学シリーズ「認知心理学」、サンエデュケーショナル、2016.
- (5) マスコミ
『鏡映反転 — 紀元前からの難問を解く』の書評
緑慎也 「右が左か、左が右か 人の心理が見せるもの」 サンデー毎日, 2015, 9, 5
最相葉月 「2000 年以上前からの難問解く」(書評欄) 日本経済新聞, 2015, 9, 6
池谷裕二 「鏡の世界 上下反転しないのは」(本よみうり堂 ビタミン Book) 読売新聞, 2015, 9, 20
西山賢一 「プラトン以来の謎を解く」(書評欄) 公明新聞, 2015, 10, 12
書評(今週の本棚) 毎日新聞, 2015, 12, 6
「今さら聞けない 鏡映反転 左右の感じ方、認識が左右」 朝日新聞, 2015, 11, 14
「日曜の朝に 鏡像の謎めく “反転”」 読売新聞, 2016, 1.17
- (6) 共同研究(産学連携除く)
国内、主催、早稲田大学・明治大学・国際基督教大学・長岡技術科学大学、「外国語力と外国語副作用の関係」、2014
～2016

3. 主な社会活動

- (1) 他機関での講義等
放送大学客員教授、「認知心理学」、2014.4～2016.3
特別講演、司法研修所、「判断の落とし穴」、2014.11
特別講演、関西大学、「“集団主義”という罠気楼 — 文化ステレオタイプの危険な誘惑」、2014.12
- (2) 学会
日本認知心理学会、常務理事、2014.4～2016.3
日本認知心理学会第 13 回大会準備委員長、2015. 7

教授 横澤 一彦 YOKOSAWA, Kazuhiko

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~yokosawa/index-j.html>

1. 略歴

1979 年 3 月 東京工業大学工学部情報工学科卒
1981 年 3 月 東京工業大学大学院総合理工学研究科電子システム専攻修士課程了
1981 年 4 月 日本電信電話公社(現 NTT) 入社
1986 年 9 月～1990 年 2 月 ATR 視聴覚機構研究所(出向)
1990 年 9 月 東京工業大学より工学博士号授与
1991 年 11 月～1992 年 12 月 東京大学生産技術研究所 客員助教授
1995 年 6 月～1996 年 6 月 南カリフォルニア大学 客員研究員
1998 年 10 月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
2006 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2009 年 12 月～2010 年 3 月 カリフォルニア大学バークレイ校 客員研究員

2. 主な研究活動

a 専門分野

統合的認知の心理学

b 研究課題

統合的認知について、認知心理学的研究を行っている。統合的認知とは、知覚された特徴がどのように記憶や言語や概念と関わりあって、認知に至るのかを解明しようとする広範囲の研究を指している。特に、視覚的注意やオブジ

エクト認知の問題を中心に研究している。さらに、感覚融合認知や共感覚に関する研究にも取り組んでおり、研究分野は視覚だけに限らず、扱っている研究課題は多岐に渡っている。

c 概要と自己評価

統合的認知に関する、多岐に渡る研究を行い、注意、オブジェクト認知、感覚融合認知の研究成果を学術論文として発表することができた。また、監修する「シリーズ統合的認知」の第1巻「注意 選択と統合」、第2巻「オブジェクト認知 統合された表象と理解」を共著で出版した。また、共感覚やラバーハンド錯覚などの最近の統合的認知研究の成果を中心に、心理学以外のバイオメカニズム学会、ヒューマンインタフェース学会、日本認知科学会などの学会誌に依頼され、概説を含めた論文を発表した。また、認知神経心理学研究会や日本心理学会公開シンポジウムで招待講演を行い、幅広い注目を集めた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、河原純一郎、横澤一彦、『注意 選択と統合』、勁草書房、2015.11

共著、新美亮輔、上田彩子、横澤一彦、『オブジェクト認知 統合された表象と理解』、勁草書房、2016.2

(2) 論文

W. Yamashita, R. Niimi, S. Kanazawa, M. Yamaguchi K., & K. Yokosawa, 「Three-quarter view preference for three-dimensional objects in 8-month-old infants」, 『Journal of Vision』, 14(4), 5, 1-10 頁、2014.4

K. Tamaoka, M. Asano, Y. Miyaoka, & K. Yokosawa, 「Pre- and post-head processing for single- and double-scrambled sentences of a head-final language by the eye tracking method」, 『Journal of Psycholinguistic Research』, 43, 2, 167-185 頁、2014.4

横澤一彦, 「統合的認知」, 『認知科学』, 21, 3, 295-303 頁、2014.9

浅野倫子、横澤一彦, 「色字共感覚：文字認知と色認知の隠れた結びつき」, 『ヒューマンインタフェース学会誌』, 16, 4, 265-268 頁、2014.11

西村聡生、横澤一彦, 「刺激反応適合性効果からみた左右と上下の空間表象」, 『心理学評論』, 57, 2, 235-257 頁、2014.11

S. Kanaya, W. Fujisaki, S. Nishida, S. Furukawa, & K. Yokosawa, 「Effects of frequency separation and diotic/dichotic presentations on the alternation frequency limits in audition derived from a temporal phase discrimination task」, 『Perception』, 44, 2, 198-214 頁、2015

G. Sastyin, R. Niimi, & K. Yokosawa, 「Does object view influence the scene consistency effect?」, 『Attention, Perception & Psychophysics』, 77, 3, 856-866 頁、2015

中島亮一、横澤一彦, 「画像シフトによる変化の見落としにおける持続的注意の役割」, 『心理学研究』, 85, 6, 603-608 頁、2015.2

正田真利恵、黒田直史、横澤一彦, 「マジック状況における人間の顔や視線方向への偏重注視」, 『認知心理学研究』, 12, 2, 69-76 頁、2015.2

金谷翔子、横澤一彦, 「手の身体所有感覚とラバーハンド錯覚」, 『バイオメカニズム学会誌』, 39, 2, 69-74 頁、2015.5

R. Nakashima, C. Watanabe, E. Maeda, T. Yoshikawa, I. Matsuda, S. Miki, & K. Yokosawa, 「The effect of expert knowledge on medical search: Medical experts have specialized abilities for detecting serious lesions」, 『Psychological Research』, 79, 5, 729-738 頁、2015.9

(3) 学会発表

国内、横澤一彦, 「高次視覚と共感覚」, 第18回認知神経心理学研究会、2015.8.9

国内、横澤一彦, 「共同注意と美感」, 日本心理学会第79回大会 公開シンポジウム、2015.9.22

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、横澤一彦、研究代表者, 「基盤研究 (B) 統合的認知としての共感覚と感覚間協応に関する認知心理学的研究」, 2014～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本認知科学会、常任運営委員、2013.1～

国内、日本心理学会、優秀論文賞選考委員会委員長、2015.4～2016.3

(2) 行政

日本学術振興会学術システム研究センター、専門研究員、2013.4～

1. 略歴

1987年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1989年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1992年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 単位取得退学
1992年4月	国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 奨励研究員
1995年2月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 博士 (心理学) 取得
1996年10月	科学技術振興事業団・川人学習動態脳プロジェクト 計算心理グループリーダー
2001年10月	ATR 人間情報科学研究所 主任研究員
2002年4月	大阪大学大学院生命機能研究科 客員准教授
2003年5月	ATR 脳情報研究所・認知神経科学研究室 室長
2008年8月	情報通信研究機構 バイオICT グループリーダー
2010年4月	ATR 認知機構研究所 所長
2011年4月	情報通信研究機構 脳情報通信融合研究室 副室長
2011年4月	大阪大学大学院生命機能研究科 客員教授
2015年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

運動の学習と制御, 認知機能を支える脳のネットワーク解析

b 研究課題

人間は新たな生活環境に置かれたとき, さまざまなことを学習し, 行動パターンを変え, 環境に適応する. 自分の脳や身体もケガ・病気・加齢などで変化することがあり, そのような場合にも新たな学習・適応を迫られる. このような学習と適応のメカニズムを調べ, それに関わる脳の仕組みを解明するとともに, 学習や適応を支援する技術の開発を行う.

c 概要と自己評価

短期の運動記憶と長期の運動記憶が脳内に存在することは, これまで理論的に示されていたが, 脳が短期と長期の運動記憶を保存する様子を可視化して, これまでの理論を支持するような実証的な成果は得られていなかった. 脳の計算モデルと, 機能的磁気共鳴画像(fMRI)を組み合わせ, 短期と長期の運動記憶が, 脳の異なる場所に保存される様子を, 世界で初めて画像として捉えることに成功した. 今回明らかになった範囲では, 極めて短期な運動記憶は, 前頭—頭頂の広いネットワークが, 中期的な運動記憶は頭頂の限られた部分, 長期の運動記憶は小脳に関連することがわかった. この研究は, オンラインの国際科学誌 PLoS Biology に掲載された. 当該論文は, プロのサイエンスライターによる紹介記事が付与され, 「心理学における古典的な理論を, 最新の実験方法で実証した」注目の論文として紹介されている. 昨年12月の公表から3ヶ月で3,565回以上閲覧されており, 国内外で高い関心が持たれている.

人間の動作から, 脳で滑らかな動きが生成される過程を推測する方法を開発し, 国際科学誌 PLoS One に掲載した. この成果は, 脳卒中後の運動回復などリハビリテーションへの応用が期待されており, 社会的にも注目されている.

d 主要業績

(1) 論文

Togo S., and Imamizu H., 「Normalized index of synergy for evaluating the coordination of motor commands」, 『PLoS ONE』, Vol. 10, No. 10, e0140836 頁, 2015.10

Kim S., Ogawa K., Lv J., Schweighofer N., and Imamizu H., 「Neural substrates related to motor memory with multiple timescales in sensorimotor adaptation」, 『PLoS Biology』, Vol. 13, No. 12, e1002312 頁, 2015.12

Izawa, J., Asai, T., and Imamizu, H., 「Computational motor control as a window to understanding schizophrenia」, 『Neuroscience Research』, Vol. 104, 44-51 頁, 2016.3

(2) 学会発表

国際、Imamizu, H.、「Neural mechanisms inducing plasticity on body representation」、Half-day Workshop at IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS) 2015、Hamburg, Germany、2015.9.28

国内、今水寛、「器用な動作を支える脳の仕組みとその評価」、昭和大学発達障害医療研究所セミナー、昭和大学附属烏山病院（東京都世田谷区北烏山）、2015.12.17

国内、今水寛、「安静時の脳活動をを用いた認知機能の予測と制御」、国立神経・精神医療研究センター「システム神経科学セミナー」、国立神経・精神医療研究センター（東京都小平市小川東町）、2016.2.10

国内、今水寛、「内部モデルと身体意識」、第4回身体性システム講演会・第11回筑波大学グローバル教育院エンパワメント情報プログラム(EMP)セミナーシリーズ「拡張する身体とその脳内表現」、筑波大学（茨城県つくば市天王台）、2016.3.20

(3) 予稿・会議録

国内会議、今水寛、「安静時の脳活動から作業記憶トレーニング効果の個人差を予測する：ゲームで認知機能は改善するか?」、第9回パーキンソン病・運動障害疾患コンGRESS、品川プリンスホテル（東京都・港区高輪）、2015.10.16

『第9回パーキンソン病・運動障害疾患コンGRESS プログラム・講演抄録』、55頁、2015.10

国内会議、今水寛、「結合ニューロフィードバックを用いた機能回復へのアプローチ」、第39回日本高次脳機能障害学会学術集会・ワークショップ「Sense of agency パラダイムによる新たなリハビリテーション戦略—運動麻痺から高次脳機能障害まで」、ベルサール渋谷ファースト（東京都・渋谷区）、2015.12.10

『第39回日本高次脳機能障害学会学術集会プログラム・講演抄録』、111頁、2015.10

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、新学術領域「脳内身体表現の変容機構の理解と制御」、今水寛、研究代表者、「脳内身体表現の変容を促す神経機構」、「Neural mechanisms inducing plasticity on body representations」、2014～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本心理学会、国際賞選考委員、2015.11～

准教授 **村上 郁也**

MURAKAMI, Ikuya

1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 修了 博士(心理学)取得
1996年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員(COEポスドク)
1997年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員(日本学術振興会特別研究員PD)
1997年9月	米国ハーバード大学心理学部視覚科学研究所 研究員(日本学術振興会特別研究員PD)
1999年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 社員
2000年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 研究主任
2004年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 主任研究員
2005年4月	東京大学大学院総合文化研究科 助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科 准教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

知覚心理学、認知神経科学

b 研究課題

こころの時間長・同期・クロックを作り出す認知メカニズムの解明。視空間的な注意機能と認知発達の関係。錯視の多面的研究—実験心理学・脳機能画像・数理解析・生物学の手法を用いて—。

c 概要と自己評価

知覚世界のどんなオブジェクトが他の何と比べていつ・どこにあるように思えるのか、という中で「いつ」に対応する、非常に基本的な視覚体験であるにもかかわらず、対象の「主観的現在」の心的・脳内表現や処理過程については未解明である。そこで、「こころの時間」の神経基盤解明の目標として、数秒以内の範囲をもつ「主観的現在」の心的表象と神経機構に関し、ヒトを対象とした知覚実験と非侵襲脳計測・刺激法で、視覚系を軸に置いた「主観的現在」の心的持続時間がどこでどうやって決まっているのか、感覚モダリティ内外で決まる知覚的時刻・時間軸同期はどのようになされるのか、心的時間を刻むクロックはどのような心的プロセスと相互影響し合うか、の原理を解明する。認知発達の研究では、心の理論、実行機能、見かけと実際の区別、記憶のされ方など、広範囲の認知能力が問題とされる。そこで、注意の範囲や向け方が視空間的課題、記憶課題、メタ認知課題遂行時にどのように変化するのかを調べるため、成人を対象に検討する。近年錯視研究は急速な進歩を遂げており、錯視は珍しい現象というわけではなくなりつつある。それどころか、錯視のいくつかは恒常性、運動視、色覚、立体知覚など機能的なメカニズムそのものであったり、その不可避的な誤動作であることが明らかになり、錯視は「普通の視覚のメカニズム」を明らかにする重要なツールとなりつつある。そこで、これまで得られた豊富な成果を基礎としてさらに錯視研究を発展・深化させることによって、錯視研究の成果が視覚のメカニズムの解明に直結する時代を先取りすることを目的とする。時間知覚研究、注意研究、錯視研究のいずれに関しても、高インパクトの国際専門誌への掲載などをはじめ順調な研究成果の出力をしており、実験環境の度重なる改修を挟んでようやく研究を加速させる下地が完成した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、村上郁也、東京大学教養学部 編 『高校生のための東大授業ライブ 学問への招待』、第9講「ものを見る」
行いの不思議 — 錯覚体験でわかる脳のメカニズム」、東京大学出版会、2015.7

共著、武田計測先端知財団 編、『感じる脳・まねられる脳・だまされる脳(科学のとびら59)』、東京化学同人、2016.1

(2) 論文

Okazaki, Y.O., Horschig, J.M., Luther, L., Oostenveld, R., Murakami, I., & Jensen, O., 「Real-time MEG neurofeedback training of posterior alpha activity modulates subsequent visual detection performance」、『NeuroImage』、107、323-332 頁、2015.2

Osugi, T. & Murakami, I., 「Onset of background dynamic noise attenuates preview benefit in inefficient visual search」、『Vision Research』、2015.6

Miyamoto, K. & Murakami, I., 「Pupillary light reflex to light inside the natural blind spot」、『Scientific Reports』、5:11862、1-12 頁、2015.6

Terao, M., Murakami, I., & Nishida S., 「Enhancement of motion perception in the direction opposite to smooth pursuit eye movement」、『Journal of Vision』、15(13):2、1-11 頁、2015.9

Hayashi, D. & Murakami, I., 「Facilitation of contrast detection by flankers without perceived orientation」、『Journal of Vision』、2015.11

(3) 学会発表

国内、村上郁也、「錯覚するのも悪くない」、武田シンポジウム、東京、2015.2.7

国際、Murakami, I., 「Dilation and compression of subjective duration」、RIEC International Symposium on Vision and Cognition、Sendai、2015.3.20

国際、Murakami, I., 「Visual motion antagonism」、RIKEN Nakahara lab 3rd mini symposium on cognition, decision-making and social function、RIKEN、2015.4.20

(4) 予稿・会議録

国際会議、Osugi, T., & Murakami, I., 「The onset of background dynamic noise degrades preview benefit in inefficient visual search」、Vision Sciences Society Annual Meeting、2014.5.17

『Journal of Vision』、Vol. 14, Issue 10、333 頁、2014.8

- 国際会議、Terao, M., & Murakami, I., 「Visual crowding distorts oculomotor space」、Asia-Pacific Conference on Vision, Takamatsu, Japan, 2014.7.19
『Asia-Pacific Conference on Vision 2014 Program』、14 頁、2014.7
- 国際会議、Murai, Y., & Murakami, I., 「Temporal relationship between the flash-drag effect and the flash-lag effect: psychophysics and modeling」、Asia-Pacific Conference on Vision, Takamatsu, Japan, 2014.7.21
『Asia-Pacific Conference on Vision 2014 Program』、27 頁、2014.7
- 国内会議、増田洋一郎・寺尾将彦・土師知己・堀口浩史・小川俊平・林孝彰・吉嶺松洋・村上郁也・仲泊聡・常岡寛、「網膜色素変性患者の脳機能：課題依存性 V1 反応の網膜部位再現に関する検討」、日本臨床視覚電気生理学学会、2014.10.3
- 国内会議、大杉尚之・林大輔・村上郁也、「注意の捕捉効果と視覚的印付け効果の加算性」、日本基礎心理学会、八王子、2014.12.6
- 国内会議、寺尾将彦・村上郁也、「周辺視での刺激の見えを決定する情報統合の時間窓」、日本基礎心理学会、八王子、2014.12.7
- 国内会議、湯浅健一・四本裕子・村上郁也、「フリッカー、フラッター刺激を用いた、視覚刺激が時間知覚に及ぼす影響の検証」、日本視覚学会、新宿、2015.1.21
『VISION』、Vol. 27, No. 1, 19 頁、2015.1
- 国内会議、林大輔・村上郁也、「方位が見えないフランカーによる Collinear Facilitation 効果における刺激間距離の影響」、日本視覚学会、新宿、2015.1.22
『VISION』、Vol. 27, No. 1, 19 頁、2015.1
- 国内会議、川野晟聖・寺尾将彦・村上郁也、「固視微動由来の網膜運動を模した運動刺激による時間拡張」、日本視覚学会、新宿、2015.1.22
『VISION』、Vol. 27, No. 1, 21 頁、2015.1
- 国内会議、三上昌平・川野晟聖・村上郁也、「周辺視における持続時間順応の位置特異性」、日本視覚学会、新宿、2015.1.22
『VISION』、Vol. 27, No. 1, 21 頁、2015.1
- 国内会議、寺尾将彦・村上郁也、「目標刺激から時間的に離れた近傍刺激によるサッカート到達位置への影響」、日本視覚学会、新宿、2015.1.22
『VISION』、Vol. 27, No. 1, 22 頁、2015.1
- 国内会議、神戸美花・大杉尚之・村上郁也、「刺激提示位置の範囲が視覚的印付けに及ぼす影響」、日本視覚学会、新宿、2015.1.23
『VISION』、Vol. 27, No. 1, 24 頁、2015.1
- 国内会議、大杉尚之・村上郁也、「視覚的印付けへの連続的な背景変化の影響」、日本視覚学会、新宿、2015.1.23
『VISION』、Vol. 27, No. 1, 24 頁、2015.1
- 国際会議、Terao, M., & Murakami, I., 「Temporal dynamics of feature integration in peripheral vision and saccadic eye movement」、Vision Sciences Society Annual Meeting, St. Petersburg, Florida, USA, 2015.5.16
『Journal of Vision』、Vol. 15, Issue 12, 96 頁、2015.9
- 国際会議、Osugi, T., & Murakami, I., 「Additivity of prioritizing selection for new objects by onset capture and visual marking」、Vision Sciences Society Annual Meeting, St. Petersburg, Florida, USA, 2015.5.17
『Journal of Vision』、Vol. 15, Issue 12, 436 頁、2015.9
- 国際会議、Hayashi, D., Terao, M., Cai, L., Osugi, T., & Murakami, I., 「Diagonal Stretch Illusion: the distance between dots appearing longer when surrounded by circles」、Vision Sciences Society Annual Meeting, St. Petersburg, Florida, USA, 2015.5.17
『Journal of Vision』、Vol. 15, Issue 12, 467 頁、2015.9
- 国際会議、Nakamura, S., & Murakami, I., 「Time compression in an unadapted region after adaptation to a moving surround」、Vision Sciences Society Annual Meeting, St. Petersburg, Florida, USA, 2015.5.18
『Journal of Vision』、Vol. 15, Issue 12, 810 頁、2015.9
- 国内会議、林大輔・寺尾将彦・蔡林・大杉尚之・村上郁也、「周辺の刺激によって 2 点間の距離が異なって見える錯視」、日本視覚学会、東京、2015.7.27
『VISION』、Vol. 27, No. 3, 111 頁、2015.7

国内会議、大杉尚之・武田裕司・村上郁也、「復帰の抑制による知覚時間の短縮」、日本視覚学会、新宿、2016.1.20
『VISION』、Vol. 28, No. 1、34 頁、2016.1

国内会議、林大輔・寺尾将彦・山上精次・大杉尚之・村上郁也、「ひし形の歪み錯視の時間特性に関する検討」、日本
視覚学会、新宿、2016.1.21

『VISION』、Vol. 28, No. 1、37 頁、2016.1

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「日本視覚学会」、チェア、セッション9、大岡山、2015.7.27～2015.7.29

国内、「日本視覚学会」、チェア、セッション5、新宿、2016.1.20～2016.1.22

(6) 総説・総合報告

村上郁也、「錯覚と眼球運動と視野安定」、『文化交流研究』、Vol. 27、49 頁、2014.3

(7) 翻訳

個人訳、David G. Myers、"Psychology 10th ed."、村上郁也、『カラー版 マイヤーズ 心理学』、西村書店、2015.4

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本視覚学会、幹事、2014.4～2016.3

国内、日本心理学会、代議員、2014.4～2016.3

国内、包括型脳科学研究推進支援ネットワーク、研究集会委員会、2014.4～2016.3

国際、Frontiers in Perception Science、Review Editor、2014.4～2016.3

国際、International Congress of Psychology、organizing committee、2014.4～2016.3

国内、日本基礎心理学会、常任編集委員、2014.4～2014.10、編集委員長、2014.11～2016.3、常務理事、2014.11～2016.3

(2) 行政

省庁、日本学術会議、科学技術政策、連携会員、2014.4～2016.3

09a 日本語日本文学（国語学）

教授 月本 雅幸 TSUKIMOTO, Masayuki

1. 略歴

- 1977年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
- 1980年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 1981年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
- 1981年4月 茨城大学人文学部専任講師（～1985年3月）
- 1985年4月 白百合女子大学文学部専任講師（～1987年3月）
- 1987年4月 白百合女子大学文学部助教授（～1992年3月）
- 1992年4月 東京大学文学部助教授（～1995年3月）
- 1995年3月 ドイツ連邦共和国ルール大学ボッフム交換助教授（～1996年1月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語史

b 研究課題

漢文に日本語としての読みを記入した訓点資料の研究を課題としている。関心の中心は平安時代から鎌倉時代にかけての訓点にあり、学界未紹介の資料を公表し、また既に知られている資料も含め、その資料的性格を再検討して言語の特質や年代性を吟味することにより、国語史料としての訓点資料の新たな利用の方法を模索している。

c 概要と自己評価

この2年間、主として平安時代の古訓点資料のうち、真言宗関係のものを中心に考察を行った。特に「大日経疏」（大毘盧遮那成佛経疏）の古訓点に注目し、主要な伝本の調査と訓読文作成を実施した。これはこの書が真言宗において最も重要な訓点資料であるとの認識に基づくものである。まだ本格的な考察を開始したばかりであるが、今後これに関する研究成果を公表して行きたいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

- 「解題」（『大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇別巻第二伊呂波字類抄』、汲古書院、pp.3-25、2015.2
- 「高山寺蔵本大毘盧遮那成佛経疏巻第十五康和点訳文稿（十一）」（『平成二十六年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』）、pp.39-42、2015.3
- 「高山寺蔵本大毘盧遮那成佛経疏巻第十五康和点訳文稿（十二）」（『平成二十七年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』）、pp.60-63、2016.3

(2) 解説

「松村文庫について」、『日本語学論集』12号、pp.402-404、2016.3

(3) 教科書（編著）

放送大学印刷教材『日本語概説』、240pp.、放送大学教育振興会、2015.3

(4) シンポジウム報告

「石山寺文化財総合調査と校倉聖教」、シンポジウム「石山寺校倉聖教修理をめぐる」、石山寺、2015.7.31

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本語学会、理事、2014.4～2015.3
- 国内、訓点語学会、副会長、2014.4～2015.3、会長、2015.4～2016.3

(2) 行政

文化審議会専門委員（文化財分科会）、2014.4～2016.3

(3) 学外組織

国立国語研究所運営会議委員、2014.4～2015.9

教授 **井島 正博** IJIMA, Masahiro

1. 略歴

1982年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科研究生
1985年10月 防衛大学校人文科学研究室助手
1989年4月 山梨大学教育学部専任講師
1991年4月 山梨大学教育学部助教授
1992年4月 成蹊大学文学部日本文学科助教授
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本語・日本文学）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（日本語・日本文学）
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本語・日本文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学 日本語文法・日本語文法学史および言語理論

b 研究課題

現代語・古典語の日本語文法あるいは日本語文法学史および言語理論の研究をテーマとしている。なかでも現代語日本語文法に関する研究を一貫して続けており、これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

さらに現代語の成果を古典語に適用して、古典語文法に新たな方向からアプローチをするとともに、従来の文法研究を歴史的にとらえることによって、各時代の文法理論を相対化することも試みている。言語理論に関しては、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論的全体像を模索している。

c 概要と自己評価

最近10年あまり特に力を入れて進めてきたことは、古典語のテンス・アスペクトに関して、これまでの研究史を概観し、その上に立ってこれまでの研究成果を包括的に説明できる理論的枠組を構築することであり、それは博士論文としてまとめた上で、それに推敲を重ね、『中古語過去・完了表現の研究』として出版することができた。現在では、テンス・アスペクトに続き、古典語の推量表現について研究を進めている。

またそれと平行して、現代語に関しては、ノダ・ワケダ・モノダ・コトダなどの形式名詞述語文、あるいは最近はとりたて詞と呼ばれることの多い副助詞、また否定文に関して研究を進めており、近い将来それぞれ単著としてまとめるつもりである。

さらにこれまであまり解明が進んでいない近世・近代の文法研究についても、数百点に及ぶ文献を収集し、それをもとに文法的な認識のあり方の変遷という観点から、分析を始めた。それぞれの時代の研究者が、どのような認識的な枠組のなかで研究してきたのか、そしてその枠組がどのようなきっかけで大きく方向を変えたのかなどを、実証的にたどっていきたい。

言語理論に関しても、特にグライスに端を発する研究の流れと広がりについて、批判的な究明を進めており、これもある程度全体像が見えてきた段階で、単著としてまとめた。

d 主要業績

(1) 論文

- 井島正博、「動詞基本形をめぐる問題」、『日本語文法』、第14巻第2号、pp.34-49、2014.10
井島正博、「トコロ文の構造と機能」、『日本語学論集』、第11号、pp.97-136、2015.3
井島正博、「過去・完了の助動詞」、『品詞別 学校文法講座 第6巻 助動詞』、pp.120～152、2016.1
井島正博、「モノダ文の周辺」、『日本語学論集』、第12号、pp.18～52、2016.3

(2) 学会発表

- 国内、井島正博、「上代・中古語の推量表現に関する一考察—特にベシをめぐる—」、早稲田大学日本語学会、早稲田大学、2014.12.6
国内、井島正博、「ソーシャルと日本語研究」、日本言語学会第151回大会公開シンポジウム「ソーシャルと日本語研究」、名古屋大学、2015.11.29

(3) 事典項目

- 井島正博、「否定文」「文の成分」「代名詞」「提示語」「並列語」「注釈語」、『日本語文法事典』、大修館書店、2014.8
井島正博、「助詞史」「名詞」「名詞文」「終助詞」「間投助詞」、『日本語大事典』、朝倉書店、2014.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本語文法学会、大会委員長、2013.4～2016.3

准教授 **肥爪 周二** HIZUME, Shuji

1. 略歴

- 1989年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1991年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
1993年4月 明海大学外国語学部日本語学科専任講師（～1996年3月）
1996年4月 茨城大学人文学部人文学科専任講師（～1997年9月）
1997年10月 茨城大学人文学部人文学科助教授（～2003年3月）
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授（～現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

国語学

b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を、主な専門領域とする。古代日本における外国語研究の二本の柱、すなわち漢字音韻学（中国語学）・悉曇学（梵語学）の学史的な研究を、主要な研究領域とする。先人の残したさまざまな記録を元に、江戸時代以前の日本における、音声観察・音声分類の発達および変遷を解明することを目指す。これらの研究成果と連動させつつ、漢字音の日本化の問題、拗音分布の偏在性についての歴史的解釈、濁音の起源（連濁現象の起源）についての考察など、音韻史分野にも研究対象を拡張し、着実に成果を上げている。近年の課題としては、国語音・漢字音（呉音系字音、漢音系字音、唐音系字音）・梵語音を総合する、日本語音節バリエーションの歴史を明らかにすることを目指している。

c 概要と自己評価

論文「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」においては、日本語学の立場からの研究が存在しなかった『華曇文字攷』の発掘・分析を行った。『国書総目録』等にも掲載されないため、複写のみによって知られていた同書の写本が、山梨県立博物館甲州文庫に蔵されることを見だし、原本調査を行った。同書は、唐音を利用した悉曇学書の一つで、伝承の過程で日本化した梵字の発音を、当時の中国語音を利用することにより、復元しようとした著作であり、梵字 pa・ca・ha 等の読みの修正に成功している。特に、日本語の語頭のガ行音と語中のガ行音（鼻音）を区別して説明したもののとしては、最も早いものであり、貴重である。論文「ハ行子音の歴史—多様性の淵源—」では、清音の濁音化と、促音挿入の平行性についても論じたが、ハ行音に関しては、清音が語頭・語中ともにとめどなく緩んでいったのに対し、濁音化した場合（濁音）・促音挿入した場合（半濁音）には、現代に至るまで閉鎖（強い音形）が維持されていることから考えて、これらが、いずれも強調（語の強調・語構成の強調）に由来するという捉え方が有効であることを提案した。この見通しは、かねてからの主張である、いわゆる連濁が、語構成明示のための内部境界の強調（延長）を起源とするという見解と、軌を一にするものである。

文献資料の調査と理論的な考察の双方を、バランスよく進めてゆくことを目指す方針が、今期も成功したと考える。一通りの問題についての私見の提出を終えたので、早急に成果を単行本にまとめることが必要である。今後、データ収集の焦点は、院政期から鎌倉時代・南北朝時代へと移行してゆくことになろう。

d 主要業績

(1) 著書

共著、肥爪周二、『日本語概説』、放送大学学術振興会、2015.3
共編、肥爪周二、『古語大鑑』第二巻、東京大学出版会、2016.2

(2) 論文

肥爪周二、「拗音をめぐる二つの物語」、『日本語の研究』、10-2、2014.4
肥爪周二、「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」、『近代語研究』、18、2015.2
肥爪周二、「ハ行子音の歴史—多様性の淵源—」、『日本語学』、2015.8
肥爪周二、「橋本進吉」、『日本語学』、2016.3

(3) 書評

沼本克明、『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る—附・半濁点の源流—』、『日本語の研究』、10-3、2014.7
小倉肇、『続・日本呉音の研究—研究篇・資料篇・索引篇・外編』、『国語と国文学』、2015.8

(4) 学会発表

国内、肥爪周二、「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」、近代語学会、2014.6.21
国際、肥爪周二、「日本語音韻の諸問題—史的研究からの解明」、国際東方学会議、2015.5.15
国際、肥爪周二、「日本漢字音史から見た法華経」、国際日本学シンポジウム、2015.7.5

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本女子大学、「国語学講義」、2014.4~2016.3
非常勤講師、國學院大學、「日本語音韻史」、2014.4~2016.3
非常勤講師、名古屋大学、「日本語音節構造史研究」、2014.7
非常勤講師、大阪大学、「日本語音節構造史研究」、2014.12

(2) 学会

国内、訓点語学会、運営委員、2014.4~2016.3
国内、日本語学会、常任査読委員、2015.6~2016.3

09b 日本語日本文学（国文学）

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki

1. 略歴

1976年3月	東京大学文学部国語国文学専修課程卒業
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1979年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1980年4月	実践女子大学文学部専任講師
1985年4月	名古屋大学文学部専任講師
1986年12月	名古屋大学文学部助教授
1993年4月	東京大学文学部助教授（1993年4月～1994年3月、名古屋大学助教授併任）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（～現在に至る）
2000年9月	博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世文学

b 研究課題

近世中期の上田秋成・建部綾足・与謝蕪村らの文人の文学を、伝記・作品論・思想論等の様々な面から考察する。新しい文学理念を掲げ、それまでになかった文学ジャンル・学問・絵画を生み出した文人の活動を、一人一人の個性・特殊性と、個人を越えた共通性との両面から明らかにすることを研究の目標とする。

c 概要と自己評価

上田秋成については、詳細な伝記研究を進める一方、生涯と作品を概観する『上田秋成の文学』を書いて多面的な文人としての秋成像を描いた。作家論を包含するような新しい伝記研究に向けての一つの試行と、自分では考えている。建部綾足については、和文読本を中心とした作品論を、また蕪村については、発句と連句の評釈を書き進めている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、秋成研究会編、『上田秋成研究事典』、笠間書院、2016.1
単著、長島弘明、『上田秋成の文学』、放送大学教育振興会、2016.3

(2) 論文

長島弘明、「延享の朝鮮通信使と日本人医師一樋口道与と『韓客治験』—」、韓国日語日文学会 2014 年国際学術シンポジウム『日本における「歴史」の語りと交流の「歴史」—「韓国との対話」という未来志向的視点から—』予稿集（韓国日語日文学会）、2014.10
長島弘明、「上田秋成と樋口道与—大坂文人の文化相対主義—」、『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（笠間書院）、2015.2

(3) 学会発表

国際、長島弘明、「延享の朝鮮通信使と日本人医師一樋口道与と『韓客治験』—」、韓国日語日文学会 2014 年国際学術シンポジウム、韓国外国語大学校、2014.10.25
国内、長島弘明、「雨月物語と漢文」、全国漢文教育学会第 31 回漢文教育研修会、湯島聖堂内斯文会館講堂、2015.7.30
国際、長島弘明、「江戸時代の名句の誤読」、ケンブリッジ大学東洋学セミナー、2016.1.25
国際、長島弘明、「文学ジャンルのヒエラルキーと本文の流動—江戸時代小説を起点として—」、国際ワークショップ「日本文学史再考」、コロンビア大学、2016.3.11

(4) 啓蒙

大谷雅夫・長島弘明ほか、「座談会「先学を語る」—日野龍夫先生—」、『東方学』、129 輯、2015.1

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2014・2015年度

(2) 学会

東京大学国語国文学会、会長、2011.1～2014.12

東京大学国語国文学会、評議員、2015.1～

日本近世文学会、常任委員、2014・2015年度

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議、会員、2011.10～

国文学研究資料館運営会議委員、2014・2015年度

教授 藤原 克己 FUJIWARA, Katsumi

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
1980年4月 岡山大学教養部講師
1984年4月 岡山大学教養部助教授
1989年4月 神戸大学文学部助教授
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年5月 博士(文学) (東京大学)
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野

平安朝文学

b 研究課題

新しい日本古典文学研究のあり方を求めて

c 概要と自己評価

戦後、日本文学研究は飛躍的に深化し充実してきたが、1970年代頃から一種の飽和状態に陥り、伝統的な研究の細分化が進む一方で、文化人類学や社会的アプローチなどによる研究の拡散化も進展した。また海外における日本文学研究には、私たちが学ぶべきものも多い一方で、文学に対する関心のあり方の違いなどから、議論のかみ合わないような面もあって小さくない。現在私が庶幾しているのは、海外の日本古典文学研究者や国内外の比較文学の研究者とも実りある議論を交換できるような共通の関心の基盤を作ることである。そのためには、こんにちの細分化した日本古典文学研究の枠組の中での「新見」を探るのではなく、先学の貴重な研究成果を批判的に継承しつつ、日本文学の「古典」を世界文学の「古典」として再定位しなければならない。下記の業績一覧に挙げたものは、すべてそのような試みである。

d 主要業績

(1) 論文

FUJIWARA Katsumi, Some Remarks on “Dialogue with the Impoverished” by Yamanoue no Okura, in *ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture*, No. 107, The Toho Gakkai, pp.1-18, 2014.8

藤原克己、「『浜松中納言物語』鑑賞の試み」、『これからの国文学研究のために—池田利夫追悼論集』（武蔵野書院）、139～158頁、2014.10

藤原克己、「源氏物語講座：光源氏と藤壺」、『むらさき』（紫式部学会編）、第51輯、101～111頁、2014.12

藤原克己、「平安朝の恋と西欧の宮廷風恋愛」、『むらさき』、第52輯、98～108頁、2015.12

(2) 解説

藤原克己、「解説」、秋山虔著『王朝女流文学の世界』（東京大学出版会・UPコレクション新装版）、237～253頁、2015.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

その他、八王子市生涯学習センター川口分館、「天神様になった詩人 菅原道真の知られざる素顔―没後 1111 年を迎えて」、2014.2

その他、福井県越前市源氏物語アカデミー委員会、「光源氏と大和魂」、2014.10

その他、かわさき市民アカデミー、「源氏物語に描かれた愛と死：光源氏と紫の上」、2014.10

その他、東京大学文学部、「源氏物語の深さと美しさ」、2014.12

特別講演、北栄町図書館（鳥取県）、「源氏物語の深さと美しさ―光源氏と紫の上―」、2015.11

(2) 学会

国内、中古文学会、編集委員、中古文学会賞選考委員長、2015.5～

国内、東方学会、学術委員、2015.5～

教授 **渡部 泰明** WATANABE, Yasuaki

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
1986年4月	東京大学文学部助手
1988年4月	フェリス女学院大学文学部専任講師
1991年4月	フェリス女学院大学文学部助教授
1993年4月	上智大学文学部助教授
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月	博士（文学）（東京大学）
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中世文学、和歌文学

b 研究課題

和歌文学については、マクロ的には和歌史を構想し記述すること、ミクロ的には新古今集前後を中心とした中世和歌作品の方法を解明することを課題としている。前者は専門化し、細分化された研究の現状に対して、和歌を長い射程のもとに捉え、この文芸のもつ意義と独自性を総体的に把握することを目指している。後者は、作品を完成したもののとして結果論的に捉えるだけでなく、より作者自身の方法に即した、内在的な理解を目標としている。

中世文学については、徒然草や方丈記など、とくに和歌的素養を基盤とした作品について、とくにその文体と方法を解明することを目標としている。

c 概要と自己評価

中等教育との、いわゆる高大連携を目的として、和歌の入門書『古典和歌入門』と『絵でよむ百人一首』の2単著を上梓し、かつ和歌技法の入門書『和歌のルール』を編集した。そのほか高校生を古典に参加させる授業方法を考察する研究発表「和歌をつくる」を行った。また、和歌研究の水準を明示する辞典、『和歌文学大辞典』に編集委員として参加した。いずれも研究の普及に一定の役割を果たしたと評価できる。和歌史記述の一環として、藤原定家の論文2本、源俊頼の論文2本、西行の論文1本および学会発表1本、世阿弥の作劇における和歌的方法の論文1本を刊行した。いずれも和歌の方法を機軸にして和歌史の動態を考察するもので、従来にない創意ある観点と評価される。和歌以外にも、『徒然草』の文学的意義を一般向けに提示した論考「言葉によってどのように「心」が表現されるのか」を発表した。

d 主要業績

(1) 著書

単著、渡部泰明、『古典和歌入門』、岩波書店、2014.6

- 単著、渡部泰明、『絵でよむ百人一首』、朝日出版、2014.10
共著、渡部泰明編、『和歌のルール』、笠間書院、2014.11
共著、『和歌文学大辞典』編集委員会編、『和歌文学大辞典』、古典ライブラリー、2014.12

(2) 論文

- 渡部泰明、「言葉によってどのように「心」が表現されるのか」、『人文知1 心と言葉の迷宮』、東京大学出版会、2014.7
渡部泰明、「藤原定家の百人一首歌」、『これからの国文学研究のために—池田利夫追悼論集』、笠間書院、2014.10
渡部泰明、「歌の（かたち）——源俊頼の方法」、『「かたち」再考 開かれた語りのために』、平凡社、2014.12
渡部泰明、「漢と和の「文」②——藤原定家に見る縁語的思考」、『日本「文」学史 第一冊 「文」の環境——「文学」以前』、勉誠出版、2015.9
渡部泰明、「西行和歌の作者像」、『二〇一四年パリ・シンポジウム 源氏物語とポエジー』、青簡舎、2015.5
渡部泰明、「和歌の本意——『俊頼髓』をめぐる——」、『能と狂言』、12、能楽学会、2014.8
渡部泰明、「「高砂」の和歌的世界」、『観世』、第82巻第2号、檜書店、2015.1

(3) 学会発表

- 国内、渡部泰明、「西行の恋の題詠歌」、西行学会大会シンポジウム、兵庫県民会館、2015.8.30
国内、渡部泰明、「和歌をつくる」、和歌文学学会大会シンポジウム、岡山大学、2015.10.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 放送大学客員教授、2014・2015年度
駒澤大学文学部、非常勤講師、2014年度

(2) 学会

- 和歌文学会、常任委員、2014・2015年度
中世文学会、常任委員、2014・2015年度
西行学会、常任委員、2015年度

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

- 日本学術会議、連携会員、2015年度

教授 **安藤 宏** ANDO, Hiroshi

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中退
1987年4月 東京大学文学部助手
1990年4月 上智大学文学部専任講師
1995年4月 上智大学文学部助教授
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代文学

b 研究課題

太宰治の文学の自意識過剰の饒舌体と呼ばれる文体に注目するところから出発、そのような文体が育まれてゆく必然性を近代文学史の展開に即して考察して行く中で、書き手の表現意識が「私小説」というわが国独自の表現形式を生み出してゆく機構にあらためて着目するに至った。いわゆる作家論の一環として太宰治の文学の特質を解明して行

く方向と、日本近代文学における「自己」表現の歴史の変容を解明して行く方向とを、同時並行的におすすめて行くことを現在の研究課題としている。

c 概要と自己評価

「表現機構」という観点から、小説が小説として認知される暗黙の要件を分析し、近代日本における変遷の様相を、『近代小説の表現機構』（岩波書店、2012年）にまとめ、それをさらに一般書の形で『日本近代小説史』（中公選書、2015年）と『「私」をつくる 近代小説の試み』（岩波新書、2015年）にまとめた。これら近代小説研究に関する成果を踏まえ、蓄積してきた太宰治研究を再検討し、集成することが現在の課題になっている。

d 主要業績

(1) 単行本

『日本近代小説史』（2015年1月、中公選書、229頁）

『「私」をつくる 近代小説の試み』（2015年11月、岩波新書、204頁）

(2) 論文

「近代日本文学」という制度の成立『人文知3 境界と交流』（熊野純彦、佐藤健二編、東京大学出版会、2014年3月、149-65頁）

(3) 小論・解説

「資料解題」、オンライン版日本近代文学館所蔵『太宰治 自筆原稿集』全三巻、2014年4月

「太宰治直筆資料公開の現状と課題」、『日本近代文学会東北支部会報』49、2014年11月、1-3頁

『生誕105年 太宰治展一語りかける言葉』の意義『神奈川近代文学館年報 2014年（平成26年）度』2015年7月

「解説」、「新装版 三好行雄『日本文学の近代と反近代』（東京大学出版会、2015年10月、269-287頁）4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学

(2) 学会

日本近代文学館理事、日本近代文学会理事、昭和文学会幹事

(3) その他

筑摩書房教科書編集委員、読売新聞読書委員

教授 **鉄野 昌弘** TETSUNO, Masahiro

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程入学
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1990年3月	同 単位取得退学
1990年4月	帝塚山学院大学文学部専任講師
1994年4月	帝塚山学院大学文学部助教授
1995年4月	東京女子大学文理学部助教授
2003年4月	東京女子大学文理学部教授
2007年12月	東京大学大学院人文科学研究科 国語国文学専門課程 博士（文学）学位取得
2009年4月	東京女子大学現代教養学部教授（改組による学部名変更）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本上代文学・和歌文学

b 研究課題

上代（奈良時代以前）日本文学を、韻文中心に研究している。特に『万葉集』の歌人、柿本人麻呂や、大伴家持の作品について、その読み直しを課題としている。『万葉集』の和歌は、中国の先進文明に正面から向き合って成立した日本という国家における草創期の文芸であり、漢詩文の表現に対して、学びつつ対抗するという両義的な関係を結んでいる。それゆえ、当時伝来していた六朝・初唐の漢詩文との比較・対照を主たる研究方法として、和歌独自の表現を明らかにしつつ、その価値を見出すことを論文執筆の際の、目標としている。更に『万葉集』は、7世紀前半から、8世紀中ごろまでの和歌の歴史を語る書物であると考えられ、歌人たちの積み重ねた作品群がいかなる軌跡を描くか、すなわち『万葉集』の和歌史を明らかにすることを、研究全体の目標とする。

c 概要と自己評価

この一、二年の業績は、大伴家持の作品、特に『万葉集』巻十七以降の「歌日誌」の歌において、古代政治史上の事象がいかに関連しているかを明らかにすることに集中している。従来見落とされてきた視点であり、近代における『万葉集』像を反省する材料であろうかと考える。今後は、『万葉集』全体の中で、家持作品を系譜学的に位置づける作業を進めたいと目撃している。

d 主要業績

(1) 論文

- 「安積皇子挽歌論—家持作歌の政治性—」『萬葉』219、2015年4月
- 「大伴家持「予作歌」の性格と位置」『芸文研究』109-1、2015年12月
- 「諸兄と家持—巻二十を中心に—」『萬葉』222、2016年5月

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 東京女子大学非常勤講師 2013、4～現在
- 御茶ノ水女子大学非常勤講師 2014年4～9月、2015年4～9月
- 慶應義塾大学非常勤講師 2016年4月～現在

(2) 学会

- 萬葉学会 編集委員
- 上代文学会 常任理事

(3) 学外組織

- 日本古典文学学術賞選考委員会委員
- 大学改革支援・学位授与機構 国語・国文学部会専門委員

准教授 **高木 和子** TAKAGI, Kazuko

1. 略歴

- 1988年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
- 1988年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学修士課程入学
- 1991年3月 同 修了
- 1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学博士課程進学
- 1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程単位取得退学
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野研究生（～1997年3月）
- 1998年4月 博士（文学）学位取得（東京大学）
- 1998年4月 関西学院大学文学部専任講師
- 2002年4月 関西学院大学文学部助教授（2007年4月より准教授）
- 2008年4月 関西学院大学文学部教授
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

平安仮名文学、源氏物語

b 研究課題

源氏物語は、平安前期に成立した長編物語・歌物語・和歌の発想を基盤とし、日記文学・漢詩文・史実等を貪婪に吸収して成立したと思われる。そこに到りつくまでの文学史的な動態、及び、源氏物語それ自体の構造や表現の分析を主な研究課題としており、初期の成果は『源氏物語の思考』（風間書房、2002年、第五回紫式部学術賞受賞）にまとめた。また平安時代の人々の思考や発想の形式にも関心を寄せており、和歌の贈答の分析を通じた意思伝達の呼吸などについて、『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』（青簡舎、2008年）に提案した。そのほか、研究成果を一般の人々に分かりやすく伝える仕事として、瀬戸内寂聴訳源氏物語の注釈等の執筆のほか『男読み 源氏物語』（朝日新書、2008年）、『コレクション日本歌人選 和泉式部』（笠間書院、2011年）、『平安文学でわかる恋の法則』（ちくまプリマー新書、2011年）等の一般書も手掛けている。

c 概要と自己評価

昨今の源氏物語研究がともすると作品の周辺の歴史的事実や享受史的な事実などの解明に偏りがちである現状を憂慮し、物語そのものを論じるために、これまでの方法論的成果をより発展的に次世代へと継承することが喫緊の課題であると考えている。今期は作品分析の方法論的な関心や思考形式について、いくつかの論考をまとめることができた。これを核として、論文集としてまとめるための準備を進めているところである。

d 主要業績

(1) 論文

高木和子、「『源氏物語』の構成原理」、『源氏物語 煌めくことばの世界』、105-119頁、2014.4

高木和子、「物語的空間と時間一場面を構築する仕組み―」、『新時代の源氏学 1 源氏物語の生成と再構築』、209-231頁、2014.5

高木和子、「『源氏物語』に現れた手紙―求愛の和歌の贈答を中心に―」、『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』、271-297頁、2014.6

高木和子、「源氏物語における系図の変容―桐壺院の皇子達と朱雀朝の後宮―」、『国語と国文学』、91-111、2014.11

高木和子、「源氏物語における贈答歌の表現の照応関係について」、『文学』、16-1、2015.1

高木和子、「源氏物語における人物造型の方法」、『源氏物語読みの現在 研究と資料 古代文学論叢第二十輯』、89-112頁、2015.4

高木和子、「源氏物語における長編化の方法」、『むらさき』、52、14-22頁、2015.12

(2) 学会発表

国内、高木和子、「源氏物語における長編化の方法」、紫式部学会講演会、東京大学（本郷）、2014.12.13

(3) 啓蒙

高田祐彦・高木和子、「〈対談〉源氏物語―作品の地平・研究の地平」、『文学』、16-1、2-31頁、2015.1

3. 主な社会活動

(1) 機関での講義等

特別講演、兵庫県高等学校教育委員会国語部会秋季研究協議会、「源氏物語若紫卷再考」、2015.11

(2) 学会

国内、中古文学会、常任委員・編集委員、2015.6～

国内、紫式部学会、理事、2015.7～

10 日本史学

教授 佐藤 信 SATO, Makoto

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
- 1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科(国史学)修士課程修了(文学修士)
- 1978年12月 東京大学大学院人文科学研究科(国史学)博士課程中退
- 1979年1月 奈良国立文化財研究所(平城宮跡発掘調査部)研究員
- 1985年4月 文化庁文化財保護部(記念物課)
- 1987年7月 文化庁文化財調査官
- 1989年4月 聖心女子大学文学部助教授
- 1992年4月 東京大学文学部助教授(国史学)
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(日本史学)
- 1996年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(日本史学)
- 1997年7月 博士(文学)取得(東京大学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代都市、出土文字資料(木簡学)、古代国家財政、文化財学。

c 概要と自己評価

研究面では、日本古代の地方官衙や地域間交流、そして古代史料の新たな校訂・訓読と史料学的研究などを進めた。教育面では、大学院・学部での日常の教育のほか、研究会での共同研究成果や教養課程の教科書などの出版を進めた。2014・15年度は公益財団法人史学会の理事長として学会運営に尽力し、社会的活動面でも、文化審議会はじめ文化財・史跡などの保存・活用をめぐる諸会議で積極的に活動した。相変わらず、研究のための時間的余裕の逼迫が大きな課題となっていると考える。

d 主要業績

(1) 会議主催(チェア他)

国内、シンポジウム「居村木簡が語る古代の茅ヶ崎」(セッション3 居村遺跡と下寺尾官衙遺跡群)、茅ヶ崎市役所コミュニティホール、2014.7.6

国内、出雲国風土記シンポジウム、パネルディスカッション「古代出雲の実像」、日経ホール、2014.7.21

国内、鞠智城東京シンポジウム「律令国家の確立と鞠智城—698年「繕治」の実像を探る—」、明治大学アカデミーコモン、2014.7.27

国内、鞠智城東京シンポジウム「古代山城鞠智城築城の謎を探る—古代山城の成立と鞠智城—律令国家への道と東アジア—」、東京国立博物館大講堂、2014.7.28

国内、木簡学会出雲特別研究集会「木簡からみた古代の出雲—木簡と地域社会の諸相—」、大社プレイスだんだんホール(出雲市)、2014.9.6

国内、鞠智城大阪シンポジウム「古代山城鞠智城築城の謎を探る—古代山城の成立と鞠智城—築城技術の源流—」、大阪ドーンセンター、2014.9.7

国内、鞠智城東京シンポジウム、パネルディスカッション「律令国家と西の護り、鞠智城」、明治大学アカデミーコモン、2015.9.6

国内、福岡県世界遺産シンポジウム、パネルディスカッション「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群—世界遺産としての価値について—」、東京国立博物館平成館大講堂、2016.2.11

(2) 著書

共編著、榎山明・佐藤信編『文献と遺物の境界Ⅱ—中国出土簡牘史料の生態的研究—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2014.12.10、全339頁

共著、佐藤信ほか『詳説日本史B』山川出版社、2015.3.5、全439頁
編著、松江市史編集委員会編『松江市史 通史編1 自然環境・原始・古代』、松江市、2015.3.30、全891頁。執筆：
第六章第一・二節(512-548頁)、第三節第三項(558-561頁)、第四節第一・二項(576-584頁)
共編、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編『新校古事記』おうふう、2015.11.25、全302頁
共編著、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著『風土記 常陸国・出雲国・播磨国・豊後国・肥前国』山川出版社、2016.1.20、
全558頁
編著、佐藤信編『大学の日本史①古代』山川出版社、2016.2.25、全280頁
共編、栄原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の新研究1 東大寺の美術と考古』法蔵館、2016.3.31、全618頁

(3) 論文

佐藤信、「大隅国建国と律令国家」『大隅国建国一三〇〇年記念記録集』鹿児島県霧島市教育委員会、2014.3.31、114-129頁
佐藤信、「郡家の構造と機能」『出雲古代史研究』24号、出雲古代史研究会、2014.7.26、1-17頁
佐藤信、「古代の陸奥国気仙郡と郡司金氏」『陸前高田市文化財等保存活用計画策定調査業務報告書資料編』陸前高田市教育委員会、2014.9、31-37頁
佐藤信、「日本古代木簡の生態的研究をめぐって」榎山明・佐藤信編『文献と遺物の境界Ⅱ—中国出土簡牘史料の生態的研究—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2014.12.10日、309-321頁
佐藤信、『出雲国風土記』の特徴と古代出雲世界、『しまねの古代文化』22号、島根県古代文化センター、2015.3.31、1-15頁
佐藤信、「2014年の歴史学界—回顧と展望— 総説」『史学雑誌』124編5号、史学会、2015.5.20、1-5頁
佐藤信、「律令地方行政と那須官衙遺跡」『第二十三回特別展那須官衙の時代—律令期地域社会の移り変わり—』大田原市なす風土記の丘湯津上資料館・栃木県那珂川町なす風土記の丘資料館、2015.9.19、100-108頁
佐藤信、「律令地方行政と那須官衙遺跡」『平成二十七年度特別展記念シンポジウム報告書 那須官衙の時代—律令期地域社会の移り変わり—』栃木県那珂川町なす風土記の丘資料館、2016.3.25、38-55頁

(4) 小論

佐藤信(パネルディスカッション、コーディネーター)『鞠智城シンポジウム二〇一三成果報告書 古代山城の成立と鞠智城 古代山城鞠智城の謎を探る(東京会場・大阪会場)』熊本県教育委員会、2014.3.31、67-89頁・139-163頁
佐藤信(討論参加)「木簡研究の過去・現在・未来 質疑応答・自由討論」、奈良文化財研究所編『歴史の証人 木簡を究める』クバプロ、2014.8.20、152-207頁
佐藤信(聞き手)「第二章遺構主義から遺跡主義へ 平野邦雄氏」「第八章史跡保護の広がり 笹山晴生氏」、『遺跡学の宇宙 戦後黎明期を築いた13人の記録』日本遺跡学会、2014.11.20、24-43頁、166-189頁
樺島郁夫・五百旗頭真・佐藤信「特別鼎談 古代日本の防衛最前線—鞠智城」『歴史読本』第60巻3号、KADOKAWA、2015.1.24、154-161頁
佐藤信(パネルディスカッション、コーディネーター)『鞠智城東京シンポジウム二〇一五成果報告書 律令国家と西の護り、鞠智城』熊本県教育委員会、2016.3.31、91-120頁

(5) 学会発表

国内、佐藤信、「古代の東国社会と上野三碑」、群馬県上野三碑シンポジウム「東アジアとの文化交流の記憶を伝える」、高崎市吉井文化会館、2014.3.29
国内、佐藤信、「磐井の乱」「藤原広嗣の乱」、敬文舎日本歴史文化講座「わが国古代の戦乱」、和亭なこわ、2014.4.16・5.14.
国内、佐藤信、「古代東国の地方官衙」(講演)、甘粕健先生追悼記念講演会「古墳文化・古代官衙」、明治大学リバティータワー、2014.7.12
国内、佐藤信、「日本古代史のなかの武蔵国分寺パート2 ①国分寺の造営をめぐって ②武蔵国の古代史」、国分寺市本多公民館歴史講座、国分寺市本多公民館、2014.7.17・18
国内、佐藤信、『出雲国風土記』の特徴と古代出雲世界(基調講演)、出雲国風土記シンポジウム「古代出雲の実像」、日経ホール、2014.7.21
国内、佐藤信、「古代の陸奥国気仙郡と郡司金氏」(報告)、陸前高田市文化財等保存活用計画策定調査委員会調査・保存部会報告会、陸前高田市役所、2014.8.31
国内、佐藤信、「宗像・沖ノ島と関連遺産群の歴史的価値」、福岡教育大学特別公開講座「講座むなかた! ムナカタ! 宗像! V」「宗像から世界へ—『宗像・沖ノ島と関連遺産群』の世界遺産登録にむけて—」、福岡教育大学アカデミックホール、2014.12.13

国内、佐藤信、「封戸水田章の注釈案の検討」（報告）、東大寺要録研究会、東大寺総合文化センター、2014.12.21

国内、佐藤信、「上野国佐位郡正倉跡と古代豪族」（記念講演）、「上野国佐位郡正倉跡」国史跡指定記念事業、伊勢崎市役所、2015.1.31

国内、佐藤信、「平安時代の東国仏教と国分寺」（問題提起）、歴史文化フォーラム「平安時代における祈りの空間 武蔵国分寺」、国分寺市立いずみホール、2015.2.15

国内、佐藤信、「古代の相模国と地方官衙」（基調講演）、平成26年度神奈川県考古学会講座「相模国を創る—古代の役所と寺院—」、茅ヶ崎市役所コミュニティーホール、2015.2.22

国内、佐藤信、「古代の歴史を考える」（講演）、基肄城築城1350年・東明館30周年記念「東明館さくらフェスタ2015 in KIYAMA」、東明館中学校・高等学校、2015.3.28

国内、佐藤信、「古代相模の地方官衙と律令国家」（記念講演）、文化財保存全国協議会第46回湘南茅ヶ崎大会シンポジウム「古代官衙の保存とまちづくり」、JAさがみ農協茅ヶ崎ビル、2015.6.21

国内、佐藤信、「高麗郡建郡と東アジアの交流」、第2回公開歴史講演会、日高市文化体育館ひだかアリーナ、2015.7.5

国内、佐藤信、「武蔵国と古代の交通」「武蔵国分寺と平安時代の東国仏教」、国分寺市本多公民館歴史講座、国分寺市本多公民館、2015.7.21・22

国内、佐藤信、「趣旨説明 古代東国の地方官衙と寺院」、コーディネーター・司会、史学会例会「古代東国の地方官衙と寺院」、東京大学文学部、2015.9.5

国内、佐藤信、「上野国の古代社会像」、桐生市高齢者大学第53回歴史講座、桐生市立中央公民館、2015.10.2

国内、佐藤信、「趣旨説明 奥州藤原氏平泉政権と気仙地域」、コーディネーター・司会、シンポジウム「奥州藤原氏平泉政権と気仙地域」、アイーナ（盛岡市）、2015.10.3・4

国内、佐藤信、「律令地方行政と那須官衙遺跡」、第23回特別展記念シンポジウム「那須官衙の時代—律令期地域社会の移り変わり—」、那珂川町あじさいホール、2015.10.17

国内、佐藤信、「橘樹官衙遺跡群から見た律令国家体制の中の東国社会」（記念講演）、川崎市橘樹官衙遺跡群・茅ヶ崎市下寺尾官衙遺跡群同時国史跡指定記念シンポジウム「橘樹官衙遺跡群を活かす—市民・地域に愛される史跡を目指して—」、川崎市高津市民館、2015.10.25

国内、佐藤信、「日本古代史の最前線と高校教科書」、平成27年度甲子園短期大学附属図書館公開講座、甲子園短期大学、2015.10.31

国内、佐藤信、「播磨国風土記の魅力」、播磨国風土記1300年記念播磨国風土記特別陳列記念講演会、兵庫県立歴史博物館、2015.11.1

国内、佐藤信、「下野国分寺と国分尼寺の造られた時代」、下野国分尼寺跡国指定50周年記念講演会、栃木県埋蔵文化財センター、2015.11.8

国内、佐藤信、「上神主・茂原官衙遺跡と古代東国」シンポジウム「姿を現した古代河内郡の役所跡—上神主・茂原官衙遺跡の実像とその時代—」基調講演、宇都宮市立南図書館サザンクロスホール、2015.11.21

国内、佐藤信、「大仏造立をめぐる日本史」、放送大学公開講演会、放送大学東京文京学習センター、2015.11.22

国内、佐藤信、「古代日本の漢字文化受容と東アジア」、第192回情報通信国際交流会講演会、東海大学校友会館、2015.12.15

国内、佐藤信、「『東大寺要録』にみる本願聖武天皇とその文書」、第14回グレイトブッダ・シンポジウム「古代東大寺の世界—『東大寺要録』を読み直す—」、東大寺総合文化センター金鐘ホール、2015.12.19

国内、佐藤信、「出雲国風土記の説話世界」、国際日本文化研究センター共同研究「説話文学と歴史史料の間に」、国際日本文化研究センター、2016.1.9

国内、佐藤信、「古代備中と山陽道」（基調講演）、「古代山陽道シンポジウム」、矢掛町環境改善センター、2016.1.24

国内、佐藤信、「日本史上の平泉の位置—古代国家から中世への変換—」（基調講演）、第16回平泉文化フォーラム、一関文化センター、2016.1.30

国内、佐藤信、「律令国家と久留倍官衙遺跡」（基調講演）、久留倍官衙遺跡シンポジウム「古代史のロマン謎の『久留倍官衙遺跡』」、三重テラス（東京）、2016.2.4

国内、佐藤信、「奥州藤原氏政権と気仙地域」、市民向け報告会「歴史・考古・民俗学から気仙地域の魅力を語るII」報告、陸前高田市コミュニティーホール、2016.2.21

国内、佐藤信「平城京と伊勢」、国史跡久留倍官衙遺跡講演会「平城京と伊勢」、四日市市民交流会館本町プラザ、2016.3.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

客員教授、放送大学、2012.4～

非常勤講師、國學院大學大学院文学研究科、2012.4～2016.3

非常勤講師、法政大学大学院人文科学研究科、2012.4～2016.3

非常勤講師（集中講義）、大阪市立大学大学院文学研究科、2015.9

非常勤講師（集中講義）、福岡大学大学院人文科学研究科、2015.10

(2) 学会

国内、公益財団法人史学会、理事長、2014.6～

国内、日本歴史学会、評議員、2012.4～

国内、史学研究会、評議員、2013～

国内、木簡学会、委員、2012.4～

国内、条里制・古代都市研究会、評議員、2012.4～

(3) 行政

文化庁、教育政策、文化審議会文化財分科会第三専門調査会専門委員、2012～2014

文化庁、教育政策、文化審議会文化財分科会世界文化遺産特別委員会委員、2013年度以前より継続中

文化庁、教育政策、古墳壁画の保存活用に関する検討会委員、2012～

文化庁、教育政策、水中遺跡調査検討委員会委員、2013.4～

宮内庁、その他、陵墓管理委員、2013年度以前より継続中

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、国立歴史民俗博物館、運営会議委員、2012～

独立行政法人、国立文化財機構、外部評価委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、文京区、文化財保護審議会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、松江市、松江市史編集委員、2013年度以前より継続中

教育機関、葛飾区、葛飾区史編集委員会委員長、2013～

その他、日本公園緑地協会、研究顧問、2013～

その他、高梨学術奨励基金、選考委員、2013～

その他、群馬県埋蔵文化財調査事業団、特別顧問、2013年度以前より継続中

その他、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、評議員、2014～

教育機関、岩手県二戸市教育委員会、史跡九戸城跡整備指導委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備指導委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、岩手県矢巾町教育委員会、史跡徳丹城跡調査指導委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、陸前高田市教育委員会、陸前高田市文化財等保存活用計画策定委員会、2013～2014

教育機関、宮城県教育委員会、多賀城跡調査研究委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、宮城県多賀城市教育委員会、多賀城南門等復元整備検討委員会委員、2013～

教育機関、茨城県鹿嶋市教育委員会、史跡鹿島神宮境内附郡家跡史跡整備検討委員会委員、～2015

教育機関、栃木県下野市教育委員会、史跡下野薬師寺跡保存整備委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、栃木県宇都宮市・上三川町教育委員会、上神主・茂原官衙遺跡保存整備委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、群馬県教育委員会、史跡上野国分寺跡調査整備検討委員会委員、2012～

教育機関、群馬県太田市教育委員会、史跡上野国新田郡庁跡調査・整備専門委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、群馬県伊勢崎市教育委員会、三軒屋遺跡調査検討委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、群馬県高崎市教育委員会、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会委員、2013～

教育機関、埼玉県立史跡の博物館、史跡埼玉古墳群保存整備協議会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、神奈川県川崎市教育委員会、橘樹郡衙調査指導委員会委員、2013～

教育機関、山梨県笛吹市教育委員会、甲斐国分寺跡・国分尼寺跡保存整備専門委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、東京都国分寺市教育委員会、武蔵国分寺跡保存整備委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、東京都府中市教育委員会、史跡武蔵国府跡保存整備活用検討協議会委員、2012～

教育機関、斎宮歴史博物館、斎宮歴史博物館運営専門委員会委員、2013年度以前より継続中

その他、国土交通省国営飛鳥歴史公園管理事務所、平城宮第一次大極殿院建造物復原検討委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、島根県教育委員会、島根県古代文化センター企画運営委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、島根県教育委員会、出雲国府跡発掘調査指導委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、福岡県教育委員会、大宰府史跡調査研究指導委員会委員、2013年度以前より継続中

教育機関、福岡市教育委員会、鴻臚館跡整備検討委員会委員、2013～

その他、宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進協議会、宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議専門家会議委員、2013年度以前より継続中

教育機関、熊本県教育委員会、鞠智城跡保存整備検討委員会委員、2012年度以前より継続中

教授 **加藤 陽子** (戸籍名は野島陽子) KATO, Yoko

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業(文学士)
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(国史学)
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学(国史学)
1989年4月 山梨大学教育学部専任講師(日本史学)
1991年4月 山梨大学教育学部助教授(日本史学)
1992年12月 文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学ライシャワーセンター研究員
1994年4月 東京大学文学部助教授(日本史学)
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(日本史学)
1997年2月 博士(文学)取得
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(日本史学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

1930年代の日本の政治と外交

c 概要と自己評価

専攻は日本近現代史で、1930年代の外交と軍事を専門としている。近代において起こされた戦争が当該期の政治や社会に持った意味、あるいは、日清・日露・第一次世界大戦など、10年ごとになされた観のある戦争の記憶が総体として国民や国家に対してもたらした影響等について研究してきた。近年は、2011年の公文書管理法施行により利用しやすくなった宮内公文書館や国立公文書館の史料を用い、大正・昭和戦前期の詔書作成過程を研究している。また、昭和戦前期の政治史を専門とする歴史研究者として、日中関係史、日米関係史についても目配りしてきた。史料公開の先進性で知られるアメリカはもとより、近年では中国、台湾等でも史資料の公開が活発になってきたこともあり、内外の研究者との交流に努めている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、加藤陽子、内海愛子、大沼保昭、田中宏、『戦後責任 アジアのまなざしに込めて』、岩波書店、2014.6

共著、加藤陽子、久保亨ほか、『日中戦争の国際共同研究 5 戦時期中国の経済発展と社会変容』、慶應義塾大学出版会、2014.6

共著、加藤陽子、福永文夫、河野康子ほか、『戦後とは何か』下巻、丸善出版、2014.6

共著、加藤陽子、長谷部恭男、葛西康德、荻部直、宍戸常寿、吉見俊哉、『「この国のかたち」を考える』、岩波書店、2014.11

共著、郭岱君主編『重探 抗戦史（一） 第一章 中日戦争の発端／第一章 日本軍国主義的興起』（台湾、聯経出版、2015年10月）、pp.17-47、pp.50-82

共著、劉傑、川島真編『対立と共存の歴史認識 日中関係150年』（社会科学文献出版社、2015年9月）、pp.137-159.

(2) 論文

加藤陽子、「体制翼賛会の成立から対英米開戦まで」、『岩波講座 日本歴史』、18巻 近現代4、1～40頁、2015.5

加藤陽子、「「第三次桂内閣初閣議での桂太郎の発言（桂太郎関係文書）」について」、『歴史と地理』、685、22～27頁、2015.6

(3) 解説

加藤陽子、「解説」、松本重治『上海時代』、上・下、2015.6

加藤陽子、「解説」、石射猪太郎『外交官の一生』、462-474pp、2015.8

(4) 学会発表

国際、加藤陽子、「現在の日本を形容すべき言葉は何か 「孤独な帝国 日本」から遠く離れて」、日仏文化サミット「変化する世界と日仏関係の未来」、日仏会館、2014.6.28

国際、加藤陽子、「近代の戦争から見た、日本の対外観と国民意識の特質」、国際シンポジウム 戦争と記憶、台湾台南市成功大学、2015.10.25

国内、加藤陽子、「南原繁と太平洋戦争 終戦のかたちと天皇の地位を中心に」、第12回 南原繁シンポジウム、学士会館、2015.11.3

国際、加藤陽子、「敗者の帰還——第二次世界大戦終結後における日本軍の武装解除について——」、北京論壇2015、中華人民共和国北京市釣魚台国賓飯店、2015.11.7

(5) 啓蒙

加藤陽子、吉田裕（対談）、「日本史研究の今 「戦争を通して見えてくる近現代の姿」」、『図書』、20-31pp、2015.2

加藤陽子（有馬学、一ノ瀬俊也、加藤聖文、季武嘉也、西川誠の諸氏とともに）、「座談会 日本史の論点・争点 『昭和天皇実録』を読み解く」、『日本歴史』、808号、1-23pp、2015.9

(6) マスコミ

「(対談) 日本史研究の今 (最終回) 「戦争を通して見えてくる近現代の姿」」、『図書』、岩波書店、2015.2

「国際分業の苦難が導いた体制護持の戦争」、『毎日新聞』、2015.2.1

「若者と国家双方にいかにか生きるか指南」、『毎日新聞』、2015.3.22

「日本の屈折姿勢 背景に列強への警戒心」、『毎日新聞』、2015.5.17

「対象に親密さ求める心の旅の記録」、『毎日新聞』、2015.7.12

「歴史を正しく成長させねばならぬ」、『毎日新聞』、2015.9.20

「「個人として尊重される」かどうか」、『毎日新聞』、2015.10.25

「あるべき中国像をめぐる日英間の相克」、『毎日新聞』、2015.12.6

「過去を語り未来を創る力」、2016.1.31

(7) 史料

加藤陽子、東大大学院近代政治史ゼミ、「森本州平日記 五」『東京大学日本史学研究室紀要』18号、2014.3

加藤陽子ほか、東大大学院近代政治史ゼミ、『森本州平日記』、「史料紹介 森本州平日記 七」『東京大学日本史学研究室紀要』19号、2015.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日弁連、「今を戦前にしないために～戦後70年記念シンポジウム」、2015.8

(2) 内閣府 委員

国立公文館の機能・施設の在り方に関する調査検討委員会委員（2014年4月～）

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専門課程修了
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程国史学専門課程中退
1987年4月 山梨大学教育学部講師（歴史学）
1990年9月 山梨大学教育学部助教授（歴史学）
1994年11月 博士（文学）
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2002年10月-2003年2月 スイス、ジュネーブ大学招聘教授
2010年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代天皇制、日唐律令制比較研究、摂関期国家の研究

c 概要と自己評価

日本古代の律令制を東アジア世界の中で位置付けることを目的とし、それにともない古代天皇制の解明、敦煌吐魯番文書の研究、摂関政治期の国制の解明を行っている。また学界の現状と課題を総括して提供することをめざし『岩波講座日本歴史』全22巻の編集を行い、2016年2月に完結した。また日本文化研究専攻の責任者として2015年3月に『日本文化研究専攻 外部評価報告書』をまとめた。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、大津透ほか、『岩波講座日本歴史5 古代5』、岩波書店、2015.6
共著、大津透ほか、『岩波講座日本歴史21 史料論』、岩波書店、2015.12

(2) 論文

- 大津透、「高松塚古墳随感」、『日本歴史』794、32-37頁、2014.7
大津透、「財政の再編と宮廷社会」、『岩波講座日本歴史5 古代5』、岩波書店、35-70頁、2015.6
大津透、「序論—史料論の今日的課題と成果」、『岩波講座日本歴史21 史料論』、岩波書店、1-10頁、2015.12
大津透（付晨農編訳）、「日本古代古文書学研究的進展及課題」、『中国史研究動態』2016年1期、73-81頁

(3) 解説

大津透、「解説」、池田温著『唐史論攷』、汲古書院、761-774頁、2014.10

(4) 学会発表

- 国際、大津透、「日本古代古文書学研究的進展及課題」、中国古文書学国際学術研討会、中国社会科学院歴史研究所（北京）、2014.10.31
国内、大津透、「藤原道長のめざした政治と文化」、第5回陽明文庫講座、立命館大学朱雀キャンパスホール、2015.2.22

(5) 座談・対談

- 大津透（司会）、尾藤正英・梅澤ふみ子・鈴木暎一・ケイトナカイ・頼祺一・戸川芳郎「学問の思い出—尾藤正英先生を囲んで」『東方学 特集座談会「学問の思い出」』、東方学会、81-122頁、2014.5
大津透・小澤毅、「古代史と考古学の対話」、『図書』788、6-13頁、2014.10

(6) 会議主催(チェア他)

- 国際、「第59回国際東方学学会議」、司会・企画、シンポジウム「律令制的人民支配の比較研究」、日本教育会館、2014.5.24、(会議記事、『東方学会報』106、17-19頁、2014.7、Chairperson's Report、『国際東方学学会議紀要』59、pp.131-136、2014.12)
国内、「第113回史学会大会古代史部会」、司会・企画、シンポジウム「摂関期の国家と社会」、東京大学文学部、2015.11.15

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本歴史学会、理事、2010.7～、理事代表 2014.9～

国内、史学会、理事、2011.5～2014.5

国内、東方学会、理事、2013.4～、常務理事 2015.6～、東方学会賞選考委員、国際東方学者会議運営委員

教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部国史学科卒業

1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程修了

(1995年3月 博士(文学)学位取得)

1992年4月 東京大学社会科学研究所助手

1994年4月 東京大学教養学部助教授

1996年1-10月 ドイツ、ボーフム大学 (Ruhr-Universität Bochum) 客員教授

1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授 (大学院重点化による)

1999年10月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2007年4月 同准教授

2012年8月 同教授

2012年8月-2013年3月 米国、イェール大学 (Yale University) 客員研究員

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

明治期の機械工業が元来の研究課題。新技術の導入が社会をどのように変えて行くのかという問題関心を中心に、史料に即した明治・大正期の再検討を心がけている。

c 概要と自己評価

講座ものの執筆や共同研究に参加したため、従来より幅広く対象をとらえることができるようになり、産業遺産の研究でも多くの知見を得られたが、手を広げすぎて多忙なため、検討を深め、また体系的に成果を提示することが課題となっている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、秋山聡・野崎欽、『人文知2 死者との対話』、東京大学出版会、2014.11

共著、似田貝香門・吉原直樹編、『震災と市民2 支援とケア』、東京大学出版会、2015.8

(2) 解説

鈴木淳、「産業遺産研究の到達点と課題—世界遺産推薦問題で見えて来たもの—」、中部産業遺産研究会創立20周年記念誌編集委員会『中部における産業遺産研究のあゆみ—中部産業遺産研究会創立20周年記念誌』、2014.7

鈴木淳、「開港の綿業への影響について」『歴史と地理』682号日本史の研究248号、2015.3

鈴木淳、「富岡製糸場と近代経済をめぐる教科書叙述」群馬県高等学校教育研究会歴史部会『歴史部会紀要』44号、2015.3

(3) 研究報告書

鈴木淳、旧東京陸軍第二造兵廠内火薬研究所等近代化遺産調査団、「旧東京陸軍第二造兵廠火薬研究所等近代化遺産調査報告書」、71-74、179-186頁、2016.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

「明治の工業都市東京における隅田川」、たばこと塩の博物館展示関連講演会、2016.1.13

「日本の近代化と川口鑄物産業」、川口市文化財調査報告会、2016.3

(2) 学会

国内、政治経済学・経済史学会、編集委員

国内、日本産業技術史学会、理事

国内、日本歴史学会、評議員

(3) 行政

文化庁、文化審議会文化財分科会第三専門調査会専門委員、世界文化遺産特別委員会委員

群馬県、群馬県世界遺産専門委員会委員

群馬県富岡市、富岡製糸場保存修理委員会委員

埼玉県川口市、川口市文化財保護審議会委員

准教授 **牧原 成征** MAKIHARA, Shigeyuki

1. 略歴

- | | |
|----------|-------------------------------------|
| 1994年3月 | 東京大学文学部国史学専修課程卒業 |
| 1996年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻修士課程修了 |
| 1999年12月 | 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程単位修得の上退学 |
| 2000年1月 | 日本学術振興会特別研究員 (PD) |
| 2003年3月 | 博士 (文学) (東京大学) (博人社390号) |
| 2004年4月 | 宇都宮大学教育学部助教授 (社会科教育講座) |
| 2007年4月 | 宇都宮大学教育学部准教授 (同) |
| 2011年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

近世前期を中心に、土地制度、身分と身分制、商品流通などの観点から近世社会の特質を検討している。

c 概要と自己評価

これまで主として農村部 (在方) における土地制度、百姓・商人・その他の身分やその集団のあり方、権力による土地・身分政策について検討してきたが、農村部とは区別・分離された都市部 (町方) における土地・身分政策や町人・商人のあり方については深く分析してこなかった。この点を反省し、上方と江戸において近世的な城下町、町人や商人が形成されてくる過程と特質を考察した。部分的ではあるが、自分なりに視野の拡大を果たすことができたと思う。

d 主要業績

(1) 著書

共著、清水光明編、牧原成征ほか、『「近世化」論と日本』、勉誠出版、2015.6

編著、牧原成征ほか、『近世の権力と商人』、山川出版社、2015.11

(2) 書評

藤田和敏、『近世郷村の研究』、『日本歴史』、796、2014.9

高木昭作、『日本近世国家史の研究』、『歴史学と、出会う—41人の読書経験から—』、2015.5

(3) 学会発表

国内、牧原成征、「近世的社会秩序の形成」、日本史研究会例会、京都大学、2015.1.10

(4) 会議主催(チェア他)

国内、「史学会大会」、実行委員、2014.11.9～2014.11.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶応大学文学部、「日本史特殊」、2014.4～2015.3

准教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki

1. 略歴

1989年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1991年4月 東京大学文学部国史学専修課程進学
1993年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程進学
1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）博士課程進学
1997年7月 同 博士課程（日本史学）中退
1997年8月 東京大学史料編纂所助手
2007年4月 東京大学史料編纂所助教
2009年1月 博士（文学）学位取得（東京大学）
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

中世武家政権の研究、14世紀政治社会史の研究

c 概要と自己評価

もっぱらモンゴル襲来を中心に鎌倉時代後半の外交・政治史研究に取り組んだ。また別に北条時頼政権について検討する機会を得たことにより、13世紀半ばから一貫する朝幕関係を見通す視座を得ることができた。今後は14世紀へと視野を拡大し、室町幕府成立期・南北朝期の政治史研究に進んでいきたいと考えている。また共同研究の一環として『平家物語』に取り組み、歴史学の立場から文学作品にアプローチする方法を模索した。さらに古記録から古文書の作成や授受を読み解くことで、古文書学の新たな一面を開拓することを試みた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、高橋典幸、『生活と文化の歴史学5 戦争と平和』、竹林舎、2014.10

編著、高橋典幸、『源平盛衰記年表』、三弥井書店、2015.7

(2) 論文

高橋典幸、「モンゴル襲来をめぐる外交交渉」、高橋典幸編『生活と文化の歴史学5 戦争と平和』（竹林舎）、221-244頁、2014.10

高橋典幸、「北条時頼とその時代」、村井章介編『東アジアのなかの建長寺』(勉誠出版)、59-72 頁、2014.11
高橋典幸、「『山田聖栄自記』と平家物語」、松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』(笠間書院)、608-619 頁、
2015.5

高橋典幸、「南北朝・室町期南九州の城郭」、齋藤真一編『城館と中世史料』(高志書院)、67-84 頁、2015.9

高橋典幸、「藤原定家と「御教書」「奉書」」、『明月記研究』、14、86-97 頁、2016.1

(3) 解説

高橋典幸、「『明月記歌道事』(文治四年四月～正治二年九月)を読む」(分担執筆)、『明月記研究』14、1-58 頁、2016.1

(4) 啓蒙

高橋典幸、「足利尊氏が御家人を周防守に推薦した文書 「観応三年」年号から浮かび上がる尊氏の決意」、『歴史読
本』905、218-221 頁、2014.9

高橋典幸、「源平合戦観の克服」、歴史科学協議会編『歴史の「常識」をみなおす』(東京大学出版会)、70-73 頁、2015.3

(5) 会議主催(チェア他)

国内、第 112 回史学会大会実行委員、日本史部会(中世史部会) 司会、於東京大学、2014.11.8～2014.11.9

国内、第 113 回史学会大会実行委員、日本史部会(中世史部会) 司会、於東京大学、2015.11.14～2014.11.15

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東洋大学(文学部) 非常勤講師「日本史学演習、日本史史料研究」、2014.4～2016.3

慶應義塾大学(法学部) 非常勤講師「中世日本政治史 I・II」、2014.4～2015.3

伊東市史編さん委員会専門委員、2014.5～

伊東市教育委員会講演「鎌倉幕府と伊豆・伊東」、2015.11

(2) 学会

国内、日本歴史学会評議員、2014.4～

国内、古文書学会理事・評議員、2014.4～

国内、史学会編集委員、2014.6～

1 1 中国語中国文学

教授 藤井 省三 FUJII, Shozo

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部中国文学科卒業（文学士）
- 1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国文学専攻課程修了
- 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（中国文学）～1982年3月
- 1979年9月 復旦大学（中国文学系、中国政府国費留学生）～1980年8月
- 1982年4月 東京大学文学部助手
- 1985年4月 桜美林大学文学部助教授（中国文学）
- 1988年4月 東京大学文学部助教授（中国文学）
- 1991年9月 東京大学より博士（文学）学位を授与される
- 1994年7月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題 c 概要と自己評価

概要

- 概要(1) 魯迅・胡適から莫言・鄭義・高行健・韓寒・郭敬明に至る現代中国文学の研究。
- 概要(2) 夏目漱石・芥川龍之介から松本清張・村上春樹に至る日中両国文化人の交流、影響関係の研究。
- 概要(3) 香港・台湾・シンガポール・南洋における文学と地域主義との関わりに関する研究。
- 概要(4) 中国語圏映画の研究。

自己評価

- (1)(2)に関しては、2015年刊行の著書『魯迅と日本文学——漱石・鷗外から清張・春樹まで』（東京大学出版会、二〇一五年八月）にまとめ、新聞・雑誌において書評されたほか、同書収録の多くの論考が翻訳されて中国の学術誌に掲載された。また論文「莫言と村上春樹：あるいは天安門事件の『アンナ・カレーニナ』」、「莫言が描く中国の村の希望と絶望——「花束を抱く女」等の帰郷物語と魯迅および『アンナ・カレーニナ』」などで比較文学的考察を行った。
- (3)に関しては台湾の学術誌に論文「西川満の戦後創作活動と近代日本文学史上第二波台湾熱潮」を発表し、香港開催の国際学会で「日本文学中的香港景状：香港与這一百多年来的日本文化界」を基調講演した。そして香港および台湾の新進作家の短篇小説を文芸誌『すばる』に訳載した（韓麗珠『海を渡る』、楊富閔『聴こえない』）。
- (4)に関しては旧著『中国映画 百年を描く、百年を読む』が翻訳されて『隔空觀影』の訳題で中国で刊行されたほか、デュッセルドルフ大学開催の国際学会で魯迅映画化作品の日本における受容を論じ、現代中国映画界を代表する監督ジャ・ジャンクー（賈樟柯）に文芸誌上で対談した。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、藤井省三、『革命・啓蒙・抒情：中国近現代文学与文化研究学思録』、北京・三聯書店、2014.7
- 単著、藤井省三、『隔空觀影』、葉雨訳、北京・世界图书出版公司、2014年8月
- 共著、藤井省三、『中日文化文学比較研究 2014』、吉林出版集团有限责任公司、2014.8
- 共著、藤井省三、『教育・環境・文化から考える日本と中国』、はる書房、2014.12
- 『魯迅と日本文学——漱石・鷗外から清張・春樹まで』、東京大学出版会、2015.8

(2) 論文

- 藤井省三、「魯迅「傷逝」中の留白匠意——「傷逝」与森鷗外「舞姫」的比較研究」、『南京師範大学文学院学報』、第4期、1-10頁、2014
- 藤井省三、「台湾文学史概説」、『華文文学』、121期、72-84頁、2014
- 藤井省三、「莫言と村上春樹：あるいは天安門事件の『アンナ・カレーニナ』」、『現代文芸論研究室論集にくさ = Реникса』、第5号、137-151頁、2014.3

- 藤井省三、「莫言が描く中国の村の希望と絶望——「花束を抱く女」等の帰郷物語と魯迅および『アンナ・カレーニナ』、『文學界』、232-276 頁、2014.5
- 藤井省三、「松本清張的私小説と魯迅の「故郷」——從「父親的手指」到「埋伏」的展開、『華夏文化論壇』、243-254 頁、2014.6
- 藤井省三、「夏目漱石『坊っちゃん』から魯迅『阿Q正伝』への展開——牧卷次郎「満州問題」・「夜の支那人」事件と「幻灯事件」との照合および「清」と「呉媽」という女性像の系譜、『日本中国学会報』、66 集、267-282 頁、2014.10
- 藤井省三、「魯迅と莫言之間的帰郷故事系譜——以托爾斯泰《安娜・カレニ娜》為輔助線來比較(上)、『揚子江評論』、第 5 期、25-36 頁、2014.10
- 藤井省三、「魯迅與莫言之間的帰郷故事系譜——以托爾斯泰《安娜・カレニ娜》為輔助線、『新地文學』、30 期、96-147 頁、2014.12
- 藤井省三、「魯迅と莫言之間的帰郷故事系譜——以托爾斯泰《安娜・カレニ娜》為輔助線來比較(下)、『揚子江評論』、第 6 期、19-31 頁、2014.12
- 藤井省三、賀昌盛、「經由文學理解現代中國——藤井省三先生訪談」、『揚子江評論』、2015 年第 52 期、14-21 頁、2015.3
- 藤井省三、「莫言と魯迅之間的帰郷故事系譜——以托爾斯泰《安娜・カレニ娜》為輔助線來研究」、『小説評論』、2015 年 3 期、93-104 頁、2015.3
- 藤井省三、「西川滿的戰後創作活動和近代日本文學史上第二波台灣熱潮」、『中國文哲研究通訊』、第 25 卷第 3 期、141-165 頁、2015.9

(3) 書評

- 残雪、『最後の恋人』、『日本經濟新聞』、2014.3
- 大澤真幸、『〈世界史〉の哲学 東洋篇』、『北海道新聞』、2014.5
- 万城目学、『悟浄出立』、『週刊文春』、2014 年 9/4 号 111 頁、2014.9
- 横山悠太、『吾輩ハ猫ニナル』、『中央公論』、2014.10
- 閻連科、『偷樂』、河出書房新社、『日本經濟新聞』、2014.11
- 張承志、『中国と日本 批判の刃を己に』、『北海道新聞』、2015.11

(4) 学会発表

- 国際、藤井省三、「魯迅帰郷故事三篇与莫言「懷抱鮮花的女人」——以托爾斯泰《安娜・カレニ娜》為輔助線來比較」、中国現代作家手稿及文獻國際學術研討会、上海魯迅紀念館、2014.8.15
- 国際、藤井省三、「魯迅帰郷故事三篇與莫言「懷抱鮮花的女人」——以托爾斯泰《安娜・カレニ娜》為輔助線來比較」、日本學振會科研費國際共同研究計劃：東亞文學史台北學術工作坊、台湾大學台灣文學研究所、2014.9.27
- 国際、藤井省三、「莫言と魯迅之間的帰郷故事系譜——以托爾斯泰《安娜・カレニ娜》為輔助線」、講述中国与對話世界：莫言与中国当代文學國際學術研討会、北京師範大學國際寫作中心、2014.10.24
- 国際、藤井省三、「魯迅帰郷故事三篇与莫言「懷抱鮮花的女人」的比較研究——以托爾斯泰《安娜・カレニ娜》為輔助線」、第三屆・21 世紀世界華文文學高峰會議、南京大學、2014.11.2
- 国際、藤井省三、「夏目漱石『哥兒』与魯迅『阿Q正伝』之比較研究——以女僕阿清与吳媽的系譜為輔助線」、第 5 屆國際魯迅研究会蘇州論壇、蘇州大學、2014.11.21
- 国際、藤井省三、「莫言と村上春樹あるいは東アジア 1989 年の『アンナ・カレーニナ』、「村上春樹と中国」國際シンポジウム、上海杉達學院大學、2014.12.6
- 国際、藤井省三、「日本文学と魯迅との影響関係」、互為方法的中国和日本／相互・方法としての中国と日本 中国の日本研究者と日本の中国研究者による北京対話、北京大學、2015.3.15
- 国際、藤井省三、「日本文学中的香港景状：香港与這一百多年来的日本文化界」、International Conference on Interpreting the History of Hong Kong through Literature and Culture、The Hong Kong Institute of Education／Hong Kong Shue Yan University、2015.4.10
- 国際、藤井省三、「魯迅電影作品在日本的接受——以陳白塵改編、岑範導演的作品《阿Q正伝》(1981) 為中心」、The 6th Academic Forum, Dusseldorf Forum of International Society of Lu Xun Studies、デュッセルドルフ大學(ドイツ・デュッセルドルフ)、2015.7.1
- 国内、藤井省三、『『IQ84』の青豆雅美と魯迅の革命同志、秋瑾』、第 9 回東大中文村上春樹研究会、東大赤門棟 701 号室、2015.8.8
- 国際、藤井省三、「夏目漱石と魯迅——「夜の支那人」事件から「阿Q正伝」まで」、シンポ「現代東アジア文学史の國際共同研究」、北九州市立松本清張記念館(福岡県・北九州市)、2015.8.22
- 国際、藤井省三、「エロシエンコと魯迅」、第 102 回日本エスペラント大会、仙台市民會館、宮城県・仙台市、2015.10.12

(5) 予稿・会議録

国際会議、Fujii Shozo、「Murakami Haruki in East Asia No.2015、2016-1」、Transactions of the International Conference of East Asian Studies、教育会館、2015.5.15、2016.1
『国際東方学者会議紀要第六十冊』、LX、126-130 頁、2016.1

(6) 会議主催(チェア他)

国際、「第5回東京-首爾 中国現代文学研究對話會」、その他、第五場《歴史記録與文学創作》13. 被召喚的 80 年代：歴史記憶和文化想像初探、早稲田大学 11 号館会議室、2014.12.19～2014.12.20
国際、「第60回国際東方学者会議シンポジウム：東アジアにおける村上春樹」、主催、教育会館（東京都千代田区）、2015.5.15
国際、シンポ「現代東アジア文学史の国際共同研究」、主催、2015.8.22～2015.8.23
国際、「現代東アジア文学史の国際共同研究」、チェア、北九州市立松本清張記念館、2015.8.22～2015.8.23
国際、「第2回日台作家会議」、主催、台湾大学（台湾・台北）、2015.10.14～2015.10.15

(7) マスコミ

「中国文学」、『ブリタニカ・ジャパン年鑑2014』、315-316 頁、ブリタニカ・ジャパン、2014
「村上春樹『IQ84』と魯迅「阿Q正伝」」、『季刊文化』、鳥影社、2014
「東瀛之声～中国文学、日本文学、その魅力～」、NHK ラジオ国際放送局、2014.2.9
「海外文学 中国文学」、『文芸年鑑2014』、77-80 頁、新潮社、2014.6
「ひと ジャ・ジャンクー ジャ・ジャンクー（賈樟柯）氏インタビュー」、『すばる』、101-103 頁、集英社、2014.6
「中国現代文学研究的方向」、『中国現代文学』、第25期、199-216 頁、2014.6
「「春樹と阿Qたち」の寓意—浮かび上がる魯迅との興味深い関係」、『毎日新聞、夕刊文化面』、毎日新聞社、2014.7.31
「中国現代文学研究的方向」、『学術月刊』、第46号、161-170 頁、2014.8
「インタビュー 翻訳者から見た「故郷」」、『中学校 国語教育相談室』、75号、5-8 頁、光村図書、2014.9
「追悼山口淑子—満映の大スター・李香蘭とぬか漬け」、242-243 頁、『中央公論』、2014.11
「中国の村上春樹文学事情／版權争奪戦 訳文も変遷」、『読売新聞』、読売新聞社、2015.5.20
「モダン都市台北の記憶」、『週刊文春』、文藝春秋、2015.6.11
「解説 韓寒—現代中国「八〇後」文学の旗手」、『すばる』、集英社、2015.7.1
「言葉のアルバム 魯迅の心に阿Qが宿る」、『読売新聞』、読売新聞社、2015.8.21
「解説 香港アイデンティティの深層を描くミステリー」、『すばる』、集英社、2015.9.1
「今、魯迅を読むことの意味」、『公明新聞』、公明党、2015.10.4
「解説 台湾ポスト民主化世代による新ローカル・カラー文学」、『すばる』、集英社、2015.11.1
「大江健三郎と『魯迅と日本文学』」、『UP』、東京大学出版会、2015.11.1
「耳で読む物語る人の話を聴くこと—あとがき」、『莫言の思想と文学 世界と語る講演集』、東方書店、2015.11.20
「大移動時代の中国における韓寒『1988』」、『早稲田文学』、早稲田文学会、2015.12.1
「刻畫香港身份認同深處的懸疑小説」、『香港文学』第372号7頁、香港文学出版社（中国・香港）、2015.12.1
「莫言と松本清張—“アンチ探偵小説”『酒国』の謎」、『セカイブングクとセイチョウブングク 図録』、北九州市立松本清張記念館・編集・発行、2016.1.16

(8) 翻訳

個人訳、韓寒、「1988」、韓寒『1988～僕はこの世界と話したい』、『すばる』、2015年7月号、286-306 頁、集英社、2015.7
個人訳、韓麗珠、「渡海」、『海を渡る』、『すばる』、2015年9月号、290-308 頁、集英社、2015.9
個人訳、楊富閔、「聴不到」、『聴こえない』、『すばる』、2015年11月号、258-272 頁、集英社、2015.11
共訳、莫言、「用耳朵閱讀」、藤井省三、林敏潔、『莫言の思想と文学 世界と語る講演集』、全245 頁、東方書店、2015.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「上海を小説と映画で読もう：魯迅『故事新編』(1936)と郭敬明監督『小時代』(2013)」、2014.1
非常勤講師、早稲田大学法学部、「文学 I D：映画と小説で読む中国語圏の現代史」、2014.4～2014.9
セミナー、文化村ルシネマ（東京）、「ジャ・ジャンクー（賈樟柯）監督『罪の手ざわり』公開記念トークショー」、2014.5
セミナー、KBC シネマ（福岡市）、「ジャ・ジャンクー（賈樟柯）監督『罪の手ざわり』トークショー」、2014.6

- 特別講演、西南学院大学国際文化学部、「映画と小説から読む現代中国——ジャ・ジャンクー(賈樟柯)監督の“底層叙述”と中国の村上春樹チルドレン」、2014.6
- 特別講演、植民地文化学会、「講座「台湾をもっとよく知ろう」グルメとフェミニズムと台湾文学」、2014.7
- 特別講演、愛知大学孔子学院、「現代中国を映画と小説で読もう——賈樟柯(ジャ・ジャンクー)監督の“底層叙述”と村上春樹チルドレン」、2014.9
- 特別講演、東華大学国際交流学院(上海)、「魯迅と村上春樹」、2014.9
- 特別講演、南京大学日語系、「夏目漱石『坊つちやん』と魯迅『阿Q正伝』との比較研究——“清→呉媽”という“下女”の系譜を補助線として」、2014.10
- 特別講演、南京師範大学文學院・外国語學院、「夏目漱石『哥兒』と魯迅『阿Q正伝』之比較研究——以女僕阿清与呉媽的系譜爲補助線」、2014.10
- 特別講演、南京外国語学校、「村上春樹と魯迅以及中国」、2014.11
- セミナー、かわさき市民アカデミー文学講座(川崎市)、「松本清張再発見——中国における清張」、2014.12
- 特別講演、かわさき市民フロンティア、「文学講座 魯迅と夏目漱石 『坊つちやん』から『阿Q正伝』への展開」、2015.3
- 特別講演、南京農業大学、「魯迅先生と日本文学」、2015.3~2015.3
- 非常勤講師、早稲田大学法学部、「文学ID(春) 魯迅と日本文学——夏目漱石、芥川龍之介から太宰治、村上春樹まで」、2015.4~2015.9
- 特別講演、南京大学文學院、「魯迅と莫言——帰郷故事系譜以及托尔斯泰《安娜・カ列尼娜》——或者“老外”所企図的現代文学史」、2015.6
- 特別講演、華中師範大学日語系、「魯迅と日本文学——從夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介到太宰治、松本清張、村上春樹」、2015.12
- 特別講演、東京大学校友会、東京大学出版会、「東アジアを生きる文学：藤井省三：漱石と魯迅 林敏潔：魯迅と蕭紅 中島京子：魯迅と董啓章 [鼎談]」、2016.2
- 特別講演、かわさき市民フロンティア文学講座、「村上春樹の中の魯迅」、2016.3
- 委嘱教授、中国人民大学文學院、「中国人的村上春樹閱讀史」、2016.3~
- 委嘱教授、中国人民大学文學院、「魯迅と夏目漱石」、2016.3~
- 委嘱教授、中国人民大学、「海外名師」、2016.3~
- (2) 行政
内閣、日本學術會議、立案、連携會員、2014.10~

教授 **木村 英樹** KIMURA, Hideki

1. 略歴

- 1976年3月 大阪外国語大学外国語学部中国語学科卒業(文学士)
- 1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(中国語学)
- 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学(中国語学)
- 1978年9月 中華人民共和国北京語言學院留学
- 1979年9月 中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学
- 1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士単位取得退学
- 1982年4月 金沢大学文学部助教授
- 1986年10月 神戸大学教養部助教授
- 1992年10月 神戸大学国際文化学部助教授
- 1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授
- 1999年4月 東京大学文学部大学院人文社会系研究科教授
- 2012年11月 博士(文学) (東京大学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、主として現代中国語の意味論と文法論

b 研究課題

自然言語の普遍性と多様性のパラダイムを背景に、中国語の意味的現象と、その反映としてある文法的現象を考察し、中国語の意味と構造のメカニズムの解明に取り組む。

c 概要と自己評価

2014～2015年度の2年間は、以下の4点を主たるテーマとして、研究活動を行った。

- (1) 中国語構文論の研究
- (2) 中国語の「視点(perspective)」に関する認知的および表現論的研究
- (3) 指示(referense)に関する研究

(1)に関しては下記の白山中国学会における基調講演および二松學舎大学での特別講演において、また、(2)と(3)に関しては下記論文において、それぞれ成果の一部を公表し、従来の当該領域における研究に新たな知見と成果をもたらし、中国語意味論および文法論の発展に貢献を為し得た。

d 主要業績

(1) 論文

木村英樹、「こと・ところ・ことば——現実をことばにする「視点」」、『人文知 1——心と言葉の迷宮』、97-118頁、2014.7

木村英樹、「“指称”の機能——概念、実体および有標化の観点から」、『中国語学』、261、64-83頁、2014.10

木村英樹、「中国語疑問詞の指示特性」、『日中言語研究と日本語教育』、Vol.8、12-23頁、2015.10

(2) 学会発表

国内、木村英樹、「こと・ところ・ことば2014.6.14」、第5回東京大学文学部公開講座、2014.6.14

国内、木村英樹、「「概念」と「実体」の文法的対立」、白山中国学会、東洋大学白山キャンパス、2015.3.21

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東北大学大学院文学研究科、「現代中国語の意味とかたち」、2014.10

特別講演、大阪広告協会、「ことばと「視点」」、2016.2

特別講演、二松學舎大学、「感情と感覚の構文論」、2016.2

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya

1. 略歴

- 1985年3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
- 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学
- 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了
- 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学
- 1988年9月 中華人民共和国北京大学中国語言語文学系留学（至1990年2月）
- 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学
- 1990年4月 神奈川大学外国語学部専任講師
- 1993年4月 神奈川大学外国語学部助教授（至1995年3月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 1998年3月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（至1998年12月）
- 2013年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、中国古文字学

b 研究課題

(1) 上古中国語の文法研究

構文と文法範疇の相関的変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。

(2) 戦国秦漢出土文字資料の研究

戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

c 概要と自己評価

研究課題(1)に関しては、上古の中国人が認識した世界をどのように言語化したのか、コーパスと残された文献の背後にはどのような世界が広がっているのかという新たな問題意識から研究を進めている。研究課題(2)に関しては、統一前後の出土資料における漢字の使用実態の解明を進めているが、近年は秦系や楚系の文献に見られる他国の文字影響に着目し、一筋縄ではいかぬ文字の歴史の複雑性に焦点を当てている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、大西克也、大榎敦弘、『馬王堆出土文献訳注叢書 戦国縦横家書』、東方書店、2015.12

(2) 論文

大西克也、「關於「漢字」一詞産生過程の一點想法」、『第二十五屆中國文字學國際學術研討會論文集』、601-606 頁、2014.5

大西克也、「上古漢語“奪取”類双及物結構研究」、『語言学論叢』、49、41-65 頁、2014.6

大西克也、「嶽麓書院秦簡をめぐって—赤外線スキャンと『占夢書』」、『書法書学研究』、15、13-19 頁、2014.7

大西克也、「従出土資料再論章系字類化的年代」、『古文字研究』、30、557-562 頁、2014.9

大西克也、「中国語における指示性範疇化の胎動」、『中国語学』、261、5-25 頁、2014.10

大西克也、「第二十四回大会特別講演 文字統一と秦漢の史書」、『書学書道史研究』、24、93-103 頁、2014.10

大西克也、「試論上古漢語光杆名詞主語句及其指稱特點」、『承繼與拓新 漢語語言文字學研究』、下、2014.12

大西克也、「清華簡『繫年』の地域性に関する試論——文字学の視点から——」、『資料学の方法を探る』、14、2015.3

(3) 学会発表

国際、大西克也、「「雅言」獻疑」、第十屆通俗文學與雅正文學 語言與文字 國際學術研討會、台中、國立中興大學、2014.10.25

国際、大西克也、「清華簡《繫年》為楚簡說—從其用字特點探討—」、「源遠流長”漢字國際學術研討會 暨 AEARU 第三屆漢字文化研討會、北京大学、2015.4.11

国際、大西克也、「試論秦簡〈官箴〉的語言文字特點」、出土文獻與先秦經史國際學術研討會、香港大學百周年校園、2015.10.17

国際、大西克也、「中国語学における木簡研究成果——戦国秦漢時代の上古中国語文法研究を中心に」、韓日木簡ワークショップ、ソウル大学校新陽人文情報館、2016.3.12

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、大西克也、研究代表者、「概念表現と実体表現から見た中国語文法史の展開—構文と文法範疇の相関的変遷の解明」、2014～

文部科学省科学研究費補助金、大西克也、分担者(代表者は東大外)、「Multi Disciplinary Approach による戦国秦漢期新出土資料研究」、2014～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、大東文化大学、「戦国秦漢漢字研究の現在」、2014.1

特別講演、福井県教育委員会、「中国古代文字の変遷——甲骨文字から文字統一前後まで——」、2014.7

特別講演、貞香会、「楚簡・秦簡より見た戦国時代の漢字について」、2015.7

(2) 学会

国内、中国出土資料学会、庶務委員長、2014.3～

国内、日本中国語学会、副会長、2014.4～2016.3

1. 略歴

1986年3月	京都大学文学部文学科中国語学中国文学専攻卒業
1986年4月	京都大学文学部聴講生
1988年4月	京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻入学
1990年3月	同上 修了(文学修士)
1990年4月	京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻進学
1991年3月	同上 退学
1991年4月	京都大学人文科学研究所助手
1997年4月	奈良女子大学文学部講師
1999年4月	同上 助教授
2000年4月	国文学研究資料館文献資料部助教授
2000年4月	奈良女子大学文学部併任助教授
2001年10月	東京大学大学院総合文化研究科併任助教授
2002年10月	東京大学大学院総合文化研究科助教授
2002年10月	国文学研究資料館文献資料部併任助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科准教授
2012年4月	同上 教授
2015年5月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古典文学

b 研究課題

- (1) 中国古典詩文、とりわけ六朝から唐宋にかけての詩賦および文学論
- (2) 古代から近代にいたる漢字圏の生成と展開、またその言語・文字・文学・出版

c 概要と自己評価

- (1)については、『文選』および『文心雕龍』を中心に研究を進め、その一端を東京大学文学部第39文化交流茶話会(2015.10.15)「言は意を尽くさず——ことばの向こう側について」と題して発表した。
- (2)については、単著『漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か』(新潮社)等の出版活動、科学研究補助金(A)「東アジア古典学の次世代拠点形成」等の共同研究活動を積極的に行っている。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、齋藤希史、『漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か』、新潮社、2014.5
単著、齋藤希史、『漢文脈と近代日本』(角川ソフィア文庫)、角川学芸出版、2014.5
共著、齋藤希史、『述語制言語の日本文化』(LIBRARY IICHIKO 127)、文化科学高等研究院出版局、2015.7
共著、齋藤希史、『ポストモダンを超えて 21世紀の芸術と社会を考える』、平凡社、2016.3

(2) 論文

齋藤希史、음영의 공간 : 시와 노래(吟詠の空間:詩とうた)、『漢字漢文研究』(高麗大学校漢字漢文研究所)、10、215-250頁、2015.8

(3) 学会発表

- 国際、齋藤希史、The Space of 'Cultivated Speech': Writing and Language in the Sinographic Sphere、The Conference 'Sinographic Cosmopolis'、プリティッシュコロンビア大学、2014.7.4
国内、齋藤希史、「才子の恋愛」、北村透谷研究会、アルカディア市ヶ谷、2015.6.6

(4) 解説

- 解説、前野直彬『漢文入門』(ちくま学芸文庫)、筑摩書房、2015.12
解説、前野直彬『新装版 風月無尽 中国の古典と自然』(UPコレクション)、東京大学出版会、2015.12

(5) マスコミ

「翻訳語事情」、『読売新聞』、2014.4.7 (「領土」、6.2 (「写真」、8.4 (「海水浴」、10.6 (「活字」、12.8 (「成果」、2015.2.2 (「風刺」、4.6 (「世界」、6.1 (「公園」、8.10 (「知性」、10.5 (「気象」、12.7 (「複製」、2.1 (「経済」)
「漢文ノート(26) 双剣」、『UP』(東京大学出版会)、44(4)、71-75 頁、2015.4
「漢文ノート(27) 斗酒なお辞せず」、『UP』(東京大学出版会)、44(7)、52-57 頁、2015.
「漢文ノート(28) 満目黄雲」、『UP』(東京大学出版会)、44(10)、46-51 頁、2015.10
「漢文ノート(29) 詩のかたち」、『UP』(東京大学出版会)、45(1)、24-30 頁、2016.1

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(A))、齋藤希史、研究代表者、東アジア古典学の実践的深化—国際連携による研究と教育、2012-2014
文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(A))、齋藤希史、研究代表者、東アジア古典学の次世代拠点形成—国際連携による研究と教育の加速、2015-2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学政治経済学部
授業担当教員、ベトナム国家大学人文社会大学大学院
セミナー、Workshop “The Sinographic Sphere: Its History and Dynamic” プリンストン大学、2014.5.19-21
セミナー、Kanbun Workshop、ブリティッシュコロンビア大学、2014.7.7-11
特別講義、漢字世界としての東アジア、高麗大学校、2015.3.10-11
特別講義、近代東アジアにおける漢文体—権威と通用、成均館大学校、2015.3.12
集中講義、東アジア古典学を理解、誠信女子大学校、2015.3.9-13
集中講義、漢文入門特講、ストラスブール大学、2016.3.30-4.1

(2) 学会

中国社会文化学会理事、東方学会学術委員、六朝学術学会理事、近世京都学会幹事、日本近代文学館運営審議委員、日本中国学会評議員

12 東洋史学

教授 水島 司 MIZUSHIMA, Tsukasa

1. 略歴

- 1976年 3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
- 1976年 4月 東京大学大学院人文科学系研究科修士課程入学
- 1979年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
- 1988年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
- 1992年 12月 東京大学文学部より博士号（文学）取得
- 1995年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
- 1997年 10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

南アジア近現代史

b 研究課題

1. 歴史研究への地理情報システムの応用
2. 在地社会論、ミーラース体制からの18世紀南インド経済史分析
3. 歴史統計分析による18-20世紀の長期変動の分析
4. グローバル・ヒストリーと南アジア

c 概要と自己評価

学内での教育・研究活動に加え、基盤研究S「インド農村の長期変動」の研究代表、人間文化研究機構「現代インド地域研究」東京大学拠点代表を務め、また、科研（基盤研究A）「グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考」の分担者となるなど、学外研究者との共同研究の組織化に尽力している。また、NHKの高校生向け世界史講座を担当し、一般向けの社会教育も行った。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、水島司、『現代インド 2 溶融する都市・農村』、東京大学出版会、2015.2
- 編著、水島司、『アジア経済史研究入門』、名古屋大学出版会、2015.10
- 編著、水島司、『Hinterlands and Commodities: Place, Space, Time and the Political Economic Development of Asia over the Long Eighteenth Century』、Brill、2015.12

(2) 論文

- 水島司、「溶融する都市・農村への視角」、『現代インド2 溶融する都市・農村』（水島司・柳澤悠編）、3-21頁、2015.2
- 水島司、「人口・耕地・農業の長期変動—不安定性の拡大から「緑の革命」へ」、『現代インド2 溶融する都市・農村』（水島司・柳澤悠編）、25-48頁、2015.2
- 水島司、「序章 アジア経済史とグローバル・ヒストリー」、『アジア経済史研究入門』水島司他編、2015.10
- 水島司、「南アジア 第8章 近現代I：18世紀～第一次世界大戦」、『アジア経済史研究入門』水島司他編、2015.10
- Tsukasa Mizushima、「Linking Hinterlands with Colonial Port Towns: Madras and Pondicherry in Early Modern India」、『Place, Space, and Time: Asian Hinterlands and Political Economic Development in the Long Eighteenth Century, Tsukasa Mizushima, George Bryan Souza, and Dennis O. Flynn (eds.)』、2015.12

(3) 学会発表

- 国際、水島司、「Constructing Pan-Asian Historical-GIS Infrastructure and Collaboration for Making Global History from Asian Perspectives」、訪問講演、Fudan University, China、2015.3.11
- 国際、水島司、「GIS-based Historical Studies and the Current Stage of its Development in Asia」、訪問講演、Sun Yat-sen University, China、2015.3.13
- 国際、水島司、「The Current Stage of GIS-based Historical Studies and Possible Collaboration among Asian Scholars」、訪問講演、Institute of History, Hanoi, Vietnam、2015.5.6

- 国際、水島司、「A New Interpretation of Indian Population Movement in Pre- and Early Census Periods」, Department of Development Science, Institute of Vietnamese Studies and Development Sciences (IVIDES), 訪問講演、The National University of Vietnam, Vietnam、2015.5.9
- 国際、水島司、「A GIS Analysis of Village Land Registers in South India between 1870s and 1920s」、The 3rd Conference of Asian Association of World Historians、Nanyang Technological University, Singapore、2015.5.30
- 国際、水島司、「A GIS-based Study on the Emergence of Small and Medium Scale Towns in Pre-Independent South India」、The 3rd Conference of Asian Association of World Historians、Nanyang Technological University, Singapore、2015.5.30
- 国内、水島司、「A GIS-based Study on the Emergence of Small and Medium Scale Towns in Pre-Independent South India」、The 3rd International Conference of the GIS-based Global History from Asian Perspectives、2015.6.5
- 国内、水島司、「アジアにおける空間情報インフラの状況と歴史研究の可能性」、グローバル展開研究会、東京大学、2015.6.12
- 国際、水島司、「A GIS Approaches to Land Development and Social Change in India」、World Economic History Conference、Kyoto、2015.8.4
- 国際、水島司、「Shares, Shares, and Shares: Life and Production in Pre-colonial India」、Shares, Shares, and Shares、International Institute of Social History, Amsterdam, Holland、2015.9.1
- 国際、水島司、「From Shares to Land: Colonial Transformation of Rural India」、From Shares to Land、International Institute of Social History, Amsterdam、2015.9.1
- 国際、水島司、「Big Data, Big Question: Assessing Colonial Impacts upon Indi」、Big Data, Big Question、International Institute of Social History, Amsterdam, Holland、2015.9.5
- 国際、水島司、「Global History and Euro-Asian Development Paths」、訪問講演、European University Viadrina Frankfurt (Oder)、2015.9.10
- 国際、水島司、「Hinterlands and Commodities in Early Modern India」、訪問講演、European University Viadrina Frankfurt (Oder)、2015.9.10
- 国内、水島司、「グローバル・ヒストリーと南アジア」、宮城県高等学校社会科（地理歴史科・公民科）教育研究会歴史部会例会、仙台工業高等学校、2015.9.25
- 国内、水島司、「歴史空間学の可能性」、第113回史学会大会公開シンポジウム、2015.11.14
- 国際、水島司、「Who takes Leadership and What Role does ANGIS play in Emerging Global History?」、International Meeting of the Asian Network for GIS-based Historical Studies、Academia Sinica, Taipei, Taiwan、2015.12.15
- 国内、水島司、「歴史地理情報システムとアジア研究」、シンポジウム 東洋学・アジア研究の新たな振興をめざして PARTIII、東京大学、2015.12.19
- 国際、水島司、「GIS-based Analysis of Demographic and Social Change in South India during the Colonial Period」, Inaugural Symposium celebrating the Collaboration of Indio-Japan Historical Studies」、ICHR-JSPS Joint Symposium on Economic History、India Cultural Centre, Delhi, India、2016.1.6
- 国際、水島司、「Agricultural Development and Social Transformation in the Long Nineteenth Century - An Analysis of Settlement Registers from South India-」、The 8th Indo-Japanese Workshop: Reconsideration of the 19th century from Asian Perspectives、the Centre for Historical Studies, Jawaharlal Nehru University, India、2016.1.7

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、水島司、研究代表者、「インド都市史の研究」、2015～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

NHK 高校講座世界史で、古代インド、中世インド、現代インド、および東南アジアを対象とした番組を担当

(2) 学会

日本南アジア学会・理事

社会経済史学会

東方学会

史学会・評議員

アジア歴史地理情報学会 (ANGIS) 事務局長

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議連携委員

1. 略歴

- 1991年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）修士課程修了
1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）博士課程中退
1995年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1999年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター助手
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教
〔2000年5月に、東京大学より博士（文学）の学位を取得〕
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

主な研究課題は、近代中国における政治体制の模索、都市政治、経済建設、ナショナリズム、日中関係史。最近では、近代中国における歴史学の形成と日本の「東洋史学」の交流の考察にも関心がある。

c 概要と自己評価

中国近代における政治体制、中国沿海部と内陸部の経済的関係、知識人の国際関係認識など、複数の研究課題を並行して進めている。それらの成果の一部は論文にまとめて発表することができたが、それぞれのテーマに即した著作としてまとめていく作業も進行中である。また、科学研究費基盤(C)「20世紀初頭の中国における帝制と共和制の論理」にも取り組んでいる。

d 主要業績

(1) 論文

- 吉澤誠一郎、「清末中国における男性性の構築と日本」、『中国—社会と文化』、29号、42-65頁、2014.7
吉澤誠一郎、「二十一か条要求と日中関係の転換—100年目の回顧」、『歴史地理教育』、834号、62-67頁、2015.5
吉澤誠一郎、「明清以来“西北”概念的変遷」、『華東師範大学学报』、2015年4期、19-24頁、2015.
Seiichiro Yoshizawa, “Chinese Nationalism and the Concept of Empire in the Twentieth Century,” Kazuhiko Kondo ed., *History in British History*, Tokyo, pp. 249-268, 2015.
吉澤誠一郎、「軍隊の動向からみた辛亥革命」、『早稲田大学高等研究所紀要』8号、148-152頁、2016.3
吉澤誠一郎、「中華民国顧問グッドナウによる国制の模索」、斯波義信編『モリソンパンフレットの世界 II』東洋文庫、105-129頁、2016.3
吉澤誠一郎、「近代天津の貿易とその後背地—羊毛輸出を中心に」、井上徹・仁木宏・松浦恆雄『東アジアの都市構造と集団性—伝統都市から近代都市へ』、清文堂出版、187-212頁、2016.3

(2) 学界展望

- 吉澤誠一郎、「2013年の歴史学界—回顧と展望— 歴史理論」、『史学雑誌』123編5号、6-10頁、2014.7

(3) 書評

- 水羽信男、『中国の愛国と民主—章乃器とその時代』、『歴史学研究』、919号、44-48頁、2014.6
林志宏著、『民国乃敵国也—政治文化転型下の清遺民』、『東洋学報』、96巻2号、65-72頁、2014.9
藤谷浩悦著、『湖南省近代政治史研究』、『中国研究月報』、68巻9号、23-28頁、2014.9
山室信一ほか編、『現代の起点 第一次世界大戦』、『歴史学研究』、931号、29-34頁、2015.5

(4) 学会発表

- 国際、吉澤誠一郎、「近代日本の都市指南與中國印象：以北京、天津為例」、「全球視野下的中國近代史研究」國際學術研討會、中央研究院近代史研究所、2014.8.12
国際、吉澤誠一郎、「明清以来“西北”概念的変遷」、明清以来華北区域市場的演变學術研討會、天津社会科学院、2014.9.13
国際、Yoshizawa Seiichiro, “Political Ideals of New Youth: Chen Duxiu and Republicanism,” The Association for Asian Studies, the Sencond AAS-in-Asia Conference, Academia Sinica, Taipei,, 2015.6.22
国際、吉澤誠一郎、「軍隊の動向からみた辛亥革命」、國際シンポジウム「革命と軍隊—明治維新・辛亥革命・フランス革命の比較からみえてくるもの—」、早稲田大学、2015.7.19

国際、Yoshizawa Seichiro, "The Changing Concept of the "Northwest Region" in Late Imperial and Modern China," XVIIth World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center, 2015.8.6
国内、吉澤誠一郎「中華民国袁世凱政権による国家儀礼の模索」、東洋史研究会大会、京都大学、2015.11.3

3. 主な社会活動

(1) 学会等の委員

国内、中国社会文化学会、理事

国内、東方学会、学術委員

国内、東洋史研究会、評議員

国内、史学研究会、評議員

国内、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、共同研究専門委員・編集専門委員

(2) 非常勤など

放送大学客員准教授、2014.4～2016.3

准教授 **佐川 英治** SAGAWA, Eiji

1. 略歴

1990年3月 岡山大学文学部史学科卒業

1990年4月 大阪市立大学文学研究科修士課程東洋史学専攻入学

1992年3月 同上 修了。文学修士の学位を取得

1992年4月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻入学

1994年9月 武漢大学（中国）にて歴史系高級進修生として在外研究（～1996年7月）

2001年3月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻修了。大阪市立大学文学研究科より博士（文学）の学位を取得

2001年10月 岡山大学文学部助教授

2006年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授

2007年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授

2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代史

b 研究課題

皇帝権力の形成と展開、4～5世紀の遊牧民族の南下と社会変容、都城史、石刻史料を用いた社会史

c 概要と自己評価

2015年10月から2016年1月まで韓国ソウル大学校歴史研究所で客員研究員として滞在し、韓国の中国古代史研究や韓国古代の都城について研究をおこなった。またこの10年間の都城に関する研究成果を平成27年度学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の助成を受けて『中国古代都城の設計と思想』（勉誠社、2016年）として刊行した。

d 主要業績

(1) 著書

単著、佐川英治、『中国古代都城の設計と思想』、2016.2

共著、大阪市立大学大学院文学研究科東洋史学専攻研究室編、『中国都市論への挑動』、2016.3

(2) 論文

佐川英治著、郭雪尼訳、「宗廟と禁苑—中国古代都城の神聖空間—」、陳金華・孫英剛編『神聖空間：中古宗教中的空間因素』、上海：復旦大学出版社、106-133頁、2014.12

佐川英治、「六朝建康城と日本藤原京」、『南京曉荘学院学報』、2015年第4期、22-29頁、2015.7

佐川英治、「北魏六鎮史研究」、『中国中古史研究』、第5巻、55-128頁、2015.12

(3) 書評

余欣主編、『中古時代的礼儀、宗教与制度』、『中国—社会と文化—』、2014.7

(4) 解説

佐川英治、「世界史Q&A:中国古代の「漢民族」について教えてください」、『歴史と地理』、第686号、2015頁、2015.8

(5) 学会発表

国際、佐川英治、「唐田令の歴史的考察—均田制と屯田制の関係を中心として—」、第59回国際東方学会議シンポジウム（日本学セミナー）「律令制的人民支配の比較研究」、日本教育会館、2014.5.24

国際、佐川英治、「從西郊到園丘—『文館詞林』北魏孝文帝祭園丘大赦詔所見孝文帝的祭天礼儀」、「Redrawing the Zeitgeist of Medieval China: From the Perspectives of Knowledge, Beliefs and Society and Their Interactions” An International Symposium、復旦大学、2014.9.14

国際、佐川英治、「北魏末の北辺社会と六鎮の乱—楊鈞墓誌と韓買墓誌—」、国際学術シンポジウム「石刻史料から見た魏晋南北朝史—北朝史を中心に—」、東洋文庫、2014.9.15

国際、佐川英治、「中国中古の都城設計と天の祭祀」、(韓国)中国古中世学会国際学術シンポジウム「中国古代都城之結構和其歴史空間」、ソウル大学、2014.9.19

国際、佐川英治、「後漢～北魏における洛陽の人口集中と都市空間」、国際研究集会「魏晋南北朝の主要都城と都城圏社会」、阪南大学、2014.12.6

国際、佐川英治、「六朝建康城与日本藤原京」、「六朝建康城 東方大都会」国際高層論壇、六朝博物館、南京、2015.5.23

国際、佐川英治、「北魏の六鎮と草原社会の羈縻支配」、Military Control on Multi-ethnic Society in Early China、ソウル大学、ソウル、2015.9.10

国際、佐川英治、「六朝建康城と日本藤原京」、東アジア古代都市のネットワークを探る——日・越・中の考古学最前線——、東京大学、2015.9.27

国際、佐川英治、「北朝出土墓誌と六鎮の乱研究」、中国古中世史学会、東国大学、ソウル、2015.12.26

国際、佐川英治、「中国古代の都城プランと天の祭祀/古代東アジアの都城の理念」、韓国木簡学会、成均館大学、ソウル、2016.1.15

(6) 監修

佐川英治、『NHK 高校講座世界史』、2015.5（中国古代に関する3つの番組を担当）

(7) 会議主催(チェア他)

国際、「歴史のなかの都城の作用」、主催、東京大学、2015.9.15

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、西南民族大学、「中日比較文化研究」、2014.12

特別講演、ソウル大学東洋史学科、ソウル、「古代東アジアの都城の理念」、2015.11

特別講演、ソウル大学国史学科、ソウル、「古代東アジアの都城の理念」、2016.1

(2) 学会

国内、史学会、理事、2014.6～

准教授 **島田 竜登** SHIMADA, Ryuto

1. 略歴

1996年3月 早稲田大学政治経済学部経済学科卒業
1998年3月 早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻修士課程修了
2001年11月 ライデン大学アジア・アフリカ・アメリンディア研究センター上級修士課程修了
2005年12月 ライデン大学より博士学位 (Doctor) 取得
2006年3月 早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻博士後期課程退学
2006年4月 西南学院大学経済学部講師
2007年4月 西南学院大学経済学部准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東南アジア史、海域アジア史、アジア経済史

b 研究課題

近世・近代のアジア域内貿易 オランダ東インド会社史 GIS を利用したアジア史研究 グローバル・ヒストリーと歴史叙述

c 概要と自己評価

2012年4月に着任して4年が経過した。この間のうちの後半2年間において、研究成果として発表したものは下記の論文8件などである。また、国内外の学術雑誌等の査読を行っている。一方、東南アジア史関係の図書の整備にも力を注いだ。先の2年間同様、2年間で600冊を超える関係図書を入手し、文学部図書室に配架するなどした。さらに、学外者を招き、東南アジア史セミナーと称する公開研究会を開催してきた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編、『アジア経済史研究入門』、名古屋大学出版会、2015.11

(2) 論文

島田竜登、「グローバル時代の歴史学—グローバル・ヒストリーと未来をみつめる歴史研究—」、比較文明学会30周年記念出版編集委員会『文明の未来—いま、あらためて比較文明学の視点から—』東海大学出版部、148-162頁、2014.5

島田竜登、「「長崎」再考—海域アジアと近世日本—」、熊野純彦・佐藤健二編『人文知3 境界と交流』東京大学出版会、109-125頁、2014.9

島田竜登、「梅棹忠夫『文明の生態史観』とグローバル・ヒストリー —歴史叙述の新たなパラダイムを求めて—」、『比較文明』、30、99-113頁、2014.10

島田竜登、「17・18世紀におけるアユッタヤー朝のアジア域内貿易とオランダ東インド会社—『スレイマーンの船』との関連で—」、『史朋』、47、1-16頁、2014.12

Ryuto Shimada, "Hinterlands and Port Cities in Southeast Asia's Economic Development in the Eighteenth Century: The Case of Tin Production and its Export Trade," in: Tsukasa Mizushima, George Bryan Souza and Dennis O. Flynn (eds.) *Hinterlands and Commodities: Place, Space, Time and the Political Economic Development of Asia over the Long Eighteenth Century*, Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, pp. 197-214, 2015.1

Ryuto Shimada, "Import Trade in Precious Metals and the Economy of Japan, 1763-c.1850," in: Jane Kate Leonard and Ulrich Theobald (eds.) *Money in Asia (1200-1900): Small Currencies in Social and Political Contexts*, Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, pp. 443-463, 2015.1

島田竜登、「東南アジア 前近代—19世紀半ばまで—」、水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編『アジア経済史研究入門』名古屋大学出版会、150-162頁、2015.11

島田竜登、「近世バタヴィアのモール人」、守川知子編『移動と交流の近世アジア史』北海道大学出版会、249-274頁、2016.3

(3) 書評

島田竜登、ジェームス・C・スコット著(佐藤仁監訳)『ゾミア—脱国家の世界史—』みすず書房、『比較文明』31、94-98頁、2015.11

(4) 解説

島田竜登、「銀と銅」、『南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える—』ミネルヴァ書房』、53頁、2016.2

島田竜登、「東インド会社」、『南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える—』ミネルヴァ書房』、80頁、2016.2

(5) 学会発表

国内、島田竜登、「長崎出島のアジア人『奴隷』とイスラーム」、第52回比較文明学会九州支部研究会、西南学院大学、2014.7.26

国内、島田竜登、「近世バタヴィアのモール人について」、第269回北海道大学東洋史談話会シンポジウム「人の移動・移住とその記録—陸と海の近世アジア—」、北海道大学、2014.9.21

国内、島田竜登、「長崎出島のアジア人『奴隷』とイスラーム」、比較文明学会第32回大会シンポジウム「文明交流と日本文明」、西南学院大学、2014.10.11

国際、Ryuto Shimada, "Maritime Asia Integrated into the World: A Case Studies of the Japanese Copper Trade by the Dutch East India Company," Workshop: East Asia and Global History, Princeton University, Princeton, USA, 2014.10.22

国内、島田竜登、「近世バタヴィアとアジア船—アジア域内貿易の一側面—」、2014年度東洋史研究会大会、京都大学、2014.11.3

- 国際、Ryuto Shimada, “Bangka’s Tin Production and its Export Trade in the Eighteenth Century from an Asian Perspective,”
Workshop: Urban Development and Social Integration: Long Term Perspectives, University of Indonesia, Depok, Indonesia,
2014.11.24
- 国際、Ryuto Shimada, “Expansion of the Dutch Colonial City: Spatial Analysis of Ethnicity and Land-use of Batavia, 1619-1930,”
Joint conference of ANGIS and CRMA, Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, Silpakom University, Bangkok,
Thailand, 2015.1.6
- 国際、Ryuto Shimada, “A Spatial Analysis of Ethnicity and Land-use of Batavia, 1619-1930,” The Third Congress of the Asian
Association of World Historians (AAWH), Nanyang Technological University, Singapore, 2015.5.30
- 国際、Ryuto Shimada, “A Spatial Analysis of Ethnicity and Land-use of Batavia, 1619-1930,” The Third Conference: GIS-based
Global History from Asian Perspectives,” The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2015.6.5
- 国際、Ryuto Shimada, “Gambling Den, Porcelain Token and Chinese Society in Thailand during the Nineteenth Century,” AAS in
Asia Conference, Academia Sinica, Taipei, Taiwan, 2015.6.24
- 国際、Ryuto Shimada, “Iranian Settlers in Ayutthaya and their Intra-Asian Trade in the Seventeenth Century,” Workshop on
Maritime Worlds around the China Seas: Emporioms, Connections and Dynamics, Academia Sinica, Taipei, Taiwan, 2015.7.1
- 国際、Ryuto Shimada, “The Birth of Pacific Links in Southeast Asia: American Shipping at Batavia from the Late Eighteenth
Century to the Mid-nineteenth Century,” XVIITH World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center,
Kyoto, Japan, 2015.8.4
- 国際、Ryuto Shimada, “Batavia in a Global Context, 1619-1799: Spatial Analysis of Trading Network, Ethnicity and Land-use of
Batavia,” XVIITH World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center, Kyoto, Japan, 2015.8.4
- 国際、Ryuto Shimada, “Alexander Hamilton in the Intra-Asian Trade around 1700,” XVIITH World Economic History Congress,
Kyoto International Conference Center, Kyoto, Japan, 2015.8.6
- 国際、Ryuto Shimada, “South Asian Settlers at Batavia in the Seventeenth and Eighteenth Centuries,” XVIITH World Economic
History Congress, Kyoto International Conference Center, 2015.8.6
- 国際、Ryuto Shimada, “Describing the Early Modern World: Temporal and Spatial Analytical Problems and Solutions in Using the
Dutch East India Company Records,” Workshop: Scale Questions in Global History, École des Hautes Études en Sciences
Sociales, Paris, France, 2015.11.5
- 国際、Ryuto Shimada, “A GIS-based Analysis of the Markets for Japanese Copper in the Seventeenth and Eighteenth Centuries,”
4th ANGIS Taipei Meeting 2015, Academia Sinica, Taipei, Taiwan, 2015.12.6
- 国際、Ryuto Shimada, “Flow of Copper from Japan to India during the Early Modern Period,” Inaugural Symposium celebrating
the Collaboration of Indo-Japan Historical Studies, India International Centre, New Delhi, India, 2016.1.6
- 国際、Ryuto Shimada, “Shipping of Java in the Dutch East Indies during the Nineteenth Century: Global and Local Perspectives,”
The 8th Indo-Japanese Workshop: Reconsideration of the 19th Century from Asian Perspectives, Jawaharlal Nehru University,
New Delhi, India, 2016.1.8

(6) 研究テーマ

- 科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、若手研究(B)「萌芽期熱帯産品輸出経済の研究：18世紀の南・東南アジアとオランダ東インド会社」、2012年度～2014年度
- 科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、基盤研究(B)「近世アジアと砂糖の世界史：砂糖の生産・国際流通・消費文化に関する国際共同研究」、2015年度～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、立教大学文学部、「史学講義」、2013年度～2014年度
- 非常勤講師、立正大学経済学部、「アジア経済史」、2014年度～
- 非常勤講師、北海道大学文学部、「東洋史学」、2015年度

(2) 学会

- 史学会、大会実行委員、2012～、編集委員、2014～
- 社会経済史学会、幹事、2014～
- 東南アジア学会、学術渉外委員、2013～
- 東洋学・アジア研究連絡協議会、会計監査、2014～
- 比較文明学会、幹事、2011～、編集委員、2014～

13 中国思想文化学

教授 川原 秀城 KAWAHARA, Hideki

1. 略歴

- 1968年4月 京都大学理学部入学
- 1972年3月 京都大学理学部数学科卒業・理学士
- 1972年4月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）編入学
- 1974年3月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）卒業・文学士
- 1974年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程（中国哲学史専攻）入学
- 1980年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程（中国哲学史専攻）単位取得退学
- 1980年7月 岐阜大学教育学部 助教授（社会科・哲学研究室）
- 1992年4月 東京大学文学部 助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
- 2015年3月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

東アジアの思想史と科学史

b 研究課題

- (1) 朝鮮儒学
- (2) 明清西学

c 概要と自己評価

定年を機に、朝鮮王朝期の儒学と明清期の西学に関する専門研究についてまとめた。

d 主要業績

(1) 著書

- 川原秀城, 『朝鮮朝後期の社会と思想』（アジア遊学 179）, 編書, 勉誠出版, 頁 198, 2015年2月
- 川原秀城, 『西学東漸と東アジア』, 岩波書店, 編書, 頁 344, 2015年2月

(2) 論文

- 川原秀城, 「宋時烈の朱子学：朝鮮朝前中期學術の集大成（朝鮮朝後期の社会と思想）」, 『アジア遊学』第 179 号, 99-139 頁, 2015年2月

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

兼任講師 中央大学文学部（2013～）

(2) 学会

東方学会評議員（2012～）

1. 略歴

1985年3月	東京大学文学部中国哲学専修課程卒業（文学士）
1987年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（中国哲学）
1987年4月	東京大学東洋文化研究所助手（東アジア第一部門）
1992年4月	徳島大学総合科学部講師（総合科学科）
1994年4月	同 助教授（人間社会学科）
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）
2007年4月	同 准教授（中国思想文化学）
2013年4月	同 教授（中国思想文化学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論

b 研究課題

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。
- (2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。
- (3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。

c 概要と自己評価

概要：これまで十年来、上記研究課題に沿って研究を進め、著書・論文を通じてその成果を公表してきた。また、いくつかの共同研究に参加して隣接諸分野の研究者と交流を深め、視野を広げるとともに他領域の研究成果を自分の研究に活かしてきた。2005年度以来進めてきた共同研究の成果を取りまとめた「東アジア海域叢書」全20巻および「東アジア海域に漕ぎ出す」全6巻の監修を担当し、それぞれ数巻を刊行した。

自己評価：2014～2015年度においても、研究が順調に進んで成果を着実にあげたとは言い難い。その理由として、一つは自分自身の関心が広がり、新たに先行研究を消化したり史料を読解分析したりすることが増え、従来からの問題に即してそれを深化させる速度が鈍った。二つめの理由としては、共同研究においてその取りまとめ作業に携わり、自身の研究に十分な労力をかけなかった。三つめに、私的な関心事象にかまけて公務以外の研究時間をきちんと確保しなかったことがあげられる。専門分野における学術的な論文執筆よりも、学界が共有する研究成果の社会還元に資するような活動（講演・解説文・一般雑誌連載など）のほうに重点を置いて活動した2年間であった。とはいえ、依頼されて論集に寄稿した結果、14点の論文を公刊することができ、また、旧著を文庫本の形で再び上梓することができた。ようやく、自身の初発の関心対象であった王安石研究に立ち戻り、その歩を進めることができた2年間であった。

d 主要業績

(1) 著書

単著、小島毅、『増補 靖国史観』、筑摩書房、2014.7

(2) 論文

小島毅、「王守仁—いくさを嫌った名将」、『アジア遊学』、173、2014.4

小島毅、「宋代における経学と政治」、『学問のかたち—もう一つの中国思想史』（汲古書院）、pp.127-148、2014.7

小島毅、「東北アジアという交流圏—王権論の視角から」、『境界と交流』（人文知3、東京大学出版会）、pp.93-108、2014.9

小島毅、「思想、宗教の伝播と変容」、北岡伸一・歩平編『「日中歴史共同研究」報告書 1 古代・中近世篇』、勉誠出版、227-256頁、2014.10

小島毅、「訓読の歴史的変遷をどう教えたらいいか—漢文と日本史の関連から」、『新しい漢字漢文教育』、59、9-19頁、2014.11

小島毅、「襲原『周易新講義』について」、『東方学』、129輯、pp.1-14、2015.1

小島毅、「夢窓疎石私論—怨親差別を超えて」、『文化交流研究』、28、pp.71-82、2015.3

小島毅、「思想史から見た宋代近世論」、渡邊義浩編『中国史の時代区分の現在』、汲古書院、369-376頁、2015.8

小島毅、「家康公と論語」、『大日光』、85、4-13頁、2015.8

小島毅、「宋学の尊王攘夷思想とその日本への影響」、『二松学舎大学人文論叢』、95輯、23-33頁、2015.10

小島毅、「日本の朱子学・陽明学受容」、『東洋学術研究』、54-2、248-267頁、2015.11

小島毅、「正気歌の思想——文天祥と藤田東湖——」、伊東貴之編『心身／身心と環境の哲学—東アジアの伝統思想を媒介に考える—』、汲古書院、537-549 頁、2016.2

小島毅、「東アジアの視点からみた靖国神社」、『高校地歴（徳島県高等学校教育研究会地歴学会）』、52、5-25 頁、2016.2

小島毅、「『論語』の解釈変更——古注から新注へ——」、『文化交流研究』、29、73-87 頁、2016.3

(3) 書評

吉田公平、『日本近世の心学思想』、研文出版、『日本歴史』、794、2014.7

(4) 解説

小島毅、「交流史」、『新編 森克己著作集』、5、442-451 頁、2015.8

(5) 啓蒙

小島毅、「解説」、玖村敏雄『吉田松陰』、文春学芸ライブラリー、397-407 頁、2014.12

小島毅、「文学部の覚醒」、『日本古書通信』、1033 号、3-4 頁、2015.8

小島毅、「遣明使と陽明学」、村井章介・橋本雄他編『日明関係史研究入門——アジアのなかの遣明船』、勉誠出版、370-374 頁、2015.10

(6) 予稿・会議録

国内会議、小島毅、「時代区分論からみた「平泉文化」」、「平泉の文化遺産」の拡張登録に係る研究集会、奥州市役所江刺総合支所、2015.11.14

『アジアにおける平泉文化』、2015.11

(7) 監修

小島毅、『海がはぐぐむ日本文化（東京大学出版会、シリーズ東アジア海域に漕ぎだす6）』、2014.4

小島毅、『訓読から見なおす東アジア（東京大学出版会、シリーズ東アジア海域に漕ぎだす5）』、2014.6

(8) マスコミ

「打倒頼朝！ “貴族” 義経の野心～武士の世を生んだ兄弟対決～」、『英雄たちの選択』、NHK、2014.12.18

「松陰の「行動」への賛美 実は危うい」、朝日新聞 15、2015.3.19

「徹底討論「靖国神社」」、『ニコニコ生放送』、DWANGO Co., Ltd.、2015.8.15

「東アジアの架け橋 遣唐留学生・阿倍仲麻呂の実像」、『英雄たちの選択』、NHK、2015.11.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、清泉女子大学文学部、「漢文学講義」、2012.4～

非常勤講師、埼玉大学教養学部、「漢字文化圏比較論」、2014.4～2014.9

非常勤講師、立正大学法学部、「アジア思想史」、2015.4～

特別講演、創価大学東洋哲学研究所、「日本の朱子学・陽明学受容」、2015.5

特別講演、徳島県立小松島高等学校、「東アジアの視点からみた靖国神社」、2015.8

特別講演、創価大学東洋哲学研究所、「朱子学の理気論・心性論」、2015.11

(2) 学会

国内、日本中国学会、副理事長、2015.4～

教授 **横手 裕**

YOKOTE, Yutaka

1. 略歴

1988年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業

1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（中国哲学専攻）修了

1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程（中国哲学専攻）中退

1991年9月 京都大学人文科学研究所助手

1997年4月 千葉大学文学部助教授

2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想、道教

b 研究課題

- (1) 道教思想、道教史の解明
- (2) 道教と中国仏教の交渉史
- (3) 儒・仏・道の三教交渉史を中心とする中国思想史

c 概要と自己評価

研究の中心は道教であるが、道教と中国仏教との関係、および儒・仏・道の三教の影響関係からみた中国思想史についても考察を進めている。三教についてはこれまで道・仏の関係を論じることが多く、とくに道教の内丹説と仏教とのかかわり方について多角的な考察を行ってきたが、道・儒の関係についてはあまり論じることができなかったため、本期間では内丹説と儒教知識人との関係について考察を試みた。その他、ジョン・ラガウェイ氏の主宰する研究プロジェクトで発表した論文では、自分の長年の宋元内丹思想史研究を総括することができた。

d 主要業績

(1) 著書

単著、横手裕、『道教の歴史』、山川出版社、2015.4、全350頁

(2) 論文

横手裕、「明清時代的『経籙三山』」、『第五届中日学者中国古代史論壇文集』、中国社会科学出版社、2014.4、298-318頁
Yokote Yutaka, "Daoist Internal Alchemy", in John Lagerwey and Pierre Marsone ed., *Modern Chinese Religion 1: Song-Liao-Jin-Yuan (960-1368 AD)*, Leiden: Brill, 2015, pp.1053-1110

横手裕、「佐命山三上司山統考」、『道教の聖地と地方神』、東方書店、2016.2

横手裕、「仇兆鰲と内丹修鍊」、『「心身／身心」と環境の哲学—東アジアの伝統思想を媒介に考える』、汲古書院、2016.3

(3) 学会発表

国際、横手裕、「蘇軾の内丹説」、Conference on Middle Period China, 800-1400、アメリカ・ボストン・ハーバード大学CGIS、2014.6.5

国際、横手裕、「日本蔵《道蔵》版本研究」（個人講演会）、中国・山東省・済南市・山東大学文史研究所、2015.9.4

国際、横手裕、「日本宮内庁本道蔵の現状、以及校勘問題」（個人講演会）、中国・山東省・済南市・山東大学民俗学研究所、2015.9.9

国際、横手裕、「林希逸《莊子口義》与五山文学」、「道教与文学」国際学術研討会、香港・香港浸会大学、2015.12.9

(4) 啓蒙

横手裕、「性悪説—中国思想の考え方」（発表）、第121回（平成27年春季）東京大学公開講座「悪」、東京大学安田講堂、2015.5.30

(5) 研究報告書

横手裕、『宮内庁書陵部所蔵道蔵を中心とする明版道蔵の研究』、科学研究費補助金研究成果報告書、2014.10、全170頁

横手裕『道蔵図録Ⅰ』、科学研究費補助金研究成果報告書、2016.1、全55頁

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（A）、横手裕、研究代表者、「宮内庁書陵部所蔵道蔵を中心とする明版道蔵の調査と研究」、2014～

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本道教学会、理事、2014～

14 インド語インド文学

教授 高橋 孝信 TAKAHASHI, Takanobu

1. 略歴

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学。
1979年10月～1982年2月 インド・マドゥライ大学へ留学、
1985年4月～1988年9月 オランダ・ユトレヒト大学東洋言語文化研究所へ留学。
1989年6月 ユトレヒト大学より博士（文学）取得。
1991年4月 四天王寺国際仏教大学（現、四天王寺大学）文学部助教授
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月 同 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

タミル語学文学

b 研究課題

- 1) タミル古代文学・詞華集『十の長詩』の研究および訳注。
- 2) タミル古代の文法書『トルハーッピヤム』の年代論。
- 3) タミル古代の文学・詩論の総合研究、ことに全作品の比較年代論。

c 概要と自己評価

上記のうち、1) については下訳は完成し、目下精訳（和訳）と訳注に力をそそいでいる。そのかわり、『十の長詩—研究』を書き進めている（英文）。2) は1)との関連で新事実が分り、論考を執筆中である（英文）。3) は、1) および2)との関連で、これまでより明らかになりつつあるが、なお、さまざまな仮説を立てながら検証中である。

d 主要業績

(1) 論文

“A New Interpretation of the ‘Sangam Legend’”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol.63, No.3, Japanese Association of Indian and Buddhist Studies, Tokyo, 2015, pp.1174-1182.

“Is Clearing or Plowing Equal to Killing?: Tamil culture and the spread of Jainism in Tamilnadu”, *Bilingual Discourse and Cross-Cultural Fertilisation: Sanskrit and Tamil in Mediaeval India*, ed. by Whitney Cox and Vincenzo Verigiani, Institut Français de Pondichéry/École française d'Extrême-Orient, Pondichéry, 2013, pp. 53-67

「象の滝—直訳と翻訳の間で—」、『奥田聖應先生頌寿記念 インド学仏教学論集』、佼成出版社、東京、2014.3.30、205-213 頁

「詩作の場、発表の場—「声の文化」と「文字の文化」との関係で—」、『万葉古代学研究所年報』第12号、万葉古代学研究所、橿原、2014.3、105-110 頁

(2) 学会発表など

「象か子牛か—異説に関する一考察—」、日本印度学仏教学会第64回学術大会、島根県立会館、松江市、2013.9.1

「詩作の場、発表の場—「声の文化」と「文字の文化」との関係で—」、第10回万葉古代学研究所共同研究公開シンポジウム「万葉古代学の飛鳥」、万葉古代学研究所、橿原市、2013.10.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東洋大学文学部（2006～）、東洋大学大学院文学研究科（2013～）

(2) 学会・研究会

日本印度学仏教学会（常務委員、評議員）、東方学会（学術委員）、
日本南アジア学会、比較思想学会、日本仏教学会、
ジャイナ教研究会、インド考古研究会、西南アジア研究会

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

(財)東京大学仏教青年会・理事長（2008～）、奈良県立万葉古代学研究所・共同研究員

准教授 梶原 三恵子

KAJIHARA, Mieko

1. 略歴

1989年3月	大阪大学文学部哲学科インド哲学専攻卒業
1991年3月	大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了
1996年3月	大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位取得退学
1996年9月	米国ハーヴァード大学大学院サンスクリット・インド学科留学
2002年6月	博士 (Ph.D.) 学位取得 (ハーヴァード大学)
2009年10月	京都大学人文科学研究所助教
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

サンスクリット語学文学

b 研究課題

古代インドの家庭儀礼と社会文化史

c 概要と自己評価

目下の主要テーマ「ヴェーダの宗教（ブラフマニズム）における聖典学習」について、三つの方向から研究を進めた。第一に、ヴェーダの宗教伝統における学習入門の儀礼と、非ブラフマニズム宗教である初期仏教における入門の儀礼を比較した。第二に、ヴェーダ聖典の学習において最重要と目される聖詩節サーヴィトリーについて、初期ヴェーダからポスト・ヴェーダ期に至るまでの宗教文化における位置づけとその変遷を跡付けた。第三に、2009年からフィールドワークを続けている南インド・ケーララ州のヴェーダ伝承について、紀元前インドのサンスクリット文献の記述を参考にしつつ、現代社会にどのように古代宗教が生きているかについて、学習儀礼を中心に、家庭儀礼を軸として中間まとめを行った。

d 主要業績

(1) 論文

国内、Kajihara, Mieko, 「Vādhūla-Srāutasūtra 10.15」、京都大学人文科学研究所共同研究、京都大学、2014.11.14

国内、梶原三恵子、「ウパニシャッドの入門儀礼と初期仏典の受戒儀礼」、仏教儀礼の成立と展開に関する総合的研究研究会、金沢大学、2015.2.21

国際、Kajihara, Mieko, 「The Sacred Verse Sāvitrī in the Vedic Religion and Beyond」、16th World Sanskrit Conference, Bangkok, Thailand, 2015.6.29

国内、梶原三恵子、「家庭儀礼一覧「十六行事」からみるナンブーディリ社会の現在」、日本南アジア学会第28回全国大会、2015.9.27

国内、梶原三恵子、「ケーララ州の Ṣoḍaśa-kriyā とナンブーディリ社会」、京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム準備研究」、京都大学人文科学研究所、2015.11.20

国際、Kajihara, Mieko, 「The ṣoḍaśa-kriyās and today's Nampūtiri society」、International Symposium: The Brahmanism and Hinduism, Prolegomena, Kyoto University, 2016.3.11

(2) 予稿・会議録・その他

国際会議、Kajihara, Mieko, 「The Sacred Verse Sāvitrī in the Vedic Religion and Beyond」、『16th World Sanskrit Conference Book of Abstracts』、17頁、2015

国内会議、梶原三恵子、「家庭儀礼一覧「十六行事」からみるナンブーディリ社会の現在」『日本南アジア学会第28回全国大会報告要旨集』、89-90頁、2015.9

共著、梶原三恵子、「月に守られた者」『世界の名前』岩波書店辞典編集部編、岩波新書、1-3頁、2016.3.

(3) 会議主催（チェア他）

国内、「日本印度学仏教学会」、実行委員、東京大学、2016.

国内、日本南アジア学会、第28回学術大会実行委員、2015.1～2015.9

(4) 共同研究（産学連携除く）

国内、京都大学人文科学研究所、「ブラフマニズムとヒンドゥイズム：準備研究」、2014～2016

国内、京都大学人文科学研究所、「ヴァードゥーラ・シュラウタストラ研究」、2015～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、インド思想史学会、編集委員、2012.4～

国内、日本印度学仏教学会、評議員、2014.10～

国内、東方学会、会員、2013～

国際、American Oriental Society、会員、1996～

(2) その他

文部科学省教科書検定調査審議会専門委員、2015.4～

15 インド哲学仏教学

教授 齋藤 明 SAITO, Akira

1. 略歴

1976年3月	東京大学文学部第I類倫理学専修課程卒業
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程修士課程修了
1981年6月	オーストラリア国立大学アジア研究学部博士課程給費留学(～1984年3月)
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程博士課程単位取得退学
1984年4月	東京大学文学部助手
1985年5月	オーストラリア国立大学より Ph.D.学位取得
1988年4月	三重大学人文学部助教授
1993年4月	同 教授
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2016年3月	同 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

インド仏教学

b 研究課題

インド大乘仏教思想史の研究。とくに中観派(Mādhyamika)の前史、学派成立の経緯、およびインドからチベットに至る同派の思想展開と影響を洗い直す作業を行っている。

c 概要と自己評価

この間、2-3世紀以降のナーガールジュナ(龍樹)を起点とする中観思想史を見すえ、とくに6世紀前半のパーヴェイヴェーカ(清弁)による中観派の成立と背景を多角的に分析、再考する作業を行った。今後の研究に資するいくつかの研究成果をもたらすと同時に、残された研究課題と展望を提示した。また、編著者(4名)の1人として責任を担った『シリーズ大乘仏教』(全10巻)が完結し、過去30年間に飛躍的に進展した大乘仏教思想研究の近年の諸成果を簡明に紹介した。一方また、主要な用例を根拠に仏教用語を現代語(日本語・英語)に翻訳する科研費プロジェクト(基盤研究(S):略称「パウッダコーシャ」)を主導し、2つの研究成果を刊行するとともに、Webサイト上で公開した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Saito Akira et al, 『Buddhism and Debate: The Development of Mahayana Buddhism and Its Background in Terms of Religio-Philosophical History』, Tokyo: The Tōhō Gakkai, 2015.2

(2) 論文

Akira Saito, Avalokiteśvara in the Saddharmapuṇḍarīka-sūtra, 『Acta Asiatica』, vol.108, pp. 1-17, 2015.2

Saito Akira, Reconsidering the Meaning of Emptiness in the Vimalakīrtinirdeśasūtra, 『Journal of Indian and Buddhist Studies』, vol.63, no.3, pp. 1256-1262, 2015.3

齋藤明、「『法華経』とイーシュヴァラ」、『三友健容博士古稀記念論文集』, pp. 547-556, 2016.3.

齋藤明、「縁起と空—『中論』三諦偈解釈をめぐる—」、『叡山学院研究紀要』38, pp. 167-193, 2016.3.

(3) 予稿・会議録

国際会議、齋藤明他、「仏典翻訳論考—「すぐれた翻訳」をめぐる—」、2014.5.24

『東方学会報』, 106, 13-15頁, 2014.7

(4) 受賞

国内、齋藤明、Saito Akira、第3回仏教思想学術賞、仏教思想学会、2014.7.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

早稲田大学非常勤講師（大学院演習）、東洋大学非常勤講師（大学院演習）、
国際仏教学大学院大学非常勤講師（大学院演習）、
ウィーン大学客員教授（大学院演習、学部講義）

(2) 学会

日本印度学仏教学会理事長（2014年3月まで）、東方学会常務理事、仏教思想学会理事、比較思想学会理事、
国際仏教学会（IABS）理事、国際オリエント・アジア研究連合（IUOAS）副会長

(3) 行政

学生懲戒委員（2013.4～2015.3）

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議連携会員（第23期 2014.10～；「言語・文学委員会・哲学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同ア
ジア研究・対アジア関係に関する分科会」分科会長）

教授 **丸井 浩** MARUI, Hiroshi

1. 略歴

1972年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1974年4月 東京大学文学部印度哲学印度文学科進学
1976年3月 同 上 卒業
1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻修士課程入学
1979年3月 同 上 修了
1979年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程進学
1983年3月 同 上 単位取得退学
1984年1月 インド・プーナ大学サンスクリット高等研究センター在学（～1986年1月）

（文部省給費留学生）

1983年4月 財団法人東方研究会専任研究員（～1990年3月）
1990年4月 武蔵野女子大学短期大学部専任講師（～1992年3月）
1992年4月 東京大学文学部助教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（大学院部局化に伴う）
1999年1月 同 上 教授（～現在）

<学位>

2011年11月 博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野はインド哲学。インドの哲学的思索の伝統諸派（ダルシヤナ）のなかで、特に多元論的世界観と分析的、合理的思考を特徴とする、ニヤーヤ学派（インド論理学派）・ヴァイシェーシカ学派のサンスクリット文献の解説・解釈、およびその思想（史）研究が中核となっている。そうした専門分野の研究を核としつつ、最近の研究課題は、(1) インド思想における哲学と宗教の交錯関係をテキスト実証的に解明しつつ、インドの寛容精神あるいは包括主義と呼ばれる思想を、宗教多元主義や異宗教間対話・共生、あるいはサステイナビリティ問題といった現代的な問題意識から見直すこと、(2) 「(インド) 六派哲学」という概念の展開を追跡して、インド哲学史の見直しを図ること、さ(1)らには (3) 文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (A) 「インド哲学諸派における〈存在〉をめぐる議論の解明」(2011～2014年度) を研究代表者として総括した上で、特にインド哲学諸派における「因果の思想」に関する新たな共同研究への発展を図る予定である。

c 概要と自己評価

この2年間の研究活動は、前半1年間は、上記の研究課題の中の(3)に、後半の1年間は(1)に重点を置いていた。(2)については特に進展を見なかった。2014年度は上記科研基盤(A)の最終年度にあたり、その注目すべき成果の一つが、若手・中堅研究者による意欲的な研究成果を集めた論文集を、『インド哲学と教学研究』22(特別号)として公刊したことであり、丸井はその編集責任者を務めた。またそれに先立って、①本共同研究を構成する4つの研究班の代表者が中心となり、インド哲学の存在論(世界認識の枠組)を「因果」「普遍と個体」「言葉と存在」「神と世界」という4つの切り口から、各班の代表者がそれぞれ分析する報告と、②西洋哲学ないしユダヤ哲学の専門家との討論、③さらには西洋哲学(古代ギリシア哲学)の専門家による基調講演から成る、公開シンポジウム「インドが育んだ世界認識の枠組み——東西哲学対話の再出発——」(東京大学文学部、2014年11月23日)を企画し、その基調説明を行い、かつインド哲学諸派における因果の思想に関する報告および西洋哲学研究者との討論を行った。従来のインド哲学研究では、プラマーナ論(認識論・論理学)を除けば、一つの学派に限定された研究が圧倒的に多く、とりわけ「存在論」「カテゴリー」という切り口から、学派横断的に研究されることは世界的に見ても殆どなかった。「東西哲学対話の再出発」を意図した比較哲学の試みとしても画期的であった。その意味では本シンポジウムの企画自体に大きな意義があったと思われる。ただしそのシンポジウムの成果がまだ具体的な出版物として実現していないことは今後の課題として残された。他方、研究課題(1)に関しては、主として学会での基調講演や、さまざまな場での招待講演が中心であり、あまり知られていないインド哲学の諸相を一般に人々に話す機会として、あるいはインド哲学の現代的な意義についての議論を開く機縁としての意義は大きかった。しかしその成果を論文や著作としてまとめる仕事の多くは、その後の課題として残されている。

d 主要業績

(1) 編集(共同)

丸井浩(代表編集者)『インド哲学と教学研究』22(特別号)、2014年3月。

(2) 論文

丸井浩「インドの寛容思想と包括主義——中村博士の思想研究の眼差し——」(特集1「共生の思想——中村元の「慈悲」の思想をてがかりに——」)『比較思想研究』41, 2015.3, pp.18-27.

丸井浩「世界平和への希求——人類の教師、中村先生からのメッセージの重み」『日本仏教教育学会研究』24, 2016年3月, pp.19-41(2015年11月14日に松江市の中村元記念館で開催された日本仏教教育学会第24回学術大会シンポジウム「中村元博士と教育」・基調講演の原稿に一部加筆・修正を施したもの)。

(3) 学会口頭発表(論文発表となったものは除く)、シンポジウム、招待講演

丸井浩 基調説明(公開シンポジウム「インドが育んだ世界認識の枠組み——東西哲学対話の再出発——」の冒頭)、東京大学文学部、2014年11月23日。

丸井浩「因果」(公開シンポジウム「インドが育んだ世界認識の枠組み——東西哲学対話の再出発——」における報告)、東京大学文学部、2014年11月23日。

MARUI Hiroshi, "An attempt to consider the issue of sustainability philosophically: Returning to the basis" (Invited speech), Roundtable 1: Sustainability Concept, The 3rd. GPSS-GLI International Symposium, Kashiwa-no-ha Conference Center, 19 Jan., 2015.

MARUI Hiroshi, "What do we mean by 'I': A debate with materialists and Buddhist Impermanence-theorists" (Invited colloquium lecture), the Philosophy Department EPOCH Project, the University of Hawaii, Sakamaki Hall, 13 Mar., 2015.

(4) 講演録、その他

丸井浩「人は生れながらにして三つの負債を負う——古代インドのおかひげさまの思想——」『モラロジー研究』73, 2014年9月, pp.1-25.

丸井浩「特別号刊行にあたって」『インド哲学と教学研究』22(特別号)、2014年3月。

(5) 講演など

丸井浩「頭を空っぽにすることの大切さ——インド哲学と仏教から学ぶこと——」(平成26年度足利学校アカデミー第1回講義、2014年6月14日)

丸井浩「“無分別”との出会い」(NHK ラジオ放送第二「宗教の時間」、2015年5月17日番組出演)

丸井浩「多宗教の国インド——多様性の中の統一」(平成27年度鶴岡文庫・東方学院共催講座「東洋思想から共生を考える」、鶴岡八幡宮鶴岡文庫、2015年5月17日)

丸井浩「すべての宗教は正しい——9世紀のインド論理学者の議論——」(平成27年度足利学校アカデミー第1回講義、2015年6月20日)

丸井浩「無分別知を考える——矛盾の中で生きぬくための知恵を求めて——」(構造計画研究所・社内講演会、2015年12月11日)

丸井浩「インド論理学入門」（経済金融研究所・定例研究会、日本文化興隆財団、2016年1月20日）
丸井浩「「無我」の教え——対立を乗り越えるための知恵」（第724回『仏教文化講座』、浅草寺主催、新宿明治生命ホール、2016年3月28日）

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等・学会役員

学習院大学非常勤講師（思想史講義）、2014年度、2015年度
NPO法人中村元記念館東洋思想文化研究所（東方学院松江校）非常勤講師（集中講義）、2014年度、2015年度
日本印度学仏教学会理事長、2014.8～2016.3
日本宗教学会、評議員、2014.4～2016.3

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議会員第22期 2011.10～2014.9
日本学術会議第23期連携会員 2014.10～現在
財団法人東京大学仏教青年会、理事、2012.4～2014.3
公益財団法人中村元東方研究所、主任研究員 2014.4～現在、常務理事・事務局長 2014.4～現在
財団法人大法輪石原育英会、理事、2014.4～現在

教授 下田 正弘 SHIMODA, Masahiro

1. 略歴

1981.03 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業
1981.04 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）入学
1984.03 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）修了
1984.04 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（印度哲学）進学（-1989.3）
1985.07 インド・デリー大学大学院留学（文部省国際交流計画）（-1986.05）
1988.04 日本学術振興会特別研究員（-1990.03）
1994.06 博士（文学）（東京大学）
1994.10 東京大学文学部助教授
1995.04 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2006.01-03 School of Oriental and African Studies (University of London) 教授
2006.04 東京大学大学院人文社会系研究科教授
2007.04 東京大学大学院人文社会系研究科（次世代人文学開発センター兼任）教授
2011.03-04 Stanford University 教授
2013.04 東京大学大学院人文社会学研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野はインド仏教の教典形成史、および人文情報学。前者については *sutra, vinaya* の形成過程解明を通して初期仏教から大乘仏教にいたる思想史、社会背景史の解明を目標とする。ここ数年は、大乘仏教の起源について伝承の媒体変化による発生という、新たな学説を提起している。これまでの研究課題は(1)大乘仏教の形成過程および大乘仏教の特徴についての従来の研究の再考、(2)仏教学を支える近代の仏教研究方法の問いなおし、(3)仏教と現代の諸問題とのかかわりの考究、および(4)大乘仏教の起源研究という4点に集約される。西洋近代から生まれ、200年の歴史を有する仏教学を検証する視野のなかにこれら4点を据え、仏教学の進む道を模索している。後者の課題、すなわち人文情報学については、仏教文献の電子化事業を進める過程で10年ほど前から本格的に着手。現在、科学研究費基盤S「仏教学術新知識基盤の構築」のプロジェクトを中心に据え、次世代に向けた仏教学の国際的知識基盤づくりを進めるとともに、日本の Digital Humanities のモデルケースを提示しつつある。

c 概要と自己評価

大乘経典形成過程の解明については、従来主流であった社会史還元型の研究がもつ問題点を洗い直し、テキスト形成過程としての研究の方法を確立すべく、書写経典の創出と変容という新たな視点を提示した。これはことに初期の大乘経典に適合すると考えられる特徴であり、現在のテキスト研究一般の成果と連絡をつけながら、かつて注目されなかった角度からの問題の解明につながる可能性をもつ。より広い資料にもとづく検証と考察は、これから慎重に進めてゆかねばならない。

仏教学方法論の問い直しについては、現在進められている仏教研究批判のほとんどが、オリエンタリズム論の強い影響を被ったものに留まっていることを批判的にとらえ直し、仏教学の資料の現状と方法の特性を照合せながら、現実的な研究方法の確定を急ぐ必要がある。

人文情報学にかんしては、ことにこの5年ほど、蓄積した成果を国際学界において意欲的に検証しつづけたため、仏教研究が Digital Humanities という人文学新領域の構築と推進において果たすべき役割が大きく増した。すでに仏教学からの問題提起は、この新分野が伝統的な人文学を適切に受容するに相応しいものに成長しうるかに重要な影響を与える地点にまで達しており、今後、さらに慎重で精力的な貢献を目指したい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、下田正弘『生と死の宗教社会学——別れの文化』（大村英昭・井上俊編集）書肆クラルテ、2014.4。（単著、下田正弘「仏教における生死——生死一如観の背景」、pp.185-211）

共著、下田正弘『仏教的伝統と人間の生』（安富信哉博士古稀記念論集刊行会編）法蔵館、2014.6。（単著、下田正弘「大乘経典の出現と浄土思想の誕生——エクリチュール論の立場から」、pp.103-118）

編著、下田正弘『フリードリヒ・マックス・ミュラー 比較宗教学の誕生 宗教・神話・仏教』（単著、下田正弘・松村一男監修）国書刊行会、2014.9。（下田正弘「近代人文学史からみた仏教学と宗教学——マックス・ミュラーの偉業——」、pp.608-629）

共著、下田正弘『人文知 2 死者との対話』（秋山聡・野崎敏編）東京大学出版会、2014.11。（単著、下田正弘「思想の痕跡としてのテキスト」、pp.43-62）

共著、M. Shimoda, *Brill's Encyclopedia of Buddhism*, Vol.1 (Literature and Languages), (J. Silk ed. in chief) Leiden: Brill, 2015.9 (“Mahaparinirvana-mahasutra”, pp.158-170)

共著、下田正弘『三友健容博士古稀記念論集 智慧のともしび アビダルマ仏教の展開』（三友健容博士古稀記念論集刊行会）山喜房仏書林、2016.3（単著、下田正弘「仏教研究の死角——ウィルフレッド・キャントウェル・スマスの理解から」、pp.84-102）

(2) 論文

単著、Masahiro Shimoda, “Some Reflections on Toshihiko Izutus’s Metaphysics of Consciousness: Focusing on His Interpretation of the Buddhist Philosophy on the Treatise of the Awakening of the Faith of the Mahayana,” (智山勸学会『小峰彌彦先生 小山典勇先生 古稀記念 転法輪の歩み』智山学報 75 号) 2016.3, pp.(51)-(60).

(3) 解説、論文要旨

単著、下田正弘「高崎直道「解説『涅槃経』を読む」（『涅槃経』を読む）（岩波現代文庫）、pp.347-357、2015

単著、下田正弘「井筒俊彦の仏教思想理解『宗教研究』別冊、89 巻、pp.103-104、2016.3

(4) 学会・シンポジウム

国際（招待）、下田正弘、「仏教学の現状と未来——仏教学的方法的批判について——」、東アジア仏教学四大学会議、2014.5.9

国際（招待）、Masahiro Shimoda、「Possible contributions to SPECTRESS from Digital Humanities Initiative」、Spectress Inaugural Conference、2014.5.25

国際、Kiyonori Nagasai, Masahiro Shimoda et al. “Bridging the Local and the Global in DH: A Case Study in Japan” Digital Humanities 2014. University of Lausanne, 2014.7.11

国際、Masahiro Shimoda, Dorji Wangchuk, Kiyonori Nagasaki, Toru Tomabechi et al. 「Project Presentations : Indo-Tibetan Lexical Resources」、17th Conference of International Association of Buddhist Studies, University of Vienna, 2014.8.19

国内（招待）、下田正弘「仏教学知識基盤から照らす デジタルヒューマニティーと図書館の未来」（むすび、ひろくアジア：アジア研究図書館の構築に向けて）東京大学、福武ラーニングシアター 2015.1.31

国内（招待）、下田正弘「意識の形而上学をめぐる」（「井筒東洋哲学フォーラム」京都大学）2015.4.22

国際（招待）、East Asian Knowledge Database, McGill University, Canada, 2015.5.9

国際（招待）, Masahiro Shimoda, “Building Communities and Networks in the Humanities” University of Western Sydney, 2015.6.29

国際、“Some Reflections on Izutsu Toshihiko’s Metaphysics of Consciousness: Focusing on His Interpretation of the Buddhist Philosophy of the Treatise of the Awakening of the Faith of the Mahāyāna: the XXIIAHR World Congress, Erfurt, August 26th, 2015

国際、“Mind the Gap between the Theory of Selflessness and the Concept of Subjectivity,” Subjectivity in Pure Land Buddhism: The 17th Biennial Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies, Berkeley, August 9th, 2015

国内、「井筒俊彦の仏教思想理解の特質」（パネル「東洋の宗教思想と井筒俊彦の哲学的思惟」）日本宗教学会第74回学術大会、創価大学、2015.9.6

国内、「仏教の社会的実践を問うためのいくつかの課題」日本仏教学会、東京大学、2015.9.8

国際（招待、基調）“The Significance of Constructing a Buddhist Studies Knowledge Base in the Diversity of Digital Humanities,” in: UBC workshop on a global network “Paper, print & cyberspace: The perspective of a global network for the multimedia and interdisciplinary studies of Buddhism and East Asian religions, 4th October, University of British Columbia, 2015.

国内（主催）「仏教における認識と経験」東方学会秋季学術大会、2015.11.6

国際、Convener, “Dṛṣṭi: The Problems of Views and Beliefs in Buddhism,” American Academy of Religion, 2015. 11.21.

国際（招待、基調）“Significant Potentials of the Humanities in East Asia for the Development of Globally Shared Digital Humanities: Illustrative Details Provided by Buddhist Studies,” 6th Conference of Digital Archive and Digital Humanities, National Taiwan University, 2015. 12.2

国際（主催）Masahiro Shimoda “Wōnhyo’s commentary on the *Nirvana-sutra* (*Tae yōlban-gyōng chong’yo*)” Mahaparinirvanasutra Conference, UC Berkeley, 2016.1.8

国際（主催）「HathiTrust とデジタルアーカイブの未来」東京大学福武ホール、2016.1.25

国際（招待）「大乘仏教の起源について」Dongkuk University, Korea、2016.3.11

(5) 受賞

国内、下田正弘、毎日出版文化賞、毎日新聞社、2014.11.28

国内、下田正弘、パーリ学仏教文化学会賞功労賞受賞、2015.5.29

(6) 科研費等

研究代表者、科学研究費基盤研究S「仏教学新知識基盤の構築——次世代人文学の先進的モデルの構築」（2015.6-）

研究分担者、科学研究費基盤研究S「パウッダコーシャ」

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

武蔵野大学大学院非常勤講師

朝日カルチャーセンター講師

日経アカデミア講座講師

(2) 学会

国際、Alliance for Digital Humanities Organizations、理事

国際、International Association for Buddhist Studies、理事

国際、The Eastern Buddhist, Board Member（編集顧問）

国内、日本デジタルヒューマニティーズ学会、会長、理事

国内、日本宗教学会、常務理事、評議員

国内、日本印度学仏教学会、理事、評議員、常務委員

国内、財団法人東方学会、理事、

国内、仏教思想学会、評議員

国内、パーリ学仏教文化学会、理事

国内、比較思想学会、評議員

国内、日本学術会議連携会員

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

大蔵経テキストデータベース研究会、代表委員

大蔵経研究推進会議、常任議員、議長

一般財団法人人文情報学研究所、評議員

公益財団法人仏教伝道協会、英訳大蔵経編集委員会委員

公益財団法人石原奨学育英会、評議員
一般財団法人仏教学術振興会、選考委員
公益財団法人国際宗教研究所、監事
宗教法人曹洞宗将来構想委員会第一部会、委員
一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

教授 **蓑輪 顕量** MINOWA, Kenryo

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業(学士)
1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻修士課程入学
1986年3月 同大学院（印度哲学印度文学専攻）修士課程修了(修士)
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程進学
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程単位取得退学
1991年4月 日本学術振興会特別研究員（平成5年3月迄）
1998年4月 愛知学院大学文学部日本文化学科 助教授（平成16年1月迄）
1998年10月 博士（文学）の学位取得
2004年1月 愛知学院大学文学部日本文化学科 教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

仏教学、東アジアの仏教及び日本仏教に関する研究。

b 研究課題

東アジアにおける仏教の研究。特に日本仏教における修行、学問に関する研究を行っている。学問に関わるところでは、古代の論議に関する研究を南都に残された法会資料を用いながら考察を進めており、古代から中世に掛けて行われた仏教教理に関する論争に焦点を当てている。また修行道に関する研究は、東南アジアや東アジア世界に伝わる修行の実際に注意を払いながら、東アジア世界に残された文献資料を用いて、修行道の内容を明らかにすることを目指して研究を進めている。また、昨年度より台湾における人間仏教の研究も視野にいれている。

c 概要と自己評価

2014年4月から2016年3月までの間は、台湾の仏光大学との共同研究で、現代の台湾仏教とくに因順の人間仏教に関する論文を執筆することができた。また、日本中世の仏教においては、引き続き南都の仏教に対する禅宗の影響を探索したが、論文として纏めるところまでは至らなかった。また、今までの研究成果を広く一般に公開する意味を込めて、一般向けの概説書として、春秋社より『日本仏教史』を刊行した。本書は、行と学という二つの視点から日本の仏教を鳥瞰する、類書のないものであると自負している。また、本書の執筆中に、中世の仏教における無分別の理解という新たな視点を得ることができたので、前向きに評価したい。しかしながら、他の仕事との時間的な配分に苦勞しており、なかなか改善が進んでいない。この点は反省させられる。さらに仕事分量の調節に留意する必要がある。なお、2014年度は初めての研究室主任として、他の研究に時間が割けなかったように思う。

d 主要業績

(1) 著書

単著、蓑輪顕量、『日本仏教史』、春秋社、2015.6

(2) 論文

蓑輪顕量、「寺僧と通世門の活躍—戒律・禅・浄土の視点から」、『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集』、第12号、71-86頁、2014.11

衰輪頭量、「良忍の念仏—その念仏の名称と念仏偈を再考する」、『融通念仏宗における信仰と教義の邂逅』、59-74 頁、2015.10

衰輪頭量、「中世法相宗における理の理解」、三友健容博士古稀記念論文集『知恵のともしび アビダルマ仏教の展開』、273-288 頁、2016.3

(3) 学会・シンポジウム

国際、The Current State of the Field and Problems to be Resolved in the Study of Japanese Buddhism, 東アジア仏教学四大学会議、於韓国東国大校 2014.5.9

国際、「日本における『法華経』の受容」第六回中日佛学会議「総合テーマ『法華経』と東アジア」、於中国紹興市新昌県大仏寺、2015.11.1

国際、“Manuscript copies of Japanese materials regarding doctrinal debates from the thirteenth century” Multidisciplinary Symposium at the University of California, Santa Barbara, November 15, 2015

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

立正大学文学部 非常勤講師

東洋大学文学部 非常勤講師(2014年3月まで)

東洋大学大学院 非常勤講師

特別講演、龍谷大学、「東大寺の論義」、2014.7

セミナー、川崎市市民講座、「仏教の伝播—日本の神々と仏教の遭遇・公式の伝来とその信仰受容の特徴」、2015.6

特別講義、「日本仏教」、韓国東国大校、2015.6.4 及び 6.8

(2) 学会

国内、日本印度学仏教学会、理事、評議員、常務委員

国内、日本宗教学会、常務理事、評議員

国内、日本仏教総合研究学会、会長(2016.3月まで)

国内、東アジア仏教研究会、会長

国内、パーリ学仏教文化学会、理事

国内、KIERA-LP 学会、会長(2015年10月～)

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

16 イスラム学

教授 柳橋 博之 YANAGIHASHI, Hiroyuki

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（東洋史学）
1988年10月 茨城大学教養学部専任講師
1989年4月 同 助教授
1993年4月 東北大学大学院国際文化研究科助教授
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（1997年度は東北大学大学院と併任）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

イスラーム法、ハディース

b 研究課題

ハディース（預言者ムハンマドの言行の記録）の形成過程を研究している。

c 概要と自己評価

現在、8つのハディース群を取り上げて、イスラーム法の発展と対応させながらその形成過程を詳細に調べており、3年以内の英文による刊行を目指している。進捗が遅いのもう少し速度を上げる必要は感じている。

d 主要業績

(1) 論文

柳橋博之、「旅行中の齋戒義務をめぐるハディースの展開について」、『イスラム世界』、81、pp.33-71、2014.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、神戸大学大学院国際協力研究科、「イスラム法社会論」、2015.9～2016.3

(2) 学会

国内、一般社団法人日本イスラム協会、代表理事、2014.4～
日本中東学会、評議員、2015.4～

准教授 菊地 達也 KIKUCHI, Tatsuya

1. 略歴

1992年3月 東京大学文学部イスラム学専修課程卒業
1992年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学修士課程入学
1994年3月 同修了
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学博士課程進学
1998年3月 博士（文学）の学位取得
1998年4月 東京大学東洋文化研究所研究機関研究員（2000年3月まで）
2000年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（2003年3月まで）
2004年4月 神田外語大学外国語学部専任講師
2008年4月 神田外語大学外国語学部准教授
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

シーア派思想史

b 研究課題

9世紀以降のシーア派思想史における「極端派」思想と十二イマーム派、イスマーイール派の形成過程との関係について研究している。

c 概要と自己評価

主流シーア派の自己形成、およびそれに呼応する形で成立したアラウィー派、ドゥルーズ派の初期思想について研究し、その成果を二つの共著論文と三度の口頭発表で公開することができた。研究はおおむね順調に進んでいる。

d 主要業績

(1) 著書

共著、近藤洋平(編)、『中東の思想と社会を読み解く』、東京大学中東地域研究センター スルタン・カブース・グローバル中東研究講座、2014.8

共著、塩尻和子(編著)、『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』、明石書店、2016.3

(2) 書評

“Omar Alí-de-Unzaga (ed.), *Fortresses of the Intellect: Ismaili and other Islamic Studies in Honour of Farhad Daftary*, I. B. Tauris”, *Journal of Shi'a Islamic Studies*, 7-3, 361-365 頁、2014.11

(3) 学会発表

国内、菊地達也、「媒介者」としてのシーア派イマーム、第61回宗教史研究会、東洋英和女学院大学大学院、2015.6.13

国内、菊地達也、「イスラーム教シーア派の起源」、宗教間対話研究所第97回月例研究会、東京グランドホテル、2015.11.27

国内、菊地達也、「11世紀ドゥルーズ派の集団移動：エジプトからシリアへ」、東京大学中東地域研究センター(UTCMES)公開シンポジウム、東京大学駒場キャンパス、2016.1.30

(4) 監修

菊地達也、『五つのキーワードでわかる！「イスラーム教」入門』、『歴史街道』2015年4月号(324号)、79-85、88-93頁、2015.3

(5) マスコミ

「偏見なき視点を持つ：イスラーム過激派の姿」、『東京大学新聞』、東京大学新聞社、2015.2.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、神田外語大学外国語学部、「宗教学 IA/IB」、2014.4～2014.9、2015.4～2015.9

非常勤講師、慶應義塾大学文学部、「哲学倫理学特殊 IC/IIC」、2014.4～2016.3

(2) 学会

国内、日本イスラーム協会、理事、2014.6～、『イスラーム世界』編集委員長、2016.3～

国内、日本オリエント学会、運営委員、2014.6～

国内、日本中東学会、評議員、2015.4～

国内、日本宗教学会、学術雑誌編集委員、2015.9～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、早稲田大学イスラーム地域研究機構共同利用・共同拠点運営委員会、委員、2014.4～2016.3

17 西洋古典学

教授 葛西 康德 KASAI, Yasunori

1. 略歴

1978年3月	東京大学法学部第一類（私法コース）卒業
1986年8月	連合王国ブリストル大学古典学・考古学科留学（1988年7月まで）
1992年2月	Ph.D.学位取得（連合王国ブリストル大学）
1978年4月	東京大学法学部助手
1982年4月	新潟大学教養部講師
1986年4月	新潟大学法学部助教授
1992年4月	新潟大学法学部教授
1993年11月	オクスフォード大学クライスト・チャーチ客員研究員（1995年1月まで）
1995年4月	新潟大学大学院現代社会文化研究科担当（「古典社会文化論」担当）
1999年9月	オクスフォード大学ベイリオル・コレッジ客員フェロー（2000年9月まで）
2002年4月	新潟大学法学部法政コミュニケーション学科長（2003(平成15)年3月まで）
2004年4月	新潟大学大学院実務法学研究科教授
2006年4月	大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学 ギリシア・ローマ法

b 研究課題

- 1 古代ギリシア人の「対立状況における行動様式」の特徴を、compliance と defiance という概念枠組を用いて、経済、法、宗教、哲学等の諸側面から総合的に考察する。
- 2 ギリシア法を「ギリシア語で書かれた法および裁判に関する文献」と広義に捉え直し、とりわけ民事訴訟をローマとパラレルにとらえることによって、その体系性と技術性を明らかにする。さらに、従来の見方を逆転してローマ法をギリシア法の普及として捉え、古代から近代にいたるギリシア法の歴史を通観する。
- 3 西洋学問の近世・近代の日本への移入を「文化転移」として、「普及」と「翻訳」という視点から総体的に把握する。

c 概要と自己評価

上記の研究課題に関して今期は以下のような具体的な研究作業を実施した。

- 1 課題1に関して、特に宗教と法の側面から、全般的な話を公開講演で行うとともに、学会で研究発表を行い、その一部を論文の形で公表した。まず、宗教については、「動物犠牲」というギリシア宗教の最も核心的な問題を、文学部の公開講演という形で二度行った。法に関しては、課題2とも関連するが、「名誉」をめぐる法的、社会的対応を、ギリシア・ローマから現代日本までをふくめて、包括的にあつかった論文およびそのもとになる研究発表を行った。
- 2 課題2に関して、特にプラトンの「立法者」という概念、「違法性」、「妥当性」という一般的概念をめぐるギリシア法の対応について学会発表を行い、論文を公表した。プラトンの『法律』の購読を継続して行っている。
- 3 課題3に関して、2014、2015年度は「他分野交流演習」を大学院オムニバス授業として開始した。この授業は今後も継続する予定である。

d 主要業績

(1) 編集

葛西康德他編『法律学小辞典第五版』、有斐閣、法制史関係項目全体責任編集ほか担当項目「ディケー」「ノモス」「弁論術」「立法者」執筆、2016.3刊

(2) 論文

葛西康德、「ヒュブリスと名誉毀損—古代ギリシア・ローマにおける情報の一側面」『知的財産・コンピュータと法—野村豊弘先生古稀記念論文集』、商事法務、2016.3刊、1039-1074頁

葛西康徳、「プラトンの『法律（ノモイ）』における教育について—特にスポーツとジェンダーの視点から—」『スポーツとジェンダー研究』13号、100-110頁、2015.3刊

葛西康徳、「憲法は変えることができるか—古代アテネの場合」長谷部恭男編『この国のかたちを考える』、岩波書店所収、63-99頁、2014.11刊

葛西康徳、査読有「はじめに—海を渡ったローマ法—」（特集 法典化の19世紀—(ポスト)コロニアル・パーステクティブ）19世紀学研究8号、p.5

(3) 書評

葛西康徳、仲手川良雄『古代ギリシアにおける自由と社会』（創文社2014刊）、『法制史研究65巻』、成文堂、2016.3刊、260-265頁

葛西康徳、古山夕城著「アルカイック期クレタにおける法碑文のコスモロジー—形式・形態分析と現象論—」、『法制史研究』64巻（2014）、成文堂、465-469頁、2015.3刊

(4) 小論

葛西康徳、「東京大学草創期の授業再現」『他分野交流プロジェクト研究ニューズレター』75号（2015.3.12）ページ記載なし

葛西康徳、「東京大学草創期の授業再現2」『他分野交流プロジェクト研究ニューズレター』76号（2015.2.18）ページ記載なし

(5) 学会発表

国際、「Hybris and Defamation in Greek and Roman Law」, Edinburgh Law and Classics Seminar, August 2015, Schools of Arts and Law, University of Edinburgh

国際、「Defamation in Roman Law and Japanese Law」, Girton College, September 2015 University of Cambridge

国際、「The Idea of Lawgiver or Legislator in Greek and Roman Law」, Conference Southern African Legal Historians, October 2015, Sun City, South Africa

日本宗教学会学術大会パネル「ローマ帝国における諸民族と宗教」、報告テーマ「ローマ法と宗教」、2014.9.3

(6) 研究会報告

九州大学ローマ法コロキウム報告「Hybris and Defamation in Greek and Roman Law」（2016.2.12-13）、（招待報告）コロキウム題目 Messages from the Antiquity.

How can Roman Law contribute to the Current Debate in Law?

東京大学学長裁量経費研究会「サステナビリティ研究会」、千葉県林景荘、2016.2.23-24

「法のサステナビリティ」、求道会館、2016.3.30

(7) 総説・総合報告

東京大学文学部 公開講座、第6回「古代ギリシア教に改宗できるか。」、2015.6.27

東京大学文学部附属常呂研究所講演会「古代ギリシアの動物犠牲」、2014.10

(8) 共同研究・受託研究

科学研究費基盤研究(A)(一般)(H25~H28)「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」(分担)(研究代表者:市川裕)

科学研究費基盤研究挑戦的萌芽研究(H24~H26)「コモン・ローとヒンドゥー法の邂逅—ウィリアム・ジョーンズ研究」(代表)

科学研究費基盤研究(B)(一般)(H23~H26)「ギリシア・ローマ民事訴訟再検討—裁判手続と法廷弁論—」(代表)

科学研究費基盤研究(C)(一般)(H23~H25)「ミクスト・リーガル・システム論による日本法の比較法的再定位—条理、名誉毀損、信託」(分担)(研究代表者:松本英実)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

2014年度

大妻女子大学「法律と現代社会」非常勤講師(2単位)

津田塾大学「ラテン語」非常勤講師(4単位)

新潟県農業大学校「くらしと法律」非常勤講師(2単位)

2015年度

大妻女子大学「法律と現代社会」非常勤講師(2単位)

津田塾大学「ギリシア語」非常勤講師(4単位)

千葉大学法科大学院「法制史」非常勤講師 (2 単位)

(2) 学会

「日本西洋古典学会(委員)」 「日本法制史学会」 「日本宗教学会」 「19 世紀学学会」
「法とコンピュータ学会(理事)」

The Hellenic Society, The Selden Society, World Society of Mixed Jurisdiction Jurists

International Academy of Comparative Law (Associate member)

(3) 行政

北陸信越地方交通審議会船員部会公益委員

(4) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

日本学術会議連携会員

新潟大学超域学術院運営委員会委員

18 フランス語フランス文学

教授 月村 辰雄 TSUKIMURA, Tatsuo

1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部卒業（フランス語フランス文学）
1976年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）
1977年10月	パリ高等学術研究院博士課程（フランス政府給費留学、～80年9月）
1979年10月	パリ第3大学東洋語東洋文化研究所講師（日本語科、～80年9月）
1981年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学（仏語仏文学）
1981年4月	同 文学部助手（フランス語フランス文学）
1986年4月	獨協大学外国語学部専任講師（フランス語科）
1989年4月	東京大学文学部助教授（フランス語フランス文学）
1995年1月	同 教授（フランス語フランス文学）
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科教授（仏語仏文学）
2000年4月	同 文化資源学研究専攻（文書学専門分野）に配置換
2014年4月	同 フランス語フランス文学専門分野に配置換

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス文学（中世文学、ルネサンス文学）
文化資源学（書物史、ヨーロッパ図書館史）

b 研究課題

(1) マルコ・ポーロ研究

マルコ・ポーロ『東方見聞録』の中世フランス語本、イタリア方言本、ラテン語本等の比較研究。

(2) 中世西ヨーロッパのアジア観についての研究

『アレクサンドロス大王物語』、とりわけその一枝篇「アレクサンドロス大王の楽園への旅」、プレスター・ジョンの手紙、カルビーニ、ルブルク、オドリコ等の東方旅行記録、ハイトンの地誌、マンドヴィルの架空旅行記など、12～14世紀のヨーロッパの東方記述の総体を対象に、中世西ヨーロッパのアジア観についての研究を進めている。

(3) レトリック教育史研究

古典修辞学が古代ギリシア以降、19世紀末のフランスに至るあいだ、どのように学校教育の中で教えられてきたのかという問題を、とりわけディスクールの様々な型を教える初等教科書『プロギュムナスマタ』を中心に研究している。

(4) 明治期の演説研究

レトリックの歴史に関連して、文化資源学においては、明治初頭の日本にヨーロッパのどのようなレトリック教本が移入され、それがどのように理解、ないしは誤解されて、自由民権運動とともに盛んになった演説の中に取り入れられたのかを研究している。

c 概要と自己評価

(1)については、2002年に岩波書店から刊行された『東方見聞録』フランス語写本の翻訳を全面的に手直しし、普及版を2012年5月に刊行。また、原本に近いとされるフランコ・ヴェネチアン版をもとに、そこに中世フランス語本、ヴェネチア方言本、トスカナ方言本、ラテン語本との校合結果を盛り込んだ翻訳を準備中。

(2)については、13～14世紀の西ヨーロッパのアジア観を、庶民レベルにおけるTO図による理解、アリストテレスなどのテキストに基づく大学知識人層の理解、布教・商業活動などで現実のアジアに触れた理解の3つのレベルに分けて研究を進めている。2015年度には、(1)との関連を日仏美術学会において発表した。

(3)については、2012年度日本フランス語フランス文学会春季大会において同趣旨のワークショップを主催した。

(4)については、「明治の演説」の原稿を準備中。また、2014年度には、パリ大学と東京大学における文学部の形成過程について講演した。

d 主要業績

(1) 学会発表、テーブル・ロンドなど

講演「文学部の誕生」、北海道大学大学院文学研究科／文学部講演会（担当、西洋文学講座、竹内教授）、2014年10月17日、北海道大学文学研究科／文学部

発表『アレクサンドロス大王物語』と『東方見聞録』——テキストの限界・挿絵の限界、日仏美術学会第137回例会、2015年12月19日

教授 中地 義和 NAKAJI, Yoshikazu

1. 略歴

1976年3月 東京大学教養学科（フランスの文化と社会）卒業
1979年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）
1982年10月 パリ第三大学東洋語東洋文明研究所講師（～'83年9月）
1985年12月 同 第三期課程博士（フランス文学・19世紀部門）
1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（仏語仏文学）単位取得のうえ退学
1986年4月 同 教養学部助手
1988年4月 同 助教授
1992年4月 同 文学部助教授
1995年4月 同 大学院人文社会系研究科助教授
1996年2月 同 教授、現在にいたる
2004年4月
～2006年3月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長・東京大学教育研究評議員
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（～2013年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近代詩。フランス現代文学の諸相

b 研究課題

- (1) ランボー『地獄の一季節』の、主題論的、ジャンル論的視点からの再検討。
- (2) 『ランボー詩選』仏日二カ国語版の準備。
- (3) ボードレール散文詩の生成論的、主題論的研究。
- (4) 現代作家ル・クレジオの形成における記憶と想像力、自伝とフィクションの関わりの研究。

c 概要と自己評価

(1)は、長年の課題で現在も続行中。ヴェネツィアの国際学会での発表が論集に収録された（論文6番目）。ラップオン社刊行の『ランボー辞典』の最長項目の一つ「地獄の季節」« Une saison en enfer »の執筆を担当した。また日本におけるランボー翻訳の意義と問題点を、東京（日本語）とパリ（フランス語）のシンポジウムで発表し、後者が論集に収録された（論文4番目）。

(2)は、目下進行中。2016年度中の刊行を目指している。

(3)については、『パリの憂鬱』における「隣み」と「利己性」の独特のかかわりを考察した論文を発表した（論文2番目）。

(4)については、自伝的性格の濃い重要な小説『隔離の島』（翻訳を担当、2013年刊）をめぐるボルドー大学での講演が、論集に収録された（論文5番目）。また、ル・クレジオ氏を招いて開催した対論形式の講演が、文芸誌に掲載された（論文1番目）。国際研究誌『ル・クレジオ手帖』の要請で、日本におけるル・クレジオの受容と研究についてインタビュー形式で総括した（論文3番目）。

d 主要業績

(1) 論文

中地義和、「文学創造における記憶と想像力——ル・クレジオとの対話」、『文學界』、第68巻第4号、2014.4、pp.222-241.

Yoshikazu Nakaji, « La poétique de la charité et ses limites », *Lire Le Spleen de Paris de Baudelaire*, André Guyaux et Henri Scepi (dir.), Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2014.11, pp.113-124.

Yoshikazu Nakaji, Isa Van Acker, « Entretien avec Yoshikazu Nakaji : la traduction et la réception de J.-M.G. Le Clézio au Japon », *Les Cahiers J.-M.G. Le Clézio*, n° 7, 2014.11, pp.167-178.

Yoshikazu Nakaji, « La poésie d'une langue à l'autre : recherche, traduction, réinvention », *Nichifutu Bunka, revue de collaboration culturelle franco-japonaise*, n°84, 2015.3, pp. 221-227.

Yoshikazu Nakaji, « Mémoire et imagination : l'euphorie dans 'le cycle mauricien' de Le Clézio », *Modernités*, 39 : « Littérature et jubilation », Textes réunis et présentés par Éric Benoit, Presses universitaires de Bordeaux, 2015, pp.347-369.

Yoshikazu Nakaji, « Rimbaud autocritique », *Rimbaud poéticien*, sous la direction d'Olivier Bivort, Éditions Classiques Garnier, 2015, pp.91-99.

(2) 辞書項目執筆

Yoshikazu Nakaji, « Une saison en enfer », *Dictionnaire de Rimbaud*, sous la direction de Jean-Baptiste Baronian, Robert Laffont, coll. « Bouquins », 2014, pp. 668-678

(3) 書評

中地義和、「幼年という磁極」（古井由吉、『鐘の渡り』、新潮社）、『群像』、69-6、2014.6、pp. 320-321.

中地義和、「文学こそは最大の重要事」（二宮正之、『文学の弁明』、白水社）、『ふらんす』、第90巻6号、2015.6、p.73.

(4) 解説

中地義和、「訳者あとがき」、『嵐』（作品社刊）、2015.10、pp. 240-255

(5) 学会発表

国内、中地義和、「言語を移り住む詩——研究、翻訳、再創造」、シンポジウム「フランス的知性の今?」、東京日仏会館、2014.4.3

国外、Yoshikazu Nakaji, La poésie d'une langue à l'autre : recherche, traduction, réinvention、シンポジウム「L'avenir des échanges franco-japonais en sciences humaines et sociales」 「人文社会系諸学における日仏交流の未来」、パリ、日本文化会館、2014.6.7.

国内、中地義和（ほか四名）、「フランス文学研究・翻訳の現在」、日本フランス語フランス文学会秋季大会におけるラウンド・テーブル、広島大学、2014.10.24.

国外、La poétique de la charité et ses limites（慈愛の詩学とその限界）、パリ第四（ソルボンヌ）大学における国際コロンク（Journées d'étude sur *Le Spleen de Paris* de Baudelaire）、2014.12..5-6

(6) 啓蒙

中地義和、「映像がとらえた奈良ゆみ」、奈良ゆみソプラノリサイタル「それぞれの故郷、心が生まれるところ、帰るところ」、p.4、2015.6

(7) 翻訳

中地義和、個人訳、Jean-Marie Gustave Le Clézio, "Tempêtes. Deux novellas", ル・クレジオ、『嵐』、作品社、2015.10、239p.

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会員

国際フランス研究学会員

国際ランボー研究誌「パラッド・ソヴァージュ」(*Parade sauvage*) 学術委員

「ボードレー年鑑」(*L'Année Baudelaire*) 編集委員

「クリティーク」誌 (*Critique*) 国際審査委員

「ランボーの友」誌 (*Les Amis de Rimbaud*) 日本通信員

(2) 行政

人文社会系研究科・文学部学術奨励委員会委員長 (2015.4.1-)

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
1981年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
1985年4月	東京大学大学院人文科学研究科専攻博士課程進学
1985年9月	パリ第3大学博士課程（～1989年3月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
1989年4月	東京大学文学部助手
1990年4月	一橋大学法学部専任講師
1993年4月	一橋大学法学部助教授
1997年5月	一橋大学大学院言語社会研究科助教授
2000年4月	東京大学大学院総合科学研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授、現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

ジェラルール・ド・ネルヴァルの作品を中心とするフランス・ロマン主義文学。フランス現代小説、映画論。

b 研究課題

- (1) フランス・ロマン主義文学における「作者」像の成立と変容。
- (2) フランス19世紀文学史の再検討。
- (3) フランス現代小説における「作者」像の解体と再生。
- (4) フランス映画における「作家主義」の再検討。

c 概要と自己評価

- (1) については、科学研究費を得て、18世紀文学やロマン派音楽の研究者も含む横断的、複眼的な探求を試みた。その成果の一端を刊行することができた。
- (2) については、(1)の研究と連動しつつ、とりわけジェラルール・ド・ネルヴァルをその結節点とするようなロマン主義的ポエジーと小説的リアリズムの相互関係の考察を深めつつある。
- (3) もまた、(1)および(2)と緊密に関連する主題であり、総合的な論考に発展させていきたいと考えている。さしあたり、作者の「死」と「再生」の寓話として興味深いミシェル・ウエルベックやジャン＝フィリップ・トゥーサン作品の翻訳紹介を行うことができた。対比的に、日本現代文学における語りと作者の関係性の変容にも関心を払っている。
- (4) に関しては、アジアとフランス映画の関わりを考察し、共同論集および単著を刊行することができた。引き続き、ヨーロッパ映画と移民の問題をめぐる共同論集を企画中である。

d 主要業績

(1) 著書

- 共編著、秋山聰・野崎敏編、『シリーズ人文知 2 死者との対話』、東京大学出版会、227 頁（野崎敏「シリーズ刊行にあたって」、i-iii; 頁 野崎敏『『死者との対話』とは何か——ロラン・バルトからシャトーブリアンへ』、1-19 頁）、2014.11
- 単著、野崎敏、『谷崎潤一郎と異国の言語』、中央公論社、中公文庫、2015.4
- 単著、野崎敏、『アンドレ・バザン 映画を信じた男』、春風社、220 頁+7 頁、2015.6
- 共編著、野崎敏、渋谷哲也、夏目深雪、金子遊、『国境を超える現代ヨーロッパ映画 250 移民・辺境・マイノリティ』、河出書房新社、328 頁、2015.10
- 編訳書、『バルザック』野崎敏編、編集協力博多かおる、集英社ポケットマスターピース第3巻、787 頁（「幻滅抄」411-477 頁、「解説」719-732 頁）、2015.12

(2) 論文

- 野崎敏、「作者と訳者の境界で ロラン・バルトから森鷗外へ」、日本近代文学会関西支部編『作家／作者とは何か テキスト・教室・サブカルチャー』和泉書院、113-128 頁、2015.11
- 野崎敏、「大いなる遺産 プルーストと現代フランス小説」、明治学院大学言語文化研究所『言語文化』、第32号、181-198 頁、2015.3

野崎敏、「悲劇の啓示 フォークナーと第二次大戦後のフランス」、『フォークナー』、第 17 号、松柏社、4-12 頁、2015.4

野崎敏、「魚を尊ぶひとの芸術 井伏鱒二小論」『すばる』第 38 巻第 2 号、214-227 頁、2016.2

野崎敏、「映画によるジャンヌ・ダルク クローデルからロッセリーニへ」、『日仏文化』、第 85 号、90-99 頁、2016.3

(3) 書評

保莉瑞穂『恋文 バリの名花レスピナス嬢悲話』書評、『日本経済新聞』朝刊、2014.8.31

「イレヌ・ネミロフスキーの邦訳小説四冊を読む」、『図書新聞』、3174 号、1-2 面、2014.9.13

「ディストピアを悦ばしく生きる 多和田葉子『献灯使』」、『群像』、第 69 巻第 12 号、306-307 頁、2014.12

「だれも目にしたことのない京都——黒川創『京都』」、『新潮』、第 112 巻第 1 号、336-337 頁、2015.1

「矢作俊彦『フィルムノワール/黒色影片』」、『日本経済新聞』朝刊、2014.1.11

中条省平『恋愛書簡術』解説、中公文庫、265-271 頁、2014.2

菅野昭正『小説家大岡昇平』書評、『北海道新聞』朝刊、2015.3.15

ポール・ベニシュ『作家の聖別』書評、『週刊読書人』、第 3089 号、2015.5.15

「歓待の精神 内田洋子『イタリアのしっぽ』」、『すばる』、第 37 巻第 7 号、415 頁、2015.7

「名作のみずみずしい新訳 フローベール『感情教育』」、『ふらんす』、第 90 巻第 5 号、72 頁、2015.7

芳川泰久『謎解き「失われた時を求めて」』書評、『週刊読書人』、第 3102 号、2015.8.14

パトリック・モディアノ『あなたがこの辺りで迷わないように』書評、『北海道新聞』朝刊、2015.8.30

「ミシェル・ウエルベック『服従』』書評、『日本経済新聞』朝刊、2015.10.25

アンドレ・バザン『オーソン・ウェルズ』書評、『週刊読書人』、第 3127 号、2016.2.12

佐々木敦『ゴダール原論』書評、『日本経済新聞』朝刊、2016.2.28

(4) 学会発表

国際、Jean-Philippe Toussaint, Marianne Kaz, John Lambert, Kan Nozaki, 「Table ronde : Un auteur et ses traducteurs」(フランス文芸家協会主催)、Paris, l'Hotel de Massa、2014.6.3

国際、Kan Nozaki, 「Au-dela de l'orientalisme : Nerval a la lumiere de Said」、『Nerval : histoire et politique』(パリ大学主催)、Paris, Archives Nationales、2014.6.6

国内、野崎敏、「歌声と回想——ルソー、シャトーブリアン、ネルヴァル」、シンポジウム「声と文学」、東京大学文学部仏文研究室主催、文学部第 1 号館 315、2014.9.27

国内、中村文則×野崎敏「創作と翻訳の罪と悦楽」、主催：静岡大学翻訳文化研究会(日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「翻訳の倫理をめぐる総合的研究」(課題番号 24617006)による研究成果公開イベント)、静岡県男女共同参画センターあざれあ、2014.12.14

(5) 啓蒙

野崎敏、「映画の源泉としてのこども」、土田環編『こども映画教室のすすめ』、春秋社、207-228 頁、2014.5

Kan Nozaki, 「The New Questions Concerning the Golden Age of Japanese Cinema」、『Japanese Book News』(国際交流基金文化事業部)、第 80 号、2-3 頁、2014 夏

野崎敏、「文学部と人文知の挑戦」、『UP』、第 43 巻第 10 号、通巻 504 号、1-4 頁、2014.10

野崎敏、「ノーベル文学賞 パトリック・モディアノ氏に寄せて」、読売新聞朝刊、2014.10.13

野崎敏、「パトリック・モディアノ 星から届く光」、『ふらんす』、第 90 巻第 1 号 1 月号、12-14 頁、2015.1

野崎敏、「ウエルベックの涙」、『ふらんす 特別編集 シャルリ・エブド事件を考える』、20-22 頁、2015.3

野崎敏、「愛に目覚めよ! 感じるフランス文学。」、『Figaro Japon』、第 466 号、214-219 頁、2015.4

Kan Nozaki, 「Japan's Love」、『Worth Sharing : A Selection of Japanese Books Recommended for Translation』(国際交流基金文化事業部)、第 13 号、2-3 頁、2015.3

野崎敏、「野崎敏インタビュー 異邦を求める文学」、『文藝別冊 谷崎潤一郎』、河出書房新社、39-47 頁、2015.2

野崎敏、「群像新人文賞 選評」、『群像』、第 70 巻第 6 号、96-97 頁、2015.6

野崎敏、「大江文学は愛に満ちている」、『日本文学全集 22 大江健三郎』月報、河出書房新社、2015.6

野崎敏、「ルノワールと素晴らしい助監督たち」、『ピクニック』デジタルリマスター版プログラム、クレストインターナショナル、11-12 頁、2015.6

野崎敏、「日仏翻訳文学賞 20 年のあゆみ」、『ふらんす』、第 90 巻第 7 号、12-13 頁、2015.7

野崎敏、「この人を見よ バフマン・ゴバディ監督『サイの季節』」、『すばる』、第 37 巻第 8 号、370-371 頁、2015.8

鼎談・野崎敏、四方田犬彦、中条省平「映画論を超えた「事件」——バザンの潜在的可能性を顕在化させる試み 野崎敏『アンドレ・バザン』(春風社)をめぐる」、『図書新聞』、第 3218 号、2015.8.8

- 野崎敏、「出口裕弘に導かれて」、『新潮』、第112巻第10号、224-225頁、2015.10
- 野崎敏、「悲しみのヌーヴェル・ヴァーグ ジーン・セバーグ」、『キネマ旬報』、1702号、通巻2516号、46-47頁、2015.11
- 野崎敏、「離陸の楽しみ パスカル・フェラン監督『バードピープル』」、『すばる』、第37号第11号、338-339頁、2015.11
- 野崎敏、「わがネルヴァルのシリア」、『ふらんす特別編集 パリ同時テロ事件を考える』、13-15頁、2015.12
- 野崎敏、「2015 私の3冊」、『東京新聞』夕刊、2015.12.27
- 野崎敏、「フランスにイスラム政権が!? 問題作『服従』の挑発」、『文藝春秋 SPECIAL』、第10巻第1号、178-183頁、2016.1
- 野崎敏、「ジャンプするエリック・サティ」、『ユリイカ』、第47巻第18号、86-88頁、2016.1
- 野崎敏、「世界文学への扉 バルザック」、『青春と読書』、第51巻第1号、通巻474号、62-65頁、2016.1
- 野崎敏、「音楽について」、『星座』、かまくら春秋社、第26号、22-23頁、2016.1
- 野崎敏、「シャルリー・エブド事件から一年」、『読売新聞』夕刊、2016.1.13
- 野崎敏、「ブリュッセルを爆破するべきか? ジャン＝フィリップ・トゥーサンからのメッセージ」、『早稲田文学』、第10次、第14号、通巻第1018号、192-195頁、2016春
- 辻原登・野崎敏対談「二十一世紀の翻訳文学の新たな誕生」、『青春と読書』、第476号、58-63頁、2016.3
- 野崎敏、「オーケストラは世界をつなぐ エディ・ホニグマン監督『ロイヤル・コンサートへボウ・オーケストラがやってくる』」、『すばる』、第38巻第2号、372-373頁、2016.2

(6) 翻訳

- 個人訳、Michel Houellebecq、Lanzarote、ミシェル・ウエルベック著、野崎敏訳、『ランサローテ島』、河出書房新社、78頁、2014.5
- 共訳、Andre Bazin、Qu'est-ce que le cinema?、アンドレ・バザン著、野崎敏、大原宣久、谷本道昭訳、『映画とは何か(上・下)』、岩波文庫、上巻369頁、下巻284頁+21頁、2015.2、2015.3
- 個人訳、Michel Houellebecq、La Carte et le territoire、ミシェル・ウエルベック著、野崎敏訳、『地図と領土』、ちくま文庫、462頁、2015.10

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会員

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

小西国際交流財団、日仏翻訳文学賞選考委員長
講談社、群像新人文学賞選考委員

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
 1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学
 1988年10月 パリ第12大学博士課程（～1991年9月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
 1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
 1992年4月 東京大学文学部助手
 1994年4月 白百合女子大学文学部専任講師（フランス文学）
 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（フランス語フランス文学）
 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（フランス語フランス文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近代文学。

b 研究課題

- (1) ポール・ヴァレリー研究。「夢」というトポス、断章という形式からの検討。
 (2) クレオール文学研究。エキゾティシズムとは無縁の、活力にあふれたその作品美学の研究を、シャモワゾー、コンフィアン、グリッサンなどの作品読解を通して進めている。
 (3) 20世紀フランス文学における散文の研究。小説全盛の19世紀とは異なり、20世紀には、詩的強度を備えたさまざまな散文作品が書かれるようになった。とりわけ、時間意識、さらにイメージの活用法という視点から、その特質の一端を捉えようと試みている。

c 概要と自己評価

(1)については、長年の課題として研究を続けている。「夢」というテーマをめぐってヴァレリーとブルーストを比較検討した。またヴァレリーが写真とどのように関わったかを論じ、その視点を発展させて、20世紀後半のオートフィクションと呼ばれる一群の作品における写真の使い方を考察した。さらに、石川淳がどのようにヴァレリーを受容したか、またヴァレリーの初期作品がどのように日本で翻訳されたか等を論じ、ヴァレリーと日本文学との関わりに関する研究を始めている。

(2)については、グリッサンの大著『カリブ海のディスクール』を共訳で翻訳し、現在校正中である。クレオール文学で得られる視点を、どのようにフランス文学全体に関係させることができるかを検討中である。

(3)については、〈声〉という視点から、20世紀フランス文学における散文についてどのような視点を構築できるか、共同研究のプロジェクトを進めた。現在論文集が印刷中であり、その成果を近々問う予定である。

d 主要業績

(1) 論文

塚本昌則、「ヴァレリーと石川淳——〈精神〉をめぐって」、『日仏翻訳交流の過去と未来——来るべき文芸共和国に向けて』西永良成・三浦信孝・坂井セシル編、p.59-77、2014.11

塚本昌則、「まどろみの詩学——ブルーストとヴァレリーにおける夢」、『言語文化』明治学院大学言語文化研究所、n.32、p.59-77、2015.30

塚本昌則、「ヴァレリーと写真」、『詩とイメージ——マラルメ以降のテキストとイメージ』マリアンヌ・シモン＝及川編、水声社、2015.6、p.213-226

塚本昌則、「オートフィクションと写真——〈本物〉とは異なる価値観形成に向けて」、『〈生表象〉の近代——自伝・フィクション・学知』森本淳生編、水声社、2015.10、p.409-426

(2) 書評

ダニー・ラフェリエール、『甘い漂流』、『吾輩は日本作家である』、藤原書店、『週刊読書人』、2014.11

トドロフ、『ゴヤ——啓蒙の光の影で』、法政大学出版局、『ふらんす』、2014.12

2014年回顧・外国文学（フランス）、『週刊読書人』、2014.12

ジャン＝ポール・サルトル『家の馬鹿息子4 ギュスターヴ・フローベール論（1821年より1857年まで）』、『週刊読書人』、2015.7.24

2015年回顧・外国文学（フランス）、『週刊読書人』、2015.12.18

(3) 学会発表

国内、塚本昌則、「〈精神〉について——ヴァレリーの翻訳を中心に」、日仏シンポジウム「日仏翻訳交流の過去・現在・未来」(Traductions France / Japon- histoire, actualité, perspectives)、日仏会館、2014.4.20

国内、塚本昌則、「プルーストの夢、ヴァレリーの夢」、「プルーストと20世紀」(明治学院大学主催のシンポジウム)、明治学院大学、2014.5.10

国内、塚本昌則、「声、夢、ブントゥム——ヴァレリーの「内的対話」を通して」、「声と文学——インデックスとイリュージョン：それは誰の声か」(東京大学文学部仏文研究室主催)、東京大学文学部、2014.9.27

国外、Masanori Tsukamoto, « Valéry et le quotidien - une poétique de l'interruption » (ヴァレリーと日常生活——中断の詩学), リヨン高等師範学校主催の研究集会« Arts et quotidien en France et au Japon : approches du contemporain »における発表、2015.9.25

国内、Masanori Tsukamoto, « Barthes et la violence du Neutre » (バルトにおける中性的なものの激しさ), 青山学院大学主催の国際研究集会 « Roland Barthes, l'écriture et la vie »での発表、2015.11.9

国外、Masanori Tsukamoto, « Variations sur un paradoxe de Valéry : les éditions japonaises de "Teste" et de "Léonard" » (ヴァレリーのパラドックスをめぐる変奏——「テスト氏」と「レオナルド」の日本語翻訳をめぐる), Fondation Singer-Polignac (Université Paris-Sorbonne, Université Paris Ouest, Item 共同開催)での国際研究集会« Paul Valéry, 70 ans après » (2015.11.26-27)での発表、2015.11.27

国内、「三島由紀夫と非人間の詩学」、青山学院大学主催の国際研究集会《日常とは何か、西欧の場合、日本の場合》« Approches du quotidien au Japon et en occident »(2015.12.5-6)での発表、2015.12.6

(4) 総説・総合報告

港千尋・塚本昌則、「存在しない写真へのまなざし」、『マルグリット・デュラス——生誕100年 愛と狂気の作家』、p.88-100、2014.9

塚本昌則、「思想の言葉——モンテーニュ再読」、『思想』、2016.2、p.2-6

(5) 翻訳

個人訳、Catherine Clément, "Lévi-Strauss", 塚本昌則、カトリーヌ・クレマン『レヴィ＝ストロース』、白水社 文庫クセジュ、2014.4

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会員

19 南欧語南欧文学

教授 **長神 悟** NAGAMI, Satoru

1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部言語学専修課程卒業
1977年3月	同 大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了
1977年4月	同 博士課程～79年3月
1977年11月	ピサ高等師範学校留学（イタリア政府給費留学生）～78年10月
1978年11月	フィレンツェ大学文学部留学～79年3月
1979年4月	東京大学文学部助手
1983年4月	成城大学文芸学部専任講師
1990年4月	同 助教授
1991年4月	東京大学文学部助教授（イタリア語イタリア文学）
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授（南欧語南欧文学）
1996年4月	同 教授（南欧語南欧文学）
2016年3月	同 停年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

イタリア語学、ロマンス語学

b 研究課題

イタリア語史上の諸問題、とりわけ「言語問題」に関する検討

c 概要と自己評価

概要

- 1) イタリア語史上の諸問題の解明を目指す。近年はことに語形成や語源学・語彙史の分野に関心を寄せている。また、大学院の演習などを通じ、イタリア語史上重要な「言語問題」(Questione della lingua)を歴史的に跡づける作業を行なっている。
- 2) ロマンス語学の観点からイタリア語の特質を検討する。

自己評価

上の1)で触れた「言語問題」に関して近年、大学院の演習において、イタリアで出版された最古のイタリア語文典であるG.F.フォルトゥニオの*Regole Grammaticali della volgar lingua* (Ancona, 1516)、またその9年後に刊行され、*Regole* よりはるかに大きな反響を呼んだP. ベンボの主著*Prose della volgar lingua* (Venezia, 1525)を取り上げ、さらに2007年度以降、P.ジャンブッラーリ(1495-1555)やL.サルヴィアーティ(1540-1589)の著作を講読しているが、今後もしばらく16世紀のイタリアの言語論争について検討を進め、この分野に関する理解を深めたい。

d 主要業績

(1) 会議主催(チェア他)

国内、「日本ロマンス語学会第52回大会」、主催、京都外国語大学外国語学部、2014.5.31～2014.6.1

国内、「Donatella Puliga 氏講演会」、主催、東京大学文学部南欧文学研究室、2014.10.23

国内、「日本ロマンス語学会第53回大会」、主催、東京外国語大学、2015.5.23～2015.5.24

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、成城大学大学院文学研究科、「歴史言語学研究」、2014.4～2016.3

非常勤講師、京都大学文学部・大学院文学研究科、「16世紀イタリア文法家論」、2015.9

(2) 学会

国内、日本ロマンス語学会、会長・理事・編集委員、2014.5～

1. 略歴

1982年3月	東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業
1984年3月	同 文学部イタリア語イタリア文学専修課程卒業
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程進学
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程中途退学
1988年4月	東京芸術大学音楽学部一般学科専任講師
1990年4月	同 助教授
1994年4月	東京大学文学部南欧語南欧文学科助教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授
2010年4月	同 教授、現在に至る。

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

(ダンテを中心とした) イタリア文学、中世オック語文学

c 概要と自己評価

概要

『ダンテ研究 I』(東京、東信堂、1994年)以降も、『神曲』以前のダンテ、恋愛詩人としてのダンテを研究の中心に据え、1230年頃からホーエンシュタウヘン家の宮廷で花開いたシチリア派の詩人たちや、それに続くシチリア・トスカーナ派の詩人たちについての知識を深め、さらには南仏トルバドールたちの詩に対する理解を深めること。ダンテは少なくとも8名のトルバドールに言及しており、そのうちアルナウト・ダニエルを「煉獄篇」第26歌に登場させるに際しては、わざわざオック語で語らせるという念の入りようである。そのため、ダンテとトルバドールとの関係に対する興味が現在では次第に大きくなりつつある。また、恋愛詩の伝統はペトラルカをへて、時と地域、個性の壁を超越した一種の文学的コイナーを形成してゆくと、ダンテ以降の恋愛詩をも視野に含めるよう努め、ダンテの受容史という観点から、その最初の崇拜者ともいべきボッカチオおよび騎士道物語詩(とりわけタッソ)にも関心を寄せている。

自己評価

『神曲』とも対照させながら、『キタ・ノワ』に収録された韻文のスタイルの変化を跡づけることが現在の主要な課題であるが、文体を問題とする困難な研究は少しずつ前進を続けている。トスカーナ地方の文学(とりわけダンテ)がアペニン山脈以北の地方、たとえばボローニャを中心としたエミリア・ロマーニャ地方や、パドヴァ、ヴェネツィア、トレヴィーゾなどを含むヴェネト地方でどのように受容されたかについても知見を深めるべく努めている。教育面では、現在、効果的な文学史教育を模索中であるが、必要な講義資料の整備を進めつつ、19-20世紀の作家にとり組んでいる(2011年度より引き続き、リソルジメント期の作家を主題として発展中である)。すでに中世オック語入門に関してはルーティーン化が完了したといってよい状況だが、入門を終えた後の教育体制の改善は中断している。また、イタリアの「詩的言語」の特徴を語学的な観点から体系的に教育すべく案を練っている。

d 主要業績

(1) 論文

- Kazuaki Ura (浦一章)、「Tre note per Guido Guinizzelli, Nicolò de' Rossi e Giovanni Quirini」、『Letteratura italiana antica』、XV、199-222頁、2014.2
- 浦一章、「3つの覚書——グイニッツェッリ、ニコロ・デ・ロッシ、ジョヴァンニ・クイリーニ」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、VII、3-65頁、2014.4
- Kazuaki URA (浦一章)、「Giovanni Quirini, lettore “sintagmatico” di Dante, Rime, LXVII e LXVIII」、『Lingue testi culture. L'eredità di Folena vent'anni dopo. Atti del XL Convegno Interuniversitario (Bressanone, 12-15 luglio 2012)』、Quaderni del Circolo filologico linguistico padovano, 28、349-369頁、2014.7

Kazuaki URA (浦一章)、『Il genere *Renga* e l'autorialità plurima』、『L'autorialità plurima. Scritture collettive, testi a più mani, opere a firma multipla. Atti del XLII Convegno Interuniversitario (Bressanone, 10-13 luglio 2014) [= Quaderni del Circolo filologico linguistico padovano, 30]』、319-34 頁、2015.7

(2) 学会発表

国際、Kazuaki URA (浦一章)、「Nascita, sviluppo e prassi del *Renga*: un genere giapponese di autorialità plurima」、L'autorialità plurima. Scritture collettive, testi a più mani, opere a firme multipla、Bressanone, 10-13 luglio 2014、2014.7.12

(3) 翻訳

個人訳、チャールズ・S・シングルトン (Charles S. Singleton)、『キタ・ノワ試論』(*Essay on the Vita Nuova*) [第5章]、浦一章、『キタ・ノワ試論』[第5章]、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、VII、91-109 頁、2014.4

個人訳、エンリーコ・ディ・ボルボーネ、*Diario*、浦一章、「エンリーコ・ディ・ボルボーネ一行の九州滞在記」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、VII、111-208 頁、2014.4

(4) 史料

浦一章、「フェルディナンド・デ・メディチ大公子の蒐集活動に関する史料から(1)」、小佐野重利編『西欧 17 世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響』、2011-13 年度科学研究補助金基盤研究 [B] 報告書、課題番号 23320029、東京、東京大学大学院人文社会系研究科美術史研究室、2014 年、55-78 頁、2014.4

浦一章、「フェルディナンド・デ・メディチ大公子の蒐集活動に関する史料から(2)」、小佐野重利編『西欧 17 世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響』、2011-13 年度科学研究補助金基盤研究 [B] 報告書、課題番号 23320029、東京、東京大学大学院人文社会系研究科美術史研究室、2014 年、79-99 頁、2014.4

(5) 会議主催 (チェア他)

国内、「Furio Brugnolo 教授 (パドヴァ大学) 講演会」、主催、東京大学文学部南欧文学研究室 (2015.4.6 および 2015.4.9)、京都大学文学部イタリア文学研究室 (2015.4.16)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、集英社 (および東京大学文学部)、「恋愛における最大の悲しみ——ダンテと宮廷風恋愛の伝統」、2014.12

特別講演、群馬県立土屋文明記念文学館、「『神曲』に描かれた中世イタリア——ダンテ生誕 750 周年に寄せて」、2015.12

20 英語英米文学

教授 **高橋 和久** TAKAHASHI, Kazuhisa

1. 略歴

- 1973年3月 京都大学文学部英語英文学科卒業
- 1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（英文学）
- 1976年4月 岡山大学教養部助手
- 1977年4月 岡山大学教養部講師
- 1978年4月 愛媛大学法文学部講師
- 1981年4月 学習院大学文学部講師
- 1983年4月 東京大学教養学部助教授
- 1992年4月 東京大学文学部助教授
- 1994年12月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英文学

b 研究課題

いわゆるイギリス小説を主たる研究対象とし、そのなかでも、1) モダニズム文学とそれ以降の文学の特質の解明、2) モダニズム運動と連動した(新批評)以降に目覚ましい展開を見せた現代批評によって獲得されたように見える様々の知見を踏まえた小説技法とイデオロギーの分析、3) それと表裏一体の関係にある文学理論の有効性の検討、に関心を払うことによって、そこから必然的に派生する、4) 英文学の正典形成という古くて新しい、つまり厄介な問題に首を突っ込む羽目に陥っている。

c 概要と自己評価

上記のように自らの研究課題の概要を纏めてみることで自分が自己評価の産物であるに違いないにも拘わらず、改めてそれをしなければならぬとすれば、自己を正しく評価できない自分を殊更に前景化して、その克服が今後の課題であるかのように記せば、自己評価はそれに尽きるように思われる一方で、「教育活動」をはじめとする諸々の活動については、どうやら自己評価に及ばないか自己評価に馴染まないらしく、「研究活動」についてのみ自己評価を下すという姿勢の暗示するところを付度して、もう少し具体性を持った表現にしなければならないとすると、以下に掲げる「業績」は、むしろ「不行跡」に近いものではないかという不安を拭い去ることのできない2年間だったので、今後はそうした不安からの脱却を目指して頑張りたい、と殊勝な身振りで言うしかないのだけれども、同じ身振りを毎年のように繰り返すはずであるという確信に満ちた予感がわき上がってくる事実だけは否定できないのはどうしてかまで記す必要は流石にないだろう。

d 主要業績

(1) 著書

編著、海老根宏・高橋和久編著、『一九世紀「英国」小説の展開』、松柏社、2014.6

(2) 学会発表

国内、高橋和久、「小説における作中人物のふるまい」、東大英文学会総会、東京大学山上会館、2015.3.2

(3) 翻訳

監訳、ピーター・バリー、高橋和久・他訳『文学理論講義：新しいスタンダード』、ミネルヴァ書房、2014.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学、「近代英文学演習」、2014.4～2016.3

非常勤講師、上智大学、「英文学演習」、2014.4～2015.3

(2) 行政

文化庁第二回 JLPP 翻訳コンクール審査員、2015.10～2016.3

教授 **今西 典子** IMANISHI, Noriko

1. 略歴

1974年 3月 お茶の水女子大学文教育学部英文科卒業
1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1977年 3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程単位取得のうえ中途退学
1977年 4月 富山大学文理学部（改組後 人文学部）専任講師
1981年 4月 富山大学文理学部（改組後 人文学部）助教授
1982年 10月 お茶の水女子大学文教育学部 専任講師
1985年 11月 お茶の水女子大学文教育学部 助教授
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
1996年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／言語学

b 研究課題

「普遍文法と言語獲得理論研究」

さまざまな言語事象について、大人の文法だけでなく子供の文法に関する通言語的資料を検討・考察し、表現形式とそれが担う意味との対応を律する原理や習得過程を律する原理を実証的に解明し、統語論と意味論・語用論とのインターフェイスや言語機能と他の認知体系とのインターフェイスに課される制約を解明することにより、言語間変異と言語の習得可能性を妥当に説明しうる普遍文法の構築を模索する。

c 概要と自己評価

2014～2015年度は、統語論と意味論・語用論とのインターフェイスに課される制約の解明という問題に焦点をあてて、2つの共同プロジェクト研究を行った。ひとつは「こころの時間学」研究で、言語・哲学の研究者とともに、時間の言語表現化に係るさまざまな問題を考察・討議し、脳内での時間の表示について、脳科学研究者と実験的共同研究の準備を進めた。個人の研究としては、時制の解釈における生涯効果 (lifetime effects) について、英語において観察されている現象が日本語においてどのような様相を示すかについて検討した。「人」の生涯で取り立てて注目されるような事象については、生涯時間枠の中でその事象が初めて当てはまる年齢に焦点が当てられ、現実世界での生存期間の前後関係とは独立して、年齢という時間軸上に2つの事象の前後関係を位置付けて解釈されるが、英語と日本語では削除形式か否かという統語形式の相違が生涯効果という時制の意味・語用論的解釈に関与していることを明らかにした。今後の課題は、この現象に係る統語論と意味論・語用論とのインターフェイスに課される制約の解明とその制約から言語観変異がどのように生じるのかを説明することであり、研究成果は近く発表予定である。もうひとつは、否定あるいは反駁的バイアスを含む意味解釈を導く「修辭疑問」についての共同研究で、修辭疑問は統語形式としては多くの言語で純粋疑問の表現形式とほぼ同じ形式になりうるのになぜ異なる意味解釈が与えられるのかについて、統語構造と談話・語用的機能の相互作用を律するさまざまな制約を検討した。その中間報告として、日本語のような文タイプや発話行為に関係する文末表現が形態・統語的に顕在化する言語と英語のように顕在化しない言語では、言語運用上の要請を文法化する仕組みに違いがあることを共著論文にまとめた。これら2つの研究は、言語機能における‘the third factor’の解明に寄与するという意味において重要なものであり、今後の研究のさらなる深化が大いに期待されるものである。

d 主要業績

(1) 論文

今西典子、稲田俊明、「日英語の修辭疑問をめぐって：言語の普遍性と多様性の探索（1）」、『長崎大学言語教育研究センター論集』、第4号、1-24頁、2016.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本学術会議、連携会員、2014.4～

国内、日本英語学会、理事、2012.4～2016.3

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

市河賞選考委員、2014～2015年度

とやま賞選考委員、2014～2015年度

東京言語研究所運営委員、2014～2015年度

教授 **大橋 洋一** OHASHI, Yoichi

1. 略歴

1976年3月 東京教育大学文学部文学科英語英文学専攻 卒業（文学士）

1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程 修了（英文学）

1979年4月 東京大学文学部英文科 助手

1981年4月 中央大学法学部 専任講師（英語）

1983年4月 学習院大学文学部英米文学科 専任講師

1985年4月 学習院大学文学部英米文学科 助教授

1994年4月 学習院大学文学部英米文学科 教授

1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授（英語学英米文学）

1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英国演劇・批評理論

b 研究課題

(1) シェイクスピアを中心とする英国初期近代演劇の研究。

(2) 英国演劇研究。

(3) 英語圏の文学理論の研究。教育の場で、理論あるいは分析法をいかに教えるかという問題も視野に入れる。

c 概要と自己評価

上記(1)に関しては、継続研究課題。2014年～15年においては、シェイクスピアの喜劇に関する包括的な研究を実施。

2016年より研究成果を公表予定。(2)についてはハロルド・ピンターに関する研究を本格的に開始。また演劇分野としては英国演劇におけるメタドラマと不条理演劇を考察。(3)エコクリティシズムの視点と方法を、文学研究や教育の場へ適用することを考察し、2014年～2015年は動物論へと発展。シェイクスピア研究との動物論との合体を考えた。

d 主要業績

(1) 論文

大橋洋一、「ボヘミアの海岸で1 シェイクスピア晩年劇のドラマトゥルギー——熊に追われて『冬の夜語り』と驚異の美学」『英語圏文化研究UTokyo』第11号、1-11頁、2014.7.

大橋洋一、「もうひとつの『ゴドーを待ちながら』——ハロルド・ピンター『部屋』覚書」『現代英語圏演劇研究』第1号、37-43頁、2014.7.

大橋洋一、「本文注釈1 ハロルド・ピンター『バースデイ・パーティ』」『現代英語圏演劇』第1号、49-52頁、2014.7.

大橋洋一、「なんのゲームか？——Caretakerの三つの読解」『現代英語圏演劇研究』第2号、17-32頁、2014.9.

大橋洋一、「ベスには何人子供がいたか——『風景』と可能態」『現代英語圏演劇研究』第4号、33-40頁、2015.3.

大橋洋一、「ピンター劇の解釈戦略——『バースデイ・パーティ』を例として」『現代英語圏演劇研究』第5号、55-62頁、2015.5

大橋洋一、「ボヘミアの海岸——シェイクスピアと中欧」『れにくさ』第6号、245-263頁、2016.3.

(2) 翻訳

個人訳、Terry Eagleton、"Literary Theory : An Introduction"、大橋洋一訳、『文学とは何か(上・下)』岩波文庫、2014.9
共訳、Terry Eagleton、"Across the Pond"、大橋洋一・吉岡範武訳、『アメリカ的、イギリス的』河出ブックス、2014.5.

准教授 **渡邊 明** WATANABE, Akira

1. 略歴

1987年3月 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993年9月 マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了
博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得
博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994年4月 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997年4月 同 大学院言語科学研究科助教授
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学/理論言語学

b 研究課題

phi 素性の役割、程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2014年度は科研費基盤 (c) の課題「統語演算における数の素性の役割」の最終年度にあたる。

一致現象一般ということでは、マヤ語族のカクチケル語などで他動詞主語が焦点化などで移動するときに使われる動詞の特殊形態が示す人称がらみの奇妙な制約についての分析をおこなった。これは、Preminger 2014 が一致のメカニズムやその結果の形態的実現についてアドホックな仮定をもとに提案していたものを修正する形となっている。あらたな分析の骨子は、当該の制約は形態的実現にかかわる一般的制約に帰着するというものである。統語演算における一致のメカニズムに関しては、プラスとマイナスの両方の値が関与する素性のシステムだけが正しい結果を得るために必要な仮定であって、それ以外の一致のメカニズムには、とりたてて余計な仮説をもうける必要がないという望ましい成果が得られた。まだ未発表であるが、今後、発表先をさがすことになる。

その他、前年度、国際言語学会で発表した成果のうち、日本語における可算・非可算の区別の存在を立証したものを論文の形にまとめ、議事録に収録された。

2015年度からは科研費基盤 (c) の課題「日英語の程度表現の統語構造と意味」をスタートさせることになった。2015年度は、日本語の「だけ」が指示詞に付随して程度表現を形成する場合や、節を伴って英語の量的関係節と呼ばれるものに対応する構文をなしている場合について分析を進めた。指示詞プラス「だけ」が名詞を修飾する構造は、難易度など性質についてさしている場合と量をさしている場合のどちらでも使えるのだが、量的意味を持つ場合のみ格助詞に後続する形(たとえば「本をこれだけ読んだ」)を取ることができるという新発見につながり、量的意味を持つ場合は、前述の量的関係節の構文と共通の構造で、いわゆる量子子のうち「たくさん」のようなものと同列に扱うことができるという結果を得た。さらに、Carlson 1977 が提案した英語の量的関係節の古典的分析における中心的アイデアのいくつかを現在のより精緻な句構造のシステムに取り込むことで日本語の量的関係節の構文が分析できることも判明した。

この成果は、Formal Approaches to Japanese Linguistics 8 という国際学会の招待講演として発表し、その議事録に論文の形で収録される予定である。

d 主要業績

(1) 論文

Akira Watanabe, '1-deletion: Measure Nouns vs. Classifiers,' *Japanese/Korean Linguistics* 22, 245-260 頁、2014

Akira Watanabe, 'Valuation as Deletion: Inverse in Jemez and Kiowa,' *Natural Language and Linguistic Theory* 33, 1387-1420 頁、2015

(2) 学会発表

国内、渡辺明、'Numerals as a Cognitive Technology and the Innate Natural Number System,' 明治学院大学（白金キャンパス）、2014.10.25

国際、Akira Watanabe, 'Amount Relatives in Japanese,' *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 8, 三重大学、2016.2.20

(3) 会議録

国際会議、Akira Watanabe, 'Count syntax and partitivity,' 2013.7.22

19th ICL Papers, (http://www.cil19.org/uploads/documents/Count_Syntax_and_the_Partitivity.pdf), 2015

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

Journal of East Asian Linguistics (出版元 Springer)、編集委員、2014.4~2016.3

Linguistic Inquiry (出版元 MIT Press)、編集委員、2014.4~2016.3

Acta Linguistica Hungarica (出版元 Akadémiai Kiadó)、編集委員、2016.1~2016.3

准教授 **阿部 公彦** ABE, Masahiko

1. 略歴

1985年3月 静岡県静岡聖光学院高等学校卒業
1985年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1989年3月 同 文学部英語英米文学科専修課程卒業
1989年4月 東京大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）入学
1992年3月 同 修士課程修了・修士（文学）
1993年10月 連合王国ケンブリッジ大学大学院博士課程入学（英米文学専攻）
1997年5月 同博士課程修了 博士号取得（文学）
タイトル：'Wallace Stevens and the Aesthetic of Boredom'
1992年4月 東京大学文学部英語英米文学科助手
1993年4月 帝京大学文学部助手
1997年4月 帝京大学文学部専任講師
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英米文学

b 研究課題

英語圏の詩や小説の研究を中心とする。個々の作品の緻密な解釈と、作品を作品たらしめる力学の解明に向けた努力を研究の中心としつつ、同時に、「なぜ詩でなければならぬか?」「なぜ小説なのか?」という素朴な疑問との取り組みをも課題とする。詩や小説を自足的なジャンルとみなすのではなく、「詩的であること」「小説的であること」を絵画・舞台芸術、スポーツ、インターネット空間などとの関係でとらえることもテーマとする。

c 概要と自己評価

概要

2014年度から2015年度にかけては、ポライトネスに研究の焦点を移し、詩や小説の語り手が読者とどのような人間関係を築こうとしているかという疑問を足がかりに、語りの作法構築の問題を考察した。その成果として『善意と悪意の英文学史』がある。また『幼さという戦略』は日本文学を主にとりあげたものだが、英文学研究で得た知見も大いに生かされており、詩や小説の語り手の本来的な「弱さ」や「幼さ」を考察している。

自己評価

ポライトネスへの注目を出発点にした文学研究はまだ一般的にも広がりを見せているとは言えないので、今後は協同研究のような形でネットワークを広げつつ、より広範にわかる対象をとりあげながら理論の洗練をめざしたい。また「凝視」の研究の延長線上として、「共視」や「錯視」「注意散漫」といった類似テーマの研究も引き続き行う予定である。

d 主要業績

(1) 著書

単著、阿部公彦、『英語的思考を読む』、研究社、2014.5

(2) 論文

阿部公彦、「発語の境界線—詩の恥ずかしさをめぐって」、『ビーグル』、23号、14-18頁、2014.5

阿部公彦、「『如是我聞』の妙な二人称をめぐって」、『太宰治研究』、22号、255-268頁、2014.6

阿部公彦、「蓮實重彦を十分に欲するということ」、『群像』、2014年8月号、150-161頁、2014.7

(3) 書評

柄折久美子、『森有正先生のこと』、筑摩書房、『春風新聞』、14号、2頁、2014.5

辻原登、『東大で文学を学ぶ』、朝日新聞出版、『一冊の本』、2014年6月号、10-11頁、2014.6

平野啓一郎、『透明な迷宮』、新潮社、『すばる』、2014年9月号、2014.9

島田雅彦、『往生際の悪い奴』、日本経済新聞社、『週刊文春』、2014年9月25日号、119頁、2014.9

鳥飼久美子、『英語教育大論争から考える』、みすず書房、『共同通信』、2014年9月11日配信、2014.9

辻原登、『東大で文学を学ぶ』、朝日新聞出版、『群像』、2014年11月号、328-9頁、2014.11

小野正嗣、『九年前の祈り』、講談社、『週刊読書人』、2015年1月23日号、5頁、2015.1

朝比奈あすか、『あの子が欲しい』、講談社、『群像』、2015年2月号、296-97頁、2015.2

竹内康浩、『ハックルベリー・フィンの冒険』、新潮社、『波』、2015年2月号、36頁、2015.2

小野正嗣、『九年前の祈り』、講談社、『文學界』、2015年3月号、298-99頁、2015.3

西村賢太、『無銭横町』、文藝春秋社、『週刊現代』、2015年4月18日号、126頁、2015.4

(4) 解説

阿部公彦、「田原解説」、『現代誌文庫 田原詩集』、2014.4

阿部公彦、「解説 作家の呼吸法」、佐伯一麦『日和山 佐伯一麦自選短編集』（講談社文芸文庫）、223-234頁、2014.6

(5) 学会発表

国内、阿部公彦、「カウンセリングの文学—村上春樹から英文学まで」、名古屋大学英文学会サマー・セミナー、名古屋大学、2014.7.11

国内、阿部公彦、「詩人川崎洋 没後十年 かがやく〈ことば〉の息づかい」、西南学院創立100周年記念学術シンポジウム、サピアタワー五階 サピアホール、2014.11.6

国内、阿部公彦、「英文学の諸事情」、日本フランス語フランス文学会関東支部シンポジウム「いま外国文学を教えるということ」、昭和女子大学、2015.3.7

(6) 啓蒙

阿部公彦、「失語不能症と数の魔術—W・B・イエイツ」、『春風新聞』、2014年秋冬 15号、8頁、2014.11

(7) 監修

阿部公彦、『ひと皿の小説案内—主人公たちが食べた50の食事』、マール社、2015.2

(8) 会議主催(チェア他)

国内、「日本英文学会北海道支部シンポジウム」、その他、「文学史を書くこと、文学史を教えること」、札幌・武蔵女子短期大学、2014.10.25

(9) 総説・総合報告

阿部公彦、「概観 2013年 海外文学 イギリス文学」、『文芸年鑑 2014年度版』、2014年度版、58-60頁、2014.6

(10) マスコミ

「新人小説月評」(2月分)、『文學界』(4月号)、2014.3

「新人小説月評」(3月分)、『文學界』(5月号)、2014.4
「新人小説月評」(4月分)、『文學界』(6月号)、2014.5
「新人小説月評」(5月分)、『文學界』(7月号)、2014.6
「新人小説月評」(6月分)、『文學界』(8月号)、2014.7
「新人小説月評」(7月分)、『文學界』(9月号)、2014.8
「新人小説月評」(8月分)、『文學界』(10月号)、2014.9
「新人小説月評」(9月分)、『文學界』(11月号)、2014.10
「新人小説月評」(10月分)、『文學界』(12月号)、2014.11
「新人小説月評」(11月分)、『文學界』(1月号)、2014.12
「2014年読書アンケート」、『みすず』、2015.1
「詩とことば 一月」、『読売新聞』、2015.1.21
「詩とことば 二月」、『読売新聞』、2015.2.17
「詩とことば 三月」、『読売新聞』、2015.3.17
「2014年上半期の収穫から」、『週刊読書人』、2015.7.25

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本アメリカ文学会、編集委員、2014.4～

准教授 **諏訪部 浩一** SUWABE, Koichi

1. 略歴

1994年3月 上智大学文学部英文学科卒業
1997年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了
2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得退学
2004年4月 東京学芸大学教育学部講師
2004年6月 ニューヨーク州立大学バッファロー校大学院英文科博士課程修了
2006年4月 東京学芸大学教育学部助教授
2007年4月 東京学芸大学教育学部准教授
2007年10月 東京大学大学院総合文化研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学

b 研究課題

モダニズム文学を中心とするアメリカ小説研究

c 概要と自己評価

主たる研究対象は、ウィリアム・フォークナーを中心としたアメリカにおけるモダニズム期の小説である。個々の作品を、大戦間という時代的文脈と小説の発展という美学的問題とあわせて、包括的に考察し、理解することを目標としている。そうした目的のために、近年においては「純文学」だけではなく、「大衆文学」と見なされている作品をも研究対象としてきた。2014～15年度は、フォークナーへの関心を発展させる一方、同時代のノワール小説などを広く視野に収めた研究を継続的におこなった。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、諏訪部浩一、『ノワール文学講義』、研究社、2014.5
共著、藤平育子監修、『抵抗することば——暴力と文学的想像力』、南雲堂、2014.7
共著、早川書房編集部編、『海外ミステリハンドブック』、早川書房、2015.8

(2) 論文

諏訪部浩一、「アメリカ小説の映画化をめぐる」、『北海道アメリカ文学』、第30号、pp.6-34、2014.3

(3) 書評

- ベンジャミン・ブラック、『黒い瞳のブロンド』、『福島民報』、2014年11月29日朝刊、第13面、2014.11
入子文子監修、谷口義朗・中村善雄編、『水と光——アメリカの文学の原点を探る』、『英文学研究』、第91巻、pp.104-07、2014.12
ロバート・クーヴァー、『ノワール』、『すばる』、第37巻第1号、p.413、2014.12
巽孝之、『モダニズムの惑星——英米文学思想史の修辞学』、『アメリカ文学研究』、第51号、pp.99-105、2015.3
フィル・クレイ、『一時帰還』、『週刊読書人』、2015年10月9日号、第5面、2015.10
鈴木元子、『ソール・ペロート「階級」——ユダヤ系主人公の階級上昇と意識の揺らぎ』、『アメリカ文学研究』、第52号、136頁、2016.3

(4) 学会発表

- 国内、諏訪部浩一、「フォークナーとファム・ファタールの詩学」、関西フォークナー研究会2014年度例会、龍谷大学、2015.3.30
国内、諏訪部浩一、「将棋・文学・アメリカ」、全国将棋サミット2015、天童ホテル（山形県天童市）、2015.8.2
国内、諏訪部浩一、「叙事詩から小説へ——四つの「熊」を読む」、第18回日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会、龍谷大学響都ホール、2015.10.9

(5) 啓蒙

- 諏訪部浩一、「アメリカ文学」、『文藝年鑑2014』、61-63頁、2014.6
諏訪部浩一、「ノーリスト・フォークナー」、『en-taxi』、第42号、157頁、2014.7
諏訪部浩一、「解説」、ジェイムズ・M・ケイン、池田真紀子訳『郵便配達は二度ベルを鳴らす』、光文社古典新訳文庫、219-33頁、2014.7
諏訪部浩一、「アメリカ文学」、『文藝年鑑2015』、67-69頁、2015.6
諏訪部浩一、「学者・小鷹信光」、『ハヤカワミステリマガジン』、第61巻第2号、296-97頁、2016.3

(6) 受賞

- 国内、諏訪部浩一、日本学術振興会賞、日本学術振興会、2015.2.24

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、学習院大学、「英語文化コース演習D」、2014.4～2016.3
非常勤講師、立教大学、「米文学特殊研究6A、6S」、2014.4～2015.3
非常勤講師、早稲田大学、「英米文学特殊研究4」、2014.9～2015.3、2015.9～2016.3
非常勤講師、立教大学、「米文学特殊研究6A、6B」、2015.4～2016.3

(2) 学会

- 国内、日本アメリカ文学会東京支部、評議員、2014.4～2016.3
国内、日本アメリカ文学会、大会運営委員、2014.4～2015.3
国内、日本英文学会関東支部、編集委員、2014.4～2015.3
国内、日本ウィリアム・フォークナー協会、編集委員、2014.4～2016.3
国内、日本アメリカ文学会、編集委員、2014.4～2016.3
国内、日本アメリカ学会、評議員、2014.6～2016.3
国内、日本英文学会、事務局長補佐、2015.4～2016.3
国内、日本ウィリアム・フォークナー協会、評議員、2015.10～2016.3

2 1 ドイツ語ドイツ文学

教授 松浦 純 MATSUURA, Jun

1. 略歴

- 1968.3 東京都立新宿高校卒業
- 1968.4 東京大学文科三類入学
- 1971.8 サンケイスカラシップによりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学留学（うち1971.8-9 ゲーテ・インスティトゥートにてドイツ語研修、1973.4 帰国）
- 1974.3 東京大学教養学部教養学科「ドイツの文化と社会」分科卒業（教養学士）
- 1976.3 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専攻修士課程修了（文学修士）
- 1976.4 東京大学文学部助手（ドイツ語ドイツ文学）
- 1977.9 ドイツ連邦共和国テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所にて在外研究（1980.3 帰国）
- 1980.4 東京都立大学人文学部講師（ドイツ語ドイツ文学）
- 1983.4 同助教授
- 1985.4 東京大学文学部助教授（ドイツ語ドイツ文学）
- 1985.5 ドイツ語学文学振興会賞受賞
- 1985.7-9 ドイツ学術交流会（DAAD）の招待によりドイツ連邦共和国へ研究出張
- 1986.7-9 東京大学学術基金によりドイツ連邦共和国へ研究出張
- 1989.10 ドイツ連邦共和国アレクサンダー・フォン・フンボルト研究財団の研究奨学金によりテュービンゲン大学ドイツ文学科および後期中世・宗教改革研究所にて在外研究（1991.9 帰国）
- 1994.12 東京大学文学部教授（ドイツ語ドイツ文学）
- 1995.4 学部改編により東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授
- 1995.7 ドイツ連邦共和国大統領より Philipp Franz von Siebold-Preis 受賞（同賞により1995、1997、1998、1999の各年度夏期休暇時、ドイツ連邦共和国ほかへ研究出張）
- 2001.4 国際交流基金助成により、ドイツ連邦共和国ミュンヘン大学にて、同大ラインハルト・シュヴァルツ名誉教授と共同研究（2002.3 帰国）
- 2002.8 国際ルター学会（於コペンハーゲン）で研究報告
- 2005.7-9 ドイツ連邦共和国アレクサンダー・フォン・フンボルト研究財団の受賞者再招待により、テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所ほかへ研究出張
- 2009.11 ドイツ、ハイデルベルク学士院主催ワイマール版ルター全集完結記念シンポジウム（於テュービンゲン大学）で研究報告
- ドイツ、エルフルト旧アウグスティヌス会修道院図書館で講演
- 2011.8 学術振興会科学研究費により、ドイツ、ヴォルフエンビュッテル、イエナ、ドレスデン各図書館他へ調査出張
- 2012.2 ドイツ、ヨーロッパ史研究所（マインツ）主催コロキウムで研究報告
- 2012.8 学術振興会科学研究費により欧州研究出張、国際ルター学会（於ヘルシンキ）で研究発表、ドイツ、ヴォルフエンビュッテル、ドレスデン、ヴィッテンベルク、テュービンゲンなど各図書館で資料調査
- 2013.6.17 恩賜賞・日本学士院賞受賞
- 2013.7-8 学術振興会科学研究費によりドイツ、ヴォルフエンビュッテル、ドレスデン、テュービンゲンなど各図書館で資料調査
- 2015.3.31 定年により東京大学を退職
- 2015.7 東京大学より名誉教授の称号を授与される

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野としては、ルター研究とドイツ中世文学・中世思想研究を重点としている。

前者については、西欧思想史の中で、伝統的キリスト教思想を革新するとともに近代への発展の関与が問題にされ、また特にドイツ思想史上まれな独自性と影響力を兼ね備えた思想家、ルターを、完成した教義としてでなく、中世思想の伝統やアクチュアルな状況との関係の中で運動としてとらえ、日本人にとってのあらたな理解の地平を開くことを課題としている。

c 概要と自己評価

上記の関心から、着任直前の1983年夏期、国際ルター学会参加の機会にエルフルト、東ベルリン（当時）、西ベルリン（当時）での資料調査によって、ルター思想発展の最初期にあたるエルフルト時代の修道院蔵書残部の再構成を行い、その中に新たな自筆資料を発見することができた事を端緒として、以来エルフルト時代の資料探索・校訂・注解作業を続けていたが、2009年11月、ようやくその成果をルター全集（「ワイマール版全集」）の続編である *Archiv zur Weimarer Ausgabe der Werke Martin Luthers* の第9巻として刊行することができた。ルター研究の基礎を築き直す仕事であり、わが国はじめドイツ、イギリス、オランダ、アメリカなどの専門誌で高い評価を受け、日本学士院からは恩賜賞・日本学士院賞を頂戴した。これに関しては、自分としても十分に評価できるものと考えている。2000年には、エルフルト時代に続くヴィッテンベルク時代初期の講義草稿の新訂版も刊行されており、それと併せて、ルターの最初期についての資料がこれで見揃った状況である。それを踏まえ、新しい基礎の上に立って、その思想発展をあらためて詳しく分析することを課題とし、2011年度から2013年度にかけてその課題で科学研究費研究を受け、研究を進めた。

中世文学研究については、着任以来この分野での大学院演習を続けているのに加えて、1997年度から講義で9世紀から13世紀初頭にかけてのドイツ中世叙事文学を講じており、また博士論文を初めとする研究指導に当たっている。

d 主要業績

(1) 論文

Jun Matsuura, 「Psalterdruck und Manuskripte zu Luthers Psalmenvorlesung (1513-1515) – Ihre Wege durch die Geschichte」、Irene Dingel / Hennig P. Jürgens (Hg.) 『Meilensteine der Reformation. Schlüsseldokumente der frühen Wirksamkeit Martin Luthers』 Gütersloh 2014, 26-43. 242-250 頁

Jun Matsuura, 「Martin Luther: Annotationen zu Melanchthons Pauluskomentaren (um 1536). Text und Kommentar」、『Luther Jahrbuch 2014』 11-53

Jun Matsuura, 「Duo cherubim adversis vultibus. Zur Herausbildung und texthermeneutischen Bedeutung des Grundsatzes *Scriptura sui ipsius interpres.*」、Volker Leppin (Hg.) 『Reformatoren Theologie und Autoritäten. Studien zur Genese des Schriftprinzips beim jungen Luther』 Tübingen 2014, 141-174

なお、2015年3月の最終授業原稿およびそれを論文としたものが、2015年度、以下の2編として公刊された
「身体 vs. 言語 — ドイツ中世トリスタン物語の意匠」（『詩・言語』81号 7-52頁）

Körper vs. Sprache. Zu poetologisch-anthropologischen Konzepten der Tristandichtungen Eilharts von Oberg und Gottfrieds von Straßburg. In: *Neue Beiträge zur Germanistik. Zeitschrift der Japanischen Gesellschaft für Germanistik* 151 (2015) 25-53

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議連携会員、2010～2014

日本学術会議連携会員、文化の邂逅と言語分科会委員長、2011.10～2014.10

日本学術会議会員、言語・文学委員会副委員長、2014.10～

1. 略歴

- 1970年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1974年3月 東京大学文学部第3類（言語学専修課程）卒業（文学士）
1974年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程進学
(1975年7月～1977年9月 ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金によりドイツ連邦共和国ボン大学、シュトゥットガルト大学に留学)
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程修了（文学修士）
1978年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程博士課程進学
1979年4月 同 教養学部助手
1980年4月 一橋大学経済学部講師
1984年4月 東京大学教養学部助教授
(1984年4月～85年3月 一橋大学経済学部併任)
(1991年10月～93年3月 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学に研究滞在)
1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授
(1996年4月～97年3月 東京大学大学院人文社会系研究科併任)
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2004年10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ語学

b 研究課題

現代ドイツ語の記述、および現代ドイツ語を生み出したドイツ語史の記述を研究の目標と考えている。背景となる言語理論や言語変化についての理論についての考察も必要となる。

研究では、最近是一般言語学の言語理論に関することとドイツ語史に関することに重点を置いている。

c 概要と自己評価

一般言語理論については、特に結合価理論の最近の発展に関心を持っている。この理論に基づく新しいドイツ語記述の可能性があることを示したいと思っている。またドイツ語音声学の発展に基づき、新しいドイツ語発音辞典についての評価が必要だと考えている。

授業は現代ドイツ語文法理論とドイツ語史に見られる言語変化を中心としておこなった。

d 主要業績

なし

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

明治大学文学部非常勤講師 2014.4.～2016.3.

成城大学文芸学部非常勤講師 2015.4.～2016.3.

1. 略歴

- 1984年3月 東京大学教養学部教養学科第2・ドイツの文化と社会卒業
1986年3月 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了
1991年4月 共立女子大学国際文化学部専任講師
1992/93年 ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金によりドイツ連邦共和国マンハイム大学留学
1996年4月 共立女子大学国際文化学部助教授
2001/02年 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国ベルリン自由
大学研究滞在
2002年4月 慶應義塾大学文学部助教授
2005年4月 慶應義塾大学文学部教授
2007年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科委員兼任
2011年4月 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科教授(現職)

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近現代文学

b 研究課題

ヴェルター・ベンヤミン研究、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究

c 概要と自己評価

ベンヤミン研究は、同時代の作家フーゴー・フォン・ホーフマンスタールやエルンスト・ユンガーらの、いわゆる保守革命運動との関係を考察する作業を進めている。科研費による「情動と技術の人間学的考察」研究プロジェクトを2013~2015年度に進め、多くの内外の研究者との議論を行い、実りあるものとなった。クライスト研究としては、「白兵戦」的抗争関係の歴史の変容のなかでドイツ文学を読み直す試みのなかでクライスト作品を位置づけ、レッシングやゲーテなど近代ドイツ文芸の他の作家たちとの問題意識の共通性を別出する論文を上梓した。さらに、後期近代における「正義」理念の動揺を「文学」の社会的位置付けの問題と関連させた論文を学会誌に発表した。こうした問題意識はドイツの文学研究・文化研究者の関心に触れ、招待講演の依頼を二度受けている。(2016年4~5月に実施。)

新たな世界文学全集の編集プロジェクトに参加し、文学作品の翻訳にも携わり、ゲーテの『若きヴェルターの悩み』の新訳を上梓した。

d 主要業績

(1) 論文

大宮勘一郎、「白兵戦の倫理」、『研究年報』(慶應義塾大学独文学研究室)、32、35-66頁、2015.3

大宮勘一郎、「労働への動員か遊戯への接続か、エルンスト・ユンガーの「有機的構成」とベンヤミンの「集合体」について」、『新しい人間の設計図』、2015.4

大宮勘一郎、「配分か交換か—近代以降の正義と文学」、『ドイツ文学』、Vol. 152、132-148頁、2016.3

(2) 解説

大宮勘一郎、「ゲーテ 解説」、『ポケットマスターピース02 ゲーテ』、733-744頁、2015.10

大宮勘一郎、「若きヴェルターの悩み 作品解題」、『ポケットマスターピース02 ゲーテ』、745-752頁、2015.10

(3) 学会発表

国内、大宮勘一郎、「配分か交換か—近代以降の正義と文学」、日本独文学会2014年度秋季研究発表会、京都府立大学、2014.10.11

(4) 啓蒙

大宮勘一郎、「ヴァイマル」、『ドイツ 55のキーワード』、2015.3

大宮勘一郎、「暗い時代の人々」、『ドイツ 55のキーワード』、2015.3

大宮勘一郎、『ヴェルター』とゲーテ、ジュール・マスネ『ウェルテル』、23-26頁、2016.4

大宮勘一郎、「道草のドイツ — Don DeLillo の „Zero K“ など」、日本独文学会ウェブサイト、2016.7

(5) 翻訳

個人訳、Johann Wolfgang von Goethe、„Die Leiden des jungen Werther“、大宮勘一郎、『若きヴェルターの悩み』、『ポケットマスターピース02 ゲーテ』、7-200頁、集英社、2015.10

3. 主な社会活動

(1) 学会

学会（国内）、日本独文学会理事、2013～

学会（国内）、日本独文学会会長、2015～

(2) 他機関での講義等

訪問教授、Freie Universität Berlin、2015.8

招待講演、ゲーテ自然科学の集い、「エミーリア、ヴェルター、イフィゲーニエ、ペンテジレーア」、2015.10

招待講演、Femuniversität in Hagen、「Die Ethik des Nahkampfs in der deutschen Literatur um 1800」、2016.4

招待講演、Universität Mannheim、「Teilen oder Tauschen」、2016.5

准教授 宮田 眞治 MIYATA, Shinji

1. 略歴

1987年3月 京都大学文学部卒業（文学士）
1989年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
1990年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
1990年4月 神戸大学教養部助手
1991年10月 神戸大学教養部講師
1992年10月 神戸大学文学部講師
2000年10月 神戸大学文学部助教授
2000年4月 文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001年2月まで）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

b 研究課題

18世紀の文学・思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学・自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の表現技法と、その背景にある言語・芸術観が興味を中心にあった。また、その問題意識を継承する20世紀の文学者・思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学・思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されることなく研究している。また、18世紀以後、ドイツ語圏にあつて、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であった人々―ハラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまで―の営みを〈実験者の文学〉という観点から跡付けるという作業を進めている。

c 概要と自己評価

日本独文学会主催によるドイツ文化ゼミナールの記録を、実行委員長を勤めた2012年と2013年について論集という形で刊行し、4年にわたった仕事が一段落した。また多くの研究者の方々の助力を得て、ドイツ文化に関する啓蒙的著作を編集刊行することができた。「文学と映画」という主題については、ロシアの映画作家タルコフスキーが最後に進めていたプロジェクトである『ホフマニアーナ』の翻訳が刊行されるにあたり、同著の翻訳者である東京外国語大学の前田和泉氏とトークショーで語り合う機会を得た。集中的に再読する中で、小説家ホフマンについてあらためて

多くの発見があった。準備中のロマン派論集に組み入れる必要がある。さらにリヒテンベルクの『雑記帳』を独自に編集した注釈付き日本語版の刊行へ向け準備を進めている。

d 主要業績

(1) 著書

編著、Japanische Gesellschaft für Germanistik unter der Leitung von Shinji Miyata (Hrsg.): *Verkörperte Sprache - Rahmen und Rahmenbrüche*, iudicium, 2015. 3

編著、宮田眞治・島山寛・濱中春（編）、『ドイツ文化55のキーワード』、ミネルヴァ書房、2015.3

(2) 啓蒙

宮田眞治・前田和泉（東京外国語大学准教授）：トークショー「鏡の二人—タルコフスキーとホフマンをめぐって」、

開催場所 Book café Espace Biblio、開催日時 2015年10月31日 15:30～17:30

宮田眞治、「パレルモの廃墟への未練」『ひろの』（ドイツ語学文学振興会）、第55号、18-19頁

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本シェリング協会、理事、2008,10～

22 スラヴ語スラヴ文学

教授 **金澤 美知子** KANAZAWA, Michiko

1. 略歴

1974年3月 東京大学教養学部教養学科卒業
1977年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（ロシア語ロシア文学）
1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学
1981年4月 東京大学文学部露語露文学研究室助手（～1989年3月）
1989年4月 放送大学教養学部助教授（～1994年3月）
1994年4月 東京大学文学部助教授（スラヴ語スラヴ文学）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（スラヴ語スラヴ文学）
1996年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（スラヴ語スラヴ文学） 現在に至る
2000年10月-2001年8月 ワルシャワ大学東洋研究所客員講師

2. 主な研究活動

a 専門分野

ロシア文学、文化

b 研究課題

18、19世紀のロシア文化 ロマン主義 ドストエフスキー ロシアと西欧

c 概要と自己評価

現在、主として次のような研究活動を行っている。

(1) ドストエフスキー研究。作品の分析、他の作家との比較研究、現代における受容の研究など。

第9回（オーストリア）、第10回国際ドストエフスキー学会（アメリカ合衆国）での研究発表を踏まえ、2000年8月、千葉大学に於いて開催された国際ドストエフスキー研究集会ではドストエフスキーと18世紀ロシア文学の関係について発表した。その成果は2002年にロシアで出版された論文集に収録された。その後も継続的に口頭および論文、また概説書などで成果を発表おり、現在それらを纏める作業にかかっている。

(2) 19世紀初頭のロマン派に関する比較文学的な視点からの考察。

これは(1)と共に私の研究の出発点であり、ライフワークでもある。研究の中心はロシア・ロマン派だが、それと関係の深い18世紀末から19世紀初めのヨーロッパの他地域の文学にも注目し、影響関係やテーマの変遷などを考察している。またロマン主義文学はドストエフスキーの初期の文学活動とも密接に関わっており、この作家との関係においても度々取り上げてきた。なお、2011年に台湾で開催された国際学会ではブレ・ロマン主義としてのセンチメンタリズムについて発表し、カラムジンとドストエフスキーの作品を論じた。

(3) 18世紀ロシア文学・文化の研究。

先行研究の少ない領域であり、文献の面での困難もあるが、多方面から助力を得て着実に成果はあがりつつある。これまで、この領域については主に次のような形で作業を進めてきた。第一は、18世紀ロシア小説の翻訳紹介であり、『可愛い料理女』（彩流社、1999年度木村彰一賞受賞）出版に続き、H. П. ミローノフ『哀れなマリヤのお話』、A. E. イズマイロフ『哀れなマーシャ』を訳出した。第二に、18世紀文化について様々な角度から調査、考察し、その成果を研究誌「ロシア18世紀論集」創刊号（1999）、「ロシア18世紀論集」2号（2002年）および3号（2006年）の監修と論文発表に反映させた。この研究誌は日本における18世紀ロシア研究の広報的な役割を果たし、また若手研究者の育成に貢献し得たと考える。現在4号発行に向けて準備中である。第三は、文部省科研助成金による研究「18世紀ロシアの文化的コンテクストに見る小説文学の成立と発展」（平成12年度～14年度）の実施である。これは小説作品を文化的コンテクストの中で読み解くと同時に、小説文学というジャンルの発展を通して18世紀ロシア文化の特質にアプローチしようとする新しい試みであった。その後も文学テキストと文化背景の関係についての調査を進め、その都度文献紹介、論文発表などを行ってきた。2007年7月、フランス、モンペリエで開催された国際18世紀学会での報告も成果のひとつである。さらに第四の作業として、2003年7月に日本18世紀ロシア研究会を設立し、以後現在に至るまでその運営に当たっている。毎年の研究会開催の実行委員および研究誌の編集委員を務めている。本会は、日本における18世紀ロシア研究の発展のために、言語、文学、歴史など

異なった領域を専門とする 18 世紀ロシア研究者が情報交換と研究協力を行うことを目的としたものである。2014 年は第 12 回研究会、2015 年は第 13 回研究会を開催し、研究会誌 10/11 号を編集発行した。

(4) 近代ロシア文学とその背景としての文化史。

上記補助金による 18 世紀ロシア研究はほぼ当初の目的を達成した。その一方で、文学を作家だけでなく、読者＝パトロンとの関わりの中で考察することが文化的コンテクストを理解する上での重要な課題として浮かび上がり、この点を明らかにするために新たな作業が必要になった。このような事情のもとに、上記の課題を進展させる形で、科研助成金による研究「近代ロシア文学の誕生とパトロンたちの文化史」(平成 15 年度～17 年度)、「手紙」の文化に見る近代ロシア文学の成立過程」(平成 19 年度～21 年度)を進め、その都度文献紹介、論文発表などを行ってきた。現在はこの分野に関わるものとして、科研助成金による研究「近代ロシア文学の手法の発展に見る記号としてのヨーロッパの「風景」」(平成 23 年度～26 年度)に従事している。これらの研究は 18 世紀半ばから 19 世紀初めに於けるロシア近代文学成立の事情を、様々な視点を通して明らかにしようとするものである。

(5) 近代ロシアの貴族屋敷の文化についての研究。

さらに 2013 年度は、文部省科研助成金による研究「近代ロシア文学創成の環境—貴族屋敷(ウサーヂバ)の文化的・社会的ランドシャフト」(平成 25～27 年度、代表：坂内徳明)の研究分担者として、文学作品と貴族屋敷文化の関係についての調査及び考察に着手した。2014 年度以後に研究成果を発表したいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

「18 世紀ロシアの恋愛小説における「社会」の役割—18 世紀ロシアにおける「公」と「私」を論じる—」、『日本 18 世紀ロシア研究会年報』No10、2014

「ドストエフスキー『白夜』における 18 世紀の「甘美な憂鬱」」、『SLAVISTIKA XXX』、2015 年

(2) 監修

編集、「日本 18 世紀ロシア研究会年報」No.10/11 号、日本 18 世紀ロシア研究会、2015

(3) 学会開催

日本 18 世紀ロシア研究会 第 12 回大会、2014.9.13

日本 18 世紀ロシア研究会 第 13 回大会、2015.9.21

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

学位授与機構委員、2010～

学位授与機構専門委員会部会主査、2014～

日本 18 世紀ロシア研究会運営委員、2003～

教授 **三谷 恵子** MITANI, Keiko

1. 略歴

1981 年 3 月 東京大学文学部露語露文学専攻卒業
1983 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科修士修了(露語露文学)
1983 年 4 月 東京大学人文科学研究科博士課程進学
1986 年 10 月 ザグレブ大学哲学部留学(～1988 年 9 月)
1989 年 3 月 東京大学文学部人文科学研究科博士課程修了
1990 年 4 月 東京大学文学部助手(ロシア語ロシア文学研究室)
1993 年 6 月 筑波大学文芸言語学系講師
1997 年 7 月 同助教授
1999 年 4 月 京都大学人間・環境学研究科助教授
2005 年 4 月 同教授
2013 年 4 月 東京大学人文社会系大学院教授(スラヴ語スラヴ文学科)

2. 主な研究活動

a 専門分野

スラヴ語学、スラヴ語歴史文法、中世スラヴ文献学；ロシア語学；ボスニア・クロアチア・セルビア語圏および旧ユーゴ圏の言語文化；スラヴ語圏の少数言語；言語接触と言語維持。

b 研究課題

以下の事柄を研究課題としている。すなわち、共通スラヴ語から現代のスラヴ諸言語にいたる変化のプロセスを、文献学的に解明にすること。スラヴ語間の類似性と共通性、また個別のスラヴ語における言語特徴とくに形態統語論的特徴について実証的に分析すること。旧ユーゴ圏における言語と文化の諸相、とりわけ言語と社会や歴史の關係に注目し社会言語学的視点をとり入れた言語研究を行うこと。またスラヴ文献学、スラヴ語史、中世スラヴ文化研究の融合的研究としての中世スラヴ比較文献研究を行うこと。

c 概要と自己評価

スラヴ語史、スラヴ語文法論とくにロシア語およびボスニア・クロアチア・セルビア語の通時的および共時的的研究を進めている。また中欧に分散するスラヴ系少数言語について、現地調査をふまえた実証的な研究を行っている。さらに中世文献を言語学、翻訳理論、比較テキスト研究などを融合された新たなアプローチで分析する試みに着手し、この成果は海外の国際学会、国内で自ら開催した国際シンポジウムで発表している。さらにこれらの成果を論文として刊行し、同時にスラヴ語学概論やボスニア・クロアチア・セルビア語の授業に反映させている。

d 主要業績

(1) 論文

Keiko Mitani, 「Derviš i smrt in Japanese: Literary translation, Bosnia, Japan」, 『International forum Bosnia』, 68, 2014

三谷恵子, 「境界の描き方—ボスニア出身作家たちのボスニア像」, 『ロシア・東欧研究』, 2014.5

Кэйко Митани, 「Мимо в глагольном образовании: Проблема разграничения префиксации и сложения в славянских языках」, 『ロシア語研究』, 24, 39-53 頁, 2014.11

Keiko Mitani, 「Начело премудрости...」 i južnoslavenski prijepisi priče «Slovo Akira premudroga」, 『Балканские чтения』, 13, Москва, РАН. 2015. 62-66 頁, 2015

三谷恵子, 「『賢者アキルの物語』南スラヴ圏写本の比較研究」, 『SLAVISTIKA』, XXX, 2015.3

Keiko Mitani, 「Uz-prefixation and the Second Future in Croatian」, 『Аспектуальная семантическая зона: топология систем и сценарии диахронического развития. Сборник статей V Международной конференции Комиссии по аспектологии Международного комитета славистов』, С.167-173 頁, 2015.11.

(2) 学会発表

国際, Keiko Mitani, “Акир премурый между Slavia Orthodoxa и Slavia Latina: южнославянские списки текста «Слово Акира премудрог»”、"The Story of Akir the Wise": A New Approach to the Medieval Slavic Literature", 2015.3.18

国際, Кэйко Митани, 「Повесть об Акире премудром южнославянские списки и вопросы деятельности переписчиков в культурно- общественном окружении средневековья」, ICCEES 2015, 2015.8.7

国内, 三谷恵子, 「『1 2 の金曜日の物語』スラヴリセンシオン写本の比較研究」, 日本ロシア文学会, 2015.11.8

国際, Keiko Mitani, 「Uz-prefixation and the Second Future in Croatian」, The fifth Conference of the International Commission on Aspectology of the International Committee of Slavists, 2015.11.14

国際, Keiko Mitani, 「Apocrypha in Apocrypha: The Story about the Twelve Firydays」, Slavic Apocrypha viewed from Inside and Outside the Slavic World, 2016.3.15

(3) 予稿・会議録

国際会議, Keiko Mitani, "Начело премудрости...” i južnoslavenski prijepisi priče "Slovo Akira premudroga", Балканские чтения, Москва, 2015.4.7

『Балканские чтения』, 13, 62-66 頁, 2015.4

(4) 共同研究(産学連携除く)

国内, 主催, 北海道大学スラブユーラシア研究センター, 「『賢者アキルの物語』のスラヴ圏テキストの比較研究—スラヴ文献言語学の再構築をめざして—」, 2015~

国内, 主催, 北海道大学スラブユーラシア研究センター, 「中世スラヴ語テキストの多元的研究—スラヴ文献言語学の新たなアプローチをめざして—」, 2016~

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、ロシア東欧学会、理事、2015.12～

日本ロシア文学会副会長、2014～2016

教授 **沼野 充義** NUMANO, Mitsuyoshi

23 現代文芸論 参照

23 現代文芸論

教授 沼野 充義 NUMANO, Mitsuyoshi

1. 略歴

- 1977年3月 東京大学教養学部教養学科学士
1979年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻修士課程）修士
1981年9月～1985年7月 ハーヴァード大学 Harvard University フルブライト全額給費奨学生として留学（スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程）
1984年6月 ハーヴァード大学修士
1985年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学
1984年2月～1985年6月 ハーヴァード大学、ティーチング・アシスタント
1985年8月～1989年1月 東京大学教養学部、専任講師（ロシア語教室・教養学科ロシア分科）
1987年10月～1988年9月 ワルシャワ大学東洋学研究所、客員講師（日本語日本文学）
1989年1月～1994年3月 東京大学教養学部、助教授（ロシア語教室・教養学科表象文化論）
1994年4月～2004年3月 東京大学文学部、助教授（スラヴ語スラヴ文学）
2000年5月～11月 ロシア国立人文大学（モスクワ）、客員研究員（国際交流基金フェロー）
2002年10月～11月 モスクワ大学アジア・アフリカ研究所、客員教授
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシアおよびポーランド文学、現代日本文学を視野に入れた世界文学論、越境・亡命文学

b 研究課題

- (1) ロシア・東欧から日本までを視野に入れた形での新たな世界文学論へのアプローチ
- (2) ポスト共産主義時代のロシア東欧文学の総合的研究
- (3) ユーラシア研究という新たな枠組みの中でのロシア東欧文学の位置づけ
- (4) ロシア近代小説の研究と翻訳（特にチェーホフ、ナボコフ）
- (5) 近現代ロシア詩の読解と新しいロシア詩アンソロジーの編纂

c 概要と自己評価

（概要）興味と活動は近・現代文学全般にわたり、現代世界文学への比較文学的アプローチや現代日本文学の批評・時評も行なっているが、本来の専門領域はロシア文学およびポーランド文学（主として19～20世紀）である。1994年文学部に赴任して以来、スラヴ語スラヴ文学専修課程と並行して、西洋近代語近代文学専修課程の教育・運営に一貫して携わり、2007年4月に西洋近代語近代文学専修課程を改組した形で現代文芸論専修課程が創設されると、こちらに研究・教育の主軸を移しながらも、スラヴ語スラヴ文学の専修課程の研究・教育活動にも引き続き関わってきた。またモスクワ大学およびワルシャワ大学との大学間交流協定の実施担当者として、東京大学とこれらの大学との研究交流および学生交換の世話役を一貫して務めてきた。

スラヴ文学の研究と並行して、「世界文学」の視点からできるだけ幅広く現代文学を（日本文学の特殊性と普遍性も視野に入れて）とらえるように努めている。一国一言語の枠内に収まらないような、亡命・越境・二言語併用などの問題に特に関心がある。

2008年4月からは現代文芸論研究室を中心とした科研費研究プロジェクト「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」の代表者として、現代の世界文学研究のための横断的な知のネットワークの構築に携わり、内外の研究者や文学者を積極的に招き、頻繁に講演会・セミナー・シンポジウムを開催してきた。

2013年3月3日・4日には、5年間にわたるこの科研費共同研究の総決算として、日本学術振興会より国際研究集会助成を受け、国際会議「グローバル化時代の世界文学と日本文学—新たなカノンを求めて」(World Literature and Japanese Literature in the Era of Globalization: In Search of a New Canon) を主に英語により開催し、内外から100名以上の研究者の参加を得ることができた。

ロシア東欧の専門分野における主要な関心の一つは、ソ連崩壊・東欧革命後の状況を文化史的にとらえることであり、その作業を通じて、因習的なロシア文学史の枠組みを変え、また文化の境界を見直す必要があることを主張してきた。またロシア文学における「詩的」なものの理論化を考えており、小説研究にこれまで偏ってきたため未発達な日本におけるロシア詩理解の基礎を固めるべく努めている。

海外（特にロシア東欧）と日本の文化・文学交流にも関心があり、国際交流基金や文化庁の様々な企画に協力し、ロシアや東欧の作家との交流や、日本文学の海外紹介といった事業にも積極的に参加している。最近では交流対象をアジアにも広げ、中国や韓国の研究者との交流も進めている。そういった機会にできた人的ネットワークも、研究・教育活動に活かしており、スラヴ研究における東アジアの研究ネットワーク構築を目指している。

2015年8月に千葉市幕張で開催された第9回国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）世界大会においては組織委員長を務め、世界49カ国から1300人以上の参加者のあった大規模国際学会の事務局の中心として中欧・東欧研究の国際的ネットワークの強化に努めた。

（自己評価）研究上の関心と活動範囲が年々広がっていき、またスラヴ語スラヴ文学と現代文芸論の両方の分野にまたがって研究・教育を行っているため、広い視野からのダイナミックな研究・教育活動を目指してはいるものの、研究のためのエネルギーと時間が分散して総花的になりやすく、それぞれのテーマについてきちんとしたまとめができないまま放置してあるものも多い。また年をとるに従って、引き受けざるをえない役職が多くなり、会議や事務的作業に多くの時間をとられる一方で、研究のための集中的な時間の確保がますます難しくなってきた。

そのうえ2015年8月に行われた大規模国際学会「第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会」の組織委員長を務めたため、大会終了後の事後的処理期間も含めて、大会前後の2年間以上にわたってエネルギーと時間をこちらに注ぎざるを得なかった。幸い、大会は成功裡に終了したが、そのため自分自身の著作活動が滞り、世界文学・スラヴ文学・日本文学についてすでに書き溜めた論考をまとめて単行本著書の形で世に問うことができない状態が続いている。とはいえ、2016年1月にはこれまでのチェーホフ研究のいちおうの決算というべき単行本『チェーホフ 七部の絶望と三部の希望』（講談社）を出版できたのは、一定の成果であった。

d 主要業績

(1) 著書

共著、沼野充義(他9名)、『人文知2 死者との対話』、東京大学出版会、2014.11

編著、沼野充義、『それでも世界は文学でできている』、光文社、2015.3

単著、沼野充義、『チェーホフ—七分の絶望と三分の希望』、講談社、2016.1

奥彩子、西成彦、沼野充義（共編）、『東欧の想像力—現代東欧文学ガイド』、松籟社、2016.1

(2) 論文

沼野充義、「失われた幼年時代（チェーホフとロシアの世紀末 1）」、『群像』、69-5、64-81頁、2014.5

沼野充義、「魅惑と嘲笑（チェーホフとロシアの世紀末 2）」、『群像』、69-6、248-265頁、2014.6

沼野充義、「「あなたに捨てられた美女」——カモメになりきれなかったリーカについて（チェーホフとロシアの世紀末 3）」、『群像』、69-7、244-254頁、2014.7

沼野充義、「仮面舞踏会の夜——あるいは人生が芸術を模倣することについて（チェーホフとロシアの世紀末 4）」、『群像』、69-8、306-319頁、2014.8

沼野充義、「戯れから愛へ——「下げ飾り」の行方（チェーホフとロシアの世紀末 5）」、『群像』、69-9、316-329頁、2014.9

沼野充義、「チェーホフとユダヤ人問題（チェーホフとロシアの世紀末 6）」、『群像』、69-10、237-251頁、2014.10
Mitsuyoshi Numano、「The Seagull Goes to the Cosmos, and Haruki Murakami Goes to Sakhalin」、『Japanese Slavic and East European Studies』、35、5-12頁、2014.10

沼野充義、「狂気と牢獄——狂っているのは誰か？（チェーホフとロシアの世紀末 7）」、『群像』、69-11、266-281頁、2014.11

沼野充義、「小さな動物園（チェーホフとロシアの世紀末 8）」、『群像』、69-12、277-282頁、2014.12

沼野充義、「動物園的<知>の展開（チェーホフとロシアの世紀末 9）」、『群像』、70-1、300-308頁、2015.1

沼野充義、「霊性の幸う国で——世紀末ロシアの信仰とオカルト（チェーホフとロシアの世紀末 10）」、『群像』、70-2、262-274頁、2015.2

沼野充義、「ハーヴァード大学におけるホレス・G・ラント教授による古代教会スラヴ語の授業」、『Slavistika』、30、19-30頁、2015.3

沼野充義、「ナボコフと「ソ連」文学——ナボコフ『ロシア文学講義』への補遺として（ナボコフが論じなかったロシア文学）」、『Krug』、7、42-51頁、2015.3

- 沼野充義、「革命の女たち（チェーホフとロシアの世紀末 11）」、『群像』、70-3、271-286 頁、2015.4
- 沼野充義、「喜劇問題（チェーホフとロシアの世紀末 12）」、『群像』、70-4、308-324 頁、2015.4
- 沼野充義、「サハリンへ！——両義性の島、サバルタンの植民地（チェーホフとロシアの世紀末 13）」、『群像』、70-5、272-288 頁、2015.5
- 沼野充義、「病の歴史（チェーホフとロシアの世紀末 14）」、『群像』、70-6、2015.6
- 沼野充義、「ロシア人は村上春樹がお好き？—源氏物語から村上春樹まで ロシアにおける日本文学を受容」、『ユーラシア研究』、52、2-7 頁、2015.7
- Mitsuyoshi Numano、「The Role of Russian Literature in the Development of Modern Japanese Literature from the 1880's to the Present: Some Remarks on Its Peculiarities」、『ねにくさ』、6、333-341 頁、2016.3
- Мицүёси Нумано（沼野充義）、「Переводы В. В. Набокова и А. П. Чехова на японский язык: о необходимости нового перевода классики」、『Found in Translation: Transformation, Adaptation and Cross-Cultural Transfer』、195-200 頁、2016.3

(3) 書評

- エラスムス（杏掛良彦訳）、『痴愚神札賛 ラテン語原典訳』、中央公論新社、『毎日新聞』、2014年2月23日
- 村上春樹、『女のいない男たち』、文藝春秋、『毎日新聞』、2014年5月18日
- 今福龍太、『書物変身譚』、新潮社、『毎日新聞』、2014年7月20日
- バトリク・オウジェドニク、『エウロペアナ』、白水社、『毎日新聞』、2014年9月21日
- ロナルド・ドーア、『幻滅——外国人社会学者が見た戦後日本70年』、藤原書店、『毎日新聞』、2015.1.25
- ウラジーミル・ソローキン、『氷』、河出書房新社、『毎日新聞』、2015年3月15日
- 内田樹、『日本の反知性主義』、晶文社、『毎日新聞』、2015年5月3日
- 村上春樹、『職業としての小説家』、スイッチ・パブリッシング、『毎日新聞』、2015年10月11日（日）朝刊
- 亀山郁夫、『新カラマーゾフの兄弟』、河出書房新社、『毎日新聞』、2015年11月29日（日）朝刊
- 温又柔、『台湾生まれ 日本語育ち』、白水社、『毎日新聞』、2016年1月31日（日）朝刊
- ウンベルト・エコ、『ブラハの墓地』、東京創元社、『毎日新聞』、2016年3月27日（日）朝刊

(4) 解説

- 沼野充義、「短編「かえるくん、東京を救う」について」、村上春樹「かえるくん、東京を救う」英訳完全読解、8-12 頁、2014.7
- 沼野充義、「若者よ、混乱の向こう側に未来をつかみとれ」、文春文庫 池澤夏樹『氷山の南』、588-594 頁、2014.9
- 沼野充義、「短編「象の消滅」について」、村上春樹「象の消滅」英訳完全読解、8-12 頁、2015.1
- 沼野充義、「異星という形而上的な地獄——ストルガツキー兄弟のSFからゲルマンの映画へ」、『神々のたそがれ(アレクセイ・ゲルマン作品) 株式会社アイ・ヴィー・シー』、24-28 頁、2015.3
- 沼野充義、「差違と普遍性——現代チベット文学が切り拓くもの」、タクブンジャ『ハバ犬を育てる話』東京外国語大学出版会、255-263 頁、2015.3
- 沼野充義、「美酒と奇想—東欧ポストモダンの旗手、パヴィチを称えて」、ミロラド・パヴィチ『ハザール事典』(男性版および女性版)、457-463 頁、2015.11

(5) 学会発表

- 国際、Mitsuyoshi Numano、「Russian Literature in Japan: Translation, Reception, and Influence」、II International Conference on “METHODS OF TEACHING ORIENTAL LANGUAGES: ACTUAL PROBLEMS AND TRENDS”、Higher School of Economics (モスクワ、ロシア)、2014.5.14
- 国内、沼野充義、「ドイツ語圏中欧とスラヴ文化—フロイト、リルケ、カフカ」、日本オーストリア文学会、麗澤大学(日本)、2014.5.25
- 国内、沼野充義、「ロシア人は村上春樹がお好き？ 源氏物語から1Q84まで—ロシアにおける日本文学を受容」、シンポジウム「ロシアのCOOL JAPAN」、聖心女子大学(日本)、2014.5.31
- 国際、沼野充義、「村上春樹 vs. カラマーゾフ——現代日本の翻訳文化と世界文学」、IJET (International Japanese-English Translation Conference)、東京ビッグサイト(日本)、2014.6.21
- 国際、Мицүёси Нумано（沼野充義）、「Переводы В.В.Набокова и А.П.Чехова на японский язык: о необходимости нового перевода классики」、III Международный конгресс преводачиков художественной литературы、Библиотека иностранной литературы (モスクワ、ロシア)、2014.9.5
- 国際、Мицүёси Нумано（沼野充義）、「Киргизская литература в Японии: Манас и Чингиз Айтматов」、Aitmatov Literary Forum、Manas University, Bishkek(キルギス)、2014.9.30

国際、沼野充義、「羊、鼠、象、蛙——村上春樹における動物イメージと日本人の自然観」、国際シンポジウム「日本文化表現の多様性」、ワルシャワ大学(ポーランド)、2014.10.28

国際、Mitsuyoshi Numano、「Pasternak in Japan: Reception and Translation」、Poetry and Politics in the 20th Century: Boris Pasternak, His Family, and His Novel Doctor Zhivago、スタンフォード大学(スタンフォード、アメリカ合衆国)、2015.9.30

国際、Мишуёси Нумано(沼野充義)、「К изучению истории «истории русской литературы» в Японии」、Международная конференция «Национальные истории русской литературы」、首都師範大学(北京、中国)、2015.11.24

国際、沼野充義、「ハルキ vs カラマーゾフ—現代日本文学における「偉大なるロシア文学」の影」、台湾日本語文学術研討会、輔仁大学(新北、台湾)、2015.12.19

国内、沼野充義、「ロシア人は好きだが、ロシアは好きじゃない」—ポーランドとその巨大な隣国のねじれた関係について(文学の例に基づいて)、2015年度フォーラム・ポーランド会議「ポーランドと隣人たち」、青山学院大学アスタジオ、2015.12.22

(6) 啓蒙

沼野充義、「21世紀のグローバル世界は教養とともに成熟する」、『グローバル時代の教養(名古屋外国語大学)』、10-27頁、2014.3

沼野充義、「今あえてロシア文学の素晴らしさを語る—プーシキンからシーシキンまで、魂の温もりを求めて」、『JICインフォメーション(JIC国際親善センター発行)』、183、2-12頁、2015.4

沼野充義、「世界文学全集はあなたがどう読むか、だ」、『Kotoba(集英社)』、20、44-47頁、2015.6

沼野充義、「今、なぜ、海外文学は面白い? 俯瞰する視点から読み解く」、『シュプール』、2016年1月号、216-217頁、2016.1

沼野充義、「文化は政治よりずっと大事なものだ」—ウリツカヤ、アクーニン、マカレヴィチに聞く(インタビューと解説)、『れこくさ』、6、497-513頁、2016.3

沼野充義、「壮大な文芸大作の世界を数時間で楽しめるロシア映画」、『Kotoba』、23、106-109頁、2016.3

(7) 会議主催(チェア他)

国内、シンポジウム「東京大学で一葉・漱石・鷗外を読む」、主催、東京大学文学部1番大教室、2015.2.22

国際、「第9回国際中欧・東欧協議会世界大会」、組織委員長、幕張メッセおよび神田外語大学(千葉県千葉市)、2015.8.3~2015.8.8

国内、「『ディブック』—記録映画上映とシンポジウム」、チェア、シンポジウム「『ディブック』—その成立と受容をめぐる」、東京大学文学部1番大教室、2016.2.6

国内、「世界文学村と愉快的仲間たち」、主催、東京大学文学部1番大教室、2016.2.22

国際、「東京国際文芸フェスティバル2016」、チェア、特別対談「海外文学の愉楽(池澤夏樹、川上弘美)、アカデミーヒルズ、国立新美術館(東京六本木)、2016.3.2~2016.3.6

国内、「第2回 JLPP 翻訳コンクール授賞式およびシンポジウム」、チェア、シンポジウム「現代日本文学の翻訳—作家と翻訳家の対話」、日本近代文学館(東京都目黒区)、2016.3.11

(8) 総説・総合報告

沼野充義、「文学 2014年(概観)」、日本文藝家協会編『文藝年鑑 2015』新潮社刊、2015年版、8-15頁、2015.6

(9) マスコミ

「«В Японии очень мало знают о реальных русских людях» Спецпроекты ЛГ / Звёзды мировой русистики / Наш человек в Японии」、『Литературная газета』、Литературная газета、2014.1.15

「ロシア文化人 勇気の言論—ウクライナ紛争の陰で」、『朝日新聞』、朝日新聞社、2014.9.23

「対話と批判 人文社会系の本質—中・東欧研究 千葉で盛大に世界大会」、『読売新聞』2015年9月12日(土)夕刊11面、2015.9.12

「「文学」の枠を広げる画期的選考—ジャーナリストにノーベル文学賞」、『読売新聞』2015年10月12日朝刊11面、読売新聞社、2015.10.12

「(ニュースの本棚) ノーベル文学賞のS・アレクシエービッチ 被災者の気持ちすくい上げ」、『朝日新聞』2015年11月15日朝刊、朝日新聞社、2015.11.15

「小さな人々の声のみずから語り始めるとき—ノーベル賞を受賞したジャーナリスト、アレクシエーヴィチの仕事」、『図書』2015年12月号、14-17ページ、岩波書店、2015.12.1

(10) 翻訳

個人訳、Stanislaw Lem、"Solaris"、沼野充義、『ソラリス』、早川書房、2015.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義など

特別講演、湖北大学、仲南民族大学（武漢、中国）、「日本の詩と小説の世界」、2014.11
千葉商工会議所、「ユーラシア世界を知るための市民教養講座—ロシア東欧の文化と芸術」、2015.6～2015.7
かわさき市民アカデミー、「世界を旅する14 ポーランド・ツアー」、2015.10～2016.1
特別講演、群馬県立土屋文明記念文学館、「日本におけるロシア文学の翻訳と受容—二葉亭四迷から村上春樹まで」、
2015.10

(2) 学会

国内、第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会組織委員長、2013.2～
国内、日本ロシア・東欧研究連絡協議会（JCREES）、代表幹事、2014.2～
国内、日本学術会議、連携会員、2014.10～
国内、日本スラヴ学研究会、会長、2015.6～
国内、日本ロシア文学会、学会大賞選考委員長、2015.10～

准教授 柳原 孝敦 YANAGIHARA, Takaatsu

1. 略歴

1989年3月 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科 卒業
1989年4月 東京外国語大学大学院外国語学研究所修士課程入学（ロマンス系言語専攻）
1991年3月 同 修了
1991年4月 Centro de Estudios Literarios, Instituto de Investigaciones Filológicas de la Universidad Nacional Autónoma de México [メキシコ国立自治大学文献学研究所文学研究センター] 訪問研究生（メキシコ政府交換留学生として、～1992年2月）
1992年4月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程進学（地域文化専攻）
1995年3月 同 単位取得退学
1996年4月 法政大学経済学部助教授
2002年4月 Centro de Estudios Latinoamericanos Rómulo Gallegos [ロムロ・ガリェーゴス・ラテンアメリカ研究センター、ベネズエラ] 客員研究員（～2003年3月）
2004年4月 東京外国語大学外国語学部助教授
2007年4月 同 准教授
2009年4月 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授（大学院重点化による）
2012年4月 同 教授
2013年10月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

スペイン語圏の文学、ラテンアメリカ思想文化論

b 研究課題

知識人たちの環大西洋的ネットワークの形成。

c 概要と自己評価

2013年度は所属が変わるなどして慌ただしかったが、研究課題である環大西洋地域を横断する知識人たちのネットワークの形成と個々の活動、その表現の様態についての研究は進行中である。一部は13年度の大学での講義として還元したし、その後、書籍化に向けて執筆にいそんでいるところ。翻訳や雑誌などでの啓蒙活動も活発に行っていると行ってよい。その成果は14年度には結実する予定である。

d 主要業績

(1) 論文

柳原孝敦、「祝祭と革命—クリス・マルケルとラテンアメリカ」、港千尋監修、金子遊・東志保編『クリス・マルケル 遊動と闘争のシネアスト』、103-124 頁、2014.11

柳原孝敦、「羊男は豚のしっぽの夢を見るか？—村上春樹の〈キャラクター小説〉化をめぐる」、柴田勝二、加藤雄二編『世界文学としての村上春樹』、125-142 頁、2015.2

(研究ノート)「突き出した指はどこから来て、どこへ行くのか——スペイン内戦のポスターとソヴィエト、そしてメキシコ」『れにくさ 特集 ロシア・中東欧』6号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 現代文芸論研究室、2016年、91-99 頁

(2) 書評

田尻陽一監修『現代スペイン演劇選集』I、II、カモミール社、2014、2015年日本イスペインヤ学会『会報』第22号、2015年10月10日、13-14 頁

キルメン・ウリベ『ムシェ 小さな英雄の物語』金子奈美訳、白水社、2015年『ラティーナ』2015年12月号、63 頁

ウンベルト・エーコ『プラハの墓地』橋本勝雄訳、東京創元社、2016年、『週刊現代』2016年3月26日/4月2日号、138 頁

カルロス・フエンテス『テラ・ノストラ』本田誠二訳、水声社、2016年『産経新聞』2016年7月3日(日)、22面

(3) 学会発表

国内、柳原孝敦、「劇場と祭のトポス—カルペンティエールの場合」、日本ラテンアメリカ学会第35回大会、関西外語大、2014.6.7

(4) 啓蒙

柳原孝敦、「文字の都市の住民たち—ガブリエル・ガルシア=マルケスに対するアンヘル・ラマの共感と差異の感情」、『ユリイカ』、2014年7月号、110-117 頁、2014.7

立石博高編著『概説 スペイン文化史—18世紀から現代まで』（ミネルヴァ書房、2015）第8章、第13章、第15章執筆分担

(5) マスコミ

「海外文学・文化2014回顧 ラテンアメリカ」、『図書新聞』、2014.12.20

(対談)「ゲバラの夢見た世界とは」(伊高浩昭と)『週間読書人』2015年9月11日、1-2面

(インタビュー)「誌上採録 ハルキをめぐる読みの冒険4」(聞き手:小澤英実/マシュー・チョジック)『NHK ラジオテキスト 英語で読む村上春樹 世界のなかの日本文学』2015年10月号、144-155 頁

「記憶についての/記憶としての映画—パトリシオ・グスマンとチリのクーデタ」『SPUTNIK YIDFF Reader 山形国際ドキュメンタリー映画祭2015』2015年10月8日、33 頁

「海外文学・文化2015回顧 ラテンアメリカ」『図書新聞』2015年12月19日、7面

「Aujourd'hui maman est morte —『偶景』を巡って」(シンポジウム「SPINNING BARTHES 100歳のロラン・バルト」)『すばる』2016年3月号、集英社、188-189 頁

(鼎談採録)「J・G・バスケスを芥川賞作家と読む」『週間読書人』2016年6月17日号、8面、7面(小野正嗣、久野量一と)

(6) 翻訳

エドゥアルド・メンドサ『グルブ消息不明』東宣出版、2015、232 頁

セサル・アイラ『文学会議』新潮社、2015、192 頁

アレホ・カルペンティエール「日々刷新される生まれ来る芸術の証拠」『キューバ映画のポスター—竹尾ポスターコレクションより』展覧会図録(東京国立近代美術館フィルムセンター、2016) 8-9 頁

ファン・ガブリエル・バスケス『物が落ちる音』松籟社、2016年、314 頁

アルフォンソ・レイェス『アナワクの眺め(一五一九)』/『Visión de Anáhuac (1519)』ヌエボレオン州立大学、モンテレイ、メキシコ、2016年、78 頁(上記二言語版の改訂版、対訳。アドルフォ・カスタンニオンによる序文の翻訳も含む)

ロベルト・ボラーニョ『第三帝国』白水社、2016、404 頁

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日本ラテンアメリカ学会第34回大会（於：獨協大学）におけるシンポジウム「ラテンアメリカ研究の射程」のパネルとして報告「ラテンアメリカ主義再考」2013年6月2日（モデレーター：佐藤勘治、他のパネリスト：砂野幸稔、園田節子、中野由美子、コメンテーター：鈴木茂、工藤多香子）

「スペイン映画の魅力」、川崎市民アカデミー「世界を旅する⑩スペイン・ツアー」の一環として。2014年7月2日（於：川崎市生涯学習プラザ）

「ガルシア=マルケスは誰が読んでいたのか？」立教大学文学部文学科文芸・思想専修専攻主催公開講演会「ガルシア=マルケスを読む——ガルシア=マルケス受容の来し方行く末」2014年10月4日（於：立教大学）

「翻訳は難しい」セルバンテス文化センター東京「スペイン語文化研究者との出会い」2015年7月2日（於：同センター）

(2) 学会

日本ラテンアメリカ学会理事（研究年報担当）2012年6月～2014年6月

日本イスパニヤ学会理事（広報担当）2014年4月～現在にいたる

24 西洋史学

教授 深澤 克己 FUKASAWA, Katsumi

1. 略歴

1973年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻修士課程入学
1978年3月 同 課程修了(文学修士)
1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻博士課程入学
(1984年3月 同課程単位取得満期退学)
1980年10月 フランス・プロヴァンス第1大学第3課程(歴史と文明)登録
1984年12月 同課程修了 フランス第3課程博士号(歴史と文明)取得
1986年12月 九州大学文学部助教授
1994年10月 九州大学文学部教授
1995年4月 東京大学人文社会系大学院教授/九州大学文学部教授(併任)
1995年10月 東京大学人文社会系大学院教授
1997年3-5月 フランス・ボルドー第3大学客員教授
2005年3-7月 フランス・ニース大学文学部客員教授
2007年6月 フランス・南ブルターニュ大学、客員教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

近世ヨーロッパ、とくにフランスを主要な対象として以下の諸分野を研究。

1) 国際商業史、2) 港湾都市史、3) 宗教社会史、4) フリーメイソン史

c 概要と自己評価

研究・教育・学内行政・学会活動、その他社会活動の各分野で、基本的責任を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

共著、佐藤彰一・深沢克己、『ヨーロッパ、海域、そしてユーラシア—近代以前の世界』、立教大学アジア地域研究所、2015.3

(2) 書評

田中きく代・中井義明・朝治啓三・高橋秀寿編著、『境界域からみる西洋世界—文化的ボーダーランドとマージナリティ』、ミネルヴァ書房、『社会経済史学』、80巻1号、114-117頁、2014.5

(3) 学会発表

国際、Katsumi Fukasawa、「L'identité marseillaise, l'altérité phocéenne : mythe et réalité」、Conférence à la Maison des Sciences de l'Homme d'Aquitaine、Université Bordeaux 3 - Michel de Montaigne、2014.4.28

国内、深沢克己、「近世ヨーロッパと地中海—南フランスの作業場から」、ヨーロッパ、海域、そしてユーラシア—近代以前の世界、立教大学、2014.5.30

国内、深沢克己、「永遠の地中海都市マルセイユ—他者性と帰属性のあいだで」、歴史家協会第13回大会、2014.6.14

(4) 総説・総合報告

深沢克己・勝田俊輔、「フランスとアイルランド—共通の歴史、差異の歴史」、『クリオ』、28号、1-44頁、2014.5

深沢克己、「コラム 歴史の風 「あまりに遠し」から西洋史研究の「新人類」まで」、『史学雑誌』、124編1号、40-42頁、2015.1

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、神戸大学大学院人文学研究科・文学部、外部評価委員、2014.7～

1. 略歴

1973年3月	奈良女子大学理学部化学科卒業
1980年6月	フランクフルト大学歴史学部修士課程修了
1984年3月	奈良女子大学大学院人間科学研究科比較文化学専攻単位取得退学（文学博士）
1988年4月	立命館大学国際関係学部講師
1991年4月	立命館大学国際関係学部助教授
1995年4月	立命館大学国際関係学部教授
1998年9月	ドイツ・ボーfum大学社会科学部客員教授（1999年3月まで）
2005年4月	筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻教授
2009年4月	東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋史

b 研究課題

近現代ドイツ社会史、女性・ジェンダー史

c 概要と自己評価

研究・教育・学内行政・学会活動、その他社会活動の各分野に携わり、基本的な責務を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

編著、姫岡とし子、『歴史を読み替える—ジェンダーから見た世界史』、大月書店、2014.5

共著、Toshiko Himeoka、『Gender Nation and State in Modern Japan』、Routledge、2014.7

共著、姫岡とし子、『外国における日本女性史研究—ドイツ』女性史総合研究会編『日本女性史研究文献目録1868—2002 CD-ROM版』、東京大学出版会、2014.10.5

監訳、姫岡とし子、レギーナ・ミュールホイザー著『戦場と性—独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』、岩波書店、2015.12

(2) 論文

姫岡とし子、『日本とドイツの反フェミニズムとナショナリズム』、『政策科学（立命館大学政策科学部紀要）』巻(2015年5月)、22号第3巻、pp.229-244、2015.3

姫岡とし子、『優しい父親・戦う男性—近代初期ドイツのジェンダー・階層・ナショナリズム』、落合恵美子、橘木俊詔編著『変革の鍵としてのジェンダー—歴史・政策・運動』、ミネルヴァ書房、pp.41-59、2015.8

(3) 書評

メアリー・ウルストンクラフト、『女性の権利の擁護』白井堯子訳、未来社、『究』、039、2014.6

フィリップ・アリエス、『<子供>の誕生—アンシャン・レージュム期の子供と家族生活』杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、『究』、042、2014.9

ナタリー・Z・デーヴィス、『マルタンゲールの帰還—16世紀フランスの偽亭主事件』成瀬駒男訳、平凡社、『究』、045、2014.12

伊藤セツ、『クララ・ツェトキーン—ジェンダー平等と反戦の生涯』、御茶の水書房、『ドイツ研究』、49号、pp.226-230、2015.3

バーバラ・ドゥーデン、『女の皮膚の下』井上茂子訳、藤原書店、『究』、048、2015.3

ジョン・W・スコット、『ジェンダーと歴史学』荻野美穂子訳、平凡社、『究』、051、2015.6

ロンダ・シービンガー、『植物と帝国—抹殺された中絶薬とジェンダー』小川真理子、弓削尚子訳、工作舎、『究』、054、2015.9

クローディア・クーンズ、『父の国の母たち—女を軸にナチズムを読む』姫岡とし子訳、時事通信社、『究』、057、2015.12

ジョージ・J・モッセ、『男のイメージ—男性性の創造と近代社会』細谷実、小玉亮子、海峯径子訳、作品社、『究』、060、2016.3

(4) 学会発表

国内、姫岡とし子、「ジェンダー史の成果は浸透したか」、日本学術会議シンポジウム、2014.6.29

(5) 啓蒙

姫岡とし子、「教養教育とジェンダー史」、『学術の動向』、2014.5

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本ドイツ学会、理事長（2010～2015）、監事（2015～現在）

公益財団法人史学会、理事（2014～現在）

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議連携会員（2010～現在）

教授 高山 博

TAKAYAMA, Hiroshi

HP: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~tkymh/index.html>

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
1980年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学修士課程入学
1982年3月 東京大学大学院同研究科同修士課程修了（文学修士）
1982年4月 東京大学大学院同研究科同博士課程進学
1984年9月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程入学
（Harvard Yenching Institute, Doctoral Scholarship for Junior Faculty, 1984-88 による）
1986年5月 アメリカ、エール大学大学院 M.A. (Master of Arts) 取得
1987年9月 アメリカ、エール大学 teaching assistant (12月まで)
1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学博士課程単位取得退学
1989年6月 イギリス、ケンブリッジ大学客員研究員(1990年3月まで)
1990年5月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D.取得
Robert S. Lopez Memorial Prize (最優秀中世史博士論文賞)
1990年4月 一橋大学助教授（経済学部）（1993年4月から1994年3月まで併任助教授）
1993年4月 東京大学文学部助教授（文化交流研究施設）
12月 サントリー学芸賞
1994年6月 地中海学会賞
10月 マルコ・ポーロ賞
1995年10月 フランス、国立社会科学高等研究院客員研究員（1996年9月まで）
（国際交流基金フェロウシップによる）
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文化交流研究施設・基礎部門）
2001年10月 （西洋史学助教授を併任）
2002年4月 21世紀COEプログラム委員会分野別審査・評価部会委員（人文科学）（2005年まで）
2002年10月 イタリア、American Academy in Rome, R.A.A.R. (Resident of American Academy in Rome), (12月まで)
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋史学） 現在に至る
2004年4月 日本学術振興会 学術システム研究センター研究員（人文学）（2007年3月まで）
2008年4月 文部科学省、科学官（2012年3月まで）
2009年10月 アメリカ、UCLA, CMRS Distinguished Visiting Scholar
2015年6月 西洋中世学会会長（～現在）
2016年4月 紫綬褒章
2016年6月 史学会理事長（～現在）

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋中世史

b 研究課題

- (1) 古代から現代に至る諸国家の形態、組織、統治システムの比較を行う。
- (2) 西洋中世の主要な君主国の統治システムを比較・検討し、その異同を明らかにする。
- (3) 異なる文化・宗教を背景に持つ様々な人間集団が、地中海を舞台にどのように接触・対応していったかを通時的に見通すとともに、地中海の回りに形成された三大文化圏（ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏）研究の接合を目指す。
- (4) 上記三大文化が併存する十二世紀ノルマン・シチリア王国の解明を行う。
- (5) 異文化交流によって生じる様々な現象を分析し、人間集団が持つ特性と多様性を考える。
- (6) グローバル化が社会や国家形態に及ぼす影響を考察する。

c 概要と自己評価

教育・研究上の義務は滞りなく果たすことができたと思う。

d 主要業績

(1) 著書

単著、高山博、『中世シチリア王国の研究—異文化が交差する地中海世界』東京大学出版会、2015.8

監訳、高山博、ジャイルズ・コンスタブル著、小澤実・函師宣忠・橋川裕之・村上樹樹『十二世紀宗教改革』慶應義塾大学出版会、2014.6

(2) 論文

高山博、「中世シチリアにおける農民の階層区分」、『西洋中世研究』、6、141-159頁、2014.12

Hiroshi Takayama, "The Administration of Roger I: Foundation of the Norman Administrative System", *Bausteine zur deutschen und italienischen Geschichte. Festschrift zum 70. Geburtstag von Horst Enzensberger (Schriften aus der Fakultät Geistes- und Kulturwissenschaften der Otto-Friedrich-Universität Bamberg, 18)*, herausgegeben von Maria Stüber & Michele Spadaccini, Bamberg, University of Bamberg Press, pp. 413-431, 2014.12

(3) 学会発表

国際、Hiroshi Takayama, "Classification of Villeins in Norman Sicily," *Medieval Academy of America, Annual Meeting, UCLA, USA*, 2014.4.10

3. 主な社会活動

(1) 学会など

国内、史学会、理事長（2016～現在）

国内、西洋中世学会、会長（2015～現在）、常任委員（2009～2015）

国内、地中海学会、事務局長（2014～2016）、常任委員（1999～現在）

国内、史学研究会、評議員（2004～現在）

国内、*Spicilegium* (Japan Society for Medieval European Studies), Editorial Board, 2015～現在

国際、*Corpus Membranarum Capuanarum* (Edizioni Scientifiche Italiane, Italia), Scientific Honorary Committee, 2014～現在

国際、*British Journal of Interdisciplinary Studies* (Science & Knowledge House Ltd, UK), Editorial Board, 2014～現在

国際、*The Mediterranean Seminar* (UCSC, USA), Advisory & Editorial Board, 2009～2016

国際、*Journal of Medieval Iberian Studies*, Editorial Board, 2007～11; Advisory Board, 2012～2014

国際、*Archivio Normanno-Svevo* (Centro Europeo di Studi Normani, Italia), Comitato Scientifico, 2008～現在

国際、*International Medieval Bibliography* (Leeds, U.K.), Regular Contributor for Japan, 1995～現在

(2) 行政

日本学術会議、立案、連携会員（史学）、2006～2014

1. 略歴

- 1991年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程博士・博士（文学）
1991年11月 東京大学文学部助手
1993年4月 大阪外国語大学外国語学部助教授
2002年3月 ケンブリッジ大学古典学部客員研究員、クレアホール客員フェロー（～2003年2月）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年11月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

古代ギリシア史

c 概要と自己評価

研究・教育及びこれに関わる学内外の諸活動に従事し、責務を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

単著、橋場弦、『民主主義の源流：古代アテネの実験』、講談社、2016.1

(2) 啓蒙

橋場弦、「英字新聞」、『公研』、606、14-15頁、2014.2

橋場弦、「アリストテレス」、『公研』、612、14-15頁、2014.8

橋場弦、「古典と向き合う」、『公研』、618、14-15頁、2015.2

橋場弦、「ドラクマ」、『公研』、624、14-15頁、2015.8

橋場弦、「ガイコツの思い出」、『群像』、71巻2号、182-183頁、2016.1

橋場弦、「手を上げる」、『公研』、630、14-15頁、2016.2

(3) 教科書

『詳説世界史（世界史B）（木村靖二・佐藤次高・岸本美緒編）』、橋場弦、執筆、山川出版社、2015

『詳説世界史（世界史B）（木村靖二・佐藤次高・岸本美緒編）』、橋場弦、執筆、山川出版社、2016

(4) 翻訳

個人訳、アリストテレス、「アテナイ人の国制」、橋場弦、『新版アリストテレス全集 19 アテナイ人の国制 著作断片集1』、岩波書店、2014.12

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本西洋古典学会、常任委員、編集委員、書評委員、2013.1～2015.12

国内、史学会、一般会員、2013.1～2015.12

国内、日本西洋史学会、一般会員、2013.1～2015.12

国内、法制史学会、一般会員、2013.1～2015.12

国際、Hellenic Society、一般会員、2013.1～2015.12

1. 略歴

- 1986年4月 東京大学教養学部文科III類 入学
1991年3月 東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1994年3月 同 修了
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1995年10月 アイルランド共和国ダブリン大学留学
~97年9月 (1996年9月まではアイルランド政府給費留学生)
1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室 助手
2002年3月 博士(文学)学位取得
2002年4月 岐阜大学教育学部社会科教育講座(史学) 助教授
2007年4月 同 准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アイルランド近代史、近代ブリテン世界史

b 研究課題

19世紀アイルランド農村史、近代ダブリン都市史、近代ブリテン世界史

c 概要と自己評価

教育・研究・学内業務において、基本的責任を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

近藤和彦(編)、『ヨーロッパ史講義』のうちの「第9章 大西洋を渡ったヨーロッパ人——19世紀のヨーロッパ移民とアメリカ合衆国」、山川出版社、2015.5

編著、勝田俊輔・高神信一(共編)、『アイルランド大飢饉——ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』、刀水書房、2016.2

(2) 論文

勝田俊輔、「アイルランド近代史におけるランドスケープ」、『建築雑誌』、130-1671、28-29頁、2015.5

(3) 解説

勝田俊輔、「Ireland in the 19th century through travellers' guides」、『Ireland in the 19th century through travellers' guides』、1-14頁、2015

勝田俊輔、「イラストレイテッド・ロンドン・ニュースのアイルランドに対する眼差しは温かい」、『Gale Interviews』、2015.1

(4) マスコミ

「論説空間 スコットランド独立」、『東京大学新聞』、2014.11.18

(5) 史料

勝田俊輔、『Ireland in the 19th century through travellers' guides, 5 vols』、2015.1

(6) データベース

Massimo Mastrogeri、「International Bibliography of Historical Sciences, vol. lxxix, 2010」、2015.7

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

任意団体、史学会、編集委員、2013.5～、評議員、2014.5～

1. 略歴

- 1994年3月 東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程西洋史学専攻 修了
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1998年10月~2000年9月 ロシア連邦ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所留学（文部省アジア諸国等派遣留学生）
2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
2005年10月 博士（文学）学位取得
2006年9月 新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科 専任講師
2010年4月 東京理科大学理学部第一部教養学科 准教授
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシア史

b 研究課題

ヨーロッパの周縁としてのロシアから、20世紀史を捉え直すこと。

c 概要と自己評価

2015年8月に千葉・幕張で行なわれた ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）第9回世界大会に関連する活動が、本期間における最も大きな活動となった。会計部長として大会組織委員にくなり、大会準備にあたったほか、報告2本、司会1本（特別セッション）にあたった。この大会において、ICCEESの執行委員会（Executive Committee）メンバーに選出された。ICCEES大会をはじめとして、研究成果の英文での発表に努め、2本の論文を公刊することができた。卒業生企画グレーター東大塾平成26年度秋期の副塾長として企画運営および司会にあたり、学術研究の成果を社会に還元することにも若干の貢献を行なった。

d 主要業績

(1) 著書

- 編著、池田嘉郎、草野佳矢子『国制史は躍動する——ヨーロッパとロシアの対話』、刀水書房、2015.10
編著、池田嘉郎、塩川伸明『社会人のための現代ロシア講義』、東京大学出版会、2016.5

(2) 論文

- 池田嘉郎、「2014年ロシア＝ウクライナ紛争の歴史的背景」、『地歴・公民資料』、79、7-10頁、2014.9
池田嘉郎、「20世紀のヨーロッパ——ソ連史から照らし出す」、近藤和彦編『ヨーロッパ史講義』、山川出版社、224-243頁、2015.5
Yoshiro Ikeda, Autonomous Regions in the Eurasian Borderlands as a Legacy of the First World War, in Shinichiro Tabata (ed.), *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia*, Routledge, New York, 2015, pp. 155-170
Yoshiro Ikeda, The Notion of Obshchestvennost' during the First World War, in Yasuhiro Matsui (ed.), *Obshchestvennost' and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society*, Palgrave Macmillan, Basingstoke, 2015, pp. 61-81
池田嘉郎、「関東大震災と日ソ関係——局地紛争の時代の災害」、公益財団法人史学会編『災害・環境から戦争を読む（史学会リレーシンポジウム2014 3）』、山川出版社、209-234頁、2015.11
池田嘉郎、「第一次世界大戦とロシア・リベラルのヨーロッパ認識——カデットを中心にして」、『ロシア史研究』、97、27-42頁、2016.4
池田嘉郎、「第22回国際歴史学会議 済南大会に参加して」、『思想』、1102、104-112頁、2016.2
池田嘉郎、「第1次世界大戦と帝国の遺産——自治とナショナリズム」、宇山智彦編著『ユーラシア近代帝国と現代世界（シリーズ・ユーラシア地域大国論 4）』、ミネルヴァ書房、147-168頁、2016.2

(3) 書評

Ilya V.Gaiduk, 『Divided Together: The United States and the Soviet Union in the United Nations, 1945-1965』、Woodrow Wilson Center Press, 『ロシア史研究』、94、35 頁、2014.5

Frederic Bozo, Marie-Pierre Rey, N. Piers Ludlow and Bernd Rother, eds., 『Visions of the End of the Cold War in Europe, 1945-1990』、Berghahn Books, 『ロシア史研究』、95、54 頁、2014.12

南塚信吾・古田元夫・加納格・奥村哲、『人びとの社会主義』(研究会「戦後派第一世代の歴史研究者は21世紀に何をなすべきか」編『21世紀歴史学の創造』第5巻)、有志舎、『クアドランテ』、17、187-191 頁、2015.3

木畑洋一・南塚信吾・加納格、『帝国と帝国主義』(研究会「戦後派第一世代の歴史研究者は21世紀に何をなすべきか」編『21世紀歴史学の創造』第4巻)、有志舎、『19世紀学研究』、9、139-144 頁、2015.3

山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編、『現代の起点 第一次世界大戦』第1巻『世界戦争』、岩波書店、『史學雑誌』、124-10、1791-1800 頁、2015.10

(4) 学会発表

Yoshiro Ikeda, “Russian Health Resorts and Visions of an Empire during the First World War”, at ICCEES (International Council for Central and Eastern European Studies) IX World Congress, at Chiba, Japan, August 6, 2015

Yoshiro Ikeda, “Disabled Soldiers and the Bolshevik Regime”, at ICCEES IX World Congress, at Chiba, Japan, August 7, 2015

Yoshiro Ikeda, “The Quest for the Republican Regime in the Russian Revolution”, at The 22nd International Congress of Historical Sciences, at Jinan, China, August 25, 2015

(5) 会議主催(チェア他)

(Chair) “New Perspectives on the Russian Revolution: Looking Ahead to 2017”, at ICCEES IX World Congress, at Chiba, Japan, August 5, 2015

(6) 教科書

『世界の歴史——世界史A』、近藤和彦、羽田正、石橋崇雄、大津留厚、高山博、中野隆生、村上衛、森本一夫、池田嘉郎、小豆畑和之、執筆、山川出版社、2014

(7) 翻訳

共訳、池田嘉郎、サルキソフ K. O. 著「ロシアと日本のアイデンティティに関する比較分析」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、31、83-103 頁、2016.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京大学卒業生室企画「グレーター東大塾 平成26年度秋期 ロシアはどこへ行くのか〜共生の道をさぐる」副塾長(第1回〜第10回の司会、第2回「ナショナリズム」講師)、2014年9月〜12月

JCREES(日本ロシア・東欧研究連絡協議会)およびICCEES幕張大会組織委員会主催「ユーラシア世界を知るための市民教養講座」第4回「暮らしと食へのまなざし——ロシアの歴史と食文化」(沼野恭子と共同講演)、2015年7月18日、千葉商工会議所、千葉市

(2) 学会

ICCEES(International Council for Central and Eastern European Studies)幕張大会組織委員会、会計部長(2014年7月から会計部長、大会開催は2015年8月)

ICCEES, member of the Executive Committee

JCREESのICCEES日本代表、JCREES参与

都市史学会編集委員;ロシア史研究会会員;史学会会員

25 社会学

教授 松本 三和夫 MATSUMOTO, Miwao

1. 略歴

- 1981年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
1982年4月 城西大学経済学部専任講師（社会学）
1985年4月 城西大学経済学部助教授（社会学）
1993年6月 博士（社会学）取得（東京大学）
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（社会学）
1998年10月 オックスフォード大学セントアントニーズカレッジ上級客員研究員（～1999年10月）
2003年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科教授（社会学）
この間、エジンバラ大学ゲノム政策研究所 Distinguished Visiting Scholar（2007.6）、カリフォルニア大学バークレー校 Visiting Fellow（2013.3）を務める。

2. 主な研究活動

a 専門分野

科学社会学、理論社会学、環境社会学、災害社会学

b 研究課題

以下の4つの領域を中心に研究をすすめている。

- (1) 科学技術の社会学におけるセクターモデルの地球環境問題、エネルギー問題への展開
- (2) 軍産学複合体の形成・展開過程の研究
- (3) 不確実性のもとでの社会的意思決定に関する理論社会学的研究
- (4) 知の失敗の研究の理論化

c 概要と自己評価

(1)は、クリーンな新エネルギー技術開発が地球環境問題を悪化させる可能性があることを解明し、予防原則を補完する「弱い凍結」の原則を示すことができた。(2)については、戦前の軍産学複合体の挙動と福島原発事故後における「原子力村」の挙動との相似性を示す成果を刊行することができた（論文参照）。現在進行中の仕事は(3)で、とくに科学社会学と理論社会学を接合する基礎枠組を開発し、経路依存的な社会過程をへて極端な現象が生成するようすをふまえ、出発点となった理論枠組を改訂した（著書を参照）。(4)は、すでに行った知の失敗の研究を新たに展開する見本例が発見され、分析をすすめ、近い将来独自の理論化を行うことをめざしている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、松本三和夫、『科学社会学の理論』、講談社学術文庫、2016.3

(2) 論文

Miwao Matsumoto, 「Structural disaster' long before Fukushima: A hidden accident」、『*Development & Society*』、Vol. 42 No. 2、165-190 頁、2013.12

Miwao Matsumoto, 「Structural disaster behind the Fukushima accident: The sociology of disaster and beyond」、in 『*Sociology in the Postdisaster Society*』、134-142 頁、2014

Miwao Matsumoto, 「The 'structural disaster' of the science-technology-society interface: From a comparative perspective with a prewar accident」、in J. Ahn, C. Carson, et al (eds.), 『*Reflections on the Fukushima Daiichi Nuclear Accident*』 (Springer)、189-214 頁、2014

松本三和夫、「構造災と制度設計の責任—科学社会学からみる制度化された不作為」、『*学術の動向*』、第19巻、第3号、34-41 頁、2014

(3) 解説

松本三和夫、「福島原発事故をめぐる科学社会学会の取り組み」、『*日本原子力学会誌*』、第57巻、第3号、56-58 頁、2015

(4) 学会発表

国際、Miwao Matsumoto、「Structural Disaster' and Infinite Responsibility behind Institutionalized Forbearance」、Paper presented at RC 23 of International Sociological Association, Yokohama、2014.7.17

国際、Miwao Matsumoto、「Structural Disaster' behind the Global Environment: A Complex Link between Ozone Destruction and Renewable Energy Technology」、Discussion made at the International Symposium on Global Warming as a Global Risk, The University of Tokyo, Tokyo、2014.7.20

国内、松本三和夫、「危機における知の公共性—討議」、Sustainability と人文知最終シンポジウムにて指定討論、於・東京大学、2015.3.6

国内、松本三和夫、「『構造災』合評会」、於・成城大学、2015.6.21

国際、Miwao Matsumoto、「Structural Disaster through War and Peace: Secrecy before Fukushima」、Paper presented at the 45 Annual Meeting、Denvor、2015.11.13

国際、Miwao Matsumoto、「The 'Structural Disaster': The Framework for Theory and History on Extreme Events」、Paper presented at the kick-off meeting of Franco-Japonais project、Tokyo、2016.3.30

(5) 啓蒙

松本三和夫、「福島原発事故の背景にある「構造災」を考える—科学社会学の視点」、『Isotope News』、2015年9月号、24-30頁、2015.9

松本三和夫、「時論 構造災—科学社会学者からのメッセージ」、『日本原子力学会誌』、第58巻、第4号、2-3頁、2016

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

招待講演、Miwao Matsumoto、「Structural Disaster' behind the Fukushima Accident: From the Viewpoint of the Sociology of Science and Technology」、Invited lecture addressed at The Institute of Political Science, Academia Sinica、Taipei、2014.10.7

招待講演、Miwao Matsumoto、「Structural Disaster': Beyond Risk Society」、Invited lecture addressed at The Department of Sociology、National Taiwan University、Taipei、2014.10.9

招待講演、松本三和夫、「福島原発事故の背景にある「構造災」を考える—科学社会学の視点から」、東京大学農学生命科学研究科第10回研究報告会にて招待講演、於・東京大学、2014.11.9

招待講演、松本三和夫、「日本における構造とリスクの概念について—「構造災」の分析から」、アジア経済研究所研究会にて招待講義、於・東京外国語大学本郷サテライト、2014.12.15

招待講演、Miwao Matsumoto、「Beyond Structural Disaster: Success and Failure of Renewable Energy Invited talk given at Energy Science Week in Tokyo organized by Norwegian Research Council、Embassy of Norway in Tokyo、Tokyo、2015.5.27

招待講演、松本三和夫、「公共圏における業界の壁を適切に突破する知的なしくみをもとめて—構造災の視点—」、環境社会学会テーマセッション「科学技術は自然との対話的知性の夢を見るか?」にて招待講演、於・立教大学、2015.6.28

招待講演、松本三和夫、「研究不正の構造的背景を考える—研究競争の在り方を問う—」、キャンパスセクシュアルハラスメント全国ネットワーク第21回全国集会にて招待講演、於・椋山女学園大学星が丘キャンパス、2015.8.30

招待講演、松本三和夫、「業界の壁を適切に見極める知的なしくみを展望する—構造災の視点—」、日本原子力学会年次大会テーマセッション「知の統合をめざして」にて招待講演、於・静岡大学、2015.9.9

招待講演、Miwao Matsumoto、「Relevant Outsiders and the Creation of New Paths in Renewable Energy」、Invited Paper presented at the Norwegian University of Science and Technology、Trondheim、2015.9.24

招待講演、Miwao Matsumoto、「Structural Disaster through War and Peace: A Hidden Accident before Fukushima」、Invited Paper presented at the Université de Paris VII、Paris、2015.9.29

招待講演、松本三和夫、「構造災—科学社会学からのメッセージ—」、東京大学・翰林大学国際学術会議にて招待発表、翰林大学、韓国、2016.3.12

(2) 学会

国際、International Sociological Association, Research Committee on the Sociology of Science & Technology (RC 23) 評議員、2014~2018

(3) 学外組織

総合研究大学院大学先導科学研究科教員選考委員会委員、2014.11~2015.3

総合研究大学院大学先導科学研究科教員昇任審査委員会委員、2016.3

1. 略歴

1984年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
社会保障研究所、中央大学を経て、1993年4月から東京大学助教授
現在 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

福祉社会学、社会政策、比較福祉レジーム分析

b 研究課題

- (1) 社会政策および社会計画に関する理論的研究
- (2) 日本の地域社会計画に関する実証的研究
- (3) 諸外国の社会政策に関する研究
- (4) 社会保障をはじめとする社会政策に関する政策論的研究
- (5) 福祉国家と福祉社会に関する理論的実証的研究
- (6) 社会政策と社会意識に関する実証的研究

c 概要と自己評価

東アジア諸国における福祉レジームの比較分析をポスト・オリエンタリスト・アプローチによって遂行している。また、公共社会学に関する研究を行い、これを実証的な観点および理論的な観点で、単著と共編著にまとめることができた。また、現在は生産レジームと再生産レジームの発展段階における時間のズレが、各国の福祉レジームにどのような影響を及ぼすかについての研究を進めている。今後、これを継続・発展させることが課題である。

d 主要業績

(1) 論文

武川正吾、「社会福祉における非対称性」、『社会福祉研究』、121、2014.10

武川正吾、「若者論の物質的基礎」、『学術の動向』、20 (1)、2015.1

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

独立行政法人、大学評価学事授与機構、大学機関別認証評価委員会専門委員会、2015.5～3

1. 略歴

1981年3月 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
1983年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
1983年4月 東京大学教養学部助手
1986年4月 法政大学社会学部専任講師
1988年4月 法政大学社会学部助教授
1994年10月 東京大学文学部助教授（東京大学大学院社会学研究科担当）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文学部担当）
2000年4月 同研究科文化資源学専攻助教授（形態資料学専門分野）併任
2005年3月 博士（社会学）学位 東京大学
2005年9月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（文学部担当）

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化の社会学、社会意識論、社会学方法論、社会調査史

b 研究課題

概要

- (1) 歴史社会学の思想と方法。一つの基礎資料としての柳田国男を中心とした全集の編纂。
- (2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。
- (3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践と方法意識の展開について。
- (4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、など。

c 概要と自己評価

2014年度から2015年度にかけては、社会学における学部の卒業論文、大学院における修士論文・博士論文等を念頭に、『論文の書きかた』をまとめ、社会学的想像力をどう動かしていくかを論じた。問いの立てかたや、調査研究の仕方とともに図表の使い方を論じ、研究倫理にも触れている。『方法としての柳田国男』という最初の著作を、全集編纂の経験をふまえて発展させた『柳田国男の歴史社会学』は、この20年近くに及ぶ編纂作業での発見の集大成であると同時に、旧来の研究を支えてきた「定本」というテキスト空間に対する組織的な批判でもあった。歴史社会学の実験としての十二階凌雲閣は、「民間学」の再評価という側面を含め、また近代歴史社会資料の方法論という要素も加味しつつ、ライフストーリー研究の作品としても評価しうる『浅草公園凌雲閣十二階』としてまとめられた。研究主体の生きた空間もとも対象を浮かびあがらせる工夫をおこなっている。その他、戦後日本を代表する知識人である鶴見俊輔と、日本の戦後社会学を代表する見田宗介について、研究序説的な論考を書いている。また、アルザス欧州日本学研究所と国際交流基金が共催するアルザス日欧知的交流事業・日本研究セミナーでは、2014年度と2015年度の二年間にわたり主任講師をつとめて、ヨーロッパ各国の若手日本研究者の指導をおこない、交流を深めた。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、佐藤健二、『論文の書きかた』、弘文堂、2014.12
単著、佐藤健二、『柳田国男の歴史社会学：続 読書空間の近代』、せりか書房、2015.2
単著、佐藤健二、『浅草公園凌雲閣十二階：失われた〈高さ〉の歴史社会学』、弘文堂、2016.2

(2) 論文

- 佐藤健二、「社会を探究する理路：盛山和夫著『社会学的方法的立場』を読む」、『UP』、2014年6月号、1-6頁、2014.6
佐藤健二、「読む対象としての〈文〉／知る方法としての〈文〉」、『UP』、2014年8月号、1-4頁、2014.8
佐藤健二、「近代日本における「実業」の位相：渋沢栄一を中心に」、平井雄一郎・高田知和編『記憶と記録のなかの渋沢栄一』法政大学出版局、47-73頁、2014.8
佐藤健二、「「演説」と「挨拶」の公共圏：声の力の原点から考える」、熊野純彦・佐藤健二編『人文知3 境界と交流』東京大学出版会、187-209頁、2014.9
佐藤健二、「歴史社会学におけるデータ批判：資料の社会的存在形態の解説」、野上元・小林多寿子編『歴史と向きあう社会学』ミネルヴァ書房、103-106頁、2015.7
佐藤健二、「鶴見俊輔における「身体」と「ことば」」、『現代思想』、43巻15号（10月臨時増刊号）、170-179頁、2015.10
佐藤健二、「見田宗介と柳田国男：初期著作論考にあらわれた歴史社会学の諸問題」、『現代思想』、1月臨時増刊号、194-209頁、2016.1.

(3) 書評

- 加島卓、『〈広告制作者〉の歴史社会学』、せりか書房、『読書人』、5月23日号、2014.5
武田尚子、『20世紀イギリスの都市労働者と生活：ロウントリーの貧困研究と調査の軌跡』、ミネルヴァ書房、『日本都市社会学年報』、33号、2015.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

静岡県立大学非常勤講師（2014年度～2015年度）、九州大学非常勤講師（2015年度）

(2) 学会

日本社会学会、社会調査協会

(3) 国際会議

国際交流基金・アルザス日本学研究所共催アルザス日欧知的交流事業・日本研究セミナー（2014年度・2015年度）

1. 略歴

- 1997年 オックスフォード大学 University of Oxford (社会学)・社会学博士
1997年4月 国立社会保障・人口問題研究所室長
2003年4月 筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (社会学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会階層論、人口社会学、計量分析

b 研究課題

主な研究課題として次の4つに取り組んでいる。

- (1) 少子高齢社会の不平等構造
- (2) 社会的、私的移転に関する実証研究
- (3) 資産の不平等に関する実証研究
- (4) 社会階層と移動に関する実証研究

c 概要と自己評価

人口高齢化と階層格差に関する研究を中心に進めている。特に、2013年度より特別推進研究「少子高齢化からみる階層構造の変容と格差生成メカニズムに関する総合的研究」(課題番号 25000001)を立ち上げ、2015年度には本事業の柱の一つである第7回「社会階層と社会移動に関する全国調査(SSM調査)」(1955年以降、10年ごとに実施されてきた)を実施した。さらに、高齢化に注目して「中高年者の生活実態に関する継続調査」の3回目を実施し、パネル分析研究も進めている。大型プロジェクトを運営し、海外での学会報告や英文ジャーナルに論文を掲載し、新たな研究成果の発表を進めており、ほぼ予定通り、研究成果をあげることができた。

d 主要業績

(1) 論文

- Shirahase, Sawako and James M. Raymo, 「Single Mothers and Poverty in Japan: The Role of Intergenerational Coresidence」、*Social Forces*, 93(2), 545-569 頁、2014
- Young-Mi Kim and Sawako Shirahase, 「Understanding intra-regional variation in gender inequality in East Asia: Decomposition of cross-national differences in the gender earnings gap」、*International Sociology*, 29(3), 209-228 頁、2014.5
- Sawako Shirahase, 「Demography as Social Risk: Demographic Change and Accumulated Inequality」、*Development and Society*, Vol. 42 No.2, 213-235 頁、2014.11
- Shirahase, Sawako, 「Income inequality among older people in rapidly aging Japan」、*Research in Social Stratification and Mobility*, 41, 1-10 頁、2015
- Shirahase, Sawako, 「Demography as Destiny: Falling Birthrates」、*Japan: the Precarious Future*, edited by F. Baldwin and A. Allison (New York University Press)』、11-35 頁、2015
- 白波瀬佐和子, 「不平等構造からみる少子化社会」『社会学論叢』no.183, 2015.6
- 白波瀬佐和子, 「働き方のジェンダー格差」、『統計』、2015年2月号、545-569 頁、2015.2

(2) 学会発表

- 国際、Shirahase, Sawako, 「Intergenerational Transfer, Social and Private, in Japan」、International Sociological Association, RC19, パシフィコ・横浜、2014.7.19
- 国際、Shirahase, Sawako, 「Intergenerational Transfer within Families from the Perspective of Social Inequality in Japan」、International Sociological Association, RC11&41, パシフィコ・横浜、2014.7.19
- 国内、白波瀬佐和子, 「社会的移転と私的移転からみる世代間格差」、日本社会学会、神戸大学、2014.11.23
- 国際、Shirahase, Sawako, 「Income inequality among older people in rapidly aging Japan」、International Sociological Association, Research Committee 28, フィラデルフィア (アメリカ)、2015.8.17
- 国内、白波瀬佐和子, 「高齢層の経済格差に関する実証研究—世帯構造と所得構造の変化に着目して—」、日本社会学会、早稲田大学 (東京・新宿区)、2015.9.20

国際、Shirahase, Sawako、「Social Inequality in the Rapidly Aging Society of Japan」、Labor and Employment Relations Association (LERA)/Ammecian Economic Association (AES)、サンフランシスコ (アメリカ)、2016.1.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 「高齢社会の若者論ー労働・福祉・コミュニティを考えるー」日本学術シンポジウム (2014年1月26日)
- 「少子高齢化と所得格差の変容：世帯構造とライフコースの変化に着目して」政府税制調査会 (2014年5月8日)
- 「持続可能な少子高齢社会の構築に向けた税制のあり方を考える」東京都税制調査会 (2014年5月19日)
- 『『お互いさまの社会』の創出に向けて』連帯社会研究交流センター「連帯社会」連続講座 (2014年12月6日)
- “A Rapid Transformation in the Demographic Structure and Social Security System in Japan: Focusing on the Change in the Family Structure” 国際交流基金・日米交流センター (2015年6月15日)
- 「2025年問題を考える～少子高齢化と格差社会のゆくえ～」茨城県市町村社会福祉協議会事務局長会研究会 (2015年6月19日)
- 「多様な働き方の中の格差：正規と非正規の間で」RIETI政策シンポジウム (2015年7月2日)
- 「少子高齢化における世帯・家族と再分配のありようー二つの世代間移転ー」政府税制調査会 (2015年7月31日)
- 「若者にとっての高齢社会～未来をどう描くのか～」北海道立常呂高校・特別講座 (2015年10月9日)

(2) 学会

- 国際、International Sociological Association、理事、2014.7～
- 国際、Research Committee 28, ISA、理事、2014.7～
- 国内、日本社会学会、理事、2012.11～2015.10
- 国内、福祉社会学会、理事、2014.6～

准教授 **赤川 学** AKAGAWA, Manabu

1. 略歴

- 1990年3月 東京大学大学院社会学研究科社会学修士課程修了
- 1995年 東京大学大学院社会学研究科社会学博士課程単位取得退学
- 1995年 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助手
- 1995年 専修大学文学部社会学科非常勤講師
- 1996年 富山大学人文学部非常勤講師
- 1998年 徳島大学総合科学部非常勤講師
- 1999年 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座講師
- 1999年 信州大学人文学部人間情報学科非常勤講師
- 2000年 筑波大学第一学群社会学類非常勤講師
- 2001年 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座助教授
- 2002年 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助教授
- 2005年 名古屋大学大学院国際多元文化専攻ジェンダー論講座非常勤講師
- 2006年 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会問題の社会学
歴史社会学

b 研究課題

セクシュアリティの歴史社会学
少子化社会論
人口減少社会論
社会問題の構築主義アプローチ

c 概要と自己評価

概要:以下の領域を中心に研究を進めている。

- (1) 社会問題プロセスの理論化
- (2) 近代日本におけるセクシュアリティをめぐる言説の変容
- (3) 人口減少社会を前提とした制度設計・社会構想
- (4) 社会関係資本の測定を基盤にした地域再生

自己評価

(1)に関しては、少子化対策や有害コミック規制などの具体的な社会問題を取り上げ、その言説や政策の形成プロセスに関する理論形成を試みている。(2)に関しては、明治期初頭の性科学書『造化機論』の翻訳過程を追尾している。(3)については、少子化対策をやめて、人口減少を前提とした年金制度、経済成長、都市-農村間の財・サービスの分配などに関する論文をいくつか執筆した。(4)については、集落・村落レベルで社会関係資本を測定し、それが地域社会の持続可能性を生み出すかいなかに着目した研究を継続している。

d 主要業績

(1) 著書

単著、赤川学、「千葉繁の半生:『造化機論』の翻訳に至るまで」『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』第27号、p.97-111、2014.3

単著、Manabu Akagawa “Regulating Pomocomic Sales to Juveniles in Japan: Cycles and Path-Dependence of a Social Problem” *Qualitative Sociology Review*, Apr 2015, Vol. 11(2), p.62-73.

単著、赤川学、「ことばは社会と文化をどのようにつくり変えるのか——社会問題の構築」唐沢かおり・林徹編『人文知1 心と言葉の迷宮』139-162頁、東京大学出版会、2014.7

単著、赤川学、『明治の「性典」を作った男』、筑摩書房、2014.9

単著、赤川学、「家族の多様性と社会の多様性—少子化をめぐる」大澤真幸編『岩波講座現代7: 身体と親密圏の変容』189-210頁、岩波書店、2015.12

(2) 学会発表

国際、Akagawa Manabu, “Comparing “harmful publication” issue with ‘non-existent youth’ issue: from a perspective of natural history model of social problems,” ,XVIII ISA World Congress of Sociology, RC34, Sociology of Youth, Pacifico Yokohama, 2014.7.17

国際、Akagawa Manabu, “The Construction and Transformation of Low Birthrate Issues in Japan since 1990s”, Society for the Study of Social Problems 2014 Annual Meeting, Session 139, Hotel San Francisco, 2014.8.17

国際、“Toward a sociological theory of declining birthrates”, SNU-UT JointForum 2014, 2014.11.15(Sat.), Seoul National University.

国内、赤川学、「進撃の高田保馬—その少子化論の悪魔的魅力」第10回社会学理論学会・一般報告4、2015年9月5日、立教大学。

国内、赤川学、「高田保馬の少子化論——社会学の巨人に学ぶ」第88回日本社会学大会・一般研究報告、2015年9月19日、早稲田大学。

国際、Akagawa Manabu, “Yasuma Takata's Theory on Declining Birthrates: Standing on the Shoulder of a Japanese Giant of Sociology”, 13th East Asian Sociologists' Network Conference 2015.11.14(Sat.), Yokohama National University

国内、赤川学、『善い社会』イメージの多様性とその規定因』第1回質的調査連絡会、2016年3月4日、東京大学。

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

立教大学社会学部非常勤講師、2014~15年

立教大学大学院教育学研究科非常勤講師、2015年

(2) 学会

国内、日本社会学会、理事、2015.9~2018.9

1. 略歴

- 1993年3月 一橋大学社会学部卒業
- 1994年4月 東京大学大学院 社会学研究科社会学専攻 修士課程入学
- 1996年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士課程修了
- 1996年4月 同 博士課程進学
- 2001年3月 同 博士課程単位取得退学
- 2001年4月 博士(社会学)学位取得(東京大学)
- 2001年4月-2007年3月 立命館大学産業社会学部助教授
- 2005年9月-2006年9月 フランクフルト大学社会研究所客員研究員
- 2007年4月-2008年3月 立命館大学産業社会学部准教授
- 2008年4月 明治大学情報コミュニケーション学部准教授
- 2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

理論社会学 社会学史研究

b 研究課題

- (1) フランクフルト学派の学説史研究
- (2) コミュニケーション理論、承認理論に基づく批判的社会理論の展開
- (3) 日本の社会学史の再評価と海外への紹介

c 概要と自己評価

- (1) エーリッヒ・フロムの理性概念とそれに基づく社会批判の再構成を行っている。その成果を国際エーリッヒ・フロム協会主催の国際会議で報告、論文として発表した。現在は後期フロムのナルシズム論の再評価を行う一方、後期ヒューマニズムを生成の哲学の観点から再構成する作業に取り組んでいる。
- (2) 現代資本主義の構造的特質を理論的に解明する。「資本主義的近代化のパラドックス」や現代社会がかかえる社会病理の諸相を承認論、コミュニケーション論の観点から分析している。
- (3) 欧米の社会学理論を背景に戦後日本で発展した社会学理論の独自性に注目し、その現代的意義を再評価すると同時に、国際会議の場で世界に発信している

d 主要業績

(1) 論文

Takeshi Deguchi, 「Beyond Shame and Guilt Culture to Globalised Solidarity: Reappraising Keiichi Sakuta's Sociology of Values as a Galapagosized Sociology」、『Theory (Autum/Winter 2014)』、2014

出口剛司、「越境する知と生の技法—フロムにおける『無意識』と知の生成をめぐる」、熊野純彦・佐藤健二編『人文知3：境界と交流』、pp.19-24、2014.9

Takeshi Deguchi, 「Erich Fromm and Critical Theory in Post-War Japanese Social Theory: Its Past, Present, and Future」、『Funk, R., McLaughlin N., (eds), Towards a Human Science: The Relevance of Erich Fromm for Today, Psychosozial-Verlag』、pp. 219-232、2015

出口剛司、「栗原社会学における社会意識の構成と自明性による支配—戦後日本における管理社会論の展開」、明治大学情報コミュニケーション学研究所編『情報コミュニケーション学研究』第16号、pp.1-15、2016年3月

(2) 学会発表

国際(招待講演)、Takeshi Deguchi, 「Erich Fromm and Critical Theory in post-war Japanese social theory: its past, present and future」、International Erich Fromm Research Conference、Berlin International Psychoanalytic University、2014.6

国際、Takeshi Deguchi, 「Beyond Shame and Guilt Culture to Globalised Solidarity: Reappraising Keiichi Sakuta's Sociology of Values as a Galapagosized Sociology」、ISA World Conference of Sociology、2014.7.14

国際、Takeshi Deguchi, 「Critical Theory and Its Development in Post-war Japanese sociology」、ISA World Conference of Sociology、Pacifico Yokohama in Japan、2014.7.19

国際 (招待講演)、Takeshi Deguchi、「New Individualism as a New Spirit of Capitalism: Emancipation from Fetters or Dissolution of Solidarity?」、For and Against the New Individualism: 10 Year Anniversary Celebration、Hawke Research Institute, University of South Australia、2014.8

国際、Takeshi Deguchi、「Beyond Shame and Guilt Culture to Globalised Solidarity: Reappraising Sociological Theory of Keiichi Sakuta」、2014 SNU-UT Joint Sociological Forum、Seoul National University、2014.11

国際 (招待講演)、Takeshi Deguchi、「Critical Theory and Sociology in post-war Japan: From Critique of Imperial Fascism to Neoliberal Capitalism」、The International Workshop on Recognition Theory, On the 11th - 12th March 2016 at the Joongmin Foundation for Social Theory in Seoul, Korea.

国際 (招待講演)、Takeshi Deguchi、「Critical Theory and Sociology in post-war Japan: From Critique of Imperial Fascism to Neoliberal Capitalism」、The International Workshop on Recognition Theory, On the 14th March 2016 at Chung-Ang University in Seoul, Korea.

国内、出口剛司、「日本型管理社会論の展開—栗原彬における〈やさしさ〉の社会学」、日本社会学理論学会大会 (一般報告)、関西学院大学、2014年9月6日

国内 (司会)、出口剛司、「社会学理論の最前線—時間」、日本社会学史学会大会 (シンポジウム)、京都大学、2014年6月28日

国内 (司会)、出口剛司、「支援するもの／されるもの—やさしさと政治の社会学」、日本社会学学会大会 (若手フォーラム)、神戸大学、11月22日

国内 (司会)、出口剛司、「戦後日本社会学の (再) 発見—境界へのまなざし／境界からのまなざし」、日本社会学学会大会 (シンポジウム 1)、早稲田大学、2015年9月20日

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、明治大学大学院情報コミュニケーション研究科、「社会的人間論」、2013.4～

非常勤講師、明治大学情報コミュニケーション学部、「コミュニケーション基礎」、2013.4～

非常勤講師、立教大学社会学部、「社会学史」、2013.4～

非常勤講師、中央大学法学部、「現代社会理論」、2013.9～

(2) 学会

国内、日本社会学会、役員・委員、研究活動委員、2012.4～2015.9

国内、日本社会学理論会、役員・理事、運営委員長、2014.9～

国内、日本社会学史学会、役員・理事、研究担当、2014.6～

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター、運営委員 (学外委員)、2012.1～

准教授 **祐成 保志** SUKENARI, Yasushi

1. 略歴

1997年3月 東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
1999年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
2002年3月 同 博士課程単位取得退学
2004年4月 札幌学院大学社会情報学部講師 (～2006年3月)
2005年5月 博士 (社会学) 学位取得 (東京大学)
2006年4月 札幌学院大学社会情報学部助教授
2007年4月 信州大学人文学部准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

コミュニティの社会学、ハウジングの社会学、社会調査史

b 研究課題

- (1) 建造環境と社会構造の関係についての理論的・経験的研究
- (2) 米国、英国および日本における社会調査史

c 概要と自己評価

(1) 欧州を中心に形成されてきたハウジング研究の画期をなした著作である *Housing and Social Theory* (1992 年) の全訳を刊行した。日本では同書およびその知的背景はほとんど知られていないため、訳者解説「ハウジングの社会学・小史」を付した。(2) 日本と米国の社会調査における計画的コミュニティ研究の展開について、関連資料の分析と考察を進め、その成果の一部を国際学会等で報告した。

d 主要業績

(1) 翻訳

祐成保志 (訳)、『ハウジングと福祉国家』(Kemeny, J., 1992, *Housing and Social Theory*, Routledge の全訳)、新曜社、2014.12

(2) 論文

祐成保志、「住まいの研究はなぜ難しいのか」、『いい住まい いいシニアライフ』、121、1-7 頁、2014.7

祐成保志、「なぜ理論が重要なのか」、『いい住まい いいシニアライフ』、122、1-8 頁、2014.9

祐成保志、「住宅市場の多様性」、『いい住まい いいシニアライフ』、123、1-6 頁、2014.11

祐成保志、「居住空間の供給源」、『いい住まい いいシニアライフ』、125、21-26 頁、2015.3

祐成保志、「住まいをつくる力」、『いい住まい いいシニアライフ』、126、13-18 頁、2015.5

祐成保志、「住宅はどのような商品か」、『いい住まい いいシニアライフ』、128、1-7 頁、2015.9

祐成保志、「メディアとしての住宅」、『いい住まい いいシニアライフ』、129、1-8 頁、2015.11

祐成保志、「ハウジングの社会学・小史」、『ハウジングと福祉国家』(前掲)、271-296 頁、2015.12

(3) 学会発表

国際、Sukenari Yasushi、「Housing Estates as Experimental Fields of Social Research」、XVIII ISA World Congress of Sociology, RC08 History of Sociology、パシフィコ横浜、2014.7.15

国際、Sukenari Yasushi、「Housing Estates as Experimental Fields of Social Research」、2014 SNU-UT Joint Sociological Forum、Seoul National University、2014.11.15

国際、Sukenari Yasushi and Hirai Taro、「Current Debates on the Condominium Management System in Japan」、2015 European Network for Housing Research Conference、Lisbon University Institute、2015.7.1

(4) その他

祐成保志、書評 武田尚子著『20 世紀イギリスの都市労働者と生活：ロウンタリーの貧困研究と調査の軌跡』、『日本労働研究雑誌』、57(2・3)、82-84 頁、2015.2

祐成保志、「講演 戦争と住宅」『住宅会議』、96、8-10 頁、2016.2

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本大学文理学部、「社会学特殊講義 3」、2015.4~2015.9

非常勤講師、法政大学大学院社会学研究科、「社会学特殊研究 6」、2015.12

(2) 学会

国内、日本社会学会、データベース委員、2013~2015

国内、日本社会学会、学術情報支援委員、2015~

国内、日本生活学会、編集委員、2014~

26 社会心理学

教授 山口 勸 YAMAGUCHI, Susumu

1. 略歴

1974年3月 東京大学文学部第四類(心理学専修課程)卒業(文学士)
1976年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程心理学専門課程 修了(文学修士)
1980年6月 同 博士課程心理学専門課程 修了退学
1980年7月 同 文学部社会心理学研究室助手 ~82年3月
1983年4月 学習院大学文学部心理学科助手 ~84年3月
1984年4月 米国オハイオ州立大学大学院留学 ~84年12月
1985年2月 放送大学客員助教授 ~85年3月
1985年4月 同 教養学部助教授 ~87年9月
1987年10月 東京大学文学部助教授(社会心理学)
1991年9月 博士(社会学)学位取得(東京大学)
1994年6月 東京大学文学部教授(社会心理学)
1995年4月 同 大学院人文社会系研究科教授(社会心理学)
1995年7月 米国ハワイ大学客員教授 ~95年12月
2000年8月 米国ミシガン大学客員教授 ~00年12月
米国ハワイ大学、グローバルイゼーション研究センター(affiliate faculty) ~

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

集団主義的傾向の比較文化的研究 集団主義的傾向は、日本でだけ見られるものではない。さらに、集団主義的な文化のもとでも、個人差がみられる。現在は集団主義的傾向と、集団として環境をコントロールしようとする傾向との関連を研究している。

個人の集団内行動 個人の集団内行動は、集団から独立している場合の行動と、多くの場合異なっている。また、他者の行動を観察する場合でも、その行動が集団の影響下で行われた場合と、そうでないときとは、異なった判断がなされることが多い。こうした点について、実験的研究を行っている。

甘えに関する研究 日本人に特有な心理的傾向と考えられている「甘え」については、実証的な研究が少ない。そこで、この問題について日本でのデータ収集と結果の分析を終えたところである。これから、日本人の甘えと同様の現象が、他のアジア文化や西欧の文化でも見られるかどうかを問題とする予定である。

自尊心に関する実験的研究 近年、日本人の自尊心は欧米人のそれと比較して低いことが主張されている。しかしながら、日本人には謙遜をするという傾向があることを忘れてはならない。したがって、実際には高い自尊心を表明しないのか、それとも本当に自己評価が低いのか、見きわめる必要がある。この点について、実験的な検討を比較文化的に行っている。

c 概要と自己評価

すでに行った諸研究のうち、一部の研究論文を発表したが、まだ未公開の研究が残されている。現在、いくつかの論文を執筆中であるが、これまでのデータの整理にもとづきさらに論文執筆を進める予定である。

d 主要業績

(1) 論文

Sawaumi, T., Yamaguchi, S., Park, J., & Robinson, A. R., 「Japanese control strategies regulated by urgency and interpersonal harmony: Evidence based on extended conceptual framework.」, 『Journal of Cross-Cultural Psychology』, 46, 252-268 頁, 2015

3. 主な社会活動

(1) 学会

Editor-in-Chief, Asian Journal of Social Psychology (2016年1月より)

1. 略歴

1982年	東京大学文学部卒業（社会心理学専修課程）
1989年	University of Illinois at Urbana-Champaign, Ph.D. (Department of Psychology)
1989年	東京大学大学院社会学研究科博士課程退学
1989年4月	東京大学文学部助手
1991年4月	東洋大学社会学部講師
1994年4月	北海道大学文学部助教授
1997年7月	Fulbright fellowship (University of Colorado at Boulder, Northwestern University)
2000年4月	北海道大学大学院文学研究科教授
2001年8月	Deutscher Akademischer Austausch Dienst Research Fellow (Max Planck Institute in Berlin, Center for Adaptive Behavior and Cognition)
2008年8月	Residential Fellow, Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences at Stanford University
2012年4月	北海道大学社会科学実験研究センター長（兼務）
2014年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学、意思決定科学、行動生態学

b 研究課題

社会的意決定

c 概要と自己評価

概要

人が社会場面でいうさまざまな意思決定について、以下の3つのテーマを中心に研究している。

(1) 「集合知」の認知・生態学的基盤の理解

個人のもつさまざまな情報をよりよい社会的決定のためにどのように集約するのかという問いは、21世紀の社会科学の直面する重要課題の1つである。本プロジェクトでは、近年、生物学領域と情報科学領域で大きな注目を集めている社会性昆虫の「群知能」(swarm intelligence)に関する知見を参考にしながら、人間の集合行動における「集合知」の発生可能性について検討している。人間集団において集合知の生まれる認知的・生態学的な条件について、数理モデル、コンピュータ・シミュレーション、種間比較実験、インターネット実験などを用い理論的・実証的に明らかにする。

(2) 「正義」の脳科学的・行動的基盤の理解

富や権利の配分を含む「社会のあり方」に関する価値対立は、“Occupy Wall Street”運動に示されるように、喫緊の政治的・社会的課題になっている。本プロジェクトは、「社会のあり方」に関する人間の価値判断がどのような行動・認知・神経科学的メカニズムを持つのかを検討する。人文学・社会科学で蓄積されてきた規範的理論（「あるべき行為・社会とは何か」に関する論考）との対応関係を視野に入れながら、計算論的モデリング、MRIを用いた脳画像計測、eye-trackerを用いた視線計測、末梢自律神経反応の計測、内分泌反応計測などを含む、行動・認知・神経科学の研究手法を用いて、さまざまな「社会価値」がどのように獲得され、私たちの心にどのように実装されるのかを実証的に探る。

(3) 「共感性」の認知・神経基盤の理解

「ヒトの共感能力とは何か」という問いは、社会的存在としての人間を考える上で極めて重要である。痛みや恐れ・興奮が集団内で伝搬するといった「原初的な共感」は、群れ生活を営む動物が同種他個体の反応をモニターし、その反応を自らも引き受けることで、捕食者の出現などの環境変化に直ちに反応できるように身体的に準備するといった適応的機能をもつだろう。一方、ヒトに特徴的とされる「高次共感」の機能的意義についてはほとんど分かっていない。本プロジェクトでは、「痛み反応の同期化現象」を軸に、ヒトの原初的な共感と高次共感の相互作用を探る。また、相手との関係に応じて共感性がどのように変化するのかについて、注意配分や情報探索行動、自律神経系反応の計測を軸に解析し、得られた結果を他の動物種と比較する。さらに、課題遂行中の脳活動をfMRIにより計測することで、共感の質・量の違いと相関する脳部位を特定し、これらの脳部位の賦活パターンが行動の個人差とどのように連動するのかについても併せて解明しようとする。

自己評価

上記の3つのプロジェクトは、

- (a) 科学研究費・基盤研究 A「集合知の認知・生態学的基盤」(平成 25-27 年度)、
- (b) 日本学術振興会・課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業(領域開拓プログラム)「“社会価値”に関する規範的・倫理的判断のメカニズムとその認知・神経科学的基盤の解明」(平成 26 年 10 月～平成 29 年 9 月)、
- (c) 科学研究費・新学術領域研究(研究領域提案型)「ヒト社会における共感性」(平成 25-29 年度)

の支援を受けて行われた(すべて研究代表者)。いずれも、生物学・脳科学・情報科学・経済学・倫理学・法哲学の研究者とのコラボレーションを軸に、PD・大学院生などの若手をチームメンバーとするプロジェクト型研究である。数年間に亘る密接な協同の結果、文理あるいは専門の壁を超えた共通理解が大きく進み、共通概念のもとに研究を展開できる段階に達している。下記に見るように、その成果の一端は、国際誌の論文や、ハンドブック・辞典のチャプターとして公刊されて始めている。今後は成果の公刊をさらに加速する。

d 主要業績

(1) 著書

編著、山岸俊男・亀田達也、『社会のなかの共存』、岩波書店、2014

編著、亀田達也、『“社会の決まり”はどのように決まるか』、勁草書房、2015

(2) 論文

Kameda, T., Van Vugt, M., & Tindale, R. S. (2014). Evolutionary group dynamics. In J. D. Wright (Ed.), *International Encyclopedia of the Social and Behavioral Sciences* (2nd edition). Oxford, UK: Elsevier.

Kameda, T., Van Vugt, M., & Tindale, S. (2014). Groups. In V. Zeigler-Hill, L.L.M. Welling, & T.K. Shackelford (Eds.), *Evolutionary perspectives on social psychology*. New York: Springer.

Toyokawa, W., Kim., & Kameda, T. (2014). Human collective intelligence under dual exploration-exploitation dilemmas. *PLoS ONE* 9(4): e95789. doi:10.1371/journal.pone.0095789

亀田達也 (2014). 「分配の正義」の認知的・社会的基盤を探る (山岸俊男・亀田達也 (編著)「社会のなかの共存」岩波講座 コミュニケーションの認知科学, 第4巻, 岩波書店)

山岸俊男・亀田達也 (2014). 秩序問題とコーディネーション問題 (山岸俊男・亀田達也 (編著)「社会のなかの共存」岩波講座 コミュニケーションの認知科学, 第4巻, 岩波書店)

Kameda, T., Inukai, K., Wisdom, T., & Toyokawa, W. (2015). Herd behavior: Its psychological and neural underpinnings. In S. Grundmann, F. Moeslein & K. Riesenhuber (Eds.), *Contract governance*. (Pp. 61-71). Oxford, UK: Oxford University Press.

亀田達也・金恵琳 (2015). 集団の生産性とただ乗り問題: 「生産と寄生のジレンマ」からの再考 (亀田達也 (編著)「“社会の決まり”はどのように決まるか」フロンティア実験社会科学, 第6巻, 勁草書房)

Kameda, T., & Hastie, R. (2015). Herd behavior: Its biological, neural, cognitive and social underpinnings. In R. Scott & S. Kosslyn (Eds.), *Emerging trends in the social and behavioral sciences*. Hoboken, NJ: John Wiley and Sons.

村田藍子・亀田達也 (2015) 集団行動と情動 (渡邊正孝・船橋新太郎 編 『情動と意思決定』, 朝倉書店)

村田藍子・齋藤美松・樋口さとみ・亀田達也 (2015) 『ヒト社会における大規模協力の礎としての共感性の役割: 向社会的配慮と共感性』、心理学評論

(3) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 (A)、亀田達也、代表者、「集合知の認知・生態学的基盤」、2013～2016
文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究(研究領域提案型)、亀田達也、代表者、「ヒト社会における共感性」2013～2018

日本学術振興会・課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業(領域開拓プログラム)、亀田達也、代表者、「“社会価値”に関する規範的・倫理的判断のメカニズムとその認知・神経科学的基盤の解明」2014～2017

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

University of Heidelberg (Heidelberg, Germany), Santander International Summer School for Doctoral Students “Frontiers in Neoeconomics” (April 8-17, 2014) 特別講義

Hokkaido University (Sapporo, Japan), “Making of Humanities: Biological Roots of Mathematics and Cooperation: Joint workshop of Social Psychology and Neuroethology” (July 28, 2014) 講演

Kyungpook National University (Daegu, Korea), International Workshop “Environmental Economics and Trade” (September 27, 2014) 講演

自然科学研究機構生理学研究所（岡崎市）平成26年度生理学研究所研究会「感覚刺激・薬物による快・不快情動生成機構とその破綻」（2014年10月7・8日）講演
理化学研究所（和光、埼玉）3rd Mini Symposium on Cognition “Decision-making and Social function” (April 20, 2015) 講演
富山大学（富山）学術会議・公開シンポジウム「心の先端研究の現在とこれから」（2015年10月10日）講演
東洋大学（東京）、「ヒトの心の社会性を考える～“群れ行動”の神経・認知・生態基盤」（2015年10月17日）講演
University of Frankfurt (Frankfurt am Main, Germany) Ernst Strüngmann Forum Evolutionary and Economic Strategies for Benefiting from Other Agents’ Investments (November 1–6, 2015) 講演
日本科学未来館（東京）サイエンスアゴラ2015シンポジウム「文理融合で、人文社会科学はこんなに変わる！」（2015年11月15日）講演

(2) 学会（主なもののみ）

社会心理学会第55回大会 ワークショップ「自由意志信念と決定論的信念を巡って」北海道大学（2014年7月26日）
心理学会第78回大会 心理学会企画シンポジウム「社会性とその発達：ヒトの特徴と教育可能性を考える」同志社大学（2014年9月10日）
発達心理学会第26回大会 自主シンポジウム「共感のなりたち・同情のなりたち：共感性の構成論的基盤を探る」東京大学（2015年3月20日）
心理学会第79回大会 心理学会企画シンポジウム「融合的なこころの科学について考える」名古屋大学（2015年9月24日）
認知科学会 2015年度冬のシンポジウム「インタラクションから革新へ」東京大学（2015年12月12日）

(3) 行政

学術会議会員（第一部）

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

Psychological Review (Consulting Editor)
Evolution and Human Behavior (Editorial Board)
International Congress of Psychology (Executive Committee)
社会心理学会理事
人間行動進化学会理事

教授 唐沢 かおり KARASAWA, Kaori

1. 略歴

1992年	University of California, Los Angeles Ph.D
1992年	京都大学大学院文学研究科博士後期課程
1992年4月	名古屋明德短期大学講師
1995年4月	日本福祉大学情報社会科学部助教授
1999年6月	名古屋大学情報文化学部助教授
2001年4月	名古屋大学大学院環境学研究科助教授
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年8月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

- 1) Mind reading and moral judgments
- 2) Beliefs in free will and self-regulation
- 3) Methodology and Science communication

c 概要と自己評価

概要

1) Mind reading and moral judgments : 近年の社会心理学は、私たちが道徳的事柄、公正さに関心を抱く「モラルエージェント」であるという人間観を提出している。私たちは、他者の心的状態(意図・動機・態度・感情など)の推論に基づき他者を「裁き」の視線で評価し、そこでの評価に基づき、「援助、非難、許し」などの道徳的な態度・行動を他者に向けた存在である、という。この研究課題では、このような私たちの他者理解の過程とその社会的帰結を、道徳的判断に焦点を当てて検討する。

2) Beliefs in free will and self-regulation : 本研究課題は、実験哲学分野とも連携しながら、自由意志信念や決定論的信念が自己制御的な行動や、自己・他者の行動理解に及ぼす影響について検討する。決定論的信念としては、遺伝子決定論、科学決定論、社会決定論など、これまでの諸研究で提出されているものを対象とする。そのうえで、自由意思信念・決定論的信念が、自己制御的な対人判断や行動を促進、抑制する心的メカニズムについて検討する。

3) Methodology and Science communication : 本研究課題では、「科学知・実践知・人文知」の融合領域として社会心理学を位置づけた上で、その立ち居地からの方法論の批判的検討、および、科学的成果を市民に伝達する際の諸問題についての検討を行う。

自己評価

これらの研究課題について、科学研究費などの支援も得て、活発にデータ収集活動を行い、その成果を学会発表、論文という形で発信している。その多くは大学院生との共同研究であり、後継者育成についても努力している。1) については、従来の知見を、「集団」「ロボット」「人工知能」など、人以外の対象に対する心的状態の推論にも拡張し、妥当性と応用可能性を検討するための研究プロジェクトを開始している。2) については実験的検討の成果を蓄積するとともに、「自由意志の有無」に関する科学コミュニケーションの影響という、3) にかかわる問題と有機的に連携させて、研究を展開している。これらの研究は、必要に応じて、科学哲学、美学、複雑系科学などの他領域の研究者と協同作業を進めている。また、認識論についての大規模な国際比較研究のチームに日本のリーダーとして所属しており、国際交流も積極的に進めている。今後は、さらに研究のネットワークを広げるとともに、他分野に対しても積極的な研究の成果発信に努め、融合的領域としての社会心理学の基盤形成に尽力したい。

d 主要業績

(1) 著書

編著、唐沢かおり、『人文知 I 心と言葉の迷宮』、東京大学出版会、2014

編著、唐沢かおり、『新社会心理学一心と社会をつなぐ知の統合』、北大路書房、2014.3

(2) 論文

渡辺匠・唐沢かおり、「死の脅威による人間の社会的行動の変化：集団への帰属意識を題材として」、『死生学・応用倫理研究』、19、49-65 頁、2014

白岩祐子・唐沢かおり、「犯罪被害者の裁判関与が司法への信頼に与える効果——手続き的公正の観点から」、『心理学研究』、85、110-117 頁、2014

渡辺匠・櫻井良祐・綿村英一郎・唐沢かおり、「自由意志・決定論尺度 (The Free Will and Determinism Plus Scale; FAD+) 日本語版の作成」、『パーソナリティ研究』、23、52-56 頁、2014

大高瑞都・唐沢かおり、「父親との政治的会話と子どもの政治関与の関連：成人形成期の子どもを対象とした検討」、『山梨学院大学法学論集』、72、251-261 頁、2014

伊藤健彦・唐沢かおり、「就職活動における集団間の不公平が不公平是正政策への支持的態度や企業への原因推論に与える影響：獲得的地位に基づく不公平に注目して」、『産業・組織心理学研究』、27、117-127 頁、2014

白岩祐子・松本龍児・内堀大成・唐沢かおり、「裁判シナリオにおける非対称な認知：規定因と帰結の検討」、『人間環境学研究』、12、11-16 頁、2014

Sakurai, R., Karasawa, K., & Watanabe, T., 「Unconscious goal activation occupies executive functions: Subliminal priming of the graphic stimulus.」、『Proceedings of International Conference on Education, Psychology and Society』、167-174 頁、2014

Watamura, E., Wakebe, T., Fujio, M., Itoh, Y., & Karasawa, K., 「The Automatic Activation of Retributive Motive When Determining Punishment.」、『Psychological Studies』、59、236-240 頁、2014

Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Science, so close and yet so far away: How people view science, science subjects and scientists.」、『Recent Advances in Natural Computing』、57-67 頁、2014

Watamura, E., Wakebe, T. & Karasawa, K., 「The Influence of improper information on Japanese lay judges' determination of punishment」、『Asian Criminology』、9、285-300 頁、2014

- 渡辺匠・太田紘史・唐沢かおり、「自由意志信念に関する実証研究のこれまでとこれから：哲学理論と実験哲学、社会心理学からの知見」、『社会心理学研究』、31、56-69 頁、2015
- Machery,E.,Stich,S., Rose,D.,Chatterjee,A., Karasawa,K., Struchiner,N., Sirker,S., Usui,N.,& Hashimoto,T, 「Gettier across cultures.」、『Noûs』、2015
- 白岩裕子・唐沢かおり、「量刑判断に対する増進・抑制効果の検討—被害者への同情と裁判に対する規範的なイメージに着目して—」、『感情心理学研究』、22、110-117 頁、2015
- Watanabe, T., Sakurai, R., & Karasawa, K, 「Free will beliefs and moral responsibility: Disbelief in free will leads to less responsibility for third person's crime」、『Asian Conference on Psychology and the Behavioral Sciences 2015 Official Conference Proceedings』、423-431 頁、2015
- 大高瑞郁・唐沢かおり、「成人形成期の子どもへの父親に対する態度を規定する要因：父親からの行動に関する子どもの認知に着目して」、『社会心理学研究』、89-100 頁、2015
- 渡辺匠・松本龍児・太田紘史・唐沢かおり、「一般的・個人的自由意志尺度（Free Will and Determinism Scale; FWDS）日本語版の作成」、『パーソナリティ研究』、228-231 頁、2016.2

(3) 学会発表

- 国際、Watanabe, T., Sakurai, R., & Karasawa, K, 「Determined to look cool: Disbelief in free will increases socially desirable responding.」、28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France, 2014.7.11
- 国際、Watanabe, T., Sakurai, R., & Karasawa, K., 「The effects of free will beliefs in Japan: Disbelief in free will impairs overriding impulsive decisions」、22nd International Congress of Cross-Cultural Psychology, Reims, France, 2014.7.17
- 国内、唐沢かおり・戸田山和久・渡辺匠・片岡雅知・亀田達也・出口康夫、「自由意志信念と決定論的信念をめぐって」、日本社会心理学会第 55 回大会、北海道大学、2014.7.26
- 国内、橋本剛明・唐沢かおり、「勢力感が制裁反応に与える影響—カラシ入りシュークリームを用いた検討—」、日本社会心理学会第 55 回大会、北海道大学、2014.7.26
- 国内、二木望・櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり、「実体性が両面価値的な集団への態度に及ぼす影響について」、日本社会心理学会第 55 回大会、北海道大学、2014.7.26
- 国内、松本龍児・櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり、「自由意志信念が制裁・報復としての攻撃に与える影響」、日本社会心理学会第 55 回大会、北海道大学、2014.7.26
- 国内、渡辺匠・櫻井良祐・綿村英一郎・唐沢かおり、「自由意志信念が精神状態におよぼす肯定的効果」、日本社会心理学会第 55 回大会、北海道大学、2014.7.26
- 国内、小林麻衣子・白岩祐子・唐沢かおり・松井豊、「犯罪被害者遺族の視点から見た有用なサポート」、日本社会心理学会第 55 回大会、北海道大学、2014.7.26
- 国内、櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり、「実際の自我枯渇と自我枯渇の認知が制御資源の節約に与える影響」、日本社会心理学会第 55 回大会、北海道大学、2014.7.27
- 国内、白岩祐子・唐沢かおり、「量刑判断に対する抑制効果の検討：「理性的」な裁判イメージと「感情的」な被害者イメージに着目して」、日本社会心理学会第 55 回大会、北海道大学、2014.7.27
- 国内、岡田真波・唐沢かおり、「制御焦点の活性化が存在脅威管理に及ぼす効果の検討」、日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会、東洋大学、2014.9.6
- 国内、松本龍児・櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり、「自己と他者に関する自由意志信念が攻撃行動に与える影響」、日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会、東洋大学、2014.9.6
- 国内、武井恵亮・唐沢かおり、「道徳的自己スキーマと制御焦点が道徳的行動意図に与える効果」、日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会、東洋大学、2014.9.6
- 国内、櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり、「既達成の目標が果たすライセンス機能：自我枯渇時における自己制御過程に着目して」、日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会、東洋大学、2014.9.6
- 国内、橋本剛明・唐沢かおり、「不公正へのコントロール知覚と公正世界信念が謝罪への反応に与える影響」、日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会、東洋大学、2014.9.6
- 国内、竹村和久・坂上貴之・唐沢かおり・若山大樹・林幹也・羽鳥剛史、「社会的判断：測定の問題と現象論」、日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会、東洋大学、2014.9.7
- 国内、白岩祐子・唐沢かおり、「被害者の裁判参加が厳罰をもたらすとき：理性的な裁判イメージによる調整効果の検討」、日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会、東洋大学、2014.9.7
- 国内、唐沢かおり、「産業・組織心理学のアイデンティティ、可能性、社会的貢献：社会的認知の観点から」、産業組織心理学会第 30 回大会、北海学園、2014.9.13

- 国際、Matsumoto, R., Sakurai, R., Watanabe, T., & Karasawa, K., 「The effects of belief in free will on retaliatory aggression」、The 16th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology、Long Beach, California、2015.2.26
- 国際、Futaki, N., & Karasawa, K., 「The relationship between essentialism and gender-specific system justification: The effect of the sense of personal control.」、Common-Sense Beliefs and Lay Theories Pre-Conference、Long Beach, California、2015.2.26
- 国際、Matsumoto, R., Sakurai, R., Watanabe, T., & Karasawa, K., 「Do belief in free will always restrain aggression?」、The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology、Long Beach, California、2015.2.27
- 国際、Futaki, N., Watanabe, T., Sakurai, R., & Karasawa, K., 「Entitativity and ageism: When do we help or neglect elderly people?」、The 16th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology、Long Beach, California、2015.2.27
- 国際、Sakurai, R., Watanabe, T., & Karasawa, K., 「Fulfilled goal as license to indulge: The effects of ego depletion and recalling past goal achievement on self-regulation」、The 16th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology、Long Beach, California、2015.2.28
- 国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「How perceived control and justice beliefs affect one's forgiveness toward an unjust other」、The 16th Annual Meeting of the Society of Personality and Social Psychology、Long Beach, California、2015.2.28
- 国際、Watanabe, T., Sakurai, R., & Karasawa, K., 「Free will beliefs and moral responsibility: Disbelief in free will leads to less responsibility for third person's crime.」、The 5th Asian Conference on Psychology and the Behavioral Sciences、Osaka, Japan、2015.3.27
- 国際、Watanabe, T., & Karasawa, K., 「The association between free will beliefs and stereotypes: People's belief in fatalism promotes gender stereotypes.」、The 5th Asian Conference on Ethics, Religion and Philosophy、Osaka, Japan、2015.3.28
- 国内、唐沢かおり、「フツウの人たちに聞いたことから概念を構築することについて：概念工学に向けて」、応用哲学会第7回年次大会、東北大学、2015.4.25
- 国内、戸田山和久・山口裕幸・唐沢かおり、「心理尺度と操作的定義を反省する」、科学基礎論学会、北海道教育大学札幌校、2015.6.14
- 国際、Ito, T., & Karasawa, K., 「The Effects of Company's University Favoritism on Causal Attribution and Social Consequences.」、11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology、Cebu City, Philippines、2015.8.21
- 国内、伊藤健彦・唐沢かおり、「就職活動における企業の大学びいきが不採用の原因帰属に与える影響：日本と米国の学生を対象として」、日本グループ・ダイナミクス学会第62回大会、奈良大学、2015.10.11
- 国内、松本龍児・渡辺匠・唐沢かおり、「自由意志信念が福祉政策への賛意に与える影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第62回大会、奈良大学、2015.10.11
- 国内、谷辺哲史・白岩祐子・唐沢かおり、「裁判員制度の目的を知ることが制度への態度に与える影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第62回大会、奈良大学、2015.10.12
- 国内、橋本剛明・唐沢かおり、「特性的な勢力感が制裁と寛容に与える影響」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.10.31
- 国内、伊藤健彦・唐沢かおり、「企業の大学びいきが不採用時の原因帰属に与える影響」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.10.31
- 国内、櫻井良祐・渡辺匠・唐沢かおり、「既達成の目標によるセルフ・ライセンス：社会的排斥時における自己制御過程に着目して」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.10.31
- 国内、谷辺哲史・橋本剛明・唐沢かおり、「非生物に対する心の知覚と道徳的態度の関連」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.10.31
- 国内、松本龍児・渡辺匠・唐沢かおり、「自己と他者についての自由意志信念が援助意図に与える影響」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.11.1
- 国内、二木望・唐沢かおり、「心理的本質主義がジェンダーシステム正当性認知に及ぼす影響」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.11.11
- 国際、唐沢かおり、「心の知覚と道徳的判断について」、日本科学哲学会第48回大会、首都大学東京、2015.11.22

(4) 受賞

- 国内、伊藤健彦・唐沢かおり、人間環境学研究会第3回優秀論文賞、人間環境学研究会、2014.6

(5) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、研究代表者、「集団心の可能性・妥当性・限界：機能主義的視点からのアプローチ」、2015
- 文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、分担者(東大内に代表者あり)、「道徳認知と社会的認知の統合的哲学研究」、2014～2015

文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、分担者、「行動意思決定研究を基礎とした多元的価値下での処方的社会心理学の構築」、2014～2015

文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、分担者、「科学画像の適切な使用に向けての基礎的・統合的研究」、2014～2015

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、応用哲学会、学術雑誌編集委員、2014.4～2016.3

国内、日本グループ・ダイナミクス学会、会長、2014.4～2015.3

国内、日本社会心理学会、常任理事、2014.4～2015.3

(2) 行政

省庁、消防庁、科学技術政策、火災予防審議会委員、2015.7～2016.3

准教授 **村本 由紀子** MURAMOTO, Yukiko

1. 略歴

1984年4月	東京大学文科Ⅲ類入学
1988年3月	東京大学文学部社会心理学専修課程卒業
1988年4月	株式会社 日本長期信用銀行 入行
1992年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻修士課程入学
1994年3月	同 修了 (修士(社会心理学))
1994年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程進学
1997年3月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学
1998年4月	京都大学総合人間学部基礎科学科 助手 (2000年3月迄)
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科 博士 (社会心理学)取得
2000年4月	岡山大学文学部行動科学科 助教授
2001年4月	岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻 助教授 (兼任)
2004年4月	横浜国立大学経営学部 助教授
2005年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 助教授
2007年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 准教授
2011年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 教授
2011年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

心と社会環境の相互構成過程の探究

- 1) 多元的無知による集団規範の維持過程
- 2) 文化的慣習の社会生態学的基盤
- 3) 組織文化・風土をめぐる諸問題

c 概要と自己評価

1) 集団規範の生成と再生産過程...人は周囲の他者の行動を観察し、特定の行動が共有されていると感じることによって、「規範」の存在を知覚する。人はその知覚に基づき、たとえそれが自らの選好とは異なっても、規範にしたがった行動をとる傾向がある。この行動がさらに他者によって観察されることで、やがて、実際には誰も望んでいないはずの規範が予言の自己成就的に維持・再生産される。こうした「多元的無知」現象の共同主観的な相互規定メカニズムを検討することは、心の社会・文化的起源を探るうえで重要な意味をもつと考えられる。私たちは、実験室内にミニマルな規範伝達の連鎖を作り出すことで、このメカニズムに迫る試みを行っている。また、多元的無知の生起や伝播に影響を及ぼす社会環境の特質の探究も進めている。

2) 文化的慣習の社会生態学的基盤...ある社会や集団において、特定の慣習や思考様式が共有され、維持されている理由について体系的な検討を行うには、その慣習や思考様式を取り巻く生態環境の特質と歴史、環境に適応する過程で作り出された特有の社会構造や人間関係のありよう、それらの維持・再生産に寄与する個人々の心理や行動の特質、といった諸変数間の関係を丹念に探り、描き出すことが必要となる。私たちは、社会の現場における慣習や思考様式の「事例」に焦点を当て、マイクロ・エスノグラフィーの研究方法論を用いてその生成・維持過程を継時的に追跡する試みを行っている。

3) 組織文化・風土をめぐる諸問題...国や民族といった大きなレベルの文化に比して、小規模で人の入れ替わりが頻繁に行われる企業組織の文化は、変化プロセスの把握が比較的容易であるため、心と文化に関わる理論構築に向けた検証が行いやすいという利点がある。私たちのこれまでの研究では、強い組織文化は組織変革にとって正負両面の効果をもつ（生産性向上のための学習を促進する一方で、環境変化に対応した柔軟な変革を抑制しうる）ことが示された。現在はさらに視野を広げ、各種の人事制度（ハード）と文化・風土（ソフト）の相互作用の様相や、それらが従業員心理・行動に与える多面的な影響過程についての検討を行っている。

自己評価

研究の実施にあたっては、研究室所属の大学院生はもとより、国内外の研究者（経営学・社会学・人類学等の関連他領域を含む）とも広く連携して、国際的・学際的な視野に立つ共同研究プロジェクトとしての展開に努めている。一部のテーマに関しては科学研究費の助成を受けている。いずれの研究テーマに関しても、その成果は随時、学会発表および学術論文として発信している。また、企業や地域共同体など、社会の現場に根差した研究を手がけていることから、実社会への研究成果の還元と、産学連携にも努めている。

d 主要業績

(1) 著書

分担執筆、村本由紀子、「『自己と他者』という問題をめぐって」、熊野純彦・佐藤健二 編 『人文知 3:境界と交流』、東京大学出版会、2014.9

(2) 論文

村本由紀子・遠藤由美、「答志島寝屋慣行の維持と変容: 社会生態学的視点に基づくエスノグラフィー」、『社会心理学研究』、第30巻3号、213-233頁、2015.3

正木郁太郎・村本由紀子、「組織コミットメントが組織学習に及ぼす影響について」、『社会心理学研究』、第31巻1号、46-55頁、2015.8

岩谷舟真・村本由紀子、「多元的無知の先行因とその帰結: 個人の認知・行動的側面の実験的検討」、『社会心理学研究』、第31巻2号、101-111頁、2015.11

(3) 書評・解説

村本由紀子、「異文化と組織とリーダーの社会心理学」、リクルートマネジメントソリューションズ 編 『RMS Message』37、35-36頁、2014.11

村本由紀子、「日本人と『自己卑下』の諸相」、たばこ総合研究センター 編 『TASC Monthly』2015年11月号、3頁、2015.11

(4) 学会発表

国内、正木郁太郎・村本由紀子、「多様なメタ認知を通じた集団規範の「共有」過程の検討」、日本社会心理学会第55回大会、北海道大学、2014.7

国内、岩谷舟真・相田直樹・村本由紀子、「多元的無知のメカニズムとその帰結」、日本社会心理学会第55回大会、北海道大学、2014.7

国際、Yukiko Muramoto、「Perceived consensus or personal beliefs?: Effects of group norms on employees' behavior and attitude toward work」、28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France、2014.7.13

- 国内、正木郁太郎・村本由紀子、「第三の集団表象の検討：重層的な集団認知の可能性について」、日本心理学会第78回大会、同志社大学、2014.9
- 国内、岩谷舟真・正木郁太郎・村本由紀子、「大学生の集団規範獲得過程に関する調査研究(1)」、日本グループ・ダイナミクス学会、東洋大学、2014.9
- 国内、村本由紀子、「他者のこころの認知と集団規範の生成：「暗黙のルール」はいかにして生まれるか」、日本認知心理学会公開シンポジウム「認知心理学のフロンティア：こころの常識と偏見を越えて」、京都女子大学、2014.10.18
- 国際、Ikutaro Masaki & Yukiko Muramoto、「When workplace diversity becomes a positive motivator: Various effects of organizational climate on diversity.」、The 11th Conference of Asian Association of Social Psychology、Cebu, Philippines、2015.8.21
- 国際、Shuma Iwatani & Yukiko Muramoto、「An experimental investigation on the antecedent conditions of pluralistic ignorance.」、The 11th Conference of Asian Association of Social Psychology、Cebu, Philippines、2015.8.21
- 国際、Yukiko Muramoto、「The multiple effects of psychological distance on the perception of consistency.」、The 11th Conference of Asian Association of Social Psychology、Cebu, Philippines、2015.8.22
- 国内、正木郁太郎・村本由紀子、「職場のダイバーシティがもたらす心理的影響」、日本心理学会第79回大会、名古屋国際会議場、2015.9.22
- 国内、榎本かおり・村本由紀子、「事後情報の提示媒体と時間経過が目撃証言に及ぼす効果」、日本心理学会第79回大会、名古屋国際会議場、2015.9.24
- 国内、岩谷舟真・笠原伊織・川尻知弥・榎本かおり・綿村英一郎・村本由紀子、「地域活動への参加を促進する要因：流動性に着目して」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.10.31
- 国内、正木郁太郎・村本由紀子、「ダイバーシティ組織風土に対する信念推測と組織制度の影響」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.10.31
- 国内、相田直樹・村本由紀子、「暗黙理論が努力戦略に及ぼす影響」、日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学、2015.10.31
- (5) 会議主催(チェア他)
- 国内、「日本社会心理学会第55回大会・自主企画ワークショップ」、その他、規範研究、最開拓：「多元的無知」を切り口に、北海道大学、2014.7.27
- (6) 受賞
- 国内、村本由紀子・遠藤由美、日本社会心理学会賞(奨励論文賞)、「答志島寝屋慣行の維持と変容：社会生態学的視点に基づくエスノグラフィー」、日本社会心理学会、2015.10.31
- (7) 研究テーマ
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)、村本由紀子、研究代表者、「関係性の類型と拡張自己評価維持過程」、2011～2014
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)、村本由紀子、研究分担者(代表者の所属：横浜国立大学)、「職業教育・訓練の日欧比較研究：エンプロイアビリティとキーコンピテンシー開発の分析」、2012～2014
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)、村本由紀子、研究代表者、「自他の認知の連続性と境界に関する多面的検討」、2015～

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国際、International Association of Cross-Cultural Psychology、2016 Conference Organizing Committee (Treasurer)、2014.4～
- 国内、日本グループ・ダイナミクス学会、理事、学術雑誌編集委員、2015.4～

27 文化資源学

《文化資源学専門分野》2015年度より

教授 木下 直之 KINOSHITA, Naoyuki

1. 略歴

1979年3月	東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
1981年3月	東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修士課程中途退学
1981年4月	兵庫県立近代美術館学芸員
1995年4月	同美術館学芸課長
1997年4月	東京大学総合研究博物館助教授
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年4月	国立民族学博物館助教授併任（～2003年4月）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学

b 研究課題

幕末・明治期の造形表現の形成と変容と展開を、従来の美術史学の枠組みを離れて追跡している。既存領域である美術に隣接する写真、芸能、祭礼、見世物、民衆娯楽の領域に目を向けるとともに、それらの表現活動と社会の関係の解明にも取り組んでいる。評価されないものの実態と、それを評価しない仕組みの双方をも明らかにしたい。後者は当時の文化政策の研究へと展開するはずだ。開設時より関わった文化資源学専攻における新たな研究領域の開拓と構築に対し、こうした歴史的視点の導入を積極的に進めてきた。

c 概要と自己評価

近年の研究に、以下の三本の柱を立てている。第1に「展示」、第2に「文化財」、第3に「近代の文化政策」である。

第1の展示研究は、狭義の博物館学にとらわれず、広く何らかの物品や問題が展示されている環境を対象とする。主に、戦争の記憶（戦意昂揚や慰霊）を伝える展示、彫刻の屋外展示、動物展示（見世物や動物園の歴史と課題）を重点的に研究している。とりわけ動物展示に関しては、展示状況のみならず、経営実態を含めて現場をよく調査するとともに、2011年より日本動物園水族館協会の広報戦略会議のメンバーとして、さらに環境省が2013-2015年度に設置した動植物園等公的機能推進方策のあり方検討会の委員として、動物園水族館法の制定を視野に入れながら実践的な活動も展開しつつある。同協会が公開シンポジウム「いのちの博物館の実現にむけて—消えていいのか、日本の動物園と水族館」を7回開催、そのすべてのコーディネーターを務めた。さらに2015年度より同協会の顧問に就任した。社会的にきわめて有意義な活動と認識している。ここで考えたことは東京大学出版会の雑誌『UP』に「動物園巡礼」と題して連載し、広く問題提起している。文学部に開設されている博物館学芸員課程講座において、その視野に動物園と水族館をとらえることも有意義だと考える。

第2の文化財研究は、文化領域における価値評価を問題にし、これを歴史的な視野の中でとらえてきた。宝物・国宝・文化財・文化遺産・文化資源をキーワードに、文化財や芸術作品を相対化し、文化資源学の展望を示したい。まずは講義を重ね、問題を整理し、近く著書の刊行で成果を示す予定である。

第3の文化政策研究に関しては、2013年秋にロンドンの大英博物館で開催された「春画展」に協力・関与し、その後同展の日本開催が難航したことを受けて、日本社会と春画展示を考える春画展示研究会を文化資源学会に開設した。2014-2015年度に7回の研究会を開催し、最終回は公開フォーラムとした。その成果は、『文化資源学』第12号（2014年）、第13号（2015年）で公表した。問題を春画展にとどめず、社会が性表現をどのように管理してきたのかを問う文化政策研究とした。

以上の三本の柱を研究軸とすることで、学内での教育と学外への発信とがうまく噛み合い出した。トータルとして、数年以内には、19世紀の日本文化の知られざる一面を明らかにできると考えている。

d 主要業績

(1) 論考

- 「二十五人の渋沢栄一 ―銅像からゆるキャラまで」(平井雄一郎、高田知和編『記録と記憶のなかの渋沢栄一』法政大学出版局、2014)
- 「死者がよみがえる場所」(秋山聡、野崎勲編『人文知―死者との対話』第2巻、東京大学出版会、2014)
- 「開港場横浜の祭礼」(久留島浩編『描かれた行列―武士・異国・祭礼』東京大学出版会、2015)
- 「春画と裸体画問題」(『文化資源学』第13号、文化資源学会、2015)
- 「春画と明治日本」(『春画展』図録、永青文庫、春画展日本開催実行委員会、2015)
- 「猥褻のはじまり」(『ユリイカ』第47巻第20号、青土社、2016)

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 静岡県立美術館第三者評価委員、2006～
- 横浜美術館、アドヴァイザー、2008～
- 独立行政法人国立美術館、運営委員、2009.4～
- 東京都写真美術館、第三者評価委員、2010～
- 日本動物園水族館協会、広報戦略会議委員、2011～

教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke

1. 略歴

- 1980.04 東京大学教養学部理科I類、入学
- 1982.04 同学部教養学科第一文化人類学分科、進学
- 1984.03 同学科、卒業
- 1984.04 東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学
- 1986.03 同修士課程、修了
- 1986.04 同研究科文化人類学専攻博士課程、進学
- 1988.04 社会学研究科より総合文化研究科へ移管
- 1990.08 東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
- 1995.11 東京大学大学院総合文化研究科、博士号(学術)取得
- 1994.04 - 1997.03 東京大学教養学部専任講師
- 1996.04 大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
- 1997.04 - 2004.09 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授
- 2004.10 - 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
- 2005.04 - 2009.03 国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員
- 2009.04 - 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授
- 2014.09 - 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻教授

2. 主な研究活動

多様な状況における文書・読み書き、その人間・社会との関係の研究

a 専門分野 b 研究課題

文化資源学(文書文化論)

主に発展途上国を念頭に置きつつ、広く文書・読み書きと人間・社会の関係について研究している。また、調査研究方法の検討、改善にも強い関心を持っている。様々なフィールド調査で得られるデータや知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的人工物(cognitive artifacts)の変化に関する歴史学的研究と有機的に接合することを目指して、隣接諸分野の研究者との共同研究にも積極的に取り組んでいる。

c 概要と自己評価

2009～2011 年度に引き続き、以下の3つの課題を意識しつつ、相互に関連しあう複数の研究を並行して進めた。

- ・文化資源学としての文書文化の考察
- ・デジタル技術と文書文化の関係の考察
- ・文書・読み書きに関する多様な領域の専門家との共同作業の推進

(1) 2006 年度より 2011 年度まで連携研究者として参加した科研費プロジェクト「地図史料学の構築」、「地図史料学の構築」の新展開（研究代表者：杉本史子 史料編纂所教授）における絵図調査、東京芸術大学における国絵図復元研究への参加にもとづき、日本語論文1本（『紙とデジタルの間で — 人文学の物質的な側面と知的分業について』、『人文知のフロンティア 3 境界と交流』）、英語論文1本（“Reconstructing Provincial Maps” in *Cartographic Japan: A History in Maps*）を執筆した。

(2) 科研費プロジェクト「近代化模索期の「国史」編纂と地図作成」（研究代表者：杉本史子 史料編纂所教授、2012/04～2014/03）に連携研究者として参加した調査結果を東京大学史料編纂所研究成果報告に執筆した（『陸から考える近代の海と読み書き』、『近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究』）。

(3) 文化資源学の展開をデジタル技術を援用しながら分析する試み「文化資源学の射程」プロジェクトの研究結果を共同研究者、鈴木親彦と共著で『文化資源学』13に投稿し（『文化資源学の射程—大学院教育プログラムへの人文情報学的アプローチ』）、さらに、可視化情報学シンポジウム 2014、Japanese Association for Digital Humanities Conference 2014 で報告した。現在、これまでの成果を学術誌に投稿し、査読結果を待っている段階である。

(4) 東京大学大学院情報学環・佐倉統研究室／オムロン・ヒューマンルネッサンス研究所（HRI）共同研究「人と機械の未来を考える研究会」（研究代表者：佐倉統 東京大学大学院情報学環教授、2011.11）の研究結果を執筆した（『デジタル・ネットワーク化する世界と読み書き—開発研究からの考察』、『人と「機械」をつなぐデザイン』）。

(5) 2014.04 より国際協力機構（JICA）中米・カリブ地域生活改善広域アドバイザーとしてコスタリカ共和国における生活改善プロジェクト情報システム構築に関する現地調査、協力を行った。また、生活改善アプローチに関する論文を投稿し、現在、査読結果を踏まえて修正中である。

(6) 文化資源学会「文化資源学の展望プロジェクト」「文化資源学を支えるテクノロジー」分科会の幹事として、様々な領域の専門家のもとを訪問し研究会を行い、その成果を発信するためのホームページを運営した。また、その成果の一部を分科会共同運営者、鈴木親彦とともに「可視化情報学シンポジウム 2015」や神田明神で報告した。

以上のように、引き続き歴史学、情報学、文化財保存科学、国際協力など多様な分野の専門家との共同作業を積極的に行い、成果の一部を公表することができた。これらの活動を通じて様々な領域でそれぞれに研究の進展があることを確認できたが、特にデジタル技術の進展は目覚ましく、それらとの連携は重大な課題となった。今後も、引き続き、学際性、社会連携、情報技術の積極的活用を重視した研究を進めていく。

d 主要業績

(1) 著書

共著、中村雄祐、『人文知 3 境界と交流』、東京大学出版会、2014.9

共著、中村雄祐、『人と「機械」をつなぐデザイン』、東京大学出版会、2015.2

共著、Kären Wigen, Sugimoto Fumiko, and Cary Karacas (eds.), 『Cartographic Japan - A History in Maps』、The University of Chicago Press、2016.3

(2) 論文

鈴木親彦・中村雄祐、「文化資源学の射程—大学院教育プログラムへの人文情報学的アプローチ」、『文化資源学』、13、91-101 頁、2015.6

(3) 学会発表

国内、鈴木親彦・中村雄祐・増田勝也、「修士論文とシラバスを対象とした人文学・社会科学の学際領域の可視化」、可視化情報学シンポジウム 2014、工学院大学新宿キャンパス、2014.7.21

国際、Yusuke Nakamura* Hideki Mima, Katsuya Masuda, Chikahiko Suzuki、「Scope of Cultural Resources Studies: Text-Mining of a Newly Created Interdisciplinary Graduate Program with MIMA Search」、Japanese Association for Digital Humanities Conference 2014、筑波大学、2014.9.21

国内、鈴木親彦・中村雄祐、「3D プリンティングによる「つくりもの」とテキストマイニングを活用した神田祭附け祭復元プロジェクトの可視化」、可視化情報学シンポジウム 2015、工学院大学新宿キャンパス、2015.7.21

(4) 研究報告書

中村雄祐、「近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究」、東京大学史料編纂所研究成果報告 ;2014-3、2015

(5) 予稿・会議録

国内会議、鈴木親彦、中村雄祐、増田勝也、「修士論文とシラバスを対象とした人文学・社会科学の学際領域の可視化—「文化資源学の射程」研究プロジェクト報告」、可視化情報学シンポジウム2014、工学院大学新宿キャンパス、2014.7.21

『可視化情報学シンポジウム2014 講演論文集』、2014.7

国際会議、Yusuke Nakamura, Hideki Mima, Katsuya Masuda, Chikahiko Suzuki、「Scope of Cultural Resources Studies - Text-Mining of a Newly Created Interdisciplinary Graduate Program with MIMA Search」、Japanese Association for Digital Humanities Conference 2014、University of Tsukuba、2014.9.21

『JADH Conference 2014 Abstracts』、p.19、2014.9

国内会議、鈴木親彦、中村雄祐、「3D プリンティングによる「つくりもの」とテキストマイニングを活用した神田祭 附け祭復元プロジェクトの可視化」、可視化情報学シンポジウム2015、工学院大学新宿キャンパス、2015.7.21

『可視化情報学シンポジウム2015 講演論文集』、2015.7

(6) マスコミ

「修士論文とシラバスを対象とした人文学・社会科学の学際領域の可視化—「文化資源学の射程」研究プロジェクト報告」、Slideshare、2014.7.21

「Scope of Cultural Resources Studies Text-Mining of a Newly Created Interdisciplinary Graduate Program with MIMA Search」、Slideshare、2014.10.7

「神田祭附け祭に向けたつくりもの連続ワークショップ・キックオフ」、Slideshare、2014.12.26

「3D プリンティングによる「つくりもの」とテキストマイニングを活用した神田祭附け祭復元プロジェクトの可視化」、Slideshare、2015.7.21

「Cuatro Acciones Pilares de MV - Aprendizaje de las Entradas de AMAGRO en SIMEVI」、Slideshare、2016.3.10

「Compartir Imágenes y Palabras de MV - Sobre el Sistema de Información de Mejoramiento de Vida para la Validación de Mejoramiento de Vida」、Slideshare、2016.3.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、神田明神、「神田祭附祭プロジェクト 文化資源としての江戸祭礼」、2015.9

特別講演、コスタリカ共和国農業牧畜省普及総局、「Compartir Imágenes y Palabras de MV - Sobre el Sistema de Información de Mejoramiento de Vida para la Validación de Mejoramiento de Vida」、2016.3

(2) 学会

国内、文化資源学会、理事、2014.7～

国際、Japanese Association of Digital Humanities、学術雑誌編集委員、2014.10～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、国際協力機構、中米・カリブ地域生活改善広域アドバイザー、2014.4～

准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

1. 略歴

1987年 3月 早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業
1987年 4月 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻入学
1990年 3月 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻修了(政治学)
1990年 4月 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻入学
1993年 5月 早稲田大学人間科学部助手(1996年3月まで)
1996年 3月 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻単位取得満期退学
1998年 4月 昭和音楽大学音楽学部助手
2000年 4月 静岡文化芸術大学文化政策学部講師
2001年 1月 博士(人間科学)
2004年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授(職名変更)

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学（文化政策学）

b 研究課題

文化を支える諸制度、それと反対のベクトルである文化の発展を阻害する制度について関心をもってきた。研究の中心を法制度においてきたが、最近では国や自治体の文化政策の動向に対応して、文化にとってよりよい政策の企画、立案、執行のあり方について考えている。とくに行政改革が現実に行われ、市町村合併の推進及び2003年に地方自治法改定で施行された指定管理者制度が導入される状況の中で、公立文化施設（美術館、文化ホール等）の望ましい運営方法とそれを管理する文化政策のあり方を研究の対象としてきた。

他方、芸術を支える制度としての劇場についても関心を持っており、この数年はドイツの劇場のあり方をめぐる動向、それを取り巻く文化政策、環境について関心をもって研究している。とはいえ、そもそも「制度」そのものについて疑問をもっていることから、あるべき「制度」に固執しているわけではない。むしろ「制度」を超えた活動、とくにドイツの社会文化活動とそれを巡る政策に大いなる関心を持っている。

c 概要と自己評価

自治体文化政策の現場において、条例制定（2006年度）、計画策定（2007年度、2008年度）、そして事業展開の基盤づくり（2009年度～2011年度）に携わってきたが、2012年からは長野県大町市において職員研修や文化資源活用ビジョンの策定に関わり、2015年度をもって策定を終えた。この策定を契機に、人材育成事業にも継続して携わりながら、地方自治体の文化行政の現場に関与しながら研究を継続している。その成果として報告書を作成したが、時間がかかってもじっくりと市民主体の文化政策を目指して市民とともに学びながら考え続けていくこと、そして自治体で文化政策に関わる人たちにとって有益となる基本的な原理と方法を明らかにすることであり、その一部を明らかにすることができたと考えている。このような研究の場に、学生も参加させることによって、多くの学びを提供できたと考えている。

またこれらの成果も踏まえて、海外の研究者と共同して「Cultural Policies in East Asia-Dynamics between the State, Arts and Creative Industries」において、日本の地方自治体の文化政策の状況を明らかにした共著を記せた。東アジアの文化政策研究者との交流を活性化しており、それに参加できたのは大変有意義であり、現在もこれらの関係は継続している。また、2014年には、研究室を巣立った元学生たちと一緒に、ドイツ、ヒルデスハイム大学で開催された International Cultural Policy Research において、日本の文化政策展開における市民協働の課題を取り扱ったセッションを行い、学会の総括において高い評価を得た。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Mari Kobayashi、『Cultural Policies in East Asia-Dynamics between the State, Arts and Creative Industries』、2014.9

(2) 学会発表

国際、Mari Kobayashi, Miho Nakamura, Ayumi Takata, Yukiko Nagashima、「Citizen's participation of decision making process in local cultural policy」、International Conference of Cultural Policy Research、2014.9.11

特別講演「地域の潜在力を引き出す文化の力」、韓国東北亜学会・慶山学会、2015年9月3日、Kyungli Univeristy、大邱

(3) 予稿・会議録

国際会議、Mari Kobayashi, Miho Nakamura, Ayumi Takata, Yukiko Nagashima、「Citizen's Participation in decision-making process of local cultural policy」、International Conference of Cultural Policy Research、2014.9.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、(社) 地方行財政調査会、「地方の潜在能力を引き出す文化の力と文化政策の担い手」、2014年7月

基調講演、栃木県公立文化施設協議会平成26年度第2回研修会、基調講演「文化施設と地域の関わり」2015年2月27日、栃木県総合文化センター

職員対象講演会、長野県須坂市・須坂市文化振興事業団、「これからの地域と文化会館のあり方」、2015年4月20日、須坂市文化会館メセナホール

岐阜県関市文化振興基調講演会、「芸術文化による地域づくりと文化振興の役割」、2015年7月26日、わかくさ・プラザ学習情報館多目的ホール

長崎県対馬市地域おこし協力隊活動支援アドバイザー派遣事業・講演会「地方自治体における文化行政と公立文化施設」、2015年9月14日、対馬市交流センター

(2) 行政

自治体、武蔵野市、立案、第五期長期計画・調整計画策定委員、2014.8～

省庁、文化庁、芸術選奨選考審査員、2014.10～

長野県大町市文化資源活用ビジョン策定委員会アドバイザー（2014、2015年）

東京都大田区「大田区の文化施設の在り方検討委員会」委員長（2014年）

東京都大田区区民プラザ等文化施設指定管理者候補者審査会委員（2014、2015年）

東京都小金井市民交流センター運営協議会委員長（2012年～）

文化庁、劇場・音楽堂等活性化事業協力者会議委員（2015年）

准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira

1. 略歴

- | | |
|-----------|--|
| 1997年3月 | 東京大学文学部歴史文化学科西洋史学専修課程卒業 |
| 2002年11月 | ロンドン大学UCL 考古学研究所修士課程修了 学位取得 修士（文化遺産研究） |
| 2003年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了 学位取得 修士（文化経営学） |
| 2004年5-7月 | 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント |
| 2005年6-8月 | 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント |
| 2009年10月 | ロンドン大学UCL 考古学研究所博士課程修了 学位取得 博士（パブリックアーケオロジー） |
| 2010年9月 | ロンドン大学UCL 考古学研究所名誉講師（Honorary Lecturer） |
| 2011年9月 | セインズベリー日本藝術研究所学術アソシエイト（Academic Associate） |
| 2011年9月 | イーストアングリア大学（University of East Anglia）世界美術・博物館学科（School of World Art Studies and Museology）准教授（Lecturer） |
| 2014年8月 | イーストアングリア大学（University of East Anglia）芸術・メディア・アメリカ研究学科（School of Art, Media and American Studies）准教授（Lecturer）（組織再編） |
| 2015年1月 | イーストアングリア大学高等教育実践準修士課程修了 学位取得 準修士（高等教育実践） |
| 2015年10月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学（文化遺産研究）、パブリックアーケオロジー、博物館学

b 研究課題

私の研究の根底にあるのは、人々にとって過去が何を意味するのかという問いにある。いかにも大仰な問いだが、この関心に導かれるかたちで、これまで人々が社会においてどのように過去をイメージし、理解し、使う（そして場合によっては「消費する」）のかをさまざまな角度から考察してきた。直接関連する分野としては、文化資源学、文化遺産研究、博物館学、物質文化研究、人文地理学などがあげられるが、おそらくあらゆる学問分野に何らかのかたちで関わりがあり、分野横断的に展開できるテーマではないかと思っている。これまでは考古学に関連する文化遺産を事例研究にすることが多く、その中でパブリックアーケオロジーという領域に強い関心をもってきた。現在は、天災に対する社会の記憶、そして古墳と地域住民の関係史というテーマにとりわけ注力している。東京大学本郷キャンパスという文化資源を魅力的にプレゼンテーションする方策にも興味をもっていている。

c 概要と自己評価

2015年10月に東京大学大学院人文社会系研究科に着任したばかりであるが、これから上に掲げた研究課題に取り組む所存である。

d 主要業績

(1) 論文

松田陽、「史跡とならずに消えた名所一本郷の富士山」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究』、29、39-57 頁、2016.3

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

文化審議会文化政策部会、委員

ユネスコ記憶遺産選考委員会、委員

川崎市橋樹官衙遺跡群調査整備委員会整備部会、委員

世界考古学会議（World Archaeological Congress）、事務局長（Secretary）

文化資源学会、理事

オーストラリア研究評議会（Australian Research Council）、研究計画評価委員

学術雑誌 Public Archaeology、編集委員

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo

30 次世代人文学開発センター《萌芽部門》参照

教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo

18 フランス語フランス文学 参照

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya

11 中国語中国文学 参照

教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji

25 社会学 参照

教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi

07 美学芸術学 参照

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki

9b 日本語日本文学（国文学） 参照

教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun

10 日本史学 参照

教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles

29 次世代人文学開発センター《創成部門》 参照

《文化経営学専門分野》

- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
30 次世代人文学開発センター《萌芽部門》参照
- 教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
11 中国語中国文学 参照
- 教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照

《形態資料学専門分野》

- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
30 次世代人文学開発センター《萌芽部門》参照

教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji
25 社会学 参照

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
11 中国語中国文学 参照

教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照

《文字資料学文書学専門分野》

教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照

教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照

准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照

准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
30 次世代人文学開発センター《萌芽部門》参照

教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo
18 フランス語フランス文学 参照

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
11 中国語中国文学 参照

教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照

- 教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki
9 b 日本語日本文学（国文学） 参照
- 教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun
1 0 日本史学 参照
- 教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles
2 9 次世代人文学開発センター《 創成部門 》 参照

《 文字資料学文献学専門分野 》 2014 年度まで

- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
2 7 文化資源学《 文化資源学専門分野 》 参照
- 教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
2 7 文化資源学《 文化資源学専門分野 》 参照
- 准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
2 7 文化資源学《 文化資源学専門分野 》 参照
- 教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
3 0 次世代人文学開発センター《 萌芽部門 》 参照
- 教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo
1 8 フランス語フランス文学 参照
- 教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
1 1 中国語中国文学 参照
- 教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki
9 b 日本語日本文学（国文学） 参照
- 教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun
1 0 日本史学 参照
- 教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles
2 9 次世代人文学開発センター《 創成部門 》 参照

28 韓国朝鮮文化

教授 川原 秀城 KAWAHARA, Hideki

13 中国思想文化学 参照

教授 早乙女 雅博 SAOTOME, Masahiro

1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(考古学)
1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学(考古学)
1981年4月 東京国立博物館学芸部東洋課東洋考古室研究員
1988年7月 東京国立博物館学芸部東洋課主任研究官
1990年4月 東京国立博物館学芸部北東アジア室長
1996年4月 東京大学文学部助教授(附属文化交流研究施設朝鮮文化部門)
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(附属文化交流研究施設朝鮮文化部門)
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(韓国朝鮮文化研究専攻)
2010年8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(韓国朝鮮文化研究専攻)
現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

韓国朝鮮を中心とする東アジアの考古学

b 研究課題

- (1) 朝鮮半島の古代国家の成立と発展過程を考古学資料から追求している。高句麗、新羅、百濟という三国史の枠を超えて、地域単位での発展過程を明らかにし、地域間の相互関係から国家の成立過程を追及する。
- (2) 高句麗壁画古墳を美術史や建築史とは異なる考古学の方法から分析して、壁画と石室の構成から編年を作り上げるとともに、当時の生活様相や社会を明らかにする。
- (3) 朝鮮考古学史では、戦前に朝鮮総督府を中心として行なわれた考古学発掘調査の成果を学術的な面から探っている。植民地政策としての古蹟調査事業のなかで、いかに学術的成果をあげてきたか、また日本における考古学の発展とどのようにかかわってきたかを明らかにする。

c 概要と自己評価

これまでに発表してきた新羅考古学の論文をまとめ、新たな資料を追加した土器編年を組み立て直し「新羅考古学研究」(2010年)として出版した。それを基に新羅の国家形成について、古墳から出土した装身具の組合せの時間的変遷を求め、そこからいくつかの画期を見出し、考古学から見た国家の成立過程を明らかにした。

2010年と2011年に朝鮮民主主義人民共和国の社会科学院考古学研究所と共同で高句麗壁画古墳の調査を行った。その成果をもとに2015年には韓国・釜山大学校に招聘され、1学期の講義を担当した。今後も継続して壁画古墳の調査研究を行う予定であるが、保存に関しても日本の経験を生かしていきたい。

学史研究は、調査研究のみでなく、それを担った研究者の歴史認識まで深く掘り下げ、その成果を発表した。今後は、韓国の研究者との共同研究へと進みたい。

d 主要業績

(1) 学会発表

「日本の文化遺産国際協力—All Japan 協力体制の構築」『文化遺産国際開発協力の統合戦略模索』2016 ユネスコ遺産国際開発協力ワークショップ、国立古宮博物館、2016.3.29

「植民地朝鮮における考古学調査・古蹟保存と、それを通してみた朝鮮古代史像」『日本統治下の朝鮮における古代史研究・考古学・文化財』2016.4.23、早稲田大学

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本考古学会幹事 (2014.4~2015.3、2015.4~)

朝鮮学会幹事 (2014.4~2015.3、2015.4~)

高句麗渤海学会海外学会諮問委員 (2014.4~2015.3、2015.4~)

(2) 他機関での講義等

招聘教授、韓国・釜山大学校、「東洋考古学特講」、2015.3~2015.6

非常勤講師、立正大学文学部、「考古学特講 8」、2015.9~2016.3

講演、「古代朝鮮の古墳文化」、甘粕健先生追悼記念講演会、明治大学、2014.7.12

講演、「世界遺産高句麗壁画古墳」、せたがや文化創造塾 2014.9.27

講演、「西都原古墳群の発掘と朝鮮古蹟調査—1910年代を中心とする日本と朝鮮の考古学調査」、宮崎県立西都原考古博物館、2015年2月1日

講演、「日帝強占期の古蹟調査」、韓国・国民大学校日本文化研究所、2015.4.23

講演、「新羅・加耶の考古学」、洗足区民センター、2015.10.10

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

文化遺産コンソーシアム東アジア・中央アジア分科会委員 (2014.4~2015.3、2015.4~)

財団法人東洋文庫、研究員（客員）(2014.4~2015.3、2015.4~)

世田谷区文化財保護審議会委員 (2014.1~2015.1、2015.1~)

教授 **福井 玲**

FUKUI, Rei

<http://www.lu-tokyo.ac.jp/~fkr/>

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部言語学科卒業（文学士）

1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（文学修士）

1984年9月~1986年10月 韓国ソウル大学校人文大学国語国文学科に留学

1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学

1987年4月~1989年3月 東京大学文学部助手（言語学研究室）

1989年4月~1992年9月 明海大学外国語学部講師（日本語学科）

1992年10月~1997年3月 東京大学教養学部助教授

1994年10月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授（併任）

1997年4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設に配置換

1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設に配置換

2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科に配置換

2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2013年3月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題 c 概要と自己評価

専攻分野は韓国語学であり、その中でも中世語の音韻体系に関する研究や古代語、近代語についての研究を行ってきた。また、それらを歴史的につなぐ通時的な研究も行なっている。現代語についても主として音声や方言に関する研究を行ってきた。さらに、中世語から近代語にかけての韓国語学の資料研究も行っている。その他に、音声学・音韻論を中心とする言語学一般、方言研究を中心とする日本語学にも関心をもっている。2013年1月にはこれまでにやってきた韓国語の音韻史にかかわる研究をまとめて単行本として出版した。

これ以外に、2013年から現在に至るまで継続して行っている研究課題として、韓国語の語彙史の研究があげられる。過去に行なわれた方言調査（小倉進平、崔鶴根、韓国精神文化研究院）の資料に基づいて、項目を選定して言語地図を作製し、そこに見られる語彙の歴史を再構成することを目指している。その過程で、言語地図を作製する既存のプログラム(Seal)に基づいて、朝鮮半島の言語地図を描くことができるシステムを構築し、さらに、ソースコードの提供を受けて、このプログラムを改良することを目指している。

d 主要業績

(1) 論文

Fukui Rei, 「On the history of words for sweet potato and potato in Korean」, 『Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics』, 59-70 頁, 2014.5

福井玲, 「中世韓国語の「傍点」をめぐるいくつかの基本的な課題」, 『言語研究』148: 61-80. 日本言語学会. 2015.9

福井玲, 「The sun in Korean」, Studies in Asian Geolinguistics. 1: 55-60. 2015.12

李賢熙, 福井玲, 「《海槎日記》의 候文과 조선어번역문 (海槎日記の候文と朝鮮語翻訳文)」, 『冠嶽語文研究』38: 63-100. ソウル大学校国語国文学科. 2015.12.

(2) 書評

福井玲, 石川遼子著『金沢庄三郎 一地と民と語とは相分つべからず』. 『歴史言語学』4: 33-40. 日本歴史言語学会. 2015.12.

(3) 学会発表

国際, Fukui Rei, 「On the history of words for sweet potato and potato in Korean」, Second International Conference on Asian Geolinguistics, Pathumwan Princess Hotel, Bangkok, Thailand, 2014.5.24

国内, 福井玲, 「中世韓国語のハングル資料製作者たちの言語的背景—中間報告—」, 朝鮮語アクセント・イントネーション研究会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015.1.31

国内, Fukui Rei, 「The sun in Korean」, Paper presented at the Studies in Asian Geolinguistics at AA Institute, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS. 2015.10.3

国内, Fukui Rei, 「Rice and related words in Korean」, Paper presented at the Studies in Asian Geolinguistics at AA Institute, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS. 2015.12.18

国内, Fukui Rei, 「Milk in Korean」, Paper presented at the Studies in Asian Geolinguistics at AA Institute, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS. 2016.2.29

国内, 福井玲, 「小倉進平による朝鮮語音声の観察について」, 朝鮮語アクセント・イントネーション研究会. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2016.3.12

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内, 朝鮮語研究会, 幹事 (1999 年～現在)

国内, 日本歴史言語学会, 理事 (2016.1～現在)

(2) 共同研究員

国内, 国立国語研究所 共同研究員

国内, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員

教授 **六反田 豊** ROKUTANDA, Yutaka

1. 略歴

- 1985 年 3 月 九州大学文学部史学科朝鮮史学専攻卒業
- 1987 年 3 月 九州大学大学院文学研究科 (史学専攻) 修士課程修了
- 1989 年 3 月 九州大学大学院文学研究科 (史学専攻) 博士後期課程中途退学
- 1989 年 4 月 九州大学文学部助手 (～1992 年 3 月)
- 1992 年 4 月 久留米大学文学部専任講師 (～1995 年 3 月)
- 1995 年 4 月 久留米大学文学部助教授 (～1996 年 3 月)
- 1996 年 4 月 九州大学文学部助教授 (～2000 年 3 月)
- 2000 年 4 月 九州大学大学院人文科学研究院助教授 (～2002 年 3 月)
- 2002 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (～2007 年 3 月)
- 2007 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (～2015 年 3 月)
- 2015 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野

朝鮮中世・近世史

b 研究課題

朝鮮王朝(李朝、1392-1910)時代の水運史や財政史・経済史などを中心に研究している。現在の主たる研究課題は、(1) 朝鮮前期漕運制研究、(2) 朝鮮中世・近世海事史研究、(3) 朝鮮中世・近世「水環境」研究、(4) 朝鮮後期財政史研究、(5) 朝鮮時代古文書研究などである。(1)の漕運制とは朝鮮時代における官営の税穀船運機構であり、朝鮮前期におけるその整備・変遷過程や運営実態等を明らかにする作業に取り組んでいる。(2)は(1)から派生したもので、朝鮮の前近代史を「海」とのかかわりで再構成するという問題意識から、済州島民の海難関係記録の分析を通じて彼らの海上活動の実態や異国への漂流・漂着をめぐる諸問題、朝鮮時代の海防体制や「水賊」などについて研究している。(3)は(2)をさらに発展させ、広く人と「水」とのかかわりを明らかにしようとするもので、当面は漢江という内陸河川を主たる対象として、水運だけでなく、渡船や漁撈、さらには治水・水利といった点も含めて「水環境」史の構築をめざしている。(4)は、朝鮮後期に施行された新税制である大同法について、その運用実態を地方財政との関連に注目しながら研究している。このほか、高麗から朝鮮への王朝交代期における社会的・経済的諸変動の歴史的意義をいかに理解するかという問題にも関心を抱いている。(5)は日本各地の諸機関に所蔵される朝鮮古文書の調査である。2014年度から2015年度にかけては、これらのうちとくに(1)(3)(4)の課題を中心に研究を進めた。またこれらのほか、『朝鮮王朝儀軌』とよばれる朝鮮時代の官撰文献記録に収録された「班次図」(国家儀礼にかかわる行列図の一種)に関連する研究もおこなった。

c 概要と自己評価

上記研究課題の(1)については、これまでの研究成果をまとめ、博士学位請求論文として2014年7月に九州大学に提出し、翌2015年1月31日付で「博士(文学)」の学位を授与された。(3)については、2010年度から2013年度にかけて「朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相—漢江を中心として」というテーマで日本学術振興会から科学研究費補助金の支給を受けていたが、この間に実施した現地調査の資料を整理するとともに、次の段階へ向けての研究計画を練った。(4)については、これまで蒐集してきた19世紀末の大同法関連記録類のいくつかを紹介し、概括的な分析を試みた。またその他として、『朝鮮王朝儀軌』所載の「班次図」をめぐる研究や原稿執筆にも取り組んだ。「班次図」については、『園幸乙卯整理儀軌』所載の「班次図」の特殊性とその理由を考察し、久留島浩編、『描かれた行列 武士・異国・祭礼』(東京大学出版会、2015年10月)に「班次図」とその周辺—朝鮮時代後期の行列図」を寄稿したほか、韓国・朝鮮文化研究会第16回研究大会(2015年10月24日、京都府立大学)において開催されたシンポジウム「韓国・朝鮮社会と記録/記憶の諸相」においてシンポジウム全体の趣旨説明を兼ねて報告した。またこれと関連して、石川県立歴史博物館で開催された特別展「朝鮮王朝—宴と儀礼の世界」の図録に朝鮮王朝の国家儀礼についての解説論文を寄稿するとともに、講演もおこなった。

d 主要業績

(1) 著書

- (共著) 川原秀城(編)、『朝鮮朝後期の社会と思想(アジア遊学179)』、勉誠出版、2015.2
- (共著) 歴史科学協議会(編)、『歴史の「常識」を読む』、東京大学出版会、2015.3
- (単著) 六反田豊、『朝鮮初期漕運研究』(博士学位論文、九州大学機関リポジトリにて公開中)、2015.3
- (共著) 石川県立歴史博物館編『朝鮮王朝—宴と儀礼の世界』、石川県立歴史博物館、2015.9
- (共著) 久留島浩編、『描かれた行列 武士・異国・祭礼』、東京大学出版会、2015.10

(2) 論文

ROKUTANDA, Yutaka "A Survey of Variant Versions of the *Sōakchi* and Their Taxonomy", *Memoirs of The Research Department of The Toyo Bunko*, Vol.73, pp.111-139, The Toyo Bunko, 2015.

(3) 書評

六反田豊、川西裕也著『朝鮮中近世の公文書と国家—変革期の任命文書をめぐって—』、『法制史研究』65、229-234頁、法制史学会、2016.3

(4) 学会発表

(国内) 六反田豊、「図面と絵画のあいだ—『園幸乙卯整理儀軌』「班次図」をめぐる」、韓国・朝鮮文化研究会第16回研究大会、京都府立大学、2015.10.24

(5) 講演

(国内) 六反田豊、「朝鮮王朝の国家と儀礼」、石川県立歴史博物館、2015.9.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

(非常勤講師) 国際基督教大学教養学部、「前近代韓国史」、2014.4～2014.6 ; 「韓国史」、2015.4～2015.6
(非常勤講師) 朝日カルチャーセンター横浜教室、「朝鮮王朝の歴史」、2014.7～2015.3、2015.7～2016.3

(2) 学会

(国際) 韓国中世史学会、地域理事、2014.1～
(国内) 朝鮮学会、常任理事、編輯委員、2014.4～
(国内) 朝鮮史研究会、幹事、編集長、2014.10～
(国内) 韓国・朝鮮文化研究会、会長、運営委員、2014.10～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

(教育機関) 釜山大学校民族文化研究所、「韓国民族文化」、編集委員、2014.3～
(その他) 財団法人東洋文庫、研究員、2014.4～
(その他) NHK 教育テレビ、「高校講座世界史」、講師、2014.4～

教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles

29 次世代人文学開発センター《創成部門》参照

准教授 **本田 洋** HONDA, Hiroshi

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~hhonda/>

1. 略歴

1986年3月 東京大学教養学部教養学科第一文化人類学専攻卒業
1986年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程入学
1988年3月 同上 大学院社会学研究科修士課程修了
1988年4月 同上 大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学
1988年8月 文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学(～1991年5月)
1993年3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学
1993年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)(～1994年3月)
1994年4月 東京大学教養学部助手(～1996年3月)
1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手(～2000年3月)
1999年8月 韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所常勤研究員(～2000年8月)
2000年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授(～2002年3月)
2000年9月 英国オックスフォード大学訪問研究者(～2001年3月)
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会・文化人類学

b 研究課題

韓国朝鮮社会を主たる対象として、社会・文化人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在籍時より20余年間、韓国全羅北道南原地域でフィールドワークを続けており、他の地域でも短期の調査を重ねている。近年の研究課題は、(1) 1990年代後半以降の韓国社会における農村移住(都市居住者の農村地域への移住。韓国では「帰農」・「帰村」と呼ぶ)と地域社会の変化、(2) 産業化過程での韓国農村社会の変化と持続性についての歴史・対照民族誌的再分析、(3) 朝鮮半島中・南部農村社会を対象とした近現代民族誌資料の再分析、(4) コミュニティ概念の再検討と近現代韓国社会への適用、等である。

c 概要と自己評価

研究課題(1)については、2007年3月から予備調査を開始し、2010年8月からは韓国全羅北道南原市山内面と近隣地域で、移住者とコミュニティ運動の指導者・活動家を対象としたインタビュー調査と参与観察を断続的に行ってきた。その成果も、論文・学会発表等を通じて継続的に公開している。近年のコミュニティ研究の成果を取り入れつつ、移住者のネットワーク形成と在来の地域コミュニティへの接合についての分析枠組みを構築する作業も進行中である。

研究課題(2)・(3)については、植民地期から産業化以前までの民族誌資料と相互対照しつつ、歴史人類学的手法と実践理論的なアプローチを援用して、私自身が1980年代末に韓国南原地域の一農村で実施したフィールドワークの資料を再分析する作業を進め、その成果をおおむね取りまとめた。

研究課題(4)についても、その成果を学術論文や学会発表を通じて公開済みである。

d 主要業績

(1) 著書

《共著》真島一郎・川村伸秀編、本田洋他執筆、『山口昌男 人類学的思考の沃野』、東京外国語大学出版会、2014.10

《共著》磯崎典世・李鍾久編、本田洋他執筆『日韓関係史1965-2015 III社会・文化』、東京大学出版会、2015.10

(2) 論文

本田洋、「美しい」生と共同体開発の主体性：山内地域帰農者の事例を中心に(韓国語)、*Tradition as Cultural Resources and Local Development (Proceedings of 2015 BK21+ International Conference)*、pp.109-122、2015.1

本田洋、「韓国の産業化と村落コミュニティの再生産——対照民族誌的考察」、『韓国朝鮮文化研究』14、pp.1-37、2015.3
HONDA, Hiroshi Social Anthropology of Korea in Japan after the 1980s, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16, pp.181-192, 2015

本田洋、「韓国山内地域の農村移住者と生活経験——2010年代前半の動向を中心に」、『韓国朝鮮文化研究』15、pp.41-66、2016.3

(3) 学会発表

《国際》HONDA, Hiroshi Social Anthropology of Korea in Japan after the 1980's, IUAES 2014 with JASCA (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences), 2014.5.17

《国内》本田洋、「コミュニティと場所：韓国の地域社会におけるローカルな関係性と共同性」、日本文化人類学会第48回研究大会、2014.5.18

《国際》本田洋、「美しい」生と共同体開発の主体性：山内地域帰農者の事例を中心に(韓国語)、2015 BK21+ International Conference "Tradition as Cultural Resources and Local Development"、韓国全北大学校、2015.1.15

(4) 総説・総合報告

本田洋、「《特集》韓国社会の生き方——早期留学、改宗、農村移住」、『韓国朝鮮文化研究』15、pp.1-2、2016.3

(5) 教科書

『社会学概論2014』、祐成・出口・赤川・本田・小林・中村・白波瀬・佐藤・武川・松本、執筆、東京大学文学部社会学研究室、2014

『社会学概論2015』、祐成・出口・赤川・本田・小林・中村・白波瀬・佐藤・武川・松本、執筆、東京大学文学部社会学研究室、2015

(6) 研究テーマ

《文部科学省科学研究費補助金》本田洋、研究代表者、「生き方の分化・再編と交渉に関する対照民族誌的研究：韓国社会の事例を中心に」、2015～

《寄附金》本田洋、研究代表者、「韓国の地域社会における帰農・帰村現象に関する社会人類学的研究：地域社会の再活性化との関連を中心に」、2015～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

《セミナー》インドゥラマン大学(韓国全羅北道南原市)、「共同体とマウル学」、2014.9

《特別講演》韓国全北大学校考古人類学科BK+、「海外碩学招聘講義「韓国の産業化とマウル共同体の再生産」(韓国語)」、2015.1

《特別講演》社団法人ソンセンミョン(韓国全羅北道南原市)、「韓国文化研究者が見た山内マウル共同体(韓国語)」、2015.3

《セミナー》インドゥラマン大学(韓国全羅北道南原市)、「共同体とマウル学」、2015.9

(2) 学会

《国内》朝鮮学会、幹事・学術雑誌編集委員、2014.5～2016.3

《国内》韓国・朝鮮文化研究会、運営委員・庶務責任者、2014.4～2016.3

29 次世代人文学開発センター

《 先端構想部門 》

教授 小佐野 重利 OSANO, Shigetoshi

1. 略歴

- 1978年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
- 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学
- 1980年9月 パドヴァ大学美術史学科専門課程(Scuola di Perfezionamento)
(イタリア政府給費留学生) ～1982年10月
- 1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（美術史学修士）
- 1983年4月 東京大学大学院博士課程 ～1985年4月15日
- 1985年4月 東京大学文学部助手（美術史学科）～1987年3月
- 1987年4月 多摩美術大学美術学部講師（西洋美術史）～1989年3月
- 1989年4月 東京工業大学工学部助教授（一般教育等芸術）～1993年3月
- 1993年4月 東京大学文学部助教授（美術史学科）～1994年6月
- 1994年6月 東京大学文学部教授（美術史学科）～1995年3月
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授に配置換え（文学部教授兼任）
(1995年9月～12月 ジョン・ポール・グッティ財団グッティ美術史人文学研究所招聘研究者)
- 2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）
教授を兼任
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長（兼務）～2009年3月
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）
教授に配置換え
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科研究科長・文学部長（兼務）～2015年3月
- 2015年4月 東京大学学生相談ネットワーク本部長（兼務）～現在

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋近世美術史 イタリア中世・ルネサンス美術 アルプス南北の美術交流 比較美術史

b 研究課題

- ①イタリア中世末、ルネサンス期の美術を特に絵画史の観点から、古代美術および同時代のアルプス以北の美術との影響関係をも検討しながら幅広くかつ詳細に研究すること。
- ②西洋美術作品における身振り言語の機能に関して、隣接研究分野（文化史、民俗学、文化人類学、考古学、社会学、記号学）の先行研究成果も踏まえ、再検討を加え、新しい様式学および図像学的研究のモデルを模索研究すること。
- ③美術の展開に果たした芸術家の旅行の意義に関する包括的研究。
- ④ヴェローナの画家一門バディーレ家（14-16世紀）の包括的な作品現地調査・資料収集研究の継続。
- ⑤1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討 ——写真家アドルフォ・ファルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレッサンドロ・ツィレリ伯爵の研究（研究代表者：平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）。
- ⑥国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的研究（研究代表者：平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）
- ⑦西欧17世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響（研究代表者：平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究課題）。

c 概要と自己評価

研究面では、平成24年度-25年度は上記の研究課題⑦の研究を継続し、最終的に成果報告書（冊子体）を刊行した。このほか、本研究科2教授および本研究科出身私立大学教員の執筆・翻訳の協力を得て、ミラノのアンプロジアーナ図

書館・絵画館所蔵のレオナルド素描および絵画を軸にした展覧会『ミラノ アンブロジーナーナ図書館・絵画館所蔵 レオナルド・ダ・ヴィンチ展—天才の肖像』を企画・監修した。一方、教育研究以外の負担の多い学内業務（平成 25 年度より研究科長・学部長を兼務）に加え、2011 年 1 月より国際美術史学会(CIHA)副会長の一人に選出されたため、この間、2013 年 1 月には鳴門の大塚国際美術館を会場に 2013 CIHA Colloquium "Between East and West: Reproductions in Art" を企画し実施したほか、同会に係わる業務に忙殺され、上記の研究課題以外に個人研究を広く展開する時間的余裕はなく、また教育面では従前以上に別段の教育を展開できなかった。

d 主要業績

(1) 論文

小佐野重利、「ラファエッロの修業時代—再考—Il periodo di formazione di Raffaello—una riconsiderazione」、『ミラノ ポルディ・ペッツォーリ美術館華麗なる貴族コレクション Collection of Museo Poldi Pezzoli』、pp.20-25/pp.238-241、2014.4

小佐野重利/Shigetoshi Osano、「絵画と時間、というよりむしろ絵画の中の時間—15, 16 世紀における歴史認識をめぐって—Peinture et Temps, ou plutôt le Temps dans l'oeuvre pictural: à propos de la conscience historique aux XVe et XVIe siècle」、『国際シンポジウム「時の作用」/Colloque international «Actions du temps」』、pp. 23-30（日本語）/ pp. 99-104（フランス語）、2014.5

小佐野重利、「イメージ/絵画は「心」の交換の場」、唐沢かおり/林徹編『人文知 1 : 心と言葉の迷宫』、pp. 165-186、2014.7

小佐野重利、「フィレンツェの大工房の時代—15 世紀後半における美術の都の隆盛」、『ウフィツィ美術館展—黄金のルネサンス ボッティチェリからブロンズイーノまで』、pp. 19-27、2014.10

Shigetoshi Osano、「Introduction」、『Between East and West: Reproductions in Art. Proceedings of the 2013 CIHA Colloquium in Naruto, Japan, 15th-18th January 2013. Edited by S. Osano, Cracow, IRSA』、pp. 15-28、2014.11

Shigetoshi Osano、「Le 'grandi officine' a Firenze: la fioritura di una città d'arte nella seconda metà del XV secolo」、『Arte a Firenze da Botticelli a Bronzino: verso una 'maniera moderna'』、pp. 10-16、2014.11

小佐野重利、「美術史研究から科学画像と科学画像リテラシーを考える」、『文化交流研究』、28、pp. 51-69、2015.3

Shigetoshi Osano、「The Chinese Literati's View of Calligraphy and Painting (書画 shuhua). A Reconsideration of the Concept of Art in China and Japan」、『LINA III. The Power of Line, edited by M. Faietti and G. Wolf』、Hirmer, Munich, 2015、pp. 106-117、2015.12

小佐野重利、「日本におけるフィレンツェ派の受容小史—特にボッティチェリに言及して—」、『文化交流研究』、29（2016）、59-72 頁、2016.3

(2) 啓蒙

小佐野重利（選）、「ウフィツィ美術館で出会う名品の中の名品たち」、『芸術新潮』、2014 年 10 月号、pp. 18-29、2014.10

小佐野重利、「レオナルド—稀代の素描家にして思索家—」、『鹿島美術財団 第 42 回美術講演会講演録』、pp. 5-38、2015.2

小佐野重利、「「眼を引き伸ばす」と内視鏡に」、『群像』、2015・3、pp. 288-289、2015.3

(3) 監修

アンナリーザ・ザンニ/小佐野重利、『ミラノ ポルディ・ペッツォーリ美術館 華麗なる貴族コレクション/Collection of Museo Poldi Pezzoli. The Aristocratic Palace and its Beauty-Milano, the Magnificent Collection of the Nobleman』、TBS、2014.4

アントニオ・ナターリ/小佐野重利、『ウフィツィ美術館展—黄金のルネサンス ボッティチェリからブロンズイーノまで/Arte a Firenze da Botticelli a Bronzino: verso una 'maniera moderna'』、TBS、2014.10

アレサンドロ・チェッキ/小佐野重利、『ボッティチェリ展 Botticelli e il suo tempo』（展覧会およびカタログ）、朝日新聞社、2016.1

(4) マスコミ

「時を超えた横顔美人」、『朝日新聞（夕刊）』、株式会社 朝日新聞社、2014.4.1

「フィレンツェ 栄華の軌跡」、『朝日新聞（朝刊）』、株式会社 朝日新聞社、2014.10.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、東京都美術館、「大工房時代のフィレンツェ美術—『マニエラ・モデルナ』の創出に向けて」、2014.10

特別講演、イタリア文化会館、「ウフィツィ美術館の歴史と傑作品への誘い—トスカナ大公国コレクションから世界の美術館へ」、2015.5

特別講演、イタリア文化会館・朝日新聞社、「日本におけるフィレンツェ派の受容小史—とくにポッティチェリに言及して—Una storia della ricezione della ‘scuola fiorentina’ in Giappone con particolare riferimento a Botticelli」、2016.1
特別講演、東京都美術館、「フィレンツェの春のうつろい」、2016.2

(2) 学会

国際、国際美術史学会C I H A、Bureau メンバー（副会長）、2014.1～2016.3

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

花王芸術・科学財団、選考委員、2014.4～2016.3

鹿島美術財団、選考委員、2014.4～2016.3

損保ジャパン美術財団、評議員、2014.4～2016.3

（一般）大塚美術財団、理事、2014.4～2016.3

Accademia Ambrosiana、Academicus (Academy member) in classe di studi sull'Estremo Oriente、2014.4～2016.3

名古屋大学新教育組織構想ワーキンググループ（学外）委員（2015年4月14日～2016年3月）

イタリア文化会館、第2回フォスコ・マライーニ賞選考委員（2015年7月～10月）

教授 **小島 毅** KOJIMA, Tsuyoshi

13 中国思想文化学 参照

教授 **向井 留実子** MUKAI, Rumiko

1. 略歴

- 1978年3月 青山学院大学文学部フランス文学科卒業
- 1994年4月 広島大学大学院教育学研究科（日本語教育）博士課程前期入学
- 1996年3月 広島大学大学院教育学研究科（日本語教育）博士課程前期修了（教育学修士）
- 1996年4月 愛媛大学教育学部、松山東雲女子大学人文学部非常勤講師
- 1998年4月 松山東雲女子大学人文学部専任講師
- 2000年4月 松山東雲女子大学人文学部助教授
- 2003年10月 愛媛大学留学生センター助教授
- 2011年9月 東京大学日本語教育センター教授
- 2014年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語教育

b 研究課題

- 1) 日本語非母語話者の学習ニーズの多様化に対応する漢字教育のための調査・研究
- 2) アカデミックな日本語の教育方法および教材の開発
- 3) 地域および大学における日本語学習支援体制づくりのための調査・研究

c 概要と自己評価

教育面では、2014年度冬学期から大学院の留学生科目を、2015年度夏学期から国際交流室日本語教室の科目を担当し、文学部・人文社会系研究科における日本語教育プログラムと日本語学習環境の充実化を進めた。具体的には、留学生のアカデミックな日本語力を養成することに特化した科目を増やすとともに、留学生の日本語学習支援の土台作りとしての交流行事を企画し実施した。また、2015年度より日本語科目を全学に向けて開放する体制を整え、受け入れを進めているが、その結果として、受講者数が増え、授業自体が活性化しただけでなく、学部・研究科の壁を越えた学生のつながりが生まれ、それが本学部・研究科留学生の日本語科目受講を促進することとなった。

研究面では、「定住外国人のリテラシー」をテーマとする科学研究費（挑戦的萌芽、代表：新矢麻紀子）の調査（地域の外国人に対する日本語学習支援のための啓発活動）と実践（地域の外国人に対する文字指導を中核にしたリテラシー教育）を進め、その成果を国内外の学会で発表した。

d 主要業績

(1) 学会発表

国内、向井留美子・新矢麻紀子・高橋志野、「国際結婚移住女性への文字学習支援—多様な学習レディネスとニーズに着目して—」、日本語教育方法研究会、2014.9.6

国内、向井留美子・高橋志野・串田真知子、「中国語母語話者に対する漢字字形指導に関する一考察—日本語の手書き場面と日本人の理解度・許容度に着目して—」、2014年度第9回日本語教育学会研究集会、2014.12.20

国際、向井留美子・新矢麻紀子・高橋志野、「国際結婚移住女性の文字学習はなぜ進まないのか」、カナダ日本語教育振興会 2015年度年次大会、2015.8.21

(2) 啓蒙

向井留美子、「国際結婚移住女性への文字学習支援」、『文化交流研究』、2015.3

(3) 研究報告書

向井留美子、「中国人日本語学習者に対する漢字字形指導のための実態調査—学習者の理解度と漢字の使用実態に即したシラバス構築を目指して—」、『漢字・日本語教育研究』、第3号、138-195頁、2014.8

(4) 予稿・会議録

国内会議、向井留美子・高橋志野・串田真知子、「中国語母語話者に対する漢字字形指導に関する一考察—日本語の手書き場面と日本人の理解度・許容度に着目して—」、2014.12.20

国際会議、向井留美子・新矢麻紀子・高橋志野、「国際結婚移住女性の文字学習はなぜ進まないのか」、2015.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、学校法人中村英数学園、「非漢字語圏の学習者に対する漢字指導」、2014.11

セミナー、愛媛県南宇和郡愛南町社会福祉協議会、「日本語サポーター入門講座 in 愛南」、2016.2-3

(2) 学会

国内、日本語教育学会、一般会員、1986～、評議員、2007～2013

日本語教育方法研究会、1997～、運営委員、2009～

専門日本語教育学会、一般会員、2005～

留学生教育学会、一般会員、2011～

国際、カナダ日本語教育振興会、一般会員、2015～

《 萌芽部門 》

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo

1. 略歴

1974年3月 早稲田大学第一文学部演劇専攻学士
1976年3月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻修士課程修了
1982年3月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻博士課程退学
1981年4月 早稲田大学文学部助手
1984年4月 早稲田大学文学部専任講師
1987年4月 早稲田大学文学部助教授
1992年4月 早稲田大学文学部教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

演劇学・舞踊学

c 概要と自己評価

研究の中心は、①鶴屋南北の研究、②歌舞伎の表現技法の研究、この二つである。①は、評伝という形で取り組んでいる。2016年1月に脱稿、2017年に白水社より出版の予定。②については、日本舞踊協会公演（2016年2月国立劇場大劇場）「文芸作品特集」の企画に参画、当日、舞台上で企画の趣旨説明を行った。

d 主要業績

(1) 啓蒙

- 古井戸秀夫、「松風物の系譜」、『NBF』45、2ページ、2014.1
- 古井戸秀夫、「流祖友五郎のこと」、『舞扇会』、2ページ、2014.7
- 古井戸秀夫、「隅田川物の系譜」、『NBF』48、2ページ、2015.7
- 古井戸秀夫、「名せりふと黙阿弥」、『歌舞伎座吉例顔見世大歌舞伎』、2015.11
- 古井戸秀夫、「日本舞踊略史」、『日本舞踊の照明』、4ページ、2015.12
- 古井戸秀夫、「海老蔵と歌舞伎十八番の復活」、『初春花形歌舞伎』、4ページ、2016.1

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、舞踊学会、常務理事、2014.4～2016.3

(2) 行政

日本芸術文化振興会、委員、2015.5～2016.3
大学評価・学位授与機構、委員、2015.5～2016.4

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本舞踊協会、理事・副会長、2014.4～2016.3
新日鉄住金文化財団、理事、2014.4～2016.3
ポーラ伝統文化財団、理事、2014.4～2016.3
日本舞踊集団21、理事・副会長、2014.4～2016.3
任意団体、日本舞踊花柳流、顧問相談役、2014.4～2016.3

教授 **松村 一登** MATSUMURA, Kazuto

<http://www.kmatsum.info/introd/index.html>

1. 略歴

1995年4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授
1996年11月 東京大学文学部附属文化交流研究施設教授
1997年8月 同 大学院人文社会系研究科附属文化交流施設教授
2004年4月 同 大学院人文社会系研究科言語動態学講座教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、ウラル諸語、ロシアの少数言語のテキストの電子化、コーパスを用いた文法研究

b 研究課題 c 概要と自己評価

科研費（基盤研究）のプロジェクトを中心に、次のような研究活動を行った。

- (1) エストニア・タルト大学のコーパス言語学研究者と言語データやツールの交換を含む研究交流を行った。
- (2) フィンランド・トゥルク大学のマリ語研究者と言語データやツールの交換を含む研究交流を行った。
- (3) エストニア国会図書館の協力を得て、20世紀初めのエストニア語の言語資料193万語を電子テキスト化し、言語コーパスとして利用可能なようにXML文書化した。また、このコーパスを含むエストニア語のコーパスを複数用いて、エストニア語の研究を行った。

(4)スウェーデン北部、トーネ川流域のフィンランド語系少数言語・メアンキエリ語のコミュニティーを訪問し、メアンキエリ語の言語資料を収集するとともに、学校などを訪問し、現地の言語事情を調査した。

d 主要業績

(1) 研究報告書

「電子化された言語資料と個別言語研究」、2009.3

(2) 学会発表

「エストニア語の動詞 *joudma* の多義性について」、日本ウラル学会 35 回研究大会、2008.7.5

「エストニア語の動詞 *pruukima* 「必要だ；用いる」の多義性—コーパスと辞書の記述に基づく考察—」、日本言語学会 137 回大会、2008.11.29

「エストニア語の他動詞文における「接格+動詞 *mast* 形」構文」、日本ウラル学会 36 回研究大会、2009.7.11

「コーパスから見える統語的变化—エストニア語の不定詞構文—」、日本言語学会 139 回大会、2009.11.28

(3) 受賞

「Maarjamaa Risti IV klassi teenetemark」、The 4th class Order of the Cross of Terra Mariana、エストニア共和国政府、2009.2.23

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本語学会、会計監査委員、2007～

Suomalais-Ugrilainen Seura [フィン・ウゴル学会]、一般会員、2007～

Suomalaisen Kirjallisuuden Seura [フィンランド文学協会]、一般会員、2007～

Societas Linguisticae Europae、一般会員、2007～

CONGRESSUS XI INTERNATIONALIS FENNO-UGRISTARUM」、国際委員、2008.1～

日本ウラル学会、理事、2008.1～2008.12

日本語学会、評議員、2009.4～

教授 **水島 司** MIZUSHIMA, Tsukasa

12 東洋史学 参照

《 創成部門 》

教授 下田 正弘 SHIMODA, Masahiro

15 インド哲学仏教学 参照

教授 ミュラー アルバート・チャールズ MULLER, Albert Charles

1. 略歴

1981年9月 ニューヨーク州立大学（ストーニブルック校）宗教学部専攻課程入学
1985年5月 同上 卒業
1984年9月 関西外国語大学入学
1985年5月 同上 修了
1986年9月 バージニア大学大学院博士課程入学（アジア宗教学専攻）
1987年5月 同上 ニューヨーク州立大学大学院転学のため退学
1987年9月 ニューヨーク州立大学大学院（ストーニブルック校）比較文学科博士課程入学
1993年8月 同上 修了（文学博士）
1994年4月 東洋学園大学助教授（～1997年3月）
1997年4月 同上 教授（～2008年8月）
2005年4月 東京大学教養学部・英語科・非常勤講師（～2007年3月）
2008年10月 東京大学人文社会系研究科・特任教授（～2013年9月）
2013年11月 東京大学人文社会系研究科・教授（～現在）

2. 主な研究活動

a 専門分野

東アジア仏教 韓国朝鮮仏教・儒教 唯識仏教 禅仏教 デジタル・ヒューマニティーズ

b 研究課題

- ①韓国新羅時代の仏教、特に影響力を持った学僧：元曉(617-686)、太賢(8c)などの思想と経典注釈。
- ②韓国朝鮮前期の禅仏教、特に禅僧：己和(1376-1433)の思想、活動、著作。
- ③中国唐・宋・明時代と韓国高麗・朝鮮時代における仏教・儒教・道教（いわゆる「三教」）の関係。
- ④東アジアの仏教・儒教・道教における「体用」(essence-function)の哲学的パラダイムの意味と役割。
- ⑤西洋的認識論、行動心理学、および仏教の見解に関する faith(信仰)、belief(信念)、viewpoint(見方)、opinion(意見)概念の多文化的比較。
- ⑥仏教専門語の漢・英インターネット辞典の編集。(www.buddhism-dict.net/ddb)
- ⑦儒教・道教・東アジア史の専門語の漢・英インターネット辞典の編集。(www.buddhism-dict.net/dealt)
- ⑧東アジア思想・歴史・言語に関する研究、電子化テキスト、論文、著書、翻訳、索引などのリソースウェブ・サイトの編集、管理。(www.acmuller.net)

c 概要と自己評価

My basic training in graduate school was in the study of Korean Buddhism, classical, medieval and premodern, which means that I have been throughout, reading texts written in kanbun. Since Korean Buddhism is a vastly understudied area (there are only a handful of specialists of Korean Buddhism Japan and the West), I have sought to make available for other scholars the works of Korean scholar monks who were influential in Korea, as well as East Asia. I began my career by studying the works of the Goryeo-Joseon monk Gihwa 己和 (1376-1433), but for the past 15 years, have focused mainly on the writings of the hugely influential scholar-monk Wonhyo 元曉 (617-686), along with the works of some of his influential contemporaries.

From the beginning of my career, I have also been deeply interested in the work of translating classical Buddhist works (as well as Confucian and Daoist works) into modern English, and so translation has become one of the major components of my career. Also, since I discovered early in my career that there were no good dictionaries available for this kind of translation work, I began to compile my own dictionaries, which I developed using the Internet. Nowadays, with the help of scores of collaborators, I maintain

two large dictionaries on the web (www.buddhism-dict.net) which are used by scholars and students throughout universities in the West. In turn, this work in development of web resources has led me into the field of Digital Humanities.

d 主要業績

(1) 著書

Muller, A. Charles. *Korea's Great Buddhist-Confucian Debate: The Treatises of Chŏng Tojŏn (Sambong) and Hamhŏ Tŭkt'ong (Kihwa)*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2015.

Muller, A. Charles (In collaboration with Ockbae Chun). *A Korean-English Dictionary of Buddhist Terms*. Seoul: Unjusa, 2014.

(2) 論文

Muller, A. Charles. "The Emergence of Essence-Function (*ti-yong*) 體用 Hermeneutics in the Sinification of Indic Buddhism: An Overview." *Critical Review of Buddhist Studies* 19 (2016): 111-152.

Muller, A. Charles. "Philosophical Aspects of the Goryeo-Joseon Confucian- Buddhist Confrontation: Focusing on the Works of Jeong Dojeon (Sambong) and Hamheo Deuktong (Gihwa)." In Anselm Min, ed. *Korean Religions in Relation*. 53–85. Albany, N.Y.: SUNY Press, 2016.

Muller, A. Charles. "Wonhyo." In John Powers, ed. *The Buddhist World*. 538–550. Oxford: Routledge, 2016.

Muller, A. Charles. "Wŏnhyo's Approach to Harmonization of the Mahayana Doctrines (Hwajaeng)." *Acta Koreana* 18 (1) (2015): 9-44.

Muller, A. Charles. "高麗-朝鮮における佛教-儒教間の対立の眼目: (鄭道傳(ジョンドウジョン 1342-1398)による『佛氏雜辨』と、己和(キファ) (涵虚得通(ハムホドウツクトン; 1376-1433)『顯正論』の立場に関する比較)." *文化交流研究* 28 (1) (2015): 9-21.

Muller, A. Charles. "A Pivotal Text for the Definition of the Two Hindrances in East Asia: Huiyuan's "Erzhang yi" Chapter." In *A Distant Mirror: Articulating Indic Ideas in Sixth and Seventh Century Chinese Buddhism*. 217-271. Hamburg: Hamburg University Press, 2014.

(3) 学会発表

Muller, A. Charles. "The Role of Essence-Function (*che-yong*) 體用 Hermeneutics in Korean Philosophy: Historical Background and Toegye's 'Critique on the Position that the Mind Does not have Essence and Function.'" The American Philosophical Association Pacific Division, 90th Annual Meeting, San Francisco, March 31, 2016

Muller, A. Charles. "Translating the Buddhist Canon in the 21st Century: Remarks on the Current Status, and How We Can Do Better." USC Symposium on Translating Buddhist Texts: Reflections on Theory and Method, March 26, 2016.

Muller, A. Charles. "The Emergence of Essence-Function (*ti-yong*) 體用 Hermeneutics in the Sinification of Indic Buddhism: Early Chinese Examples." Tokyo Buddhist Discussion Group, February 13, 2016.

Muller, A. Charles. "Korea's Great Buddhist-Confucian Debate." Korean Studies Authors Special Lecture Series. Kyujanggak, Seoul National University. January 27, 2016.

Muller, A. Charles. "The Role of Essence-Function 體用 Hermeneutics in the Sinification of Indic Buddhism: A Propaedeutic Investigation." University of Tokyo/Geumgang University Seminar: Developments of Madhyamaka and Yogacara in East Asia (東京大学・金剛大学校合同学術セミナー テーマ 「中観・唯識の東アジア的展開」). January 18, 2016.

Muller, A. Charles. "A Comparative Philosophical Approach to a Universal Problem: Views and Beliefs in Epistemology, Psychology, and Buddhism." 2015 Annual Meeting of the American Academy of Religion, Nov. 21, 2015 (Buddhist Philosophy Group session on "The Problems of Views and Beliefs in Buddhism").

Muller, A. Charles. "Right View (*samyag-dṛṣṭi*) and Correct Faith (*śraddhā*): Correspondence, Distinction, and Re-Merging in East Asian Mahāyāna." Toho Gakkai, Nov. 6, 2015 (Panel on Buddhism and Cognition).

Muller, A. Charles. "北米の比較思想的仏教研究の特徴一見(視点)という仏教語の扱いを手がかりとしてグローバル文学の可能性と課題." 日本学術会議講堂. Tokyo, Dec. 6, 2014

Muller, A. Charles. "Wonhyo and the *Samdhinirmocana-sūtra*." Annual Meeting of the American Academy of Religion. San Diego, Nov. 21, 2014.

Muller, A. Charles. "Philosophical Parameters of the Korean Confucian-Buddhist Debates of the Goryeo and Joseon: Focusing on the Works of Jeong Dojeon (鄭道傳; 1342-1398) (Sambong) and Hamheo Deuktong (Gihwa) 己和 (1376-1433)." The Spirit of Korean Philosophy: Six Debates and their Significance for Asian and Western Philosophy: The Inaugural NAKPA Conference Sponsored by Academy of Korean Studies, Korea. University of Nebraska at Omaha, October 22-24, 2014.

Muller, A. Charles. "The Value of Wonhyo's Thought for Contemporary Buddhist Studies." 8th Keimyung International Conference on Korean Studies. Keimyung University, Daegu, South Korea. May 28, 2014.

Muller, A. Charles. "The Making of an "Outstanding" Translation: Obstacles and Solutions." 59th International Conference of Eastern Studies (Tōhō Gakkai). Tokyo, May 24, 2014

Muller, A. Charles. "高麗-朝鮮における佛教-儒教間の対立の眼目: (鄭道傳(ジョンドウジョン 1342-1398)による『佛氏雜辨』と、己和(キファ) (涵虚得通(ハムホドウツクトン; 1376-1433)『顯正論』の立場に關する比較)." Presentation to Faculty Members of University of Tokyo Faculty of Humanities. May 8, 2014

3. 主な社会活動

(1) Web Resource Development

Charles Muller 編集 Digital Dictionary of Buddhism (電子佛教辭典 www.buddhism-dict.net/ddb) 範囲の拡大: 2014/5 に 62,553 語彙→2016/5: 65,659 語彙

Charles Muller 編集 CJKV-E Dictionary (漢日韓越-英辞典 www.buddhism-dict.net/dealt) 範囲の拡大: 2014/5 に 37,814 語彙→2016/5: 47,680 語彙

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki
9 b 日本語日本文学 (国文学) 参照

教授 **武川 正吾** TAKEGAWA, Shogo
2 5 社会学 参照

教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
2 7 文化資源学 《文化資源学専門分野》参照

准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato
0 1 言語学 参照

准教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki
1 0 日本史学 参照

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
0 3 美術史学 参照

30 死生学・応用倫理センター

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru (センター長)

06 宗教学宗教史学 参照

教授 榊原 哲也 SAKAKIBARA, Tetsuya

04 哲学 参照

准教授 堀江 宗正 HORIE, Norichika

1. 略歴

1992年3月 東京大学文学部心理学専修課程卒業
1992年4月 東京大学文学部研究生(～1993年3月)
1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1995年3月 同修了(修士(文学)取得)
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程進学
2000年3月 同単位取得退学
2001年4月 聖心女子大学文学部専任講師
2003年4月 聖心女子大学大学院文学研究科専任講師兼任
2007年4月 聖心女子大学文学部准教授、聖心女子大学大学院文学研究科准教授兼任
2008年9月 博士(文学)取得(東京大学大学院人文社会系研究科)
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究

b 研究課題

日本人の死生観、宗教心理学の学説・理論の研究、現代日本人の個人主義的スピリチュアリティ、未来に関する倫理

c 概要と自己評価

死生学におけるこれまでの学際的研究の蓄積を踏まえて、医療関係者や心理・福祉・介護などの視点と、人文社会系の学問の視点の双方を取り入れた死生学の構築を目指している。現在の死生学は、医療・福祉・介護の視点にやや偏りがちで、歴史学や社会学や宗教学の視点を踏まえた死生観の研究を充実させる必要があると考える。しかし、この人文社会系の死生学も個別研究は充実しているものの、体系的に関連づけられているとは言えない。基礎的とも言える現代日本人の死生観の包括的な量的研究すら、決定的なものがない状況である。このような状況を踏まえて、現代日本人の死生観の量的調査に着手し、成果を発表し始めている。とりわけ、日本社会において死と生に関わる重要テーマである自殺と死生観の関連について研究成果を発表することができた。

また、震災後の宗教学・死生学は、支援活動をしている宗教者同士の関係性構築のために一定の役割を果たしたと言えるが、被災地や被災者そのもののリアリティに迫るような調査研究については、調査被害を招くなどの理由で、十分に進んでいるとは言えない。2013年度から2015年度には、東北大学実践宗教学講座を中心とする科学研究費助成プロジェクト「東北被災地域における心霊体験の語りと宗教者による対応に関する宗教学的研究」に加わり、被災地での調査研究をおこなった。今後はその成果を広く問う予定である。また、震災と宗教の関係を広く、また理論的観点からも深く考察した論考を発表することができた。

d 主要業績

(1) 論文

- 堀江宗正、「日本人の死生観をどうとらえるか——量的調査を踏まえて」、東京大学学術機関リポジトリ (2014年4月)、<<http://hdl.handle.net/2261/55822>>、1-12頁
- 堀江宗正、「現代日本の魔女たち」、『季刊民族学』149号 (2014年7月)、15-23頁
- 堀江宗正、“The Contemporary View of Reincarnation in Japan: Narratives of the Reincarnating Self,” Christopher Harding, Iwata Fumiaki, and Yoshinaga Shin'ichi (eds.), *Religion and Psychotherapy in Modern Japan* (Abingdon: Routledge, September 2014), pp. 204-233.
- 堀江宗正、「霊といのち——現代日本仏教における霊魂観と生命主義」、『死生学・応用倫理研究』第20号 (2015年3月)、195-235頁
- 島藺進・堀江宗正、「宗教は自殺予防に資するのか——日本人と自殺」、『精神科治療学』第30巻3号 (2015年3月)、387-392頁
- 堀江宗正、「サブカルチャーの魔術師たち——宗教学的知識の消費と共有」、江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛上巻』(リトン、2015年3月)、417-466頁
- 堀江宗正、「震災と宗教——復興世俗主義の台頭」、似田貝香門・吉原直樹編『震災と市民2——支援とケア』(東京大学出版会、2015年8月)、215-233頁
- 堀江宗正、「戦後70年の宗教をめぐる動き」、『宗教と現代がわかる本2016』(平凡社、2016年3月)、122-7頁
- 山本功・堀江宗正、「自殺許容に関する調査報告——一般的信頼、宗教観・死生観との関係」、『死生学・応用倫理研究』21号 (2015年3月)、34-82頁

(2) 書評

- 堀江宗正、松本皓一『日本の近代と宗教的人格』『宗教的人格と教育者』(いずれも秋山書店、2014)、『週刊読書人』3055号 (2014年9月5日)、6頁

(3) 学会発表

- 堀江宗正、「日本人の死生観をどうとらえるか——量的調査を踏まえて」、臨床死生学・倫理学研究会発表 (東京大学、2014年4月16日)、東京大学学術機関リポジトリ<<http://hdl.handle.net/2261/55822>>
- 堀江宗正、「霊といのち——日本人における死後観の相克を現代仏教にみる」、上廣死生学・応用倫理講座『医療・介護従事者のための死生学——2014年度夏季セミナー』(東京大学、2014年8月3日)
- 堀江宗正、「被災地における霊的体験と継続する絆——身内の霊と未知の霊」、日本宗教学会発表 (同志社大学、2014年9月13日)、『宗教研究』第88巻別冊、156-7頁
- 堀江宗正、「アニメ、アニムスから、アニメへ」、早稲田大学エクステンションセンター『ユング心理学と現代』(2014年11月22日、29日、12月6日)、<https://www.academia.edu/9755469/アニメ_アニムスから_アニメへ>
- 堀江宗正、「死に関する表現——日本語と外国語の語彙の比較から」、上廣死生学・応用倫理講座『医療・介護従事者のための死生学——2015年度夏季セミナー』(東京大学、2015年8月1日)
- 堀江宗正、「Wicca Today in Japan: Aspects of Culture, Gender, and the Media」、International Association for the History of Religion (University of Erfurt, 2015年8月25日)、<<http://www.iahr2015.org/iahr/2020.html>>
- 堀江宗正、「Continuing bonds in the disaster area: Locating the destinations of spirits」、International Association for the History of Religion (University of Erfurt, 2015年8月25日)、<<http://www.iahr2015.org/iahr/3061.html>>
- 堀江宗正、「New Trends in the Study of Japanese Religions: Political aspects of religion, religious aspects of politics」、International Association for the History of Religion (University of Erfurt, 2015年8月27日)、<<http://www.iahr2015.org/iahr/3172.html>>
- 堀江宗正、「信仰者の語る被災地の霊的体験——東京近辺の諸教団の事例から」、日本宗教学会発表 (創価大学、2015年9月5日)、『宗教研究』第89巻別冊、333-4頁
- 堀江宗正、「経済優先から〈いのち〉の連帯へ——原発事故を契機として」、翰林大学生死学研究所国際シンポジウム、2016年3月12日

(4) 啓蒙

- 堀江宗正、「アンケート 東大教師が新入生にすすめる本」、『UP』498 (東京大学出版会、2014年4月)、24頁。以下に再録。東京大学出版会『UP』編集部『東大教師が新入生にすすめる本 2009-2015』(東京大学出版会、2015年3月)、223-4頁
- 堀江宗正、「「死生学」から見えてくること」、『ちいさい・おおきい・よわい・つよい』、105号 (2015年4月)、78-85頁。編集部のまとめによる。

(5) 翻訳

堀江宗正・鷹田佳典訳、トニー・ウォルター「死にゆくこと、東と西と」『死生学・応用倫理研究』21号（2016年3月）、8-33頁

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

2015年9月から2016年7月まで高野山大学大学院にて非常勤講師

(2) 学会

日本宗教学会、「宗教と社会」学会、日本社会学会、日本生命倫理学会、日仏哲学会

3 1 北海文化研究常呂実習施設

准教授 熊木 俊朗 KUMAKI, Toshiaki

1. 略歴

1990年3月	北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業
1990年4月	旭化成工業株式会社入社
1994年3月	明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科考古学専門分野修士課程修了
1996年4月	東京大学文学部助手（附属常呂実習施設勤務）
2004年4月	北海道常呂町教育委員会社会教育課とこ遺跡の森主幹
2005年2月	博士（文学）学位取得 東京大学大学院人文社会系研究科
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

北東アジア考古学

b 研究課題

北海道を中心とした北東アジア地域の考古学的研究を専門とするが、特に近年は以下の2点を主要な課題として、北海道やロシア極東地域でフィールドワークを中心とした調査研究を行っている。

- (1) アイヌ文化成立過程の考古学的研究
- (2) 日本列島とアジア大陸の「北回りの交流」に関する研究

c 概要と自己評価

上記研究課題について、2014年度～2015年度には以下の研究をおこなった。

1) 北見市大島遺跡群の発掘調査

北見市大島遺跡群は、擦文文化の竪穴住居等からなる集落遺跡である。アイヌ文化の直接の母体になったと考えられる擦文文化の終末過程や、擦文文化とオホーツク文化の関係について解明するため、北見市大島遺跡群（大島2遺跡）の発掘調査を実施した。この調査は2010年度から継続して実施しており、2013年度までに2軒の竪穴住居跡を完掘し、その年度分までの調査報告書を2015年度末に刊行している。2014年度から2015年度にかけては新たに2軒の竪穴住居跡の調査を行い、竪穴住居跡の構造や出土遺物、住居の廃棄儀礼、オホーツク文化との関連等について新知見を得た。本遺跡群については、2016年度以降も調査を継続する予定である。

2) ロシア・サハリン州での発掘調査

ロシア連邦サハリン州の先史時代遺跡について、2014年度にはアド・ティモボ遺跡群、2015年度にはゴルノザボーツク2遺跡で発掘調査を実施し、ロシア極東の新石器文化編年や、ロシア極東と北海道との関連について新知見を得た。

3) トコロチャシ跡遺跡群の史跡整備事業に伴う発掘調査報告書の刊行

東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設と北見市教育委員会が共同し、1995年度から2009年度まで実施した北見市トコロチャシ跡遺跡群の史跡整備事業に伴う発掘調査について、全体の調査成果を総括して2014年度に調査報告書を刊行した。この調査は大学と地域が連携しておこなったもので、史跡の内容や性格を考古学的に解明すると同時に、文化財の保護と活用という地域の課題に対しても取り組み成果をあげた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、菊池徹夫・宇田川洋編、『オホーツク海沿岸の遺跡とアイヌ文化』、北海道出版企画センター、2014.7

編著、熊木俊朗編、『トコロチャシ跡遺跡群（史跡常呂遺跡）整備に伴う発掘調査報告書』、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設・北見市教育委員会、2015.3

共著、青木豊・鷹野光行編、『地域を活かす遺跡と博物館』、同成社、2015.9

編著、熊木俊朗編、『擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動 ―大島2遺跡の研究（1）―』、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設、2016.3

単著、熊木俊朗、『ところ文庫 32 トコロチャシ跡遺跡群の発掘』、常呂町郷土研究同好会、2016.3

(2) 論文

榊田朋広・熊木俊朗、「特集 2013年の考古学会の動向 北海道 続縄文・擦文・オホーツク以降」、考古学ジャーナル、No.656、142-145頁、2014.5

熊木俊朗、「オホーツク文化と周辺諸文化の交流」、『歴史と地理』、675、1-14頁、2014.6

福田正宏・熊木俊朗・國木田大・大貫静夫、「トコロ 14 類土器とトコロ 13 類土器の再検討」、『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究』、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・東京大学大学院自分社会系研究科附属常呂実習施設、132-148頁、2015.3

福田正宏・グリシェンコ,V.・ワシレフスキー,A.・大貫静夫・熊木俊朗ほか9名、「サハリン新石器時代前期スラブナヤ5遺跡の発掘調査報告」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、29、121-146頁、2015.3

熊木俊朗、「オホーツク文化とアイヌ文化」、『季刊考古学』、133、80-81頁、2015.11

(3) 啓蒙

熊木俊朗、「熊骨偶」、設楽博己編、『十二支になった動物たちの考古学』、新泉社、口絵15

熊木俊朗、「オホーツク海岸の冬ごもり」から春さりを来れば、『史学雑誌』、125-3、36-38頁、2016.3

(4) 予稿・会議録

国内会議、福田正宏・グリシェンコ,V.・ワシレフスキー,A.・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗ほか8名、「サハリン中部アド・ティモボ遺跡群の考古学的調査(2014年度)」、第16回北アジア調査研究報告会、東京大学、2015.2.21

国内会議、熊木俊朗、「続縄文後半期・オホーツク期・擦文期における「サハリン・ルート」の交流」、北海道考古学会2015年度研究大会「サハリン・千島ルート」再考、北海道大学、2015.5.9

国内会議、熊木俊朗・夏木大吾・中村雄紀、「北見市 大島2遺跡」、北海道考古学会2015年度遺跡報告会、北海道大学、2015.12.12

国内会議、熊木俊朗、「擦文文化堅穴住居跡の構造と廃絶儀礼について」、第17回北アジア調査研究報告会、石川県立歴史博物館、2016.2.28

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本赤十字北海道看護大学、「北海道の自然と文化」、2014.6、2015.6

その他、北海道立青少年体験活動支援ネイパル北見、「歴史をさかのぼってみよう！ 講座『トコロヒストリークラブ』」、2014.11

セミナー、北見文化連盟、「オホーツク文化を発掘する ―遺跡の調査でわかった古代オホーツク人の暮らし―」、2015.4

その他、北海道佐呂間高校、「大学で考古学を学ぶ」、2015.10

(2) 学会

日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員(2014.4~2016.3)

(3) 行政

北見市市史編集委員会委員(2014.4~2016.3)

北見市常呂自治区社会教育推進協議会委員(2014.4~2016.3)

北見市文化財審議会委員(2014.4~2016.3)

北見市史跡整備委員会委員(2014.4~2016.3)

北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見運営協力委員会委員(2014.10~2016.3)

斜里町チャシコツ岬上遺跡調査検討委員会委員(2015.10~2016.3)

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)

常呂川流域文化遺産活用推進事業実行委員会、委員長(2014.4~2016.3)

3 2 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

特任教授 清水 哲郎 SHIMIZU, Tetsuro

1. 略歴

1969年4月 東京大学理学部天文学科卒業
1972年3月 東京都立大学人文学部人文学科（哲学専攻）卒業
1974年3月 同大学大学院人文科学研究科修士課程修了
1977年3月 同大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学
1977年6月～80年8月 東京都立大学人文学部倫理学講座助手
1980年8月～82年8月 北海道大学文学部西洋哲学第二講座講師
1982年8月～93年3月 同 助教授
1990年2月 文学博士（東京都立大学）
（1990年10月～91年6月文部省在外研究員（英国ケンブリッジ大学））
1993年4月～96年3月 東北大学文学部助教授（西洋哲学史第一講座）
1996年4月～2000年3月 同 教授
2000年4月～2007年3月 東北大学大学院文学研究科教授（哲学講座）
（2004年4月～2006年3月 東北大学教育研究評議会評議員、文学研究科副研究科長）
2007年4月～2012年3月 東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター 上廣死生学講座
特任教授
2012年4月～現在 同大学院同研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学・応用倫理講座
特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、臨床倫理学、臨床死生学、西欧中世思想

b 研究課題

- ①医療現場に臨む哲学・臨床倫理学から臨床死生学へ
- ②臨床現場から人間における倫理の理論へ
- ③西欧中世の言語哲学・キリスト教思想

c 概要と自己評価

①医療現場に臨む哲学・臨床倫理学から臨床死生学へ 医療の現場への哲学的アプローチから出発し、その思索を医療の質の向上につなげるべく、研究と実践が一体となった活動を行っている。従来的人文系の研究者による生命倫理学研究は現場と結びつかずに終わっていたのに対し、80年代後半から医療現場の医師、看護者等と対話しつつ哲学するという新しい試みをして来ており、その線上で、医療者が患者・家族とコミュニケーションを通して治療方針の決定等に至るプロセスを、現実にも有効であり、理論的にも適切に基礎付けられたものとして整えようとする臨床倫理学研究に取り組んでいる。最近では、介護の現場にも活動領域を広げている。この面の活動を臨床倫理プロジェクトとして主宰し、臨床現場の医療・介護従事者と協働しながら、ケアの質の向上を目指している。

この線上で、臨床現場において死生をどう理解し、その理解を医療・介護のケア実践にどう活かして行くかという臨床死生学の課題にも向かっている。最近では、高齢者が経口摂取できなくなった時の人工的水分・栄養補給の導入について、日本老年医学会の要請により意思決定プロセスについてのガイドライン作成に取り組んだが、ここから本人・家族の本人らしい選択を支援する意思決定プロセスノートの開発（2013年6月書籍刊行）、さらに現在から人生の最期に到るプロセスを見通して心積もりをすることを支援する「心積りノート」の開発に取り組み、第一版を冊子体およびeブックとして公開した。

〔自己評価〕臨床現場で有効な理論とそれに関わるツールの開発は、日本の現場で一定の支持を得、浸透しつつあり、人文・社会科学の社会への貢献として評価できる実践的研究であると考えている。『心積りノート』は高齢者の人生の終わりをどう生きるかという日本における大問題に取り組んだものであり、社会的な影響を今後発揮するようになるのでは、と期待している。

②臨床現場から人間における倫理の理論へ 前項の活動を通して、臨床現場のケア従事者や一般市民にどのようにして《倫理》ということを実践に有効な仕方でもらえるかを検討し続けてきた。その思索を通して、高邁な倫理学理論ではないが、現実の人間関係を理解し、どのように対応するかを考える際に有効な倫理の理解の仕方についての実践的理論の構築という活動に行き着いた。これは、《現場から理論へ》という方向の歩みであり、倫理を、人間関係において見出される、《皆一緒》と《人それぞれ》という、他者に対する一見両立し難い二つの姿勢が並存していて、私たちはその二つの姿勢を相手との距離に応じた割合でブレンドしつつ対応を選ぶという構造を持っているとするものである。これを「同の倫理—異の倫理」として展開している。

〔自己評価〕これについては、これまでいろいろところで部分的に発表しており、臨床のケア従事者や一般市民に「自分たちが感じている問題に対する説明として、腑に落ちる」と概して好評であるが、体系的な発表は未だであり、それが今後の課題である。

③西欧中世の言語哲学・キリスト教思想 西欧中世における言語と論理の哲学をテーマとし、当時の哲学者たちが古代ギリシア哲学とキリスト教思想の伝統を受け継ぎ、この二つの絡み合いにおいて西欧中世特有の哲学的思索を展開していく状況を明らかにしつつ、現代の私たちの哲学がそこから学び得るものを見出そうとしている。アンセルムス、アベラルドゥス、オッカムを主要な研究対象としているが、さらにキリスト教思想伝統の源流であるパウロ思想等にも取り組む。この系統の研究はさらに死生学領域にもつながるものと今後なっていくであろう。

〔自己評価〕本研究テーマについては、上記①と②に多くの時間を割いた結果、この二年間では見るべき成果をあげていない。今後、再度やり残した課題に取り組みたいと考えている。

d 主要業績

(1) 著書

清水哲郎、『教育・事例検討・研究に役立つ 看護倫理 実践事例 46』,監修・執筆,日経研出版,全446頁,2014.6

執筆担当:(1)看護倫理を考える視点(8-30頁),(2)倫理的ジレンマの構造とジレンマへの対応(31-39頁),(4)臨床倫理検討シートを用いた事例検討の進め方(67-77頁)

公益財団法人 医療科学研究所 監修、『人生の最終章を考える:その人らしく生き抜くための提言』,(株)法研,2015年10月,全325頁,執筆部分:「本人・家族の意思決定を支える—治療方針選択から将来に向けての心積りまで—」,単著,60-84頁

清水哲郎、『上手に老い、最期まで自分らしく生きるための心積りノート』,臨床倫理プロジェクト《高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成》チーム,2015年11月,全58頁

(2) 論文その他

清水哲郎,人生の最終段階のケアと死生学,作業療法ジャーナル 48-4: 303-308,2014.4

清水哲郎,状況に向かう姿勢と状況把握—アリストテレス的行動分析から臨床現場へ—,『アリストテレス月報』5: 1-4,岩波書店,2014.7

清水哲郎,高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン,地域ケアリング 16-8:18-22,2014.7

清水哲郎,慢性期医療・高齢者医療,日本消化器病学会監修『消化器病診療 第2版』465-467,2014.10

清水哲郎,倫理一般と臨床倫理,聖マリア学院大学紀要 6: 3-9,2015.3

清水哲郎,最期まで自分らしく生きるために—臨床死生学の核心—仙台白百合大学カトリック研究所『カトリック研究所論集』19:1-34,2015.3

清水哲郎,エンドオブライフに向かう小児と共に歩む—意思決定支援の臨床倫理—,単著,小児看護 38-6(通巻479): 672-679,2015.6

清水哲郎,本人・家族の意思決定を支える—治療方針選択から将来に向けての心積りまで—,単著,医療と社会 25-1: 35-48,2015.6

清水哲郎,事前指示を人生の最終段階に関する意思決定プロセスに活かすために,単著,日本老年医学会雑誌 52-3: 224-232,2015.7

清水哲郎,物語られるいのちと生物学的生命 再考,哲学雑誌 130(802): 1-24,2015.10

清水哲郎,高齢を生きるための複数の視点(特集 高齢者の透折導入を再考する),臨床透折 32-1: 7-14,2016.1

清水哲郎,日本における臨床死生学と臨床倫理学の交叉,死生学・応用倫理研究 21: 119-147,2016.3

(3) 研究費の獲得状況

日本学術振興会科学研究費 基盤研究(A)「ケア現場の意思決定プロセスを支援する臨床倫理検討システムの展開と有効性の検証」(2011~14年度),研究代表者

日本学術振興会科学研究費 基盤研究(A)「臨床倫理検討システムの哲学的見直しと臨床現場・教育現場における展開」(2015~18年度),研究代表者

独立行政法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター (RISTEX) 研究開発領域「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発プロジェクト「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」, 2012年度下半期～2015年度上半期, 研究代表者

厚生労働省科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業「人生の最終段階における医療にかかる相談員の研修プログラム案を作成する研究」課題番号: H25-特別-指定-036 (研究代表: 鳥羽研二/国立長寿医療研究センター病院長) (2013), 研究分担者

(4) 学会講演・国際会議発表など

特別講演「認知症の End-of-Life Care と臨床倫理」, 第 29 回日本老年精神医学会, 東京, 2014.6.12

シンポジスト提題「End-of-Life Care に携わる者の姿勢」, 日本老年歯科医学会第 25 回学術大会 シンポジウム 2「終末期高齢者における歯科の対応」, 福岡, 2014.6.14

特別講演「高齢者と家族の意思決定を支える—最期まで自分らしく生きるために—」, 老年看護学会第 19 回学術集会, 名古屋, 2014.6.28

特別講演「臨床倫理エッセンシャルズ—慢性疾患患者・家族を支えるプロセス—」, 日本慢性看護学会第 8 回学術集会, 2014.7.6

シンポジスト提題 “The Ethics of Unity and Difference: With special reference to ethical principles in healthcare”, Kyoto University - Inamori Foundation Joint Kyoto Prize Symposium, 京都, 2014.7.13

特別講演「臨床倫理～超高齢化を見越した意思決定支援～」, 第 11 回日本循環器看護学会学術集会, 東京, 2014.10.4

特別講演「それぞれの自分らしい人生を支える歯科医療—死生学と臨床倫理の視点から—」, 第 31 回日本障害者歯科学会学術大会, 仙台, 2014.10.15

シンポジスト提題「人生と生命 [物語られるいのちと生物学的生命] 再考」, 哲学会第 53 回研究発表会, シンポジウム「いのち再考—つくること、はぐくむこと、たもつこと」, 東京, 2014.11.2

シンポジスト提題「人生にとっての最善を目指す意思決定プロセス—臨床倫理の視点から—」, 第 9 回 医療の質・安全学会学術集会 シンポジウム 12「人生の最終段階における医療体制整備事業の推進」, 千葉, 2014.11.23

シンポジスト提題「用語の整理と基本的な考え方—臨床倫理の視点から—」, 第 20 回日本臨床死生学会大会 シンポジウム I 「安楽死・尊厳死の今」, 川崎, 2014.11.29

シンポジスト提題「日本における臨床死生学と臨床倫理学の交叉」, 東京大学死生学・応用倫理センター, 翰林大学生死学研究所共催 国際シンポジウム「東アジアの死生学へ」, 東京, 2014.12.20

認知症ケア学会関東 2 地域部会 I 講演「認知症高齢者の End-of-Life Care と臨床倫理」(日本消防会館(ニッショーホール) 虎の門), 2014.12.21

報告「日本における死の理解と end-of-life care」, 翰林大学生死学研究所 第 4 回国際学術大会, 韓国春川市, 2015.2.25
パネリスト提題「本人・家族をめぐる臨床倫理」, 日本小児科学会倫理委員会「第 9 回倫理委員会公開フォーラム」第 II 部 小児の看取り医療, 東京, 2015.3.8

シンポジスト提題, 日本文化にあった臨床倫理システムを目指して, 日本生命倫理学会臨床倫理部会主催第一回臨床倫理公開シンポジウム『これからの臨床倫理』, 東北大学東京サテライト(東京都), 2015.10.10

パネリスト提題, 「臨床倫理からみた意思決定支援 臨床倫理からみた意思決定支援 ～E-FIELD による相談員研修のコンセプト～」, 第 1 回 患者・家族メンタル支援学会学術総会ワークショップ「人生の最終段階医療における多職種チームによる患者・家族のメンタル支援 ～特に倫理判断支援について～」, 東京大学本郷キャンパス(東京都), 2015.10.25

基調講演, 「自分らしい人生」を支援する—診断時からエンドオブライフ・ケアまで, 第 53 回癌治療学会学術集会 シンポジウム「“がんと生きる”をサポート—終末期を生きる」, 京都(国立京都国際会館), 2015.10.29

シンポジスト提題, 《分かり合える》と《分かり合えない》のはざまで—または《皆一緒》にして《人それぞれ》である私たち, 第 34 回医学哲学・倫理学会大会シンポジウム「私の病い、あなたの病い～病いの”当事者性”を考える」, 新潟大学, 2015.11.8

シンポジスト提題, ACP の方向性と《心積りノート》の開発, 第 27 回日本生命倫理学会年次大会 公開シンポジウム XI 「ACP の理念と実践」, 千葉(千葉大学), 2015.11.29

3. 主な社会活動

(1) 学術団体役員・各種委員等

日本学術会議連携会員

日本哲学系諸学会連合事務局長(～2015年3月)

日本哲学会理事（～2015年5月）
日本生命倫理学会理事
日本臨床死生学会常任理事
東北大学利益相反アドバイザーボード 委員長
日本緩和医療学会 鎮静ガイドライン作成専門委員
日本老年医学会 代議員
日本スピリチュアル・ケア学会 理事、倫理要綱担当

(2) 他大学への出講

東京大学大学院医学系研究科 看護学特論 (1コマ×1回) 看護倫理 2015.4.23
東北大学歯学部 非常勤講師 (2コマ×1回) , 医の倫理・社会の倫理 2014.5.1, 2015.4.30
宮城大学大学院看護学研究科非常勤講師 (2コマ×4回) 看護倫理 2014.5.13, 20, 27; 6.3, 2015.5.12; 5.19; 5.26; 6.2
東京大学ジェロントロジー部局間・・・教育プログラム (1コマ) 2015.7.8
慶応大学 看護 授業 (2コマ×1回) 2014.5.23, 2015.7.9
島根大学大学院医学研究科 (看護学) 非常勤講師 (集中)、看護倫理 2014.7.3, 2015.7.23
東京大学 GLAFS 高齢社会総合研究学特論 VIII (高齢社会の人文・社会科学) 2015.1.21, 2015.10.8
慈恵会医科大学 医学生・看護学生 倫理研修 (1日) 2014.10.25, 2015.10.31

(3) 講演、研修会講師等

講師, 東京大学 死生学・応用倫理センター 医療・介護従事者のための死生学春季セミナー, 2014.4.20
講師, 京都府看護協会 専任教員養成講習会, 京都, 2014.4.25; 5.9
講師, がん分野における臨床倫理セミナー, 東北大学大学院医学系研究科緩和ケア看護学, 仙台, 2014.5.10
講演「臨床倫理の考え方と実際」, 呉医療センター講演, 呉市, 2014.5.16
eラーニング講師, 「臨床倫理の考え方と実際」, 学研, 東京, 2014.6.18(収録)
講演「End-of-Life Care の臨床倫理」, 高岡市民病院, 高岡市, 2014.6.26
講義「臨床における倫理の基礎」, 平成 26 年度 人生の最終段階における医療にかかる相談員の研修会 (先行研修会), 国立長寿医療研究センター, 大府市, 2014.6.28
講演「自分らしいケアの選択—食べられなくなったらどうする?—」, 福井市介護サービス事業者連絡会総会, 福井市, 2014.7.12
講師「臨床倫理」, 大阪府看護協会 看護管理者ファースト研修, 大阪市, 2014.7.18; 10.3; 2015.1.16
講演「最期まで自分らしく生きるために—臨床死生学の核心—」, 仙台白百合大学 第 27 回公開講座, 仙台市, 2014.7.19
講師, 日総研「看護倫理 実践事例 46」出版記念講演, 名古屋, 2014.7.25; 東京, 2014.8.2; 福岡, 2014.8.8
講師, 2014 年度ソーシャルワーク スキルアップ研修「ソーシャルワークにおける臨床倫理」, 日本医療社会福祉協会, 大阪市, 2014.7.27
講師「臨床死生学コア講義」, 東京大学 死生学・応用倫理センター 医療・介護従事者のための死生学夏季セミナー, 東京, 2014.8.3
講演「エンドオブライフ・ケアの臨床倫理」, 磐田市立総合病院, 静岡県, 2014.8.21
講義「臨床における倫理の基礎」, 厚生労働省 平成 26 年度人生の最終段階における医療体制整備事業「人生の最終段階における医療にかかる相談員の研修会」, 国立長寿医療研究センター, 東京, 2014.8.22
講師, 臨床倫理ファシリテーター養成, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2014.8.23
講師, 臨床倫理セミナー in さっぽろ, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2014.8.24
シンポジウム座長・総括発言「本人の人生にとっての最善を目指して」, 第 46 回岩手県立病院医学会総会シンポジウム〈高齢者の意思決定を支える: 今、医療にできること〉, 二戸市, 2014.8.31
講師, 都立駒込病院 看護師対象臨床倫理セミナー, 東京, 2014.9.2
講演「高齢者の意思決定支援」, 京都看護協会研修会, 京都市, 2014.9.11
講師, 広島 MSW セミナー「臨床倫理 理論と事例からの学び」, 広島市民病院 (会場), 広島市, 2014.9.27
講師, 第 2 回臨床倫理セミナー in 砺波, 市立砺波総合病院 (会場), 砺波市, 2014.9.28
講師, 北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プラン 臨床倫理セミナー in 金沢, 金沢市, 2014.10.4
講師, 第 3 回北陸地区臨床倫理事例研究会, 金沢大学病院 (会場), 金沢市, 2014.10.5
東京都研修 2014.10.8
講演「臨床倫理の核心」, 岩手県立中部病院, 北上市, 2014.10.9

講演「その人らしい治療・ケアの選択のために 意思決定プロセスにおけるいのちの評価—臨床倫理の視点から—」,
伊勢赤十字病院 研修センター, 伊勢市, 2014.10.10

講演「臨床現場のコミュニケーション：臨床倫理の視点から」, 東札幌病院 札幌, 2014.10.23

講演「生死にかかわる意思決定の臨床倫理」, 徳島県立中央病院 徳島市, 2014.11.7

講師「ジレンマの理解と対応：臨床倫理の考え方」, 大阪医療ソーシャルワーカー協会 平成26年度医療社会事業従
事者講習会, 大阪市, 2014.11.14

講師, 臨床倫理セミナー, 癌研有明病院看護部, 東京, 2014.11.29

シンポジウム座長, 医療フォーラム 2014, 国立がん研究センター・癌研有明病院・東大死生学応用倫理センター 共
催, 東京, 2014.12.13

講師, 第8回臨床倫理事例研究会, 臨床倫理事例研究会, 大阪, 2015.1.10-11

講師, 第3回愛媛地区臨床倫理事例研究会, 松山, 2015.1.24

講師, 臨床倫理セミナー12 in さっぽろ, 臨床倫理プロジェクト & 東札幌病院臨床倫理委員会 共催, 札幌,
2015.1.31

シンポジスト提題「End-of-Life Care の臨床倫理」, シンポジウム「エンドオブライフ・ケア：最期のプロセスの臨床
倫理」, 東大死生学・応用倫理センター上廣講座, 東京, 2015.2.8

講師, 臨床倫理セミナー in 大隅, 鹿屋医療センター, 鹿屋市, 2015.2.15

講演「人生の最善を目指すケア—臨床倫理の視点から—」, 第31回 長野県作業療法学会 特別講演・市民公開
講演, 松本市, 2015.2.21

講師, 第3回中国地区臨床倫理事例研究会, 広島県看護協会研修センター (会場), 広島市, 2015.2.22

講演「高齢者のエンドオブライフ・ケア—死生学と臨床倫理の視点から—」, 第2回超高齢社会の医療を考える会,
千葉市, 2015.2.26

eラーニング講師, 「臨床倫理の考え方と実際」, 学研, 東京, 2015.3.11(収録)

講義「臨床倫理の考え方と事例検討」, 宮城県高等看護学校 特別授業, 名取市, 2015.3.13

講師, 平成26年度 臨床倫理事例研究会, 佐久医療センター (佐久総合病院), 佐久市, 2015.3.14

講師, 臨床倫理事例研究会ファシリテーター養成研修, JCHO 大坂病院(会場), 大阪市, 2015.3.17-18

コメンテーター, シンポジウム「ホスピス・緩和ケアはどこから、どこへ向かうのか：世俗化と医療化の時代におけ
る終末期ケアの思想的な拠り所をもとめて」, 上智大学 (会場), 東京, 2015.3.28

講演, 「人間の尊厳について—尊厳療法・尊厳死等の理解のために—」, 東札幌病院 倫理セミナー, 2015.4.13

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in おおさか, 大阪, 2015.5.9

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー, 岩手県立中部病院, 北上市, 2015.5.23

講師/研修会開催協力, 臨床倫理ファシリテーター養成, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2015.5.30

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in さっぽろ, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2015.5.31

講演, 残りの人生を考える—死生学してみましよう 他, ぬくもり講座 (NPO法人傾聴グループぬくもりほっとら
いん), 千葉(新習志野), 2015.6.6; 8.8

講演, エンドオブライフ・ケアの死生学と臨床倫理, 石巻赤十字病院 エンドオブライフ・ケア小委員会 勉強会, 石
巻(宮城), 2015.6.16 (追加講演: 2015.12.11)

講演, 高齢になっても自分らしく生き続けるために—暮らしと健康についての心積り—, ニツ井ふくし会創立 20 周
年記念・福祉のまちづくり講演会, ニツ井公民館 (秋田県能代市), 2015.6.20

講師, 看護専門職論 (看護実践の倫理、臨床倫理), 大阪府看護協会 認定看護管理者教育課程ファーストレベル, 大
阪市, 2015.7.3; 10.9; 12.18

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー, 東北大学大学院医学系研究科緩和ケア看護学, 仙台, 2015.7.4

講演, 医療従事者のための死生学, 平成27年度第2回薬剤師アップデート講座, 北海道薬科大学札幌サテラ
イト (札幌市), 2015.7.10

講師, 臨床倫理：考え方と検討の実際, 平成27年度 兵庫県薬剤師会・兵庫県病院薬剤師会共催 参加型研修会,
三宮研修センター (神戸市), 2015.7.12

講演, 臨床倫理/エンドオブライフ・ケア, 2015年度ソーシャルワーク スキルアップ研修「ソーシャルワークにお
ける臨床倫理」, 日本医療社会福祉協会, 新大阪丸ビル別館 (大阪市), 2015.7.25

講義, 臨床倫理入門, 関西臨床倫理研究会新人ナース研修, 大阪府看護協会ナーシングアート (大阪市)

講義, エンドオブライフ・ケアの死生学 (臨床死生学コア), 東京大学 死生学・応用倫理センター 医療・介護従事
者のための死生学夏季セミナー, 東京, 2015.8.1

講演, 言語哲学から現場に臨む哲学へ, 第 67 回日本文学協会国語教育部会 夏期研究会, 東京都立産業技術高等専門学校品川キャンパス (東京都), 2015.8.9

講師/セミナー開催協力, 臨床における倫理の基礎/合意形成を行う上での手順・意思決定プロセス・及びガイドライン, 平成 27 年度人生の最終段階における医療体制整備事業相談員研修会 (厚生労働省 実施: 国立長寿医療研究センター), 東京大学本郷キャンパス, 2015.8.12-13

研究成果報告, 上手に老い、最期まで自分らしく生きるための《心積りノート》, RISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」公開ワークショップワークショップ, 東京大学本郷キャンパス工学部 11 号館講堂 (東京都), 2015.8.18

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in えひめ, 愛媛地区臨床倫理事例研究会, 愛媛大学病院 (東温市), 2015.9.13

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in かなざわ, 北陸地区臨床倫理事例研究会, 金沢大学病院 (金沢市), 2015.9.19

講義, 高齢者の意思決定支援, 京都府看護協会研修会, 京都市, 2015.9.25

講演, 最期まで自分らしく生きるために—コミュニケーションのための死生学—, 仙台傾聴の会 傾聴ボランティア 公開講座, 仙台市福祉プラザ, 2015.9.26

講演, 今、看護に求めたいこと, 新潟大学医学部保健学科&医歯学総合病院主催「臨床教授等 連絡協議会・講演会」, 新潟大学 (新潟市), 2015.10.20

講演, 患者・家族とのコミュニケーション ～人として尊重すること・最善を目指すことの臨床倫理～, 秋田厚生医療センター (秋田市), 2015.11.13

講演, エンドオブライフ・ケアの臨床倫理, 死生学セミナー in とやま実行委員会, 富山福祉短期大学 (射水市), 2015.11.21

講義, 治療・ケア選択の臨床倫理: 口から食べられなくなったら時どうするか, 東札幌病院倫理セミナー, 札幌市, 2015.11.26

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in ちくご, 久留米大学病院 (久留米市), 2015.12.13

講師/研修会開催協力, 臨床倫理ファシリテーター養成, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2015.12.19

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in さっぽろ, 北海道臨床倫理研究会, 札幌, 2015.12.20

講師, 看護倫理, 日本看護協会特定行為研修, 看護協会研修センター (清瀬), 2015.12.22. 2016.1.6

講師/セミナー開催協力, 第 9 回臨床倫理事例研究会, 関西臨床倫理研究会, 大阪, 2016.1.9-10

講演, DN(A)R の考え方とプロセス —エンドオブライフ・ケアの視点から, 藤沢市民病院, 藤沢市, 2016.1.13

講演, 臨床における倫理をどう理解するか —ルーチンワークから意思決定プロセスまで, 諏訪中央病院, 茅野市, 2016.1.14

講演, 死生観と臨床倫理 —エンドオブライフ・ケアをめぐる, 第 4 回終末期医療に関するシンポジウム「高齢者の終末期の医療およびケア～死生観を考える～」, 千葉県医師会館 (千葉市), 2016.1.23

講演, 最期まで自分らしく生きるために —本人・家族と考える心積り, 訪問看護ステーションネットワーク西宮「看取りのシンポジウム」, 西宮市, 2016.1.24

講演, エンドオブライフ・ケアと臨床倫理, 福井県済生会病院, 2016.1.28

講義, 人生の最終段階における臨床倫理と相談あり方, MSW 相談員研修会(日本医療社会福祉協会主催), 東京, 2016.1.30

シンポジスト提題, プロセスガイドラインと臨床倫理 —意思決定プロセスと価値評価, シンポジウム「救急医療のエンドオブライフ・ケア —法と倫理と臨床現場—」(上廣講座主催), 東京大学 (東京都), 2016.2.7

パネリスト提題, 研究開発プロジェクト《高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成》, RISTEX 戦略的創造研究推進事業 (社会技術研究開発) 研究開発領域「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」第 4 回領域シンポジウム, 東京大学安田講堂 (東京都), 2016.3.4

講師/セミナー開催協力, 臨床倫理セミナー in さく, 佐久医療センター (佐久市), 2016.3.5

講義, 人生の最終段階における臨床倫理と相談あり方/アドバンス・ケア・プランニング～意思決定の支援, MSW 相談員研修会@名古屋(日本医療社会福祉協会主催), IMY ホール (名古屋市), 2016.3.6

特別講義, 本人・家族と一緒に進めて行く医療・看護, 宮城高等看護学校 (名取市), 2016.3.7

講師/研修会開催協力, 臨床倫理ファシリテーター養成研修, 関西臨床倫理研究会, JCHO 大阪病院 (大阪市), 2016.3.10-11

講演, 高齢者ケアと終末期ケアにおける倫理的問題とその克服, 市立大町総合病院 (大町市), 2016.3.16

講師/セミナー開催協力, 事例検討の進め方 他, 函館ものがたり塾, 函館市, 2016.3.26

1. 略歴

- 1984年3月 成蹊大学文学部英米文学科 卒業
- 1986年9月 Contemporary British Society Course, School of Oriental and African Studies, University of London 入学
- 1987年6月 Contemporary British Society Course, School of Oriental and African Studies, University of London 修了
- 1988年4月 株式会社メディカル・トリビューン 記者
- 1992年9月 株式会社ジャパン・タイムズ社 記者
- 1999年9月 Medical Ethics Fellowship Program, Harvard Medical School, Harvard University 入学
- 2000年6月 Medical Ethics Fellowship Program, Harvard Medical School, Harvard University 修了
- 2003年4月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程入学
- 2005年3月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程修了
- 2005年4月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程進学
- 2008年3月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程修了
博士（保健学）取得（東京大学大学院医学系研究科）
- 2008年4月 東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」特任研究員
- 2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター 特任研究員
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上級死生学・応用倫理講座
特任准教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学

b 研究課題

エンドオブライフ・ケアの改善

医療技術が進進し超高齢化が進んだ現代社会におけるエンドオブライフ・ケア（人生の最終段階の医療とケア）のあるべき姿を模索し、現状の改善・充実を目指し、そのために必要な社会の意識改革を促す。

臨床倫理の普及と啓発

日本人のコミュニケーションのあり方などの文化的な特徴を踏まえ、一人ひとりの患者と家族に関する倫理的問題へよりよく対応することが可能な方法論を探り、臨床現場の医療・介護従事者との協働・対話によって、現実の症例の倫理的問題について幅広く検討を深め、現場における実践の知へつなぐ。

臨床死生学の試み

死生学の側面を「生き終わりを見据えつつより良く生きることを社会のなかで考える学問」と捉え、現実社会の問題として死生学の理解・考察を深め、一般への浸透を図る。

c 概要と自己評価

エンドオブライフ・ケアの改善について

超高齢社会におけるエンドオブライフ・ケアに関して最も一般的かつ深刻な問題に、摂食嚥下困難な高齢者に対する人工的水分・栄養補給法（AHN: artificial hydration and nutrition）の導入・差し控え・中止終了に関する諸問題がある。これは日本の高齢者医療およびケアにおける長年の懸案であった。先行研究が稀有であったこの分野において、会田は数々の実証研究を推進し、その成果を日本老年医学会の「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給の導入を中心として」の策定につないだ。これが2012年6月に同学会ガイドラインとして公表された後は、その趣旨の普及とそれを踏まえた現場での臨床実践の拡大に努めた。数多くの学術集会および講演等において、医療・介護従事者だけでなく一般市民への浸透を目指して継続的に活動した。この成果は、2015年に開催された第29回日本医学会総会を記念して刊行された『医と人間』（岩波書店）の一章につながり、現代日本の医学会を代表する碩学らの末席で一文を寄稿する機会を得ることができた。

また、この課題を本人と家族の側から捉え、本人と家族が医療・介護従事者の助言を得ながら最善の選択に至ることを支援するため作成した『高齢者ケアと人工栄養を考える—本人・家族のための意思決定プロセスノート』の普及に努めた。この冊子は、臨床倫理学における意思決定プロセスと人のいのちの理解についての清水哲郎特任教授の理論および高齢者ケアにおけるAHNに関する臨床現場の実態についての会田の調査研究をもとにして作られた。総じて、AHNに関する研究・実践活動では、当初計画以上の成果を上げることができた。

さらに、これらの成果を踏まえて、2013年度には慢性腎臓病の専門医療者との協働によって、『高齢者ケアと透析療法を考える—本人・家族の意思決定プロセスノート』の開発に着手し、2015年度の日本透析医学会学術集会に間に合うよう刊行した。これは日本透析医学会の「維持血液透析の開始と継続に関する意思決定プロセスについての提言」(2014)というガイドラインの発表も見据えた研究活動であった。いずれのノートも、本人と家族と医療・介護従事者が本人のために一緒に考え共同の意思決定に至ることを支援するためのツールである。

また、2014～2015年度は意思決定支援に関して世界的に注目されているACP (advance care planning) の文献研究と学術集会での報告を重ね、本学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座が主催する《医療・介護従事者のための死生学》セミナーや日本各地での講演活動を通して、研究知見を社会還元した。

さらに、10年来の研究課題の1つである frailty (フレイル) に関する研究知見の整理と発信にも務め、高齢者の人生の最終段階における過少医療および過剰医療への対策としての考え方を示した。frailty に関しては、国内の老年学関係者は介護予防のみに注目しているが、会田は frailty が進行した高齢者における適切な医療のあり方について、医療関係者を対象とするセミナーや学術集会等で問題提起した。これは国内では依然として稀少な活動であるため、今後、継続的に取り組むことが必要と考えている。

また、高齢者に限らない研究課題として、実証研究をもとに脳死に関する理解を日本の文化的側面も踏まえて深めた。脳死に関する諸問題への対応について専門医療者とともに検討し、社会的に構成される死の概念について日本の臨床現場の実態に基づいて考察し、救急・集中治療現場での患者・家族対応に関する実践知につなげた。

これらの研究・実践活動によって、進展した医療技術が汎用される現代の日本においては、治療行為は行うことも、差し控えることも、治療開始後でも本人の状態や本人自身の価値によっては治療を終了して看取することも、いずれも治療の選択肢であることの社会的啓発に努めた。今後はさらに、見送る側の心のケアも含め、本人の人生の集大成を支援するという観点で、医療とケアのあり方に関する考察と理解の深化を図っていくことを目指している。

臨床倫理の普及と啓発について

当研究室の清水教授が主宰する臨床倫理プロジェクトの活動の一環で、全国各地で医療・介護従事者のための臨床倫理セミナーを開催し、基本的な考え方の講義を行い事例検討の支援をした。2014年度は全国各地で計13回のセミナーを実施し、延べ約2,000名が参加した。2015年度は全国各地で計10回のセミナーを開催し、延べ約1,700名が参加した。また、2014年度および2015年度にファシリテーター養成講座を大阪と札幌で開催した。今後も、臨床倫理を一般の医療・介護従事者や市民が理解可能な言葉で表現し、個別症例の倫理問題に多職種協働で具体的に取り組み、現場の実践知とともに高めることを目指している。

臨床死生学の試みについて

当講座の《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースにおいて、セミナーの企画・運営と臨床死生学関連の講義を担当し、臨床現場で働く人たちが死生についてどのように理解し、どのようにケアに活かしていくかの研鑽を支援する活動を展開した。

また、年間に10回開催している「臨床死生学・倫理学研究会」の企画・運営を担当し、この分野において研究・実践活動に取り組む研究者や実践家との意見交換の機会を医療・介護従事者および一般市民に提供した。毎回、100名程度が参加し、臨床現場の実態を踏まえて死生の問題に関して議論した。

今後も、現場で生きる臨床死生学の取り組みを継続し、社会のなかで活かす知の集積・活用を目指したい。

d 主要業績

(1) 著書

『高齢者ケアと人工透析を考える—本人・家族のための意思決定プロセスノート』、[清水哲郎監修、会田薫子編、大賀由花ら共著] 医学と看護社、2015.6

(2) 論文その他 (単著あるいは第一著者の論文のみ)

会田薫子、「高齢者医療における倫理的問題を考える—人工的水分・栄養補給法(AHN: Artificial hydration and nutrition)に関する問題を中心に」、『教育医療』、Vol.40No.5、一般財団法人ライフ・プランニング・センター(LPC)、2014年5月、2-3頁。

会田薫子、「高齢者医療における倫理的問題を考える—人工的水分・栄養補給法(AHN: Artificial hydration and nutrition)に関する問題を中心に その2: あるべき終末期医療の姿」、『教育医療』、Vol.40No.6、一般財団法人ライフ・プランニング・センター(LPC)、2014年6月、6-7頁。

会田薫子、「高齢者医療における倫理的問題を考える—人工的水分・栄養補給法(AHN: Artificial hydration and nutrition)に関する問題を中心に その3: 一人ひとりの死」、『教育医療』、Vol.40No.7、一般財団法人ライフ・プランニング・センター(LPC)、2014年7月、6-7頁。

会田薫子、「高齢者終末期医療 臨床倫理学・臨床死生学 第2回 高齢患者における人工的水分・栄養補給法の問題を考える Part2」、『臨床老年看護』、日総研出版、2014年5・6月号、93-97頁。

- 会田薫子、「高齢者終末期医療 臨床倫理学・臨床死生学 第3回 フレイルを考える 一侵襲度の高い治療を行う意味とは」、『臨床老年看護』、日総研出版、2014年7・8月号、102-106頁。
- 会田薫子、「高齢者の終末期医療とケア 一evidence-based narrativeの構築へ」、『死の臨床』第37巻第1号、日本死の臨床研究会、2014年6月、27-29頁。
- 会田薫子、「高齢者における人工的水分・栄養補給法の問題を考える」、『看護倫理 実践事例46』、日総研出版、2014年6月、341-350頁。
- 会田薫子、「認知症患者におけるPEGの施行・継続は誰が決めるのか：臨床倫理学の立場から」、『消化器の臨床』第17巻第3号、ヴァンメディカル、2014年6・7月号、230-235頁。
- 会田薫子、「認知症の終末期における人工的水分・栄養補給法の考え方」、『分子精神医学』第14巻第3号、先端医学社、2014年7月、238-240頁。
- 会田薫子、「高齢者終末期医療 臨床倫理学・臨床死生学 第4回 「自己決定」を再考する 一本人の意思の尊重とは』、『臨床老年看護』、日総研出版、2014年9・10月号、92-96頁。
- 会田薫子、「神経救急における終末期医療 一エンドオブライフ・ケアの視点で考える」、『脳神経外科診療プラクティス4 神経救急診療の進めかた』、文光堂、2014年10月、254-255頁。
- 会田薫子、「高齢者の終末期医療の考え方」、『標準理学療法学・作業療法学 老年学第4版』、医学書院、2014年11月、323-328頁。
- 会田薫子、「高齢者終末期医療 臨床倫理学・臨床死生学 第5回 事前指示からACPへ 一本人の意思を尊重するために」、『臨床老年看護』、日総研出版、2014年11・12月号、113-118頁。
- 会田薫子、「延命医療とは何か 一肯定できる人生のために」、『老い方上手』、WAVE出版、2014年12月、135-194頁。
- 会田薫子、「このチューブで命をつなぐことは、私の人生にとって最善か?」、『歯科衛生士』、クインテッセンス出版、2014年12月号、44-45頁。
- 会田薫子、「臨床に役立つQ&A 超高齢社会のエンドオブライフ・ケアの動向 一フレイルとエンドオブライフ・ケア」、"Geriatric Medicine", ライフ・サイエンス社、2015年1月、第53巻第1号、73-76頁。
- 会田薫子、「高齢者終末期医療 臨床倫理学・臨床死生学 第6回 尊厳死問題とは何か」、『臨床老年看護』、日総研出版、2015年1・2月号、85-89頁。
- 会田薫子、「胃ろう問題と死生学」、『医と人間』(井村裕夫編)、岩波書店、2015年2月、215-233頁。
- 会田薫子、「高齢者の終末期医療 一人生の集大成を支援する医療とケアの考え方」、『入院高齢者診療マニュアル』、文光堂、2015年4月、281-283頁。
- 会田薫子、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア 一フレイルの知見を臨床に活かす」、『日本腎不全看護学会誌』、日本腎不全看護学会、第17巻第1号、2015年4月、37-44頁。
- 会田薫子、「高齢者の終末期医療を考える 一医療倫理の視点から考える」、『高齢者の終末期医療を考える』(増田寛也+日本創成会議編)、公益財団法人日本生産性本部発行、2015年6月、14-19頁。
- 会田薫子、「倫理的葛藤と対処」、『施設におけるエンドオブライフ・ケア』(内田陽子・島内節編)、ミネルヴァ書房、2015年9月、99-107頁。
- 会田薫子、「老衰のエンドオブライフ・ケアに必要な“医療とケアの倫理” 一「適切な医学的判断」と「人生の物語りのある終末期ケアのために」、『訪問看護と介護』、医学書院、2015年10月、第20巻第10号、839-845頁。
- Aita, K, "Thinking about End-of-life Care for the Elderly. Chapter 2: From the perspective of medical ethics", Discuss Japan: Japan Foreign Policy Forum. January 2016. <http://www.japanpolicyforum.jp/archives/society/pt20160116093042.html>
- (3) 学会・研究会発表 (単独あるいは第一演者の発表のみ)
- 招聘講演「科学技術の進展が変える死の基準 一人生の物語りへの問い」教育講演、第28回小児救急医学会学術集会脳死セミナー、横浜(パシフィコ横浜)、2014.6.8.
- 招聘講演「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」基調講演、第21回日本介護福祉教育学会学術集会、札幌(京王 プラザホテル札幌)、2014.8.28.
- 招聘シンポジスト提題「日本老年医学会“人工的水分・栄養補給法的意思決定プロセスガイドライン”が目指すもの」、パネルディスカッション3「社会全体で考えるべき終末期医療の現実と課題」、第52回日本癌治療学会学術集会、横浜(パシフィコ横浜)、2014.8.29.
- 招聘講演「緩和ケアのアプローチ 一患者の人生にとっての最善を考える」特別講演、第11回日本在宅静脈経腸栄養研究会学術集会、東京(ソラシティカンファレンスセンター)、2014.10.4.
- 招聘講演「意思決定と事前指示 一高齢社会で求められる Advance care planning」基調講演、第17回病院歯科介護研究会学術集会、岡山(岡山コンベンションセンター)、2014.10.12.

招聘講演「長寿社会のエンドオブライフ・ケア」教育講演4、第17回日本腎不全看護学会学術集会、幕張（リゾート東京ベイ幕張）、2014.11.9.

招聘シンポジスト提題「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、シンポジウム「終末期医療をどのように国民にご理解いただくか」、第42回日本集中治療医学会学術集会、東京（ホテル日航東京）、2015.2.9.

招聘講演「科学技術の進展が変える死の基準—人生の物語りへの問い」、第29回日本小児救急医学会学術集会脳死判定セミナー、日本小児救急医学会主催、大宮（大宮ソニックシティ市民ホール）、2015.6.13.

招聘シンポジスト提題「超高齢社会のエンドオブライフ・ケア—フレイルの知見を臨床に活かす」、第53回日本癌治療学会学術集会シンポジウム3「“がんと生きる”をサポート(2)」、日本癌治療学会主催、京都（京都国際会議場）、2015.10.29.

シンポジスト提題「ADからACPへの展開と意義」口演、公募シンポジウム11「ACPの理念と実践—本人を人として尊重する意思決定支援のあり方をめぐって」、第27回日本生命倫理学会大会、千葉（千葉大学）、2015.11.29.

招聘シンポジスト提題「高齢者救急における心肺蘇生法の問題—フレイルの知見を救急医療に活かす」、日本臨床倫理学会第4回年次大会シンポジウム3「救命医療における倫理」、東京（日赤看護大学）、2016.3.6.

(4) 研究報告書

『人生の最終段階におけるケア—富山県砺波市庄東地区質問紙調査報告書(詳細分析版)』、科学技術振興機構（JST）/社会技術研究開発センター（RISTEX）コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域、2015年9月30日.249頁

『高齢者ケアと終末期医療に関する調査』、科学技術振興機構（JST）/社会技術研究開発センター（RISTEX）コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域、2015年9月30日.120頁.

(5) 研究費の獲得状況

日本学術振興会科学研究費 基盤研究（A）「臨床倫理検討システムの哲学的見直しと臨床現場・教育現場における展開」（2015～2016）（分担研究者、研究代表＝清水哲郎）

科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究開発領域 研究開発プロジェクト「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」（2014～2015）（分担研究者、研究代表＝清水哲郎）

(6) マスコミ報道

インタビュー「人工透析 使わぬ選択も 患者側への手順 学会が決定」朝日新聞、2014.4.22.34面

インタビュー「死ぬ権利の議論進む欧州 本人の意思を反映する動き」、朝日新聞 Globe The End-of-Life 特集、2014.8.17.G-4面.

講演記事「ACP的アプローチは『情報共有—合意モデル』そのもの」、ベストナース、2014.11月号. pp 30-35.

インタビュー「米女性 予告どおり安楽死」、朝日新聞、2014.11.4.31面

インタビュー「胃ろうは外せるか 挑む高齢者施設」、週刊朝日、2015.4.17. pp 240-243.

インタビュー「終末期の治療 事前に話す」、日本経済新聞、2015.9.13.

インタビュー「特報首都圏 延命医療をやめられますか」、NHK、2015.10.16.

インタビュー「アドバンス・ケア・プランニングの可能性 人生最期の尊厳性を高める動き」、終活読本ソナエ、2016年冬号、p54.

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本生命倫理学会理事

日本医学哲学・倫理学会評議員

日本老年医学会代議員

日本救急医学会倫理委員会委員

日本透析医学会倫理委員会外部委員

日本老年社会科学会会員

日本臨床死生学会会員

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

静岡県立静岡がんセンター治験倫理委員会委員、2014.4～2016.3

一般社団法人日本専門医機構外部評価委員会委員、2014.4～2016.3

PEG・在宅医療研究会(HEQ:Home Healthcare, Endoscopic therapy and Quality of Life)幹事、2014.4～2016.3

NPO法人PEG ドクターズネットワーク理事、2014.4～2016.3

NPO 法人 生活介護ネットワーク理事、2014.4～2016.3

(3) 他機関での講義

早稲田大学大学院政治学研究所非常勤講師、「医療とメディア」、2014.4～2016.3

上智大学総合人間科学部非常勤講師、「社会老年学」、2014.4～2016.3

新潟県立看護大学非常勤講師、「老年看護学」、2014.4～2015.3

(4) 講演・研修会講師等

講演、「Advance Care Planning の考え方 ―本人の意思を尊重するために」、第2回ぐんま地域連携スキルアップセミナー、ぐんま県養療法ネットワーク主催、高崎（高崎市総合保健センター）、2014.4.19.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、「高齢者ケアにおける人工的水分・栄養補給法の考えかた」、《医療・介護従事者のための死生学》2014年度春季セミナー、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座主催、東京（東京大学山上会館）、2014.4.20.

講演、「科学技術の進展が変える死の基準 ―人生の物語りへの問い」、第14回東京大学生命科学シンポジウム、東京大学生命科学ネットワーク主催、東京（伊藤国際学術研究センター）、2014.4.26.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ入門編」、2014年度がん分野における臨床倫理セミナー@仙台、仙台（東北大学大学院医学系研究科保健学科棟大講義室）、2014.5.10.

講演、「医学的意味と倫理的判断」、S-QUE 院内研修 1000'E ナース衛生研修収録、ヴェクソンインターナショナル株式会社、群馬県伊勢崎（三原記念病院）、2014.5.16.

講演、「天寿と延命 ―胃ろうで生きるということの意味」、第10回PEG栄養サポート地域連携研究会、PEG栄養サポート地域連携研究会主催、東京（吉祥寺東急イン）、2014.5.23.

講演、「看護管理者が取り組む医療倫理」、独立行政法人国立病院機構中国四国グループ内副看護部長研修会、独立行政法人国立病院機構中国四国グループ主催、広島県東広島市（国立病院機構中国四国グループ研修室）、2014.5.30.

講演、「高齢者ケアと意思決定 ―人生の最終段階を支える文化の創成」、第10回十和田緩和ケアセミナー、十和田緩和ケアセミナー実行委員会主催、青森県十和田市（十和田市立中央病院講堂）、2014.5.31.

講演、「延命医療とは何か ―肯定できる人生のために」、早稲田大学オープンカレッジ、早稲田大学主催、東京（早稲田大学中野国際コミュニティプラザ）、2014.6.7.

講演、「人がより良く生き残るために ―終末期における医療およびケアのあり方」、第3回野桑の里講演会、特別養護老人ホーム野桑の里主催、兵庫県上郡（野桑の里ホール）、2014.6.29.

講演、「高齢者の終末期医療とケアを考える ―食べられなくなったら、どうしますか?」、第4回会津地方の慢性期医療を考える会、会津地方の慢性期医療を考える会主催、会津若松（會津稽古堂）、2014.7.13.

講演、「臨床倫理の考え方、高齢者の終末期医療とケアに関する倫理的問題」、平成26年度高齢者の終末期ケアにおける倫理的問題に関する研修、公益社団法人日本看護協会主催、神戸（日本看護協会神戸研修センター）、2014.7.17.

講演、「緩和ケアのアプローチ ―長寿時代のエンド・オブ・ライフ・ケア」、福井県内科医会学術講演会、福井県内科医会主催、福井（ユアーズホテル福井）、2014.7.19.

講演、「超高齢社会！ 終末期の豊かなケアを考える ―意思決定プロセスガイドラインの考え方」、神戸市介護サービス協会記念講演会、神戸市介護サービス協会主催、神戸（神戸市医師会館）、2014.7.26.

講演、「高齢者の終末期医療とケア ―倫理的課題と対応」、2014年度ソーシャルワーク・スキルアップ研修「ソーシャルワークにおける臨床倫理」、公益社団法人日本医療社会福祉協会主催、大阪（新大阪丸ビル別館）、2014.7.27.

講演、「人生の最終段階の医療とケア ―延命医療問題について考える」、高齢者住宅セミナーin 東京、高齢者住宅新聞社主催、東京（東京ビックサイト西3・4ホール）、2014.7.29.

講演、「高齢者の終末期医療」、2014年老年医学セミナー、日本老年医学会・国立長寿医療研究センター共催、軽井沢（軽井沢プリンスホテルウェスト）、2014.8.1.

講演、「本人の意思を尊重するための取り組み ―ACP の考え方」、医療・介護従事者のための死生学夏季セミナー、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座主催、東京（東京大学福武ラーニング・シアター）、2014.8.3.

講演、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、高齢者の終末期医療を考える会講演会、高齢者の終末期医療を考える会主催、札幌（札幌サンブラザ）、2014.8.9.

講師、「臨床倫理 入門編」、「Advance care planning の考え方 ―本人の意思を尊重するために」、第8回北海道臨床倫理検討会、北海道臨床倫理研究会主催・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、札幌（札幌国際ビル国際ホール）、2014.8.24.

講演、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、京都府医師会地域ケア委員会講演会、京都府医師会主催、京都（京都府医師会館）、2014.9.9.

講演、「高齢者ケアにおける意思決定プロセス —ACP の考え方」、安芸地区在宅医療推進連絡協議会講演会、安芸地区医師会主催、広島（ホテル・グランヴィア）、2014.9.20.

講演、「認知症のエンドオブライフ・ケア —人工栄養問題を中心に」、第5回豊生会グループフォーラム、豊生会グループ主催、札幌（札幌サンブラザ）、2014.9.21.

講演、「延命医療問題を考える」、第27回東海大学医学部卒前医学教育ワークショップ、東海大学医学部主催、静岡県小山町（共栄火災富士研修センター レインボー）、2014.9.25.

講演、「高齢者ケアと人工栄養を考える」、新生会市民講座、新生会主催、静岡県富士（ロゼシアター）、2014.9.26.

講師、「臨床倫理 入門編」、第二回臨床倫理セミナー in 砺波、RISTEX 研究プロジェクト「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」主催・市立砺波総合病院看護部共催、富山県砺波（市立砺波総合病院研修室）、2014.9.28.

講演、「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、第三回北陸地区臨床倫理事例検討会、北陸地区臨床倫理事例研究会主催・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、金沢（金沢大学附属病院）、2014.10.5.

講演、「高齢者医療と看取り」、第三回烏山在宅医療連携塾、高齢者救急地域連携塾在宅医療分科会主催、東京（世田谷区立粕谷区民センター）、2014.10.17.

講演、「家族とともに自ら考える最期のとき —食べられなくなったら、どうしますか？人工栄養について考えましょう」、終末期医療について考える会主催特別講演会、小樽（小樽市医師会館講堂）、2014.10.18.

講演、「天寿と延命—胃ろうで生きるということを考える」、江南医療連携の会主催特別講演会、宮崎（宮日会館）、2014.11.1.

講演、「認知症末期患者に対する人工栄養法について考える」、福井県立すこやかシルバー病院主催講演会、福井（ユニー・アイふくい）、2014.11.22.

講演、「これからの日本人の終生の生き方」、ライフ・プランニング・センター主催ヘルスボランティア講座、東京（砂防会館）、2014.11.26.

講演、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア —事前指示から ACP へ」、平成26年度第2回東京都介護支援専門員研究協議会主催大規模研修、東京（東医健保会館）、2014.11.29.

講演、「高齢社会における臨床倫理 —最期までその人らしく生きるために」、社会福祉法人石井記念愛染園附属愛染橋病院主催職員研修会、大阪（愛染橋病院）、2014.12.5.

講演、「認知症のエンドオブライフ・ケア —胃ろうで生きるということを考える」、第15回南総認知症研究会、南総認知症研究会主催、千葉県木更津市（オークラアカデミアホテル）、2014.12.11.

講演、「高齢者ケアの最新トピック —フレイルについて考える」、第8回臨床倫理事例研究会、臨床倫理事例研究会主催、大阪府看護協会ナーシングアート、2015.1.11.

講演、「臨床倫理エッセンシャルズ<早分かり>」、第3回愛媛地区臨床倫理事例研究会、愛媛地区臨床倫理事例研究会主催、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座「臨床倫理プロジェクト」共催、2015.1.24.

講演、「生命倫理の現在の課題」、2014年度第4回研修会、日本カウンセリング学会主催、東京早稲田大学）、2015.2.1.

講演、「高齢者のいのちを考える —胃ろう問題とは何か」、日本医学会特別公開フォーラム～第29回日本医学会総会2015 関西プレイベント、日本医学会主催、京都（京都劇場）、2015.2.7.

講演、「高齢社会と終末期医療問題」、第19回西兵庫言語嚥下栄養研究会、兵庫県高砂（高砂福祉保健センター）、2015.2.12.

講演、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革：死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築 キックオフシンポジウム」、岡山大学歯学部・岡山大学大学院医歯薬学総合研究科主催、岡山（岡山大学五十周年記念館）、2015.2.14.

講演、「臨床倫理エッセンシャルズ入門編」、臨床倫理セミナー in 大隅、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座「臨床倫理プロジェクト」主催、鹿児島県鹿屋（県民健康プラザ健康増進センター）、2015.2.15.

講演、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア —緩和ケアの大切さ」、岡山県老人保健施設協会「高齢者の生と死を見つめる会」、岡山県老人保健施設協会主催、岡山（岡山国際交流センター）、2015.2.17.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ入門編」、第3回中国地区臨床倫理事例研究会、中国地区臨床倫理事例研究会主催・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座「臨床倫理プロジェクト」共催、広島（広島県看護協会大研修室）、2015.2.22.

講師、「高齢者ケアのトピック —フレイルについて考える」、第3回中国地区臨床倫理事例研究会、中国地区臨床倫理事例研究会主催・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座「臨床倫理プロジェクト」共催、広島（広島県看護協会研修室）、2015.2.22.

講演、「人生の最終段階の医療とケア」、第13回聖隷福祉学会、社会福祉法人聖隷福祉事業団主催、浜松（アクトシティ浜松）、2015.2.28.

講演、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援と対応のプロセス」、「人生の最終段階における意思決定支援」研修会、公益社団法人日本医療社会福祉協会主催、東京（聖路加国際病院研修室）、2015.3.1.

講演、「胃ろうの決定のプロセスとACP」、第10回広島胃ろうと経腸栄養療法研究会（広島ページェント）、広島胃ろうと経腸栄養療法研究会主催、広島（広島国際会議場）、2015.3.8.

講演、「人生の最終段階の医療とケア—フレイルの知見を臨床に活かす」、北海道自治体病院協議会・小規模病院等看護技術強化研修事業主催研修会、北海道江別（江別市立病院講義室）、2015.3.14.

講演、「人生の最終段階の医療とケア—フレイルの知見を臨床に活かす」、北海道自治体病院協議会・小規模病院等看護技術強化研修事業主催研修会、北海道砂川（砂川市立病院多目的ホール）、2015.3.15.

講師、「Jonsenの4分割法—臨床倫理事例検討法」、ファシリテーター養成研修、臨床倫理事例研究会主催、大阪（独立行政法人地域医療機能推進機構大阪病院附属看護専門学校講義室）、2015.3.17.

講演、「人生の最終段階の医療とケア—延命医療問題について考える」、平成26年度社会福祉セミナー、千葉市社会福祉協議会主催、千葉（千葉市ハーモニープラザ社会福祉研修センター研修室）、2015.3.18.

講演、「終末期医療をめぐる課題—医療倫理の観点から」、高齢者の終末期医療勉強会第二回会合、日本生産性本部主催、東京（ANAインターコンチネンタルホテル東京）、2015.3.31.

講演、「高齢者医療と看取り」、高輪会職員研修講習会、高輪会主催、東京（アリアル五反田アネックス）、2015.4.20.

講演、「高齢者のがん治療における適切な治療選択に向けて—フレイルの臨床活用」、相良病院職員研修会、相良病院主催、鹿児島（相良病院ホール）、2015.4.24.

講師、「フレイルの知見を高齢者医療に活かす」、「医療・介護従事者のための死生学」基礎コース春季セミナー（臨床倫理セミナー@おおさか）、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座主催、大阪（天満研修センター）、2015.5.9.

講演、「高齢者医療の課題と自己決定・意思表示のとらえ方」、「超高齢社会におけるヘルス・デザイン」講座、ライフ・プランニング・センター主催、東京（砂防会館）、2015.5.20.

講演、「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、札幌訪問看護ステーション協議会主催講演、札幌（北農健保会館）、2015.5.23.

講師、「臨床倫理—ジョンセンの4分割法とは」、臨床倫理ファシリテーター養成コース研修@北海道、北海道臨床倫理研究会主催・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、札幌（アスティ45）、2015.5.30.

講演、「フレイルの知見を高齢者医療に活かす」、第9回北海道臨床倫理検討会、北海道臨床倫理研究会主催・東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、札幌（アスティ45）、2015.5.31.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「フレイルの科学を臨床に活かす」、第3回仙台臨床倫理セミナー、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座・東北大学大学院医学系研究科保健学専攻緩和ケア看護学教室共催、仙台（東北大学医学部保健学科講堂）、2015.7.4.

講演、「食べられなくなったらどうしますか？ 人工栄養で生きるということを考える」、NPO 傾聴グループ ぬくもりほっとらいん主催「ぬくもり講座」講演会、習志野（茜浜ホール）、2015.7.11.

講師、「フレイルの知見を臨床に活かす—高齢者医療とケアの新たな視点」、「医療・介護従事者のための死生学」夏季セミナー、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座主催、東京（伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホール）、2015.8.1.

講演、「高齢者医療における倫理的課題と対応」、「高齢者のがん治療における適切な治療選択に向けて—フレイルの臨床活用」、鹿児島県公的病院等看護部長会主催研修会、鹿児島（鹿児島市医師会病院大研修室）、2015.8.30.

講演、「老化・老衰の科学—フレイルについて考える」、NPO 傾聴グループ ぬくもりほっとらいん主催「ぬくもり講座」講演会、習志野（茜浜ホール）、2015.9.12.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ入門編」、「ジョンセンの4分割法による事例検討とは—臨床倫理検討シートとの違い」、「ファシリテーションの基礎」、第4回愛媛地区臨床倫理事例研究会、愛媛地区臨床倫理事例研究会主催、東温（愛媛大学医学部講義室）、2015.9.13.

講演、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門主催平成27年度研究生研修会、東京（昭和大学）、2015.9.17.

講演、「臨床倫理 入門編」、第4回北陸地区臨床倫理事例検討会、北陸地区臨床倫理事例検討会主催、金沢（金沢大学附属病院CPDセンター&石川県内TV会議会場）、2015.9.19.

講師、「アドバンス・ケア・プランニング —人生の最終段階における意思決定支援」、「高齢者の医療とケアにおける適切な意思決定のために —フレイルの臨床活用」、「高齢者のエンドオブライフ・ケア —人工的水分・栄養補給の問題を中心に」、愛媛県看護協会研修会、愛媛県看護協会主催、松山（愛媛看護研修センター）、2015.10.3.

講演、「終末期の療養での意思決定支援 —どのようなステップを踏めば倫理的な決定ができるのか」、島根県立中央病院緩和ケア講演会、島根県立中央病院緩和ケアワーキンググループ主催、出雲（島根県立中央病院大研修室）、2015.10.16.

講演、「認知症の人の終末期を考える — 食べられなくなったらどうしますか?」、第4回「いのちの輝きを考える日」、いのちの輝きを考える日実行委員会主催、出雲（出雲市役所くにびき大ホール）、2015.10.17.

講師、「看護倫理」、平成27年度国立病院機構中国四国グループ内実習指導者研修会、東広島（国立病院機構東広島医療センター内研修センター）、2015.10.19.

講演、「人生の集大成を支える高齢者の機能評価 —フレイルの知見を臨床に活かす」、豊生会職員研修会、札幌（東苗穂病院）、2015.10.30.

講演、「医療・介護者のためのアドバンス・ケア・プランニング」、東区在宅医療支援協議会10月特別例会、札幌東区在宅医療支援協議会主催、札幌（東区民センター）、2015.10.31.

講演、「人生の最終段階の医療とケア —人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、彦根市立病院倫理委員会主催講演会、彦根（彦根市立病院講堂）、2015.11.6.

講演、「臨床倫理の基礎—看護倫理を現場で活かすために」、「エンドオブライフ・ケアと意思決定支援」、「高齢者の医療とケアにおける適切な意思決定のために—フレイルの臨床活用」、平成27年度インターネット配信研修「高齢者の終末期ケアにおける倫理的問題」、日本看護協会、神戸（日本看護協会神戸研修センター）、2015.11.20.

講師、「超高齢社会の医療とケア —フレイルの知見を臨床の場に活かす」、第6回共創福祉研究会「死生学セミナー in とやま 2015」、死生学セミナー・イン・とやま実行委員会主催、富山県射水（富山福祉短期大学）、2015.11.21.

講演、「科学技術の進展が変える死の基準 —人生の物語りへの問い」、MED プレゼン 2015、一般社団法人チーム医療フォーラム主催、東京（日本未来科学館未来館ホール）、2015.11.22.

講師、「フレイルの臨床活用」、第46回暮らしの保健室勉強会、暮らしの保健室主催、東京（暮らしの保健室）、2015.12.1.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、臨床倫理セミナー in ちくご、ちくごかんわ研究会主催、久留米大学病院緩和ケアチーム・久留米ネットワークの会共催、久留米（久留米大学）、2015.12.13.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、第10回北海道臨床倫理検討会、北海道臨床倫理研究会主催、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣講座共催、札幌（札幌国際ビル国際ホール）、2015.12.20.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ：入門編」、「AD から ACP へ」、第9回関西臨床倫理研究会、関西臨床倫理研究会主催、大阪（大阪府看護協会ナースングアート大阪）、2016.1.9.

講演、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、第1回鹿児島国際歯学シンポジウム、鹿児島大学歯学部主催、鹿児島（鹿児島大学鶴陵会館ウィリアムウィリスホール）、2016.1.30.

講演、「アドバンス・ケア・プランニング —意思決定の支援」、2015年度人生の最終段階における意思決定支援研修会、日本医療社会福祉協会主催、東京（綿商ホール）、2016.1.31.

講演、「延命医療とその選択 —人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、平成27年度施設・在宅看護師交流会講演、静岡県看護協会主催、静岡（静岡県看護協会第一研修室）、2016.2.17.

講師、「事例検討法 —臨床倫理の方法と実際」、「臨床倫理セミナー」、独立行政法人国立病院機構東広島医療センター主催、東広島（東広島医療センター大会議室）、2016.2.24.

講演、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—胃ろう問題と死生学」、新川地区在学医療療養連携協議会講演会、新川地区在宅医療療養協議会主催・新川地区在宅医療支援センター共催、富山県魚津（ホテルグランミラージュ）、2016.2.26.

講演、「認知症の看取り —食べられなくなったらどうしますか?」、市民公開講座「認知症プレミアム講演会」、さいたま市与野医師会主催、2016.3.5.

講演、「人生の最終段階の医療とケア —延命医療問題について考える」、平成27年度社会福祉セミナー、千葉市社会福祉協議会主催、千葉（千葉市社会福祉協議会ハーモニー）、2016.3.7.

講師、「ファシリテーションの方法とグループワークの進め方」、ファシリテーター養成第二期研修、関西臨床倫理研究会主催、2016.3.10.

講演、「これからの高齢者医療とケア —フレイルの知見を臨床に活かす」、平成27年度社会福祉系実習研修会、熊本学園大学社会福祉学部主催、熊本（熊本学園大学講義室）、2016.3.12.

講師、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、函館ものがたり塾—臨床倫理とものがたりの原点、函館ジェネラリスト・カレッジ主催、函館（函館市民会館）、2016.3.26.

3 3 集英社 高度教養寄付講座

特任教授 柴田 元幸 SHIBATA, Motoyuki

1. 略歴

1979年 東京大学文学部（英語英米文学）学士・文学士
1984年 東京大学大学院人文社会研究科（英語英文学）修士・文学修士
1986年 イェール大学 Yale University（Department of English）修士・文学修士
1984年4月～1987年11月 東京学芸大学教育学部、講師
1987年12月～1988年9月 東京学芸大学教育学部、助教授
1988年10月～1997年3月 東京大学教養学部、助教授
1997年4月～1999年3月 東京大学大学院総合文化研究科、助教授
1999年4月～2005年3月 東京大学大学院人文社会系研究科、助教授
2005年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科、教授
2014年3月 東京大学大学院人文社会系研究科、退職
2015年1月～3月 カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校アジア言語文化学科、客員教授
2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科、特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学

b 研究課題

アメリカ現代小説の網羅的研究

c 概要と自己評価

これまで同様、現代アメリカ小説の紹介・翻訳に努めるとともに、翻訳の文化的意義などについても発言してきた。また、毎年国際作家会議を組織し、日米作家の交流にも貢献している。

d 主要業績

(1) 学会発表

国際、Haruki Murakami and American Literature 村上春樹研究センター設立記念講演会、淡江大学淡水キャンパス、2014/9/22

1910年代の新聞漫画 シンポジウム「表象文化から捉え直すアメリカ 1910年代」日本アメリカ文学会東京支部例会、2014/12/13

(2) 訳書

ポール・オースター『闇の中の男』新潮社2014/5

ケリー・リンク『ブリティ・モンスターズ』早川書房2014/7

フィリップ・ロス『プロット・アゲinst・アメリカ もしもアメリカが・・・』集英社2014/8

ジェイ・ルービン『日々の光』（平塚隼介と共訳）新潮社2015/7

ジョナサン・スウィフト他『ブリティッシュ&アイリッシュ・マスターピース』（編訳）スイッチ・パブリッシング2015/7

『現代語訳でよむ日本の憲法』アルク2015/8

ステイーヴン・ミルハウザー『ある夢想者の肖像』白水社2015/9

レアード・ハント『優しい鬼』朝日新聞出版2015/10

ステイーヴ・エリクソン『ゼロヴィル』白水社2016/2

『マーク・トウェイン』（編・共訳）集英社文庫ヘリテージシリーズ、ポケットマスターピース2016/3

ウィリアム・サローヤン『僕の名はアラム』新潮文庫2016/3

(3) 主催(チェア他)

国際、「PEN World Voices Festival」、Asia Society, Park Avenue, New York, NY USA、2014.5.3

国際、「PEN World Voices Festival」、Asia Society, Park Avenue, New York, NY USA、2015.5.4

3. 主な社会活動

(1) 集英社高度教養寄付講座 講演の組織・司会

小野正嗣『読む・書く・学ぶ』(2015/5/10)

マイケル・エメリック、角田光代、藤原克己『2015年の源氏物語』(2015/7/4)

木下直之『春画とはなんだろう——誰がそれを好色画から猥褻ノ物品に変えたか』(2015/10/3)

管啓次郎、岩切正一郎『アカデミズムとパフォーマンスのあいだで—研究・翻訳・創作・上演』(2015/11/21)

(2) 他機関での講義等

国際、About *Monkey Business* (ローランド・ケルツ氏と) Europa House、スウェーデン大使館主催講演会、2014/4/22

国際、Model or Mirror: Reception of American Literature in Japan The University of Oregon 2014/5/15; The University of Washington 2014/5/20; Dartmouth University 2015/5/6

世界文学を愉しもう 4 (きたむらさとし氏と) 江戸川区立葛西図書館、2014/12/3

国際、Japanese Novelists as Translators The University of Washington 2015/2/20

旅とアメリカ文学 クラブヒルサイド 2015/6/24

二葉亭から村上春樹まで 日本の翻訳 150年 関西大学 2015/6/25

文学を読む・訳す——外国語から日本語へ/日本語から外国語へ 鶴ヶ島市立中央図書館 2015/7/5

日本文学を読む、訳す、書く 一瀬石、芥川、村上春樹、その先へ (ジェイ・ルービン氏と) 早稲田大学大隈講堂、2015/7/30

第14回中之島どくしょ会 (レアード・ハント、柴崎友香氏と) 中之島フェスティバルタワー、2015/11/30

国際、Imagining Other Times, Dreaming Other Places: A Talk and Reading (レアード・ハント氏と) 東京大学駒場キャンパス、2015/12/1

小説と想像力 (レアード・ハント、古川日出男氏と) 実践女子大学渋谷キャンパス 2015/12/2

文学にできること (レアード・ハント、古川日出男氏と) 国際交流基金 JFIC ホール 2015/12/2

世界文学を愉しもう 5 江戸川区立葛西図書館、2015/12/9

(3) その他

第1回須賀敦子翻訳賞 (イタリア文化会館) 選考委員 2014

特任准教授 **河村 英和** KAWAMURA, Ewa

1. 略歴

1995年3月 東京工業大学工学部建築学科卒業

1995年4月 菊池建設(株)入社

1997年6月 小沢書店(株)入社

1998年9月 ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部「単科コース」入学

2000年6月 同 修了

2000年7月 同 建築史科博士課程「建築史・建築批評コース」入学

2005年1月 同 Ph.D.博士学位取得

2005年10月 ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部建築史科助手 (Cultore della Materia)

2006年10月 ローマ第3大学建築学部建築史欧州マスターコース (II livello) 入学

2007年4月 同 修了

2007年10月 ナポリ・フェデリコ2世大学経済学部観光学科契約教授 (2009年2月まで)

2008年10月 大阪大学外国語学部非常勤講師 (2010年3月まで)

2011年10月 東京工業大学外国語研究教育センター特別研究員、非常勤講師

2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

建築史、都市史、風景史、美術史、観光史、イタリア史、ヨーロッパ文化史、地域研究、芸術学、観光学

b 研究課題

18世紀から20世紀までのイタリアを中心とするヨーロッパの自然風景やアイデンティティの発見、観光資源の変遷、地域特有の建築（郷土建築）、観光・リゾートの発展に伴って派生する建築やホテル、偉人像、記念碑などを、郷土愛やナショナリズム思想の影響を考慮しながら、イコノロジー（多種図像）と一次文献史料から、タイポロジー分析を踏まえて、地域別に発展・衰退史を読み解く。

c 概要と自己評価

2014-15年度に出版されたものは、以下の内容の5点の論文と著書1点である。

- 1) オーストリアとイタリアの領土を揺れ動く、20世紀初頭の南チロル地方の観光資源と、観光目的・宿泊施設の変遷について（伊語と独語の併記）。
- 2) 南伊カンパーニア州の18世紀末から20世紀初頭までの観光資源と観光目的の変遷史（伊語と仏語の併記）。
- 3) 1838年にオランダから出発した無名の若い女性によってフランス語で書かれたイタリア旅行の手書きの未刊行手記（イタリアの骨董商から河村が購入）から、時代特有の視点、旅行ルート、宿など、当時の一般的な旅行形態を分析（伊語）。
- 4) 20世紀初頭、観光図像（観光ポスター、ホテルのパンフレット、鞆用ラベル、絵葉書）の分野でイタリア全土を席卷した最大手の印刷会社リヒターの芸術的価値と波及効果について（伊語）。
- 5) ファシズム期に発行されたプロパガンダ絵葉書をタイプ別（イタリアの擬人女性、ダンテとその関連、ムッソリーニと家族の肖像、ムッソリーニによる新設都市、ファシスト党支部の建物、ムッソリーニまたは家族の名を冠した建物・広場・インフラなど）に分けて、それぞれの傾向と特徴を分析（日本語）。

著書（日本語）は、ナポリとその近郊に特有な建築の歴史をまとめたもので、ナポリの建築史について日本で初めて著述されたものであるため、啓蒙的な役割も大きい。論文ではとくに3)と4)は、新発見事実を多く含むものであり、日本語よりも現地のイタリア語で発表するのに適した学術性の高い内容である。5)は日本語であるもの、イタリアでも先例のない研究の端緒をつくるものとなっているので、イタリア語に書き直して、現地の学術誌「*Storia e memoria*」に加筆・改訂したものを投稿する予定である。

なお当該年度の3つの学会発表は、それぞれイタリア観光学会（SISTUR）、イタリア都市史学会（AISU）、ローマ第3大学ローマ学センター（CROMA）が主催したもので、いずれもイタリア語で行い、現地の最新研究動向に沿ったものとなっている。

d 主要業績

(4) 著書

単著、河村英和、『ナポリ建築王国—「悪魔の棲む天国」をつくった建築家たち』、鹿島出版会、2015.10

(5) 論文

Ewa Kawamura, L'inedito journal del viaggio in Italia negli anni 1838-1839 di Clara de Constant Rebecque, in Congresso AISU Visibile e invisibile: percepire la città tra descrizioni e omissioni, Scrimm Edizioni, Catania, pp. 753-763, 2014

Annunziata Berrino; Ewa Kawamura, L'évolution du tourisme en Campanie et ses relations à L'industrialisation (XVIIIe-XXe siècles), in Le Tourisme Comme Facteur de Transformations Economiques, Techniques et Sociales (XIXe-XXe Siècles), Edition Alphil, Neuchâtel, pp. 75-90, 2014

Annunziata Berrino ; Ewa Kawamura, Grande guerra nell'area sudtirolese: i mutamenti di una regione turistica e il dibattito che li accompagna, in Krieg und Tourismus im Spannungsfeld des Ersten Weltkrieges: Guerra e Turismo nell'area di tensione della Prima Guerra Mondiale, Studienverlag GmbH, Innsbruck, pp. 271-292, 2014

Ewa Kawamura, L'attività e l'epoca d'oro del tipografo Richter & C. a Napoli, promotore delle vedute turistiche d'Italia degli anni 1900-1930, in Città mediterranee in trasformazione Identità e immagine del paesaggio urbano tra Sette e Novecento a cura di Alfredo Buccaro, Cesare de Seta, Edizioni Scientifiche Italiane, Napoli, pp. 251-264, 2014

河村英和、「ファシズム期のプロパガンダ絵葉書—その分類と傾向」、『日伊文化研究』、53、pp. 24-36、2015.4

Ewa Kawamura, L'iconografia nella produzione a stampa della Richter & C. per il settore turistico tra il 1900 e il 1930, Eikonocity, 1, pp. 147-160, 2016.1

(6) 学会発表

国内、Ewa Kawamura, Il nuovo turismo culturale negli hotels, equivalenti a museo d'arte contemporane e lo sviluppo dei generi alberghieri, art-, design-, fashion-, haute (couture) hotel, VI Riunione scientifica nazionale della SISTUR, Università Europea di Roma, 2014.11.20

国際、Ewa Kawamura, Molteplicità delle iconografie storiche ed attuali del paesaggio del Monte Fuji: un esempio del patrimonio culturale del Giappone, Convegno Internazionale "Patrimonio Culturale. Sfide attuali e prospettive future", Università degli studi Roma Tre, Centro di ateneo per lo studio di Roma (CROMA), 2014.11.21

国際、Ewa Kawamura, Il ruolo urbano degli alberghi-ristoranti in Italia tra Otto e Novecento, VII Congresso AISU Padova 2015 - Food and the City, Università degli Studi di Padova, 2015.9.4

(7) 総説・総合報告

河村英和、「19世紀の風景画家としてのカプリ島—芸術家宿ホテル・パガーノの誕生と終焉をめぐって」、『文化交流研究』、第29号、21-37頁、2016.3

(8) マスコミ

- 「アマルフィ海岸の真珠！コンカ・デイ・マリーニ村」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.5.13
「青の洞窟」以外で絶対行くべきカプリの観光スポット」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.5.13
「アマルフィ海岸にあるカワイイ陶器の町ヴィエトリ」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.5.31
「お土産にしたい！ナポリの超有名人さんプルチネッラ」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.6.7
「ナポリの守護聖人サン・ジェンナーロと観光スポット」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.6.30
「ナポリ・バロックの華に酔う！ジェズ・ヌオーヴォ教会」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.7.23
「圧巻のコレクション！カポディモンテ美術館を極める」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.10.13
「美術館とともに！カポディモンテの王宮と庭／ナポリ」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.10.14
「ナポリの隠れ家スポット！現代アート美術館マードレ」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.11.21
「名水の里フィウッジ温泉を代表する最高級ホテル」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.12.8
「ローマ貴族の避暑地に泊まる！元枢機卿の館のホテル」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2014.12.16
「トスカーナ貴族気分に入れる！シエナの最高級ホテル」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.1.20
「ヴェネツィアの離島にあるラグジャリーな隠れ家ホテル」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.1.21
「メディチ家の里山も満喫！仮面だらけの貴族の館ホテル」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.4.2
「アペニン山が擬人化！メディチ家の夢の庭プラトリノ」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.4.2
「ドロミティ山塊に棲む伝説の王に因んだ歴史的ホテル」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.4.6
「ピサからすぐ！サン・ジュリアーノ温泉と極楽ホテル」、Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.4.10
「トスカーナで海水浴！リバティ建築の町ヴィアレージョ」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.5.8
「オペラの聖地！ブッチーニの名作たちを生んだ湖畔と家」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.5.11
「英国人に愛されたトスカーナの栄光ある港町リヴォルノ」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.5.16
「ナポリから日帰り！ペストゥムの古代ギリシャ神殿群」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.6.8
「南イタリアで名湯につかる！温泉町カサミッチョラ案内」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.6.15
「デザイン好き必見！南伊ソレントの名建築ホテル」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.7.13
「イスキア島の絶景！映画監督ヴィスコンティの別荘」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.7.15
「最古の現役オペラハウス！ナポリのサン・カルロ劇場」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.9.3
「ナポリの歴史と美味しさ満載！絶対行くべき老舗カフェ」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.11.8
「気分は貴族!? 豪華邸宅を見学できるナポリの博物館」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2015.11.14
「トゥルッリがかわいい！アルベロベッロの町案内」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2016.1.23
「さすがイタリア！美術館のような地下鉄の駅が美しい」、『Allabout』、株式会社オールアバウト、2016.2.26

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、東京工業大学、「イタリア語」、2015.1～2015.12

非常勤講師、立教大学、「都市と芸術」、2015.4～2015.9

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「イタリアのホテルの魅力を探る!」、2015.5

非常勤講師、東京工業大学、「国際文化入門（イタリア編）」、2015.9～2015.12

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜校、「風景絵画でたどる都市ヴェネツィア」、2015.12

(2) 学会

国際、Viaggi e soggiorni in Europa nel primo Ottocento Oltre Napoli, verso Amalfi e Sorrento、査読・審査委員、2016.1～20s

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

任意団体、Associazione Palazzi Napoletani、Comitato scientifico del Premio Internazionale Cosimo Fanzago、2014.1～2016.3

教育機関、ナポリ・フェデリコ2世大学、Comitato scientifico、2016.1～2016.3